エフビーエスピー とことん「まかでみ」を味わいつくす！ スペシャルコラボ短編も入った激レアな一冊！

FBSP

An entertai
A novel and
and pleasant
are special one
Do not forget
Vol.2

まかでみスペシャルDVD付き!!

まかでみスペシャル

『まじしゃんず・あかでみい』&『まかでみ・らでぃかる』

榊 一郎 新作『えくすぺりめんと』&『らでぃかる』書き下ろし短編！
BLADE カラー超描き下ろし&ラフ大公開！

榊 一郎×BLADE
【特別対談"まかでみ"で語ろう!!】

古橋秀之&葛西伸哉 特別寄稿
『シスマゲ☆まかでみい』『だめあね☆まかでみい』

豪華"まかでみ"グッズプレゼント！

特別短編書き下ろし
『ガーゴイルおるたなてぃぶZERO』
『学校の階段』
『"文学少女"番外編』
『バカとテストと召喚獣』

『狂乱家族日記』4コマ劇場

ファミ通文庫SP

FBSP Vol.2
まかでみスペシャル
とことん「まかでみ」を味わいつくす！書き下ろし&スペシャルコラボ短編も入ったお得で激レアな一冊！
まかでみスペシャルDVD付き!!
ファミ通文庫SP

FBSP VOL.2

大プレゼント なのである。

なんとなんと！今回もワクワクドキドキのプレゼントを
いっぱい用意したのである。ありがたく応募するのである。

賞品① 2名

PS2版ゲーム『まじしゃんず・あかでみい』

ついに発売となるMM-SRPG「まじしゃんず・あかでみい」の
ソフトをプレゼント！　ゲームならではの「まかでみ」の世界を味わおう!

賞品② 3名

BLADE先生サイン入り「ZEALOTIC BLADE ZERO BLADE夢創作画集」

獣耳伝道絵師BLADE先生の魅力が
200%詰まった初画集。サイン入りでプレゼント!

賞品③ 10名

『まかでみ』なつかし販促グッズお楽しみ袋

『まかでみ』シリーズ販促のために作成してきた
ポストカードなどの販促グッズ&Tシャツなどを詰め合わせで。

賞品④ 4名

黒川芽以ちゃんサイン本『学校の階段』1巻

撮影現場にお邪魔してゲットしてきた、映画「学校の階段」
主演の黒川芽以ちゃんのサイン入り第1巻。

Wチャンス賞 300名

『まかでみ』特製うちわ

※①～④の賞に当選しなかった人の中から抽選となります
※画像はサンプルです。実物とは異なる場合があります。

応募方法

この本のアンケートハガキの必要事項に記入いただき（住所・氏名・電話番号・性別・年齢・職業・裏面のアンケート）裏面一番下の「プレゼント応募欄」に希望の賞品番号を明記して、切手を貼ってお送りください。
抽選の結果は、賞品の発送をもってかえさせていただきます。発送は、8月下旬の予定です。

応募締め切り

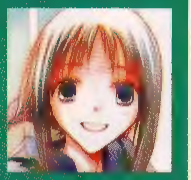
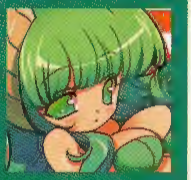
2007年7月1日（当日消印有効）

※ご提供いただくお客様の個人情報につきましては、弊社のプライバシーポリシー（URL:http://www.enterbrain.co.jp/）の定めるところにより、取り扱わさせていただきます。

FBSP Vol.2

CONTENTS

まかでみスペシャル

◆巻頭カラー

まじしゃんず・あかでみい　イラスト／BLADE　4
“文学少女”シリーズ　イラスト／竹岡美穂　6
学校の階段　イラスト／甘福あまね　8
バカとテストと召喚獣　イラスト／葉賀ユイ　10

◆大特集

なんか大特集なんですけど。　11
「まかでみ」の歩み　BLADE　12
「まかでみ・きゃらくたーず」　16
「特別対談“まかでみ”で語ろう！」　榊 一郎×BLADE　70
「“まかでみ”秘蔵ラフなんですけど。」　BLADE　76
「まかでみ・ぎゃらりぃ」　BLADE　115
「まかでみゲーム情報」　122

◆小説

「まかでみ・えくすぺりめんと　魔法都市？」　榊 一郎×BLADE　20
「まかでみ・らでぃかる　彼女なんですけど。」　榊 一郎×BLADE　40
「シスマゲ☆まかでみい　超妹召喚!? なんですけど。」古橋秀之×内藤 隆　82
「だめあね☆まかでみい　アニレオンなんですけど。」葛西伸哉×うなじ　96
「ガーゴイルおるたなてぃぶZERO　高原さん家の昔話」
田口仙年堂×日向悠二　138
「学校の階段　～夜明けの階段～」　櫂末高彰×甘福あまね　156
「“文学少女”番外編　“文学少女”と恋する牛魔王」
野村美月×竹岡美穂　186
「バカとテストと召喚獣 僕と暴徒とラブレター」井上堅二×葉賀ユイ　206

◆コミック

「狂乱家族日記　4コマ劇場」
x6suke/オカアサハ/カヅキレン/とりしも　130

◆企画

「FBNews Special Part1」
鋼鉄の白兎騎士団／戦嬢の交響曲　126
「“学校の階段”映画化記念特別インタビュー」櫂末高彰　179
「"文学少女"のつくり方 ～Cooking of "Bungaku-Shoujo"～」
野村美月×竹岡美穂　198
「FBNews Special Part2」　108年目の初恋。ほか　221

◆コラム＆トピック

「募集！　遠子先輩に捧げる文学レシピ」　205
「FBonline Express」　222
「エフビー通信　～お便り募集～」　224
「FBSP vol.2 大プレゼントなんですけど。」　227

◆付録ＤＶＤ

「まかでみ」ミニゲーム＆アクセサリー
【特別収録】PS2版ゲーム「まじしゃんず・あかでみい」プロモムービー
実写映画「学校の階段」プレミアム試写会シークレットレポート

●カバーイラスト／BLADE　●デザイン／田村宏（海月デザイン）

見かけは平凡ながら〈始源的神魔創造者〉の拓人、
拓人が創ってしまった〈未分化魔神〉タナロット、
〈魔力侵奪能力〉をもつ鈴穂、〈魔法機杖〉の精霊ファルチェ。
4人のワケあり同棲？生活も、いよいよクライマックス直前！

◆まじしゃんず・あかでみい◆

著者／神 一郎
イラスト／BLADE

MAプロジェクト加速中！

「まかでみ」なんでもアリの大特集は11ページから！

◆学校の階段◆

著者／櫂末高彰
イラスト／甘揚あまね

ビバ！青春の無駄足！

学校非公認の部活「階段部」で校内を爆走し
女の子同士、お風呂で親睦を深め
それを覗こうと必死にがんばる――
それもこれもすべて青春の輝き！

天ヶ崎邸での女子限定お泊まり会をノゾける『学校の階段』短編は156ページから！

『学校の階段』映画化記念特別インタビューは179ページから！

◆"文学少女"シリーズ◆

著者／野村美月
イラスト／竹岡美穂

文芸部の甘～い放課後!?

物語を食べちゃうくらい愛する"文学少女"遠子先輩と
そんな彼女に振り回される後輩の心葉。
ふたりをめぐる人々の甘く切なく奇妙な"物語"を
遠子先輩が読み解くBitter & Sweetストーリー！

遠子に恋する柔道部主将に心葉が"遠子先輩攻略法"を指南する『"文学少女"番外編』&とっておきラフ公開は186ページから!

◆バカとテストと召喚獣◆

著者／井上堅二
イラスト／葉賀ユイ

『バカとテストと召喚獣』の短編は206ページからSTART!

なんか大特集なんですけど。
「らでぃかる」はともかく
「えくすぺりめんと」とかいう新作があるんですけど。
他作品とコラボしちゃってるんですけど。
ギャラリーとか対談とかゲーム紹介とか
とにかくぜーんぶ☆まかでみなんですけど。

まかでみ大特集

FLASHBACK MACADEMI

フラッシュバックまかでみ！ 名場面で綴る

まかでみの歩み

女神降臨!?

みゃ……？

魔王発生!?

私は魔王で書方は生け贄なんですから

聖母抹殺!?

さて。覚悟はいい？

聖夜爆走!?

メリークリスマス

父親奪還!?

メガネウス

FLASH MACADEMI

女王って呼ばないでな

雪原沸騰!?

もだら君に理解してもらいたかったんだよ。僕は

学園閉鎖!?

君が依存しているあの〈学園〉というものの脆さをさ

そして物語はクライマックスへ——!

凡人には人質になってもらう

乙女分裂!?

神界、魔界、人間界が入り乱れる「まかでみ」ワールド。
登場するキャラクターも、平凡な高校生から魔法使い、
神族、魔族、人形にロボット、オタクに精霊エトセトラ。
おもな登場人物(?)を見ただけでも、この通り!

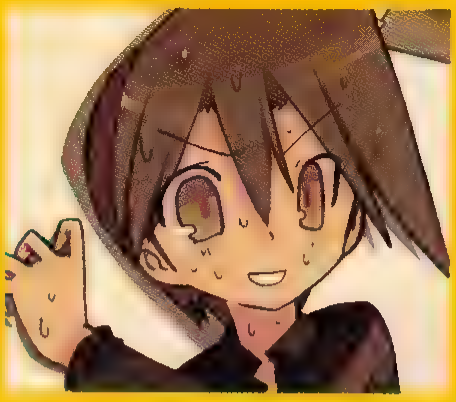
MA
MAGICIAN'S ACADEMY

タナロット・アンサーティン
TANAROT UNCERTAIN

主人公、羽瀬川拓人が召喚実技の追試で創造してしまった、神族・魔族のいずれにも属さない謎の存在。外見は燃えるような紅い髪と瞳の美少女だが魔力総量は推定10万以上。「歩く核弾頭」と形容されるほどの膂力を備えるため、手足に魔力制御用の装具をつけている。立場上は拓人の使い魔であり、名付け親である拓人に非常に懐いている。拓人を巡ってライバル関係にある鈴穂とは、いいケンカ友達でもある。

まかでみ★きゃらくたーず

Macadem Characters



羽瀬川拓人●はせがわたくと
TAKUTO HASEGAWA

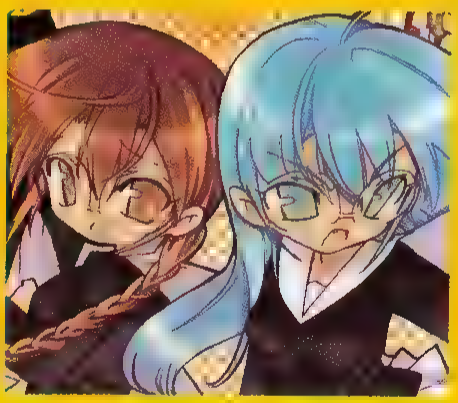
日本男子高校生の標準原器といえるほど、容貌・成績・運動能力等あらゆる面において「普通」だが、実は〈学園〉で学ぶ新米魔法使いでもある。タナロットを「創ってしまった」ことで、神魔を創造できる〈始源的神魔創造者〉であることが判明。しかし、当人はその自覚はおろか、力の使い方さえも把握できていない。

温厚でやや押しに弱く、タナロットをはじめとする周囲の連中が繰り広げる騒動に日夜翻弄されている。

ファルチェ・ザ・ヴァリアブルワンド
FARUCHIE THE VARIABLE WAND

外見はおっとりした線の細い癒し系美少女だが、本質は〈可変型魔法機杖〉。迷宮倉庫に君臨する精霊だったが、現在は拓人に仕える身である。言動もふわふわっとした天然系だが、時にはこれが「抜け駆け」として、タナロットや鈴穂の癇に障ることもしばしば。

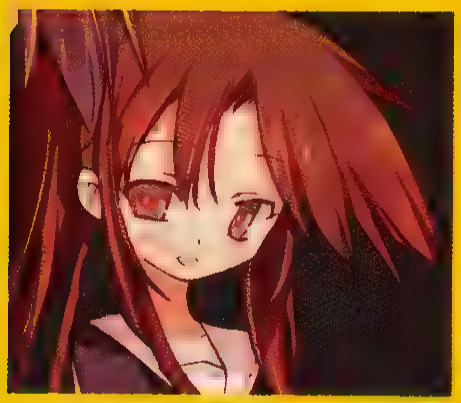
「魔法の杖」として拓人に仕える以外に、単体においても呪文高速詠唱や精密解析など、高いスペックを備えている。



羽瀬川鈴穂(鈴果)●はせがわすずほ(すずか)
SUZUHO/SUZUKA HASEGAWA

拓人の半年年上の従姉妹。幼少時のトラウマが原因で喋ることができないが、筆談によって不自由なく会話できる。極端に引っ込み思案な性格だが、髪のリボンをほどくと、周囲の魔力を無効化する〈魔力侵奪能力〉が発動。その際、髪は蒼く染まり、人格も鈴果という好戦的な別人格が出現する。

鈴穂も鈴果も拓人に好意を寄せており、事が起これば機剣〈ワルプルギス〉を操って戦う。

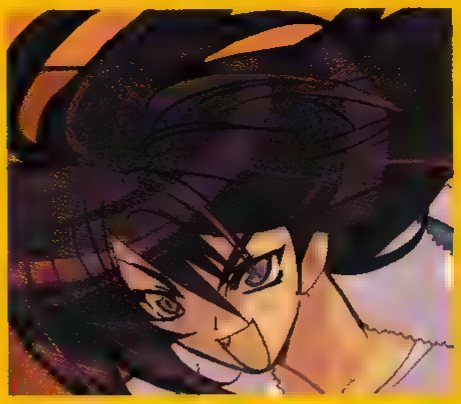


霧島双葉●きりしまふたば
FUTABA KIRISHIMA

拓人が現実世界で通う、御堂高校のクラスメイト。明朗快活で面倒見がよく「姐さん」と呼ばれて慕われているが、拓人に恋心を抱きながらも言葉や行動に出せないという乙女らしさも併せ持つ。長く揺れるポニーテールがトレードマーク。二卵性双生児の葉月という弟がいるが、こちらは制服を着ていなければヤ●ザとみまごうくらいの強面。

拓人の関わる〈学園〉についてはその存在すらも知らない。

佐久間榮太郎●さくまえいたろう
ATARO SAKUMA



〈学園〉における拓人の先輩。美形だが一本ネジが抜けたような容貌で、魔法に関しては教師になれるほどの実力がありながら自ら望んで準教師の立場に留まる謎の人。

ゲームから漫画・アニメ・特撮・同人誌・果てはフィギュアその他もろもろ幅広い領域をカバーする、業の深いオタクである。「おもしろければジャスティス、萌えれば正義」をいっさいの躊躇なく実践中で「キング・オブ・変人」の異名を誇る？

ミヤビ
MIYABI

神族の一柱であり、西方を守護する瑞獣「白虎」の化身。

シンクラヴィアと共に、「始源的神魔創造者」である拓人暗殺の命を受けるも失敗。〈学園〉に拘束され、榮太郎の管理下で懲役という名のパシリをやらされるハメになり、同人誌のアシを務めたりフィギュアの着彩に追われる日々。

白い巫女服に白銀の髪、白いケモノ耳と、白を具現化した外見が特徴的。武器は切れ味鋭い日本刀。

エーネウス・ザ・バージェスト
ENEUS THE BARGHEST

強力な魔物、黒犬獣の化身で、佐久間榮太郎の使い魔。イヌ耳に尻尾に清楚なメイド服というマニアックな外見は榮太郎の趣味によるが、魔族の中では常識派。

「佐久間榮太郎の外付け型良心回路」として、常に携帯しているお掃除用具兼武器「デスキン」で、何かと歯止めの利かない榮太郎に鋭すぎるツッコミを入れている。

シンクラヴィア・ザ・セイレーン
SYNCLAVIER THE SIREN

魔族の一柱であり、音を司る魔鳥「セイレーン」一族の一員。

ミヤビの相方で、やはり拓人暗殺の刺客として現れたが（中略）、現在は買い出しや各種裏方など、やはりパシリに甘んじる身である。

基本はボンデージファッションで、会話のアクセントが独特。必要とあらば、背中に翼を広げて立ち回りを演じる。得意技は衝撃波。

寒河江教授●ひむろあきと
PROFESSOR SAGAE

〈学園〉の最高意志決定機関、十二席委員会に名を連ねる重鎮のひとり。金髪碧眼、愛くるしい少年の外見は憑依型傀儡人形のもので、その[illegible]

〈学園〉の風紀委員顧問として風紀ゴーレム部隊を率いて学園の治安維持に努める傍ら、特異な存在である拓人や鈴穂、タナロットを見守り、時には良きアドバイザーとして、時には彼らに絡む厄介事の収拾役として奔走している。

アガリアレプト
AGALIAREPT

魔界第二軍の指揮官を務める超絶美少女[illegible]

アの上司的存在。〈学園〉〈連盟〉の不穏な動きを察知し、ガブリエルと共に人間界の監察に現れる。

趣味は美少女ゲームと美少女アニメの編集、愛車は『鋼鉄●白兎騎士団』をペイントしたディアブロという、萌え要素てんこ盛りのオタクでもある。愛称は「アガりん」。

氷室明人●ひむろあきと

〈学園〉に対立する〈連盟〉側の少年。どことなく拓人に似ており〈始源的神魔創造者〉でもあるようだが、性格は狡猾で冷酷非情。成績・運動能力・魔力等、あらゆる面において、拓人をはるかに凌駕する。その背景には邪悪なる野心が渦巻いているよう[illegible]

アレフとタウという、強力なふたりの使い魔を従えている。

ガブリエル
GABRIEL

天使の中で最も高位とされるセラフィムのうちの一柱で、ミヤビの上司的存在。外見はゴスロリ幼女、口調は遣り手ババア。アガリアレプトと共に人間界に降臨し、神界・魔界[illegible]

正体を探りつつ、趣味のヘビメタ&ビジュアル系CD収集に励んでいる。

鈴穂の母親、秋穂とは、ずいぶん昔から親しい仲らしい。

愛称は[illegible]

榊 一郎
イラスト/BLADE

まかでみ・えくすぺりめんと
魔法都市？

2007年最注目の新作が遂に開幕！
榊×BLADEの『MAプロジェクト』に新シリーズ登場!!

トンネルを抜けるとそこは異世界だった。

「……なんなんだ……これ……？」

驚愕と困惑に揺れる声で周防千里は呟いた。

眼の前には延々と続く……橋。

それは一見しただけでは、おおよその長さすらわからないような——あまりに規模が大きすぎて距離感が狂うような代物だった。間違いなくメートルではなくキロメートルの単位で語られる規模の巨大建造物だ。

とはいえ、それ自体はさして驚くようなものではない。人類の偉業は時に現実味さえ薄い域に達する。衛星軌道上からも見えるという万里の長城は言うに及ばず、現代の建築技術では、数キロに及ぶ長さの橋の建造もそう難しい事ではない。現に世界一の長さで知られるポンチャートレイン湖コーズウェイなどは全長二八・四キロ、吊り橋として世界最長と言われる日本の明石大橋も四キロ近い全長を誇る。

だが……杭州湾海上大橋だろうが、チェサピーク湾ブリッジだろうが、あんなものに繋がってはいまい。

即ち——

「——〈都市〉」

車を運転する青年が謡うように言った。

「正式名称、アバロン学園都市島——君がこれから住む街さ」

——空中に浮かぶ島などには。

それはまるで悪い冗談のような光景だった。

白い虚無の中を——まるで雲海の上を走るかのように、延々と伸びていく橋。その行き着く先には、巨大な岩の塊が、即ち『陸』があったのだ。

その存在を最も近い概念で表すならば、やはり『島』になるだろう。

ただしそれが浮かんでいるのは海でも湖でもなく、完全な空中だった。その証拠に巨大な岩塊はその頂点から底部までを隠さず千里の視界に晒している。まるで何処かのアニメに出てきた小惑星のように——

「街って——いや、だから」

混乱して千里は言葉がまともに出ない。

一体これは何なのだ。

彼は——彼の乗る車は、確か数分前まで、トンネルに入る前までは、ごく平凡な風景の中を走っていたはずだ。もっと厳密に言えば東京のど真ん中——靖国神社に程近い市ヶ谷付近の道路を走っていたはずだ。

なのに。

これは——

「こんな……有り得ない」

こんな異常な、常識外れの、有り得ない風景が眼の前に広がっていて良いのか？　それともこれは何かのトリックとか特殊視覚効果ＶＳＦＸの類なのだろうか？

だが——周りの風景に作り物めいた不自然さは何処にも見当たらない。よく眼を凝らしてみると、島の端のあちこちから滝のように水が流れ落ち、数十メートル——だろう多分——落ちた辺りで、霧のように白く拡散して消えている様子も見えた。

上には幾つもの建物が並んでいて、街らしきものが形成されているのも見える。ただし街と言っても今風のそれではなく、どことなく中世ヨーロッパを連想させる煉瓦造りの建物が多いようにも見えた。

「特撮でもなけりゃ蜃気楼でもない」

青年は楽しげに——千里の内心を見透かしたかのような口調で言った。

「現実さ」

恐らく青年が操作したのだろう。千里の右横にある車の硝子が低いモーター音と共に下りて、外を吹き抜ける風が入り込んできた。

窓の外に顔を出す。

だが風景は変わらない。少なくとも窓硝子に映したＣＧの類でない事はこれでわかった。

「で——でもこれって」

「現実だよ」

もう一度念を押すように青年は言う。
「常識とか条理とかそういうものの、裏側にひっそりと承継されてきた――これもまた現実の一つさ」
「……」
とりあえず千里は自分の頬を定石通りにつねってみる。
ちゃんと痛い。
どうやら自分は夢を見ている訳ではないらしい。となると起きても夢を見てしまう位に狂っているか、さもなければ――これが紛う事なき現実だという事だ。
「何者なんだ、あんたは……？」
千里は運転手の青年の背中を睨み付ける。
何だかわからないが尋常ではない。そしてその尋常でない部分をこの青年はまるで当然の事であるかのように受け入れている。
つまりはこの青年も尋常でない側に属しているという事だ。
そういえば――と千里は思う。
自分はこの青年の名前もまだ知らない。
私立アバロン学園からの迎えだという事以外は何も知らない。
いや――その素性すらこの青年の自己申告だ。証明書を見せられた訳でもないし、たとえ見せられてもその真贋について判断できる知識は千里にはない。
そもそも改めて見れば――どこか胡散臭い青年ではある。
端整な顔立ちをしている。切れ長の目元やすっきり通った鼻筋、薄い唇など、部品部品を見ていけば――いやその配置すらも全く隙のない美形のそれだ。
なのに全体的に見ると、何処か完全になりきれていないというか、何処か重要な部分のネジが一本緩んで抜け落ちているような――奇妙な雰囲気がこの青年にはある。
「単なる送迎役さ。今のところは――ね」
バックミラーの中で青年がにたりと笑うのが見えた。
それは妙に斜に構えた、不真面目な感じで……哀れな犠牲者を地獄に誘う悪魔のそれに似ていると、千里は思った。
そして――
「さて。そろそろかな」
青年が楽しげに言う。
「何が――……」
そろそろなのか。
問おうとして――今度こそ千里は絶句した。
世界を左右に二分するかのように延々と真っ直ぐ伸びる橋の両脇。そこにごぼりと泡立つものがあった。
雲だ。
白い虚無と見えていたのはやはり雲海であったらしい。その厚い雲の層を押し退けて何か巨大なものが浮かび上がってくるのだ。
そう。それは巨大だった。
距離感が多少狂っていても、それだけはわかる。何か巨大なものが――恐らくは戦艦とか石油タンカーにも相当するかのようなものが姿を現そうとしている。
それは――
「……！」
最初に見えたのは鼻。
次に見えたのは牙。
それらはすぐに繋がって顔を成し、巨大な角を経て長い長い首に至る。更にそれは雲を割って出現する体軀と翼に――恐らく広げられたそれは一〇〇メートルにも達するだろう――達し、ノコギリの刃のように並ぶ背びれを経て長大な尻尾へと――
「か……」
怪獣、と言おうとして千里はその言葉を喉の奥に押し戻した。違う。確かに怪獣だがもっと相応しい言葉がある。
ドラゴン。
神話と伝説をその棲息領域とするはずの――伝説上の生物。最も神に近い生物とも呼ばれ、いわゆるモンスターの中では常に最強の代名詞として扱われる存在。
それが左右に一頭ずつ。
轟――と空気が鳴動した。
ドラゴン達はまるで衛兵の掲げる儀礼槍の如く左右から交差し――そしてその巨体で大

気を抉り抜きながら旋回。悠然とした動作で橋の左右に着地した。

まるで止まり木に止まる鳥のように。

「や。御苦労さん」

まるで路上で知り合いに挨拶するかのように軽い口調で言う青年。

「――周防千里君」

次いで彼は千里を振り返った。

運転中という事を考えればとんでもない行為だが――今更そんな常識を指摘できるような状況ではなく、また車もヨタつく事なく、するすると安定した動作で進んでいる。

「ようこそアバロン学園都市島――通称〈都市〉へ」

にたりと笑いながら青年は言った。

「目指すは、万能と無能の狭間、無限と有限の端境、特異と平凡の溶け合う混沌。我々関係者一同、君の入学を心より歓迎する」

――ぅぉおおおおおおおん。

青年の言葉を裏打ちするかの如く、銅鑼の音のような声で二頭の竜が吼えた。

●

周防千里は自分の事を比較的物わかりの良い息子だと考えていた。

父が海外に単身赴任すると言った時も、父がその単身赴任先で見つけてきた女性と再婚すると聞いた時も、特に異を唱えなかった。

更にはその女性には連れ子がいると聞いても殊更に反対はしなかった。

色々あって妻と別れて十余年。まあ息子が独立した後の人生について、多少なりとも想像力があれば、改めて伴侶を求めるのは当然ではある。それが子連れかどうかというのは単なる結果であって――少なくとも千里自身は新たに妹が出来ようと出来まいと、まあ対応する自信はあった。余程に酷い連中でもない限り、程々の緊張感と距離感を保つ事は難しくないと思っていたのだ。

だが。

それが物凄く甘い考えだと思い知らされたのは、父がその新しい妻と娘を連れて帰国した翌日であった。

その後の二カ月間については千里はあまり思い出したくない。

何にせよその二カ月間で千里は早々に家を出る決心をした。というか決心をしたのは一カ月目の事で、次の二カ月間は独り暮らしをする為の作業に費やされてきた訳だが。

「俺はこの家を出るから」

そう宣言しても明確な反対意見が家族の内から出なかったのは、それがちょうど、進学の季節であったからだ。正直、年末辺りから急に行く高校を変更して地方に独り住まいを決めるとなると、色々遅きに失した感があったが、千里には一つ切り札があった。

新設の学園都市。

その広告をネットで見つけた時は即座にこれだと思った。

小学校から大学までを網羅し、同時に生徒達の生活を、おはようからおやすみまで完全サポートする都市機能まで備えた、巨大教育機関複合体。翌年の四月からの新入生を募集していたその〈アバロン学園都市〉のパンフレットを取り寄せ、ざっと内容を確認し、――千里はこれぞ天の配剤とばかりに入学手続を取った。

資格確認の名の下に簡単なアンケートが送られてきたのでこれに答え、後は必要書類を取り寄せて送付する。基本的に父が海外にいた間は、全部、自分の事は自分でしてきたので、その手の手続にまごつく事もなく、晴れて千里はこの〈アバロン学園都市〉の生徒となったのである

だが……

この〈アバロン学園都市〉がどういう場所であるのか、千里は自分の眼で確かめた訳ではない。あくまでパンフレットとネットのホームページの情報だけだ。

ただ、どういう場所であろうと、千里としては堂々と独り暮らしができれば――あの家を出られればそれで良かったので、他の部分

は本当にさしたる関心を払っていなかった。どうせ狭い日本――何処に行っても大差ないだろうと。

故に。

それが超巨大な過ちであったと彼が知ったのは、実際に〈アバロン学園都市〉に辿り着いた……その後の事であった。

●

長い長い橋の果て。

そこには――顔面があった。

男の顔というのはわかる。だがそれ以外はまるでわからない。ありとあらゆる人種の特徴を混ぜて平均化したような――極めて純粋な『男の顔』がそこにあった。

ごっつい、鋲打ちなんかもされていたりして、どう考えても鋼鉄製としか思えない巨大な扉の表面に、浮き彫りになって。

「……」

千里はただ呆然とそれを見上げるばかりだ。

アメリカのラシュモア山国立記念公園には歴代アメリカ大統領四人を彫った、全高一八メートルにも達する胸像が存在するが――有名なので千里も写真だけは見た事がある――細かい数値はさておき、真下に立って見上げる際に受ける威圧感は、きっと似たようなものだろう。

でかい。馬鹿馬鹿しい位に。

しかも――

「――周防千里」

それが喋った。

「――わあっ!?」

思わず後ろに跳び下がり――千里はそこに停められたままだった車のボンネットに引っ掛かった。

「汝は周防千里――間違いはないか？」

「え？　あ――ああ……」

動揺と混乱のせいでほとんど反射的に答えてしまう千里。まあ書類は提出してしまっているので今さらとぼけても意味はないのだが――後にして思えばこれが引き返す最後の機会だったのかもしれず、それを千里は知らずに逃してしまったのだった。

「我はアバロン学園都市正門管理用イズモ型仮想神格六号〈ギズモⅥ〉である」

何処をどうやっているのか、鋼鉄のはずの顔面は滑らかに唇を動かしてそう言った。

「では――これより我が権能と機能により汝を〈アバロン学園都市島〉の住民として登録する」

ギズモⅥがそう宣言する。

それはあくまで儀礼的なものではあったのだろう。拒む間もあればこそ――ギズモⅥの両眼から『びみょ～ん』ってな感じの奇怪な音と同時に白い光が飛び出したかと思うと、千里を捉え――

「――!?」

その光の中をするすると何かが伝わってくる。よく見ればそれは文字列だった。

テープの類ではない。媒体を持たない純粋な文字の羅列がぞろぞろとやってきて千里の身体にまとわりつく。

「……!　……!?」

やがて声を出す余裕すらない千里の左手首の辺りへとそれは集まり、そして互いに折り重なるようにして定着した。

まるで刺青のように。

「な……な……なんだ!?」

千里がようやく声を出せたのは、その左手首の紋様が完全に皮膚と一体化した後であった。

「なんなんだ……これ!?」

「慌てない慌てない」

車のボンネットに座った青年がにやにや笑いながら言った。

「一休み一休み」

「どこのトンチ坊主だよテメエはッ！」

反射的に振り向いて突っ込んでから――改めて千里は己の手首に定着してしまったその紋様を眺めた。

見するとまるで刺青のように見えるが、角度を変えると微妙に色彩が変わって見える処を見ると、単にインクを皮膚に注入しただけのものではないのだろう。むしろ何かシー

ル状のものを巻き付けて貼ったものに近い。ただし皮膚上に何か貼り付けられているという感触は皆無なのだが。

「それは言ってみりゃこの〈都市〉の住民票みたいなもんだ」

青年は言って自分の手首を示す。

確かにそこには千里のものと同じくブレスレットのような紋様が描き込まれていた。

「うざったけりゃ隠す事もできる」

と言うや否や青年の手首から紋様が消えた。

「……！」

「なんにしてもこれがないと〈都市〉には入れない。同時に〈パーマンズ・ヴォウ〉の中核でもある訳だが……」

「パーマ……なんだって？」

「ああ、まあ細かい事はまた後でな」

怪訝そうに尋ねる千里に青年は肩を竦めて言った。

「あまり待たせるのもなんだ。さっさと中に入ろうぜ？　――ギズモ！」

「了解した」

巨大鉄面が言う。

「我が権能と機能を以て住民番号ＡＴ０６６６サクマ・エイタロウ、及び住民番号ＨＳ０５３８スオウ・センリ、汝等の入都を許可する――今日も汝等にとって佳き日であらん事を」

そしてギズモⅥに縦線が走った。

轟音と共に割れる顔面。それは左右にゆっくりと開いていき――そしてその向こう側にあったものをさらけ出した。

奇妙な街並みと。

そこに闊歩する奇妙な住民達と。

そして――

「……お待ち申し上げておりました」

地面に正座し頭を垂れる、人の少女とを。

「周防千里……様」

ゆるりと上げられた顔の真ん中で――宵闇を想わせる紫の瞳が静かに千里を映していた。

●

昔――犬を飼っていた。

全体的に間の抜けた雌の大型犬で、勿論血統書なんぞない雑種で、まあ言ってしまえば駄犬だった。

身体はでっかいが、てんで覇気がなく、臆病で、物覚えも悪く、お使いは勿論の事、番犬としても全く役に立たなかった。まあそれなりに愛嬌はあったが、いつまで経っても芸の一つも覚えない駄目犬だった。

元々は父が拾ってきた犬だ。

千里としてはあまり興味はなかった。ただまあ海外での仕事が多い父の代わりに、彼が面倒を見る事が多かったので、犬は千里によく懐いた。まあ動物は――特に家畜は餌をくれる人間によく懐くものだ。

だが。

ある日――その犬が調子を崩した。

変なものでも食べたのかと千里は訝しみ、二日ばかり様子を見たが、犬はどんどん弱っていく感じだった。二日目には下半身が麻痺しているのか、立つ事もできずにずりずりと這い回るだけになった。

これはさすがにまずいと千里にもわかる。

彼は獣医に犬を連れて行った。

獣医はその場で千里に入院を勧め、千里はその通りにした。千里はその時初めて、保険の利かない犬の入院には、びっくりする位のお金がいるのだと知った。雑種の駄犬一匹にははっきり言って過ぎた金額だったかもしれない。

だが千里は何の疑問も抱かずに犬を入院させた。自分がどうしてその事に疑問を抱かないのかさえ意識しなかった。

ただ……

中学の期末試験時期だった事もあり、専門家に任せたという安心感もあって、千里はそれから一週間、犬を入院させたまま、病院に行かなかった。

彼が病院へ行ったのは、八日目の事。

病院から――犬が死んだと電話が入ったからである。

千里が迎えに行くと、犬は物言わぬ物体となっていた。

周防千里様……ですよ……ね？

医者は何か言い訳じみた事を言っていたが、千里は詳しくは覚えていない。ただ人間と違って動物医療では多少のミスも追及されないし、されたとしても、裁判沙汰になるのは稀だ。獣医がどんな処置をしていたのか——本当に手を抜いていなかったのかは、千里にはわからない。

ただ——

千里は思い出した。

入院させたその日。

くんくんと鼻を鳴らす犬の悲しげな目。

愚かだから——自分がどうなるのかもわかっていない獣の目。自分がどうして置き去りにされるのかも、どうして飼い主が自分から離れていくのかもわからず、不安で不安でしょうがない、そんな愚鈍の瞳。

きっと——犬は歩けなくなった自分が棄てられたと思っただろう。飼い主に見限られた事への絶望と失意の中で犬は死んでいったのだろう。

それに千里は気付いた。

気付いてしまった。最早啼きも吼えもしない犬の遺骸を前にして、そんな今更どうしようもない事に気付いてしまったのだ。

もし。

一度でも見舞いにいってやれていたら、ひょっとして犬は安心しただろうか。たとえ助からなかったにしても、次に千里が訪れるのを待って——希望を抱いて逝けたろうか。

もしそうだとしたら。

自分は何と薄情だったのだろう。

わずかな時間を割く事を厭って、犬に絶望を与えた。絶望の中に沈んだまま飼い犬を死なせた。

死そのものについての責任は千里にはないだろう。それは犬にとって天寿であったかもしれない。

だが——それでも。

（俺は——ひどい奴だ）

ほんの僅かな努力。

だがそれを千里は怠った。

だから犬は孤独と悲嘆の内に死んだ。

それはもう取り返しがつかない事だ。

駄犬ネシェルはもういない。

●

何故……今頃になってネシェルの事を思い出したのかはよくわからない。もう二年近く忘れていたのだが。

ただ——

「……千里……様？」

黙ったままの千里をどう思ったのか——地面に正座した少女が、何処かおずおずとした口調で問うてくる。

年齢は恐らく千里と同じ位で十代半ば……五か六といった処だろう。

女性としては紫色の髪を短めに整えているせいか、あるいはやや切れ長の双眸のせいか、とにかく何処かその姿にボーイッシュな雰囲気のある少女だった。容貌としては整っているのだが、全体としてみると中性的というか、女としての色やら艶やら柔らかさやらがあんまり感じられない。

「周防千里様……ですよ……ね？」

繰り返し問いつつ——ゆらりと何処か頼りなげな仕草で少女が立ち上がる。

ほとんど無意識に千里は半歩後ろに下がっていた。

「……」

高い。背が。

千里は同年代の少年に比べて決して低い方ではないのだのだが、今、彼と相対する少女は、多分……頭半分ばかり、数字にして、〇センチ近く千里よりも背が高い。

長身痩躯だ。

細身なのに加えて——何処かちょっと猫背気味なので余計にひょろりと背が高い印象を受けるのである。ただ立つだけの仕草一つとってみても、何処か不安定というか、ぬぼーっとただ何かに吊り下げられているかのような——操り人形のような立ち方なので、余計にその印象が強まる。

何となくだが、千里はそのままこの少女が自分に向けて棒のように倒れてくるのではないかと思った。

ただし痩身といっても殊更に病的な細り方をしている訳ではない。半袖からのぞく腕はよく引き締まっていて健康的な印象がある。まあ胸やら腰やらの肉付きはよくわからないのだが。

何故なら——

「……えっと……？」

千里が答えない事がやはり不安なのか、少女は何処か茫洋とした表情のまま、首を傾げる。

その際に頭に付けたヘッドドレスのフリルがさらりと揺れた。

そう。

メイド服だ。

少女はメイド服を着ているのである。それも場末の風俗店なんぞで見掛けるような安っぽいものではなく——明らかにきちんと仕立てられたと思しき品を。

ただ——

「あ。ああ、そうだけど」

「……良かった」

ようやく認めた千里を前にして、ぬぼーっと立ちながら、ぽんやりとした笑みを浮かべる少女。

何というか……恐ろしい程にメイド服が似合っていない。元々メイド服というのは家事労働をする際の作業服な訳だが、この少女に

は『メイド』とか『作業』とかいう単語から連想されるキビキビとした印象が皆無なのである。

ましてこのボーイッシュな容姿に男顔負けの長身となると、フリル付きのヘッドドレスもエプロンも襟元のリボンも、何か違和感を醸成する為の小道具にしか成り得ない。

「……」

じゃあどんな服が似合うんだよ――と問われれば千里も口をつぐむしかないのだが。強いて言えばジャージやスーツの類か。少なくとも愛らしさを強調するような、フリフリヒラヒラ系の服は似合わないだろう。

「えと……あ。そだ……」

少女はしばらくぼーっと千里の方を見つめていたが、ふと思い出した様子でメイド服のポケットに手を突っ込んで、そこから小さな手帳を取り出した。

「ええと周防……千里様……私……千里様の……アジャスタントを拝命……しました……クフィール……アブソリュートと……申し……ます」

何か台詞一つ単語一つにもつっかえつつそう言う少女。

今一つ自分の言葉に自信が持てていないというか、明らかに教え込まれた台詞を口にしているだけといった印象であった。

「以後よろしく……お願いいたし……ます」

「はあ……よろしくお願いします……って」

眼を瞬かせて千里は言った。

「なんだって？　アジャ……？」

「アジャスタント……です」

クフィールと名乗った少女は言った。

「まあ仲良くな」

それは一体何だと千里が尋ねる前に――それまで、何やらニヤニヤしながら黙って事の成り行きを見守っていた青年が言った。

「これから一緒に暮らす訳だし」

「――はあ!?」

なんの脈絡もなく告げられる衝撃的な事実に千里は素っ頓狂な声を出し――その声に怯えるかのように少女はびくりと身を竦ませた。

「一緒に暮らす？　誰が？　誰と？」

「周防千里。君が」

言って青年はまず千里を指差し――そしてその先端をついと旋回させてクフィールの方を指差した。

「クフィール・アブソリュートと」

「アジャスタントは――」

おどおどと千里の反応を窺うようにしながらクフィールが付け加える。

「おはようからおやすみまで、御主人様の暮らしを見つめるライオ――もとい、暮らしを支援するのがその使命です……ので」

「……」

千里の喉から獣の唸りのような声が漏れる。

一緒に暮らす？

この少女と？

会ったばかりで何も知らないこの子と？

「いや。あの――ちょっといい？」

訳のわからなさに暴れ出したくなる気持ちを辛うじて抑え――千里は言った。

「はい……？」

やはり茫洋とした表情で首を傾げる少女。

「えっと――クフィールさん、だっけ？」

「はい……」

ほんのりとその表情を喜色に染めて少女は頷いた。

「クフィと略してお呼び下さると……多分……親密度が増して良い感じ……かと」

「いや親密度とかはさておき」

「さておくんです……ね」

何故かしゅん……と気落ちした様子で言うクフィール。だが構わず千里は言葉を続けた。

「一緒に暮らすとかなんとか――なんでそんな事が俺の承諾なしに決まってるんだよ!?　っていうかその前に此処は一体何なんだよ!?　でもって君等は一体何者なんだ!?」

「えと……」

立て続けに問い詰める千里の勢いに、クフィールは長身を逃げるように逸らし、困惑の表情で青年の方を見る。

「うーん」

青年は微苦笑を浮かべてひとしきり後頭部

を掻いていたが――

「まあ先ずは自分の眼で視て、耳で聴いて貰った方が、理解も納得も早いだろ」

と言って――彼は門の向こう側に広がる街の景観を指し示した。

●

「なんなんだ……一体ここは……」

千里は呻くように言った。

彼の前には奇妙な街の風景が広がっている。基本的に〈都市〉の景観は橋の上から見たものと大して変わらない。

並ぶ建築物は、雰囲気的には一昔前のヨーロッパを思わせる意匠のものが多く――やたらと石畳や煉瓦造りの建物が眼に付く。高層ビルめいたものも少なくはないが、どちらかというとそれも『塔』の雰囲気で、何処か古めかしい空気が漂っていた。

別に千里は西欧に住んでいた訳ではないのだが何処か郷愁を刺激される風景ではあった。

だが――最もこの街の風景を特徴付けているものは別にある。

水路だ。

道路と並行するようにして、あるいは建物の下をくぐるようにして、本当に何処にでも――それこそ碁盤目状に無数の水路が通っているのである。

それらは分岐し、あるいは合流し、街のあちこちを血管のように覆っている。どう考えても流れがおかしくなりそうなのだが――何故かとりあえず問題はないらしく、ぷかぷかとゴンドラのようなものや、モーターボートみたいなものが浮かんでのんびりと行き来をしていた。

雰囲気的にはベニスの街が近いだろうか。

ただし――

「……」

ベニスの街にあんなものはいないだろう。

水路の縁に腰掛けてぷかりと煙管をふかしている二頭身の半魚人とか。

ゴンドラの上の本屋からサッカーの雑誌を買っている人魚とか。

仲睦まじそうに水路を行き――泳ぎながらソフトクリームを食べている人間サイズのズ●ックとアッ●イとか。というか何処で喰ってんだお前らとツッコミそうになりつつも千里は叫ぶのを堪えた。多分一度ツッコんだら止まらなくなるのが自分でもよくわかっていたからだ。

まあそれはさておき。

橋の上から水路を眺めているだけで驚くのにも疲れた千里は、近くに車を停めて、そこらの屋台で買った焼き鳥の串をのんびりと食べている青年を振り返った。

「だからなんなんだよ、ここは!?」

「んー。ラ●ュタ?」

などととんでもない事を言ってくる青年。

何がどうとんでもないかはさておき。

「嘘つけッ!」

「じゃあ白●彗星帝国の中身。最後には巨大戦艦になります」

「んな訳ねえだろが!」

「……我が侭な奴だなー。どうせ何を言っても納得しないくせに」

「真面目に答えろッ!!」

地団駄を踏んで千里は喚いた。

「大体何なんだあの連中は! この水路だって何処をどうしたらこんな――そもそもこの水何処から来てるんだよ!?」

橋から見た限りでは水路の先は滝だ。という事はこの水路を満たす水はいつか落ち続けて無くなるはずで――

「循環してるのさ」

「どうやって!?」

「実はエッシャー機関ってのがあってだな。こういう原理で――」

といって青年が出してきた解説図を見ながら千里は喚いた。

「それは騙し絵だッ!」

千里は不機嫌だった。

どう考えてもからかわれているとしか思えない。

そもそも一般常識の通じない環境が――父親が異国から連れ帰ってきた妻と連れ子のい

る家庭がどうにも馴染めなかったからこそ、千里は家を出たのである。

なのにその結果としてもっと非常識な場所に連れてこられては意味がないというか——本末転倒である。

「一体何がどうなってるんだ！　此処は何処で、誰がこんな場所を作って、何の目的で俺を連れてきて、どういう理屈でこの無茶苦茶な状況が維持されてて、そもそもあんたは一体誰で——全部説明しろ、今すぐ！」

「悪いがその手の説明は俺の仕事じゃないんだよなー」

食べ終わった串を青年がひょいと振るとそれはまるで手品のように消える。投げ捨てた訳ではない。文字通りに消えたのだ。

「……」

一体こいつは何者なのか。

そして——

「……あの……そういうのは私の……アジャスタントの仕事です……から」

おずおずとそんな風に声を掛けてくる、このメイド服が激烈に似合わない少女も。

「じゃあ説明してくれ。今すぐ」

千里はクフィールの方を振り返って言った。

「え……でも」

クフィールは戸惑うように視線を千里と、青年の間で右往左往させる。

「長くなりますから……その……先に下宿に行って落ち着いた方……が」

「今すぐ！」

ほとんど怒鳴るような声で促す千里。

クフィールは首を竦め——青年が『まあそろそろいいんじゃない？』と気楽に同意するのを確認してから、話を始めた。

●

それは一つの教育機関であった。

ただしそれはいわゆる学校教育法上の定めに則って造られた組織ではない。そもそも社会通念や一般常識には縛られる事のない領域にそれはあった。

この国の公文書の何処を探してもその機関の名前は記されていない。

この国のどんな地図を紐解いてみてもその機関の所在地は掲載されていない。

それは存在しないはずの機関。あり得ないはずの組織。

何故ならこの教育機関が教える事は一般社会とは相容れないものであったからだ。人が人として社会を営む上で切り捨ててきたものが堆積して出来たものであったからだ。

だが捨てる者がいれば拾う者も居る。

そこは一般社会の常識からは見捨てられてきたものを営々と磨き上げてきた者達とそれに続く者達が学ぶための場所だ。利便性。効率。経済効果。確実性——無味乾燥とした実利主義の陰で忘れ去られたはずの不可思議なる、しかし厳然たる真実を身に付ける為の場所だった。

故に関係者は様々な想いを込めてその教育機関をこう呼んだ。

現代に隠れ住みし魔法使い達の学園——〈マジシャンズ・アカデミイ〉と。

……

だが——

●

「元々〈学園〉の理念は『魔法を一般人が受け入れないのなら、それはもう仕方がないから、我々は別の処に行って好きなことをしよう』……でした」

通りの片隅に置かれたベンチに座って千里はクフィールの説明を聞いていた。

クフィールはというと何故か千里の隣、ベンチの上に正座して喋っている。

元々彼女は身長が高いので、普通に座っている千里は何やら見下ろされるような感じで妙に圧迫感があるのだが、クフィール本人はそういう事は全く気にしていない——というか気付いていないようだった。

「それに対し〈連盟〉の理念は『魔法を一般人が受け入れないのなら、一般人を征服して意識改革をしよう』……でした」

「どっちも極端だな」

千里はぶすっとした表情で言った。
「はい……」
クフィールはぼんやりと頷く。
「そういう意見は……〈学園〉が〈連盟〉を吸収合併した辺りから出だしました……そして……ある種の人々が折衷案を出した……です」
「折衷案？」
「『本当に一般の人々が自分達を受け入れられないのか？　もし受け入れてもらうとするならどういう手段が有効か？』……そういった事を検証する為の実験を……行おうと」
「実験？　そんなものどうやって――」
そこまで言って。
千里は気付いた。
実験。シミュレーション。
限定された領域内で行われる仮想的行為。
それはつまり――
「此処が？」
「はい……」
ほんのりと喜色を、その茫洋とした表情に混ぜてクフィールは頷いた。
「〈都市〉――〈アバロン学園都市〉は……その為の実験都市です……一般の人達を受け入れ……魔法使いや神族や魔族や精霊と共存できるようにと……」
「……」
「ですが……」
クフィールは上目遣いで千里の顔色を窺うように視線を投げてくる。
「一般の方々は……魔法や……それに類する技能を行使できません……」
「そりゃそうだな」
千里だって魔法だの何だのは使えない。それどころかそんなものの実在すら信じていなかった――この〈都市〉に来るまでは。
「そうすると……当然……色々な軋轢と不平等が生まれるのは予想された事です……」
魔法使いと一般人。
あるいは神族や魔族や精霊と一般人。
当然――超常の技や能を行使する者達とそうでない一般人の間には、圧倒的とも言うべき能力差が存在する。そしてそれは容易く社会運営上の不都合へと発展するだろう。
この差をどうやって埋めるか。
例えば足の悪い者が暮らす為に、車椅子を、松葉杖を、あるいはバリアフリーの住宅を造るように――様々な角度から一般人とそうでない者達の隔たりを埋める方法が検討された。
そして――
「そうした方法の一つが……私達……アジャスタント……です」
それは『調節する』と『支援人』の双方を組み合わせた造語だ。ただしこれは一種の通称で――正式には『適合補助者』と言うらしい。
クフィールによるとそれは要するに使い魔なのだという。
高い能力を持った使い魔を側に置く事により、一般人と魔法使い達との能力差を少しでも埋めようとしたという事である。
勿論それは単なる魔法の道具でも良かったのだが、魔法の道具は使いどころが難しく、また使い手本人の魔力を使って起動するものも多い為、必ずしも一般人に渡して使いこなせるとは限らない――それどころか危険ですらある。
故に、あくまで思考能力を持ち、魔力をも自前で備えた使い魔が適当とされたのだ。
「するとなに……人間じゃ、ないって？」
「はい……」
こっくりとクフィールは頷いた。
「……」
千里は改めてクフィールの姿を眺める。
何というか――メイド服が似合ってないとか、ベンチの上の正座が変とか、色々おかしな処は確かにあるが、基本的に彼女は人間にしか見えない。
「信じられないな。何処からどう見ても人間だろ、君」
「あ……これは」
クフィールはぼんやりと笑うと頬をぽんぽんと左右から両の掌で叩く。
すると――

「――！」

ぽぽんと連続して小さな爆発が彼女の側頭部で発生し、煙に包まれ――それが収まった瞬間には、まるで漫画やアニメに出てくる亜人種だののような、尖り耳がにょっきりと生えていた。

「千里様が見慣れておられる……普通の耳の方が……おそばに侍る上で……良いのではないかと思いました……です」

「……」

もう大抵の事には驚かないつもりだったが、やはり手の届くような身近な距離でこうもはっきりと『魔法』を見せられると、千里としても言葉が出てこない。

無論、それが単なる奇術の類でないという証拠はない訳だが――

「千里様」

両手をぽんと正座する膝の上に揃えて姿勢を正し――クフィールは言った。

「そういう訳ですので……よろしくお願いします……！」

「――嫌だ」

「……」

「……」

気まずく重苦しい沈黙が辺りに満ちる。

「……えっと」

クフィールは目を瞬かせて言った。

「それは反語表現か何かでしょうか……？」

「端的に言う。嫌だ」

「……」

「……」

クフィールは何やらごそごそと傍らを探ると、辞書のようなものを取り出してぱらぱらとめくり始めた。

「念の為に言うけど同音異義語とかじゃないからな。嫌だ、NO、断固拒否だ！」

「うっ……」

「馬鹿馬鹿しい！　話にならねえよ！」

言って立ち上がると千里は足音も荒く石畳の道を歩き出す。

「あの……どちらへ」

「帰る」

「あ――でも」

「ついてくんなッ!!」

怒鳴って。

ぴくりとクフィールが身を竦ませた隙に千里は駆けだしてその場を去った。

●

「それで……そのまま帰ってきてしまったのですか？」

呆れの響きを伴うそんな言葉と共に、ティーカップが、千里を《都市》まで連れてきた例の青年の側へ――佐久間榮太郎の側へと置かれた。

「まあ元々、『新入り』への状況説明はアシスタントの仕事だしなー」

のんびりと漫画雑誌の頁をめくりながら榮太郎は言った。

「しかしそのまま放置は流石に無責任かと」

「だってしょうがねえだろ。俺が説明しても苛立つみたいだし」

「真面目に説明なさらないからでしょう？」

「真面目な説明なんてもんほど、下らないものはないと思うんだけどなー」

《都市》の中央部――《アバロン学園》内部に設けられた各教師専用執務室。榮太郎がいるのは彼にあてがわれた部屋の片隅であった。

縦長の部屋の左右の壁は全て本棚。真ん中に置かれているのは長く厚い――部屋の床面積の六割以上を占める机。でもって、それとは別に壁際に置かれた執務机があり――それと対になる革張りの椅子に座って、榮太郎は漫画雑誌を読んでいるのである。

そして――

「榮太郎様」

「うん？」

「そもそも……もっと段階を踏んで丁寧に招く事はできなかったのですか？」

榮太郎の隣には、黒髪のメイドが微苦笑を浮かべて立っていた。

クフィールとは異なり、その優美な容姿と慎み深さを示す典雅な物腰は、清潔なメイド服とぴたりと嚙み合い、一つの完成形を描き

出している。まるでメイド・サーヴァントの本場たるイギリスから――それもヴィクトリア王朝時代の――やってきたかのように、その姿には一分の隙もない。

もっとも。

隙はないが――本来のメイドにはまず有り得ない余分なものは付いていた。

獣耳と尻尾が。

「勿論、できたさ」

榮太郎は肩を竦めて言うと、漫画雑誌を机の上に放り出し、カップを手に取る。

強くもなく弱くもなく、適切な温度と時間が醸し出すダージリンの香りが彼の鼻孔をくすぐった。

「実際、そういう形で連れてきている者もいるしな」

「では――」

「忘れたのか？　これは実験だよ、エーネ」

榮太郎はにたりと笑いながら言った。

「想定され得るありとあらゆる事例（ケース）を仮想（シミュレート）展開し、検証する。それがこの〈都市〉に与えられた機能であり存在理由だ」

「それは――」

「我々が一般社会と馴染めるのか否か。一般社会が我々と馴染めるのか否か。実のところ、一般社会に比して我々の数はあまりに少ない。〈学園〉と〈連盟〉の関係者、および在野の魔法使い達全てを併せても四〇〇〇人弱。それに対して世界総人口実に七〇億――」

四〇〇〇対七〇億。

実に一七五万倍。

それは――ある意味で絶望的な数字だった。

「もし魔法使い達と、一般社会との融和が実際に開始されたとしても――全ての人々に万全の状況や態勢を用意できるとは限らない。中には不本意な形で順応を余儀なくされる者もいるだろうさ」

「……確かに」

「その為の数ある実験台の一つってとこだな、周防千里君とクフィールは」

「……惨（むご）いような……」

エーネと呼ばれた獣耳&尻尾付きメイドは微苦笑を浮かべる。

「そうか？」

むしろ楽しげに榮太郎は言う。

「こんなオチモノ的シチュエーション、そう体験できんぞ？　これで萌えなきゃ男じゃねえって。クフィールにしてもまんざらでもなさそうだったしな」

「……誰もが御主人様と同じような性癖だとは考えない方がよろしいかと」

「そーかなー」

●

道筋そのものは単純だったので、千里はさして迷う事もなく、徒歩でギズモⅥの処に辿り着く事ができた。

だが……

「うーむ……」

千里は巨大な鉄扉を前に唸った。

ギズモⅥの開け方がわからない。

〈都市〉の側にもギズモⅥの顔面はあったが、こちら側は完全に飾りなのか、前に立っても話し掛けても、何の反応もない。あるいは他に何か条件があるのかもしれなかったが――さすがに魔法使いではない上、此処に来て間もない千里にわかるはずもなかった。

しかしまさかこの重そうな鉄扉を手で押して開ける訳にもいくまい。

「他の出口を探すか……？　でもなあ」

ここに来る際に見たこの〈都市〉の全景からすれば、外に繋がる道は、あの橋一本だけだ。勿論、千里から見て死角側――〈都市〉の反対側にも同様の橋があるのかもしれないが、もしあったとしても、その橋が一体何処に繋がっているのかはわからない。

アメリカやEU諸国辺りに繋がっているのならいいが、戦争中の国とか、あるいはアマゾン奥地とか南極なんぞに繋がっていたら目も当てられない。

「となるとやっぱりあの橋に辿り着かないといけない訳だけど……」

〈都市〉の周りはぐるりと城壁のようなものが取り囲んでいて、基本的に出入りはギズモ

Ⅵを通らなければならないようになっているらしい。一見するとそれは刑務所じみたものにも見えるが――壁はむしろこの『島』から住民達が落っこちないようにするための『柵』の意味合いの方が強いのだろう。

「――待てよ」

ふと記憶を辿る千里。

この〈都市〉に来る時に見たものを一つ一つ改めて脳裏に浮かべてみる。

そして――

「そうか。水路だ」

『島』の外縁部には幾つもの滝が確認できた。確か、このギズモⅥのすぐ脇にも一つ細い滝が――恐らくは水路から繋がっている――あったはずだった。

勿論、水路の橋には壁と同様に落下防止の鉄柵か何かが填め込まれているだろうが、上手く行けば鉄柵の隙間から外に出られるかもしれない。流れもあまり速くはなさそうだし、外側に出てから、水が滝となって落ちるまでの間に岸に上がれば、橋の方にも出られるはず――

千里はそう考えて辺りを見回す。

周りは相変わらず非常識な光景が広がっている。

千里のすぐ隣を、球体関節人形の少女がとてとてと駆け抜けていき、人間の頭部の代わりに狼の頭を載せた巨漢が自転車に乗って通り過ぎていった。

でもって――

「……」

視界の端っこに覚えのある人影を見た。

クフィールである。

何やら心配げな表情で彼女は一〇メートル程離れた処に立っている。恐らくその一〇メートルという距離は、『ついてくるな』という千里の言葉と、自分の、アジャスタントとかいう職務への妥協点なのだろう。

「……ったく」

千里は溜息をついた。

またネシェルの事を思い出したからだ。あの駄目犬もよくこうやって千里の後をついて歩いていた。妙に臆病だったあの犬は、散歩に連れ出してもいつも千里の前には出ようとしなかった。『鷹』なんぞという大層な名前を貰っていたくせに、てんでそういう処は名前負けしている犬だった。

元より人間――ではないのかもしれないが――と犬、容姿として似ている部分なんぞは全くないのだが、でかい身体に似合わず、妙におどおどしているその様子にどうしてもネシェルを想像してしまうのだ。

「……まあいいか」

あの少女がネシェルに似ているからといってどうだというのか。

別にどうでもいい事だ。

千里はこんな奇妙で常識の通用しそうにない処に住むつもりはないのだ。多分、此処を出ていけば二度とクフィールと会う事もないだろう。

本当にただの通りすがり。

それだけだ。

だけなのだが――

「……」

千里はもう一度溜息をついて歩き出した。

●

「――ありゃ」

机の上に置いた二〇インチの液晶ディスプレイを眺めながら榮太郎は頬を掻いた。

そこには石の階段を通って水路に下りていく千里の姿が映っている。そして――彼から一〇メートル程離れて、ついていくクフィールの姿も。

「これは……まずいか」

呟くと彼は傍らに控えていた犬耳メイドを振り返って言った。

「意外に行動力と決断力あるな、こいつ。最初にパーマンズ・ヴォウについて教えておくべきだったか」

「はい」

「俺が行ってもいいんだが、下手に顔出すと意固地になりそうだしなあ」

机に片肘をついて唸る榮太郎。

「誰か――今、ギズモの側で、動ける者はいるかな？」
「ヘフィロソフィアⅡ〉で検索してみます」
メイドはそう言って一礼した。

●

「そこの少年ッ！」
水路への階段を下りて小さな桟橋に辿り着いた千里の背中に――突如そんな声が投げ掛けられた。
いかにも『私気が強いです』と言わんばかりに高く鋭く妙に尊大げな女の声。
背後を振り返った千里は――そこで愕然と凍り付いた。異常なものはまあいい加減に見慣れたが、それでもやはり相対すれば思わず身構えてしまう対象というものはある。
例えば鋭く尖った刃物の先端とか。
あるいは――
「そこで何をしてるですか!?」
水路の上――橋の上に立ってそう詰問してくる少女と、そのすぐ背後に傲然と立つ身長四メートル程の鋼鉄巨人とか。
四メートルというとたかが人間の二倍強、大した大きさではない、と普通の人間は思うかもしれない。
だが実際に鋼の塊としてそれらが眼の前にそびえていたりすると、人間は自分がいかに脆弱で矮小な存在なのか思い知らざるを得ない。それはまるで直立歩行する戦車のような威圧感を黙々と放散していた。
手前にいる少女が小柄だから、その巨大感が余計に際立つのかもしれないが――
「通報を受けて来てみれば案の定なのです！　貴方が周防千里なのですね？」
「……」
どうやらこの少女……千里の事を知っているらしい。しかも『通報』と今言った。という事は千里の行動を邪魔しようと考えている誰かの差し金なのだろう。
「水路に入ってはいけませんです！」
少女は言った。
眼鏡といい、生真面目そうな表情といい、神経質な位に綺麗に整えられた髪と、何かの見本のようにきっちり着こなされた制服といい――何というか、見るからに『委員長』といった印象の少女ではあった。それも図書委員とかではない。間違いなく風紀委員だ。
年齢は恐らく二十歳前――多分千里よりほんの少し年上といった処か。
美人ではある。
ただし彼女の場合、その容姿が優れている事よりも先に『生真面目』という構成要素が先に目立って見る者の印象に残る感じだった。
「聞いていますか、そこの少年！」
びしりと千里の方を指差す少女。
その腕に『風紀』と書かれた腕章が揺れている。でもって同時に彼女の動きをそのまま真似るかのように背後のロボットも千里の方をびしりと指差してきた。その腕の部分にもやっぱり『風紀』の文字。
ひょっとして彼女はこの学園都市の警察といった役回りなのだろうか。
「誰か知らないが邪魔しないでくれ」
「そうはいかないのです！　とうっ！」
言って少女は橋の上から飛び降りる。
同時に――ロボットもがっちゃこぎっちゃこと金属音をさせつつ橋の上から跳躍し、空中で少女の身体をキャッチ。そのまま着水した。
大量の水飛沫が辺りに舞い上げられる。
それらが雨のように降り注ぐ中で少女は眼鏡をきらりと反射させつつ、挑発的に笑った。
「大人しく従うです！　水路から離れるです！　いえ――この〈都市〉から出るのを中止するです！」
どうやら水路の水深はそう深くないらしい。ロボットは腰の辺りまで沈んだ処で止まっていた。
「うるさいな――俺は非常識な連中に振り回されたくなくて家を出てきたんだよ。こんな非常識な場所には一秒だっていたくないんだ！」
「問答無用！」
少女が叫ぶとロボットはざばざばと水を蹴

立てながら千里の方へと迫ってくる。
だが……
「ふん――」
何者か詳しい事は知らないが、ここまでするという事は――逆に水路から外に出られると太鼓判を押したようなものだ。
とはいえ、自分に向けて殺到してくるでっかいロボットをさばききるだけの技能は千里にはない。見た限り動きも外見に似合わず素早いようだ。
だが……
「――千里様」
とん、と千里の横に降り立った者がいる。
二〇段以上もの階段を一足飛びで下りてきたとは思えない位に、それは軽々とした動作だった。
クフィールである。
「ここは私にお任せ……下さい」
「え……？」
千里は思わず瞬きしながら傍らのクフィールを見た。彼女は〈都市〉側の者のはずだ。ならばむしろ眼鏡少女と一緒になって千里を捕まえようとするのが筋ではないか……？
「なんで？」
「補助対象者の行動をお手伝いするのがアジャスタントの役目です……から」
言ってクフィールはきゅっと拳を握った。
その横顔が――不意に引き締まる。少女の貌から茫洋とした雰囲気が拭い去られ、悲壮な程の決意が露わになる――
「命に、替えても」
「いや、ちょっと待て」
そんな大層な話なのか？
と――問う間もなくクフィールは迫り来るロボットに向けて跳躍していた。
「刃向かうですか!?」
驚いた様子で叫ぶ眼鏡少女。
だがクフィールは答えず、空中で一回転半、両足を揃えてのドロップキックをロボットにむけてぶちかましていた。
片や長身とはいえ少女。
片や戦車並みの重量がありそうなロボット。
多分重さから言えば一〇〇倍余りの差があるだろう。どう考えても帰結は明らか――だったはずなのだが。
「――ッ！」
どごん、という爆音じみた音と共によろめいたのはロボットの方だった。衝撃で吹っ飛ばされた眼鏡少女が、数メートルを飛んで、ぼちゃんと水路に落っこちた。
「――うそ」
目を丸くして呟く千里。
クフィールはそのまま蹴りの反動で舞い上がり、空中で再び一回転。今度は両手両足を使ってロボットの胸部に取り付いた。
「千里様　――お早く」
「あ、ああ――」
思わず見とれていた千里は、クフィールの呼び掛けで我に返る。
ここはクフィールに任せて自分は水路に飛び込んでしまえばいい。頭ではとりあえずそうわかっていた。
だが――
「……」
抵抗感がある。
自分の為に……会ったばかりの自分を助ける為に、戦ってくれているらしいクフィールをこの場に置き去りにして良いのか？
「――ぎッ！」
ロボットが声というより何か不協和音じみた音を出して両手を振り回す。鋼鉄の腕がクフィールの細い身体を弾き飛ばした瞬間、思わず千里は叫んでいた。
「クフィール!?」
だが――
「――ふッ！」
だん！　とクフィールは四つん這いで水路脇に立つ建物の壁に着地。両手の指と両足の爪先を建物の壁に食い込ませて、まるでニンジャのように彼女は壁に取り付いていた。
そこに――
「ぎッ！」
一声吼えて（？）ロボットが腕を掲げる。
次の瞬間、ロボットの手首から先がぱしゅん

と音を立てて発射され、鋼鉄の拳がケーブルの尾を引きながらクフィールを壁から打ち落とさんと突っ込んでいく。

だがクフィールは更に壁から跳躍。

伸びる拳の一打を回避、拳はそのまま空を切り、隣の建物の壁に食い込んで止まった。

そして――

「――ふッ！」

短く呼気を吐いて降り立つクフィール。

何処に？

ロボットの腕から伸びた――ケーブルの上に！

「ぎッ!?」

あるいはそれはロボットの驚愕の叫びだったのかもしれない。

仰け反るロボットに向けて、クフィールは駆ける――ケーブルの上を。とても綱渡りとは思えない速度で肉薄する彼女を、左手の一打で止めようとしてロボットは身構えるが、明らかにクフィールの方が速い。

二打目が発射されたその瞬間、クフィールは自分に向けてすっ飛んできた鋼鉄の拳に手を付き、まるで跳び箱を跳ぶようにしてこれをも回避。

くるりと空中で回転して、伸ばした右足の踵をロボットの頭部にぶち込んだ。

がごん！

音を立ててへこむロボットの頭部。

さすがにこれは効いたのか、ロボットはぐらりとよろめいて――倒れる。

ばしゃんと撒き散らされる大量の飛沫。

でもって――

「おい――クフィール!?」

慌てて千里が叫ぶ。

クフィールが――ロボットと同じく水飛沫を撒き散らしながら水路に沈んだクフィールが――浮かんでこない。

「ってまさか――あんなアクロバットできるくせに、泳げないのかよ!?」

泳げないのに。

こんな水路で大立ち回りをしたのか――あの少女は？

水深はおおよそ二メートル。

充分に溺死できる深さだ。

「くそっ――」

千里は短く呻いて水路に飛び込んだ。

●

「――パーマンズ・ヴォウ？」

一〇分後。

クフィールを（ついでにやっぱり溺れていた眼鏡少女を）引き上げている内に、完全に逃げ出す機を失した千里は、改めて駆け付けてきた別のロボット――重機動ゴーレムとここでは呼ぶらしい――に取り押さえられてしまった。

でもって。

「そうなのです」

腰に手を当てて千里の前に仁王立ちしながら、眼鏡の少女――御狩谷はるかは言った。

全身びしょ濡れなので今一つ迫力とかそーゆーのはなかったが、彼女の後ろでやっぱり若干頭をへこませたゴーレムが、腰に手を当てて反っくり返っていた。

「あのまま貴方が水路から外に出ていたら、確かに帰れたかもしれませんですが――パーマンズ・ヴォウが作動して、貴方は脳天パーになっていたです」

はるかが言うには――この街の秘密を守る為に、一般社会から来た関係者にはある種の『呪い』が掛けられるのだという。

〈都市〉の事に関して関係者以外に秘密を漏らせば、脳天パーになってしまうという呪いだ。

それは――

「――ってこれの事か!?」

千里は自分の左腕に付いた紋章を指差して言った。

「そうなのです」

「って――なんて事しやがる!? 外せー 今すぐ外せ！」

顔色を変えて怒鳴る千里。

だが――
「そういう訳にはいかないのです！」
とはるか。
彼女は千里の左腕を指差して続けた。
「そもそもそれは、〈都市〉の事を口外しない限りは無害なものなのです」
「だからって――」
「それは逆に言えば、秘密さえ守って貰えれば、いつでも外に出て貰ってもよいという事なのです！」
「――あ」
それはその通りだ。
そもそも〈都市〉から全く外に出られないのなら、そんな呪いは意味がない。
「しかしその事を知らないまま外に出ていたら、まず間違いなく秘密を喋って脳天パーになっていたです！」
つまり。
はるか達が千里が出ていくのを止めようとしたのは、千里が脳天パーになるのを防ぐ為だった訳で。
「って、言えよ、そういう事は最初に!?」
「ろくに話も聞かずに出ていこうとしたのは誰なんだよ！　なのです！」
顔を付き合わせて怒鳴り合う千里とはるか。
でもって――
「えっと……という事は……」
おずおずと片手を挙げて尋ねるのは――やっぱりずぶ濡れのクフィールである。
「貴女の行動は全くの無意味どころか、周防千里が脳天パーになるのを助けていただけなのです！」
「うっ……」
表情を引きつらせて呻くクフィール。
「アジャスタントのくせにそんな事にも思い至っていなかったのか、です！」
「……」
怒鳴られたクフィールは首を竦め……そして上目遣いに千里とはるかを眺める。
「ご……ごめん……なさい」
クフィールはぼそぼそとした声でそう言った。

●

ぽたりぽたりと雫が滴る。
点々と水滴の跡を石畳に残しながら千里は〈都市〉の街路を歩いていた。全身ずぶ濡れの異様な状態なのだが、元々人間以外が当たり前に闊歩している街なので、殊更に千里に注意を払う者はいない。精々が通りすがりにちらりと一瞥を投げていく位の事だ。
そして――
「……」
立ち止まる千里。
彼が振り返るときっかり五メートル離れた場所でやっぱりずぶ濡れのクフィールも立ち止まっていた。
ちなみに彼女は下着姿のままで、脱いだメイド服は小脇に抱えている。
「あの……」
「……」
「その……」
「――なあ」
千里は呟くように言った。
「いきなり、見ず知らずの人間と一緒に住めって言われて、なんとも思わねーの？」
「……」
きょとんとした表情を浮かべてクフィールは目を瞬かせる。
そして――
「見ず知らずの人じゃない……です」
「だって今日初めて会ったじゃんか」
「それはそう……ですけど」
クフィールが目を伏せて言う。
「でも……書類が私の処に来た時から……千里様のデータは色々見てたから……見ず知らずの人じゃない……です」
「……」
千里は言葉に詰まった。
理由は彼にもよくわからない。
「あの……」
クフィールは改めて深々と頭を下げた。
「ごめんなさい……私、アジャスタント失格……です」

「……」

「管理委員会に申請すれば……アジャスタントの交代とか、《都市》に関する記憶消去とかの処置もとれますから……その……明日にでも窓口に御案内……します」

しょぼんとした様子でそう告げるクフィールを、しばらく千里は黙って見つめていたが――

「ああ――もういい」

溜息をついて千里は言った。

「わかった、俺の負け」

「え……？」

きょとんとした様子で目を瞬かせるクフィール。頬を掻きながら千里はもう一度長々と溜息をつく。

そして。

「クフィール」

「は……はい」

「道案内頼む。学生寮まで」

「あ――……」

ぱっと表情を輝かせて――それでもこの少女は何処かぼんやりとした風情を引きずってはいたが――千里に駆け寄るクフィール。

そんな彼女を見つめて、ちょっと頬を赤らめると、千里は視線を逸らしながら言った。

「しばらく様子見だ。今から別の学校やら下宿やら探すのも大変だしな」

「はい」

「それとな」

「はい」

「似合わないからメイド服はやめろ」

「……はい」

言われて、クフィールはしゅんとしょげた表情を浮かべた。

まかでみ・えくすぺりめんと　魔法都市？　完

――遂に幕を開けた新シリーズ『まかでみ・えくすぺりめんと』！　未だ謎に包まれたままの《都市》の全容、そして図らずもクフィールとの同棲を受け入れた千里の学園生活の行方は!?　今後の展開や新情報はTDコミで配信していきます！　要チェック!!

猛吹きすさぶ極寒の地の果てに、
霧島葉月の彼女――謎の美少女は実在した!?
まおでみ・らでぃかる
彼女なんですけど。
榊 一郎
イラスト/BLADE

まかでみ・らでぃかる

延々と白い死の荒野が広がっていた。
渺々と吹き荒れ、全てを漂白してゆく吹雪が支配する世界。視界のほとんどは乱舞する雪によって白濁し、全てを凍り付かせんとする寒気が、空気そのものをささくれだったものに変えていく。
「みゃっみゃっみゃっみゃっ――」
それは――既に必殺の凶器だった。
人間は、体温が二五度を割ると昏睡状態や仮死状態に陥るという。対象を瞬殺するような即効性こそないものの、間断なく吹き付ける風は体温を少しずつ少しずつ奪い去り、じりじりと緩慢に――しかし確実に、己の中を往かんとする無謀な愚か者を、死の淵へと追い込んでいくのだ。
いや――心臓の弱い者ならば、いきなりこんな場所に放り出されただけでショック死も有り得る。
なんにせよ……
「みゃっみゃっみゃっみゃっ――」
こんな場所をわざわざ徒歩で進もうというのは、とんでもない馬鹿か、さもなくば自殺志願者だけだろう。
では――

「みゃっみゃっみゃっみゃっ、みゃっみゃっ、みゃっみゃっ――」
――などと行進曲調というか、超初期テレビゲームの侵略者のよーに単調なリズムで声をあげながら、楽しげに歩いている少女は、果たしてどちらなのか。
やや癖の強い赤毛。健康的な褐色の肌。手足を高く上げて歩く、やったらめったら元気そうな仕草と相まって、生命力溢れるその姿は、何処か常夏の南国を想わせる。
着ているものも薄手のシャツにジーンズで、ジャンパーやコートすら羽織っていない。普通の人間なら数秒で手足がかじかんで身動きが取れなくなるはずの格好なのだが……少女はまるで気にした風もなく、ざっくざっくと雪を掻き分けながら進んでいく。
異様な風景である。
この猛吹雪の中では、その少女は存在そのものが不相応というか……砂漠の真ん中の雪だるま、密林の中のビルディングの如く、明らかにチグハグだった。
そんな彼女の背中に――
「……た……タナロット……」
か細く震える声が少女の背に追い縋る。
いかにも瀕死の病人が生命力を振り絞って出しているかのような声で――タナロットと呼ばれた少女に比べると随分と場に相応しい声ではあった。

「――みゃ？」
タナロットはきょとんとした様子で後方を振り返る。
彼女の視線の先、白く白く塗り込められた地面の上で、もこりと雪が動いた。
いや。違う。
動いたのは雪ではなくて――雪に埋まりつつある誰かだった。勿論わざわざ雪の中に隠れているのではない。この状況ではそれこそタナロットのように常に動いていないと、雪がどんどん降り積もって、瞬く間に層をなしてしまうのである。
「どうしたのであるか、タクト？」
とタナロットは首を傾げて尋ねる。
「なんだか元気がないのである」
「……いや……僕としては……どうしてタナロットが……そんなに元気なのか……理解に苦しむ……位なんだけど……」
雪に半ば以上埋まっているその人物は呻くような口調で言った。
「みゅ？　ひょっとしてタクトは寒いのであるか？」
「……」
声の主が黙り込んでしまったのは、単に呆れたのか――それとも既に突っ込む元気もないからか。
まあなんにしても沈黙そのものが肯定である事はタナロットにもわかったらしい。

「それはいけないのである！」
ぽぽぽ――と雪をラッセル車顔負けの勢いで跳ね飛ばしながら戻ったタナロットは、雪の中から凍りかけの少年をずぼりと引きずり出して言った。
タクト――羽瀬川拓人。
容姿から身長、体重、体力、学業成績、財力、家柄その他、各種諸元が見事に――お前わざとやってねえか？　と尋ねたくなる位に、日本人高校生男子の平均値を記録する平凡な少年である。
特徴を挙げろと言われれば、彼の知り合いは揃って首を捻った挙げ句に――『特徴がない事』と言うだろう。
多少中性的な顔立ちや、善人丸だしの表情などは彼の持ち味ではあるが、特徴とするには薄い要素でしかない。
まあそれはさておき。
「タクト！　タクト！　しっかりするのであるタクト！」
そう言ってタナロットはしばし黙り込んでしまった拓人を揺さぶっていたが――
「――みゃ」
不意に何か思い付いた様子で大きく頷いた。
「閃いたのである！　こういう時は人肌で温め合うのである！」
「……へっ……!?」
止める間もあればこそ――タナロットはすんごく嬉しそうに拓人少年の着ている服を脱がしにかかった。
猛吹雪の中で。
「ちょっ……」
「さあ、タクト、脱ぐのである！」
「やっ……駄目っ……」
「人肌で温め合う為に脱ぐのである!!」
「……寒ッ……冷ッ……」
「恥ずかしがっている場合ではないのである！　こういう時は人肌で温め合うと助かるのが定番なのである！　ついでに愛が芽生えたりするのである！　実は前から好きでしたとかどさくさ紛れの告白タイム……」
「……」
「……みゅ？」
反応のない拓人の襟首を摑んでぶらんとぶら下げながら、タナロットは首を傾げる。
彼女は数秒、息も絶え絶えの拓人をきょとんとした表情で眺めていたが――
「みゃ！　タクト、眠ってはいけないのである！　眠ったら死ぬのである！　天は我を見放したなのである！　原稿も落ちるのである！　早く、早くすっぽんぽんになって温め合うのである！」
「……その前に……し……死ヌ……」
辛うじて突っ込む声は既に臨終間際の如く弱々しい。まあこの氷点下の雪原で裸に剝かれかかったら誰でもそうなるだろう。
しかし……
ごばッ!!
爆音めいた音と共に熱風が走る。
突如として発生したそれは――ほんの束の間ではあるが、辺りを満たす寒気を切り裂き追い払った。
相転移。
何らかの力で瞬間的に昇華――つまり融解の過程をすっ飛ばして蒸発させられた雪の仕業だ。水蒸気化によって瞬間的に体積を一七〇〇倍にも増したそれは、文字通りに爆発に等しい威力を発揮したのだ。
「みゃっ!?」
しゅうしゅうと立ち上る白煙は――タナロットと拓人の脇、数センチの処に長々と刻まれた溝から発生していた。
まるでアイスクリームに熱したナイフを入れたかのように、滑らかで、しかし深々と刻まれた溶断の跡。
その長さ――実に五メートル。
でもって――
「～～～～～～～～ッ!!」
その溝の一端でぽこりと雪を割って姿を現したのは……一人の少女であった。
まん丸眼鏡。黒の三つ編み。大きな眼はやや下がり目気味でかつ潤み気味。見るからに

まかでみ・らでぃかる

地味で気弱で人見知りというか『あの、その、私は眼鏡ッ子……です……』などとオドオドヴォイスなんぞをあてると綺麗にハマりそうな感じの容姿であった。

よく見れば整った、清楚で可愛らしい顔立ちをしている。だが、改めて問われなければ彼女を美人と認識しないような——積極的に他人を惹き付け印象に残るような艶やかさが欠けているのだ。

もっとも……

『あんたは……』

何やら異形の剣——だろう多分——を握り殺気めいた気迫を背負って雪中に立つ姿は、地味とか気弱とか消極的とか、そーゆー要素を全て相殺して余りある殺気に満ちていたりもするのだが。

ぶぅん——と少女の剣が羽虫のような低く鈍い唸りを上げる。

一応構え方からそれが武器だと——それも『剣』なのだと推測はできるが、やたらに複雑で機械的な形状を各部に備えたそれの外観は、刃物よりもむしろ、チェーン・ソウや機関銃といったものの方が近い印象である。

機剣〈ワルプルギス〉。

人造金剛石の『剣身』を芯として不可視の力場刃を発生させる強大な刃物。

雪を——一部ではあるが瞬間的に蒸発させたのはこの『剣』だった。

『私が凍死しかけてる横でなにやってんの』

と眼鏡の少女は左手でノートを掲げてそう問うた。

「みゃ？」

タナロットは首を傾げて言った。

「スズホ——まだ生きていたのであるか？」

羽瀬川鈴穂。

拓人の従姉妹であり、同居人であり、拓人の事をスキスキ大好きな恋する乙女でもある。

本来は見た目通りの引っ込み思案な少女だが、事が拓人絡みとなると——見ての通り。

『生憎とまだ死んでないわよ』

鈴穂は眼鏡の奥からタナロットを睨み据えつつノートにそう書き示した。

「みゅう。必要以上の生命力なのである」

『悪かったわね！』

鈴穂は幼い頃の心理的外傷が原因で喋る事ができない。なのでまだるっこしい話だが彼女の意思疎通は基本的に筆談なのである。

まあ諺に『目は口ほどに物を言う』などと言われるが——〈ワルプルギス〉を片手に、全身から熱風の如き怒気を迸らせている鈴穂の姿を見れば、殊更言葉なんかなくても彼女の気持ちは正しく伝わるだろうが。

「みゅう。仕方ないのである」

ヤレヤレ、といった様子で肩を竦めてから——タナロットは急に真顔になって言った。

「スズホ」

『何よ』

「スズホはここで急に身の上話をすると良いのである」

『は？　なにを言ってるの、あんたは』

「この戦争が終わったら結婚するだん」とか『故郷には待っている人がいるんだ』とか言いながら誰かの写真を意味深に見せたりするのである」

『はあ？』

「『この仕事が終わったら、こんなヤクザな商売から足を洗うんだ』でもいいのである」

タナロットは言った。

『それってどう考えても死亡フラグ……』

と鈴穂。

まあ漫画とかドラマとかアニメとかでそーゆー台詞を言った者は、間違いなく途中でお亡くなりになるという不文律（なのか？）はあったりする訳だが。

「——他にも『先に行って待ってるぞ』とか、『ここは俺にまかせて先に行け』とか、閉ざされた山荘で殺人事件が起こった後で『殺人犯と一緒にいられるか！　俺は自分の部屋で寝る！』とか言ったりするとなお良いのである！」

ぶんぶんと両手を振って力説するタナロットを冷ややかな半眼で見つめる鈴穂。

『……そうまでして私を亡き者にしたい訳ね？』

……ああ。お花畑の向こうで母さんが手招きしてるよ

「みゅう。余計な処で察しが良いのである」
『……って、だからこの非常時に、どさくさ紛れに何してんのよ、あんたは！』
怒鳴る――もとい書き殴る鈴穂。
彼女の視線の先には、やっぱりいそいそと拓人の服を脱がすのを再開するタナロットの姿があった。
「既成事実を作っているのである」
『開き直るなッ！』
ぶおんッ！――と音を立てて〈ワルプルギス〉が振られる。
不可視の力場刃が走り、軌道上にあった雪がまるで焼けた鉄板に触れたかのように音を立てて蒸発した。
触れるものを焼き切る必殺の一撃。
最強レベルに設定して振るえば、それはプラズマ溶断刀の如く戦車をもバターよろしく切り分ける。勿論人間など手応えを示す間もなく真っ二つだ。
だが――それも当たればの事。
タナロットは慣れた様子で、その見えない刃をひょいと身を屈めてかわすと、次の瞬間――跳躍。
「――！」
愕然と頭上を振り仰ぐ鈴穂に向けて、タナロットはスニーカーの両足を揃えて急降下ドロップキックをかました。
鈴穂はこれを回避。
雪の上を転がってかわす彼女のすぐ隣に着地したタナロット。
どぉんッ！と――まるで列車砲の砲弾の如く深々と地面に突き刺さったタナロットから放射状に衝撃波が発生、大量の雪を巻き上げる。
こちらも文字通りに必殺。
まともに当たれば痛いとか感じる前に人間などぺちゃんこだろう。
『こんの！』
吹っ飛んでくる大量の雪をプラカードで払いつつ、出来たばかりの雪のクレーターへと〈ワルプルギス〉を叩き付ける鈴穂。
轟音。
力場刃によって再び溝が深々と刻まれ、水蒸気が噴き上がる。
しかし既にタナロットはそこにはおらず――雪の中をモグラよろしく掘り進んでいた彼女は、クレーターから数メートル離れた辺りにずぼりと顔を出した。
「外れなのである♪」
「～～～～～～～～！」
キッと眼鏡の奥から怒気に満ちた眼でタナロットを睨み据えると鈴穂は三つ編みの先に結び付けられていたリボンを解いた。
くるくると回転しながら解けていく黒髪。
それが――まるでCGでも見ているかの様にすっと先端から蒼く染まっていった。

時間にしてわずかに数秒。鈴穂の髪は本来有り得ない紺碧の色に染まり――

「やかましい！　今日という今日はボコボコのメタメタにしてやるかんな！　覚悟しやがれッ！」

と――心理的外傷から喋れないはずの鈴穂は大声で啖呵をきった。

いや。違う。

これは鈴穂であって鈴穂ではない。

彼女の名前は鈴果。紆余曲折あって鈴穂の中に発生し、封印のリボンを解くと顕れるもう一つの人格であった。

とはいえ何度もこの現象を見ているタナロットは今更驚くはずもなく、むしろ小馬鹿にした様子で言った。

「何度もその台詞は聞いたのである。性懲りもなくできもしない事を繰り返すのは老化が進んだ証拠なのである」

「アタシはまだ十代だッ！」

「でも我の方がずっと若いのである。だから相対的にスズカは年増で年寄りなのである。これはどう考えても覆せない歴史的事実なのである。我の方が若くてぴちぴちなのである！」

「テメェは～～～ッ!!」

怒り狂う鈴果と挑発を重ねるタナロット。

でもって――

「今日こそ死ねえええええええええ!!」

「みゃあああああああああ!!」

次々と鈴果の〈ワルプルギス〉が雪原を切り裂き、タナロットのドロップキックがクレーターを穿つ。

吹雪は益々激しく吹きすさんでいるのだが、少女達の戦いは熱を帯び周囲の状況なんぞまるで知らなげに続いた。

弾け飛び蒸発する雪。

入り交じる怒号と轟音と熱風。

ほとんど怪獣大決戦のノリである。

そして。

一撃必殺の破壊力が惜しげもなくばらまかれるその横で――

「……ああ。お花畑の向こうで母さんが手招きしてるよ……」

――放置された拓人は一人静かに臨死体験なんぞしたりしていた。

●

それは一つの教育機関であった。

ただしそれはいわゆる学校教育法上の定めに則って造られた組織ではない。そもそも社会通念や一般常識には縛られる事のない領域にそれは在った。

この国の公文書の何処を探してもその機関の名前は記されていない。

この国のどんな地図を紐解いてみてもその機関の所在地は掲載されていない。

それは存在しないはずの機関。在り得ないはずの組織。

何故ならこの教育機関が教える事は一般社会とは相容れないものであったからだ。人が人として社会を営む上で切り捨ててきたものが堆積して出来たものであったからだ。

だが捨てる者が居れば拾う者も居る。

そこは一般社会の常識からは見捨てられてきたものを営々と磨き上げてきた者達とそれに続く者達が学ぶための場所だ。利便性。効率。経済効果。確実性――無味乾燥とした実利主義の陰で忘れ去られた筈の不可思議なる、しかし厳然たる真実を身に付ける為の場所だった。

故に関係者は様々な想いを込めてその教育機関をこう呼ぶ。

現代に隠れ住みし魔法使い達の学園――〈マジシャンズ・アカデミイ〉と。

●

全ての発端は一週間前まで遡る。

二学期が始まって間もなく――それは珍しく拓人が、下校の際に友人である霧島姉弟を遊びに誘った時の事だった。

「今度の連休、皆でどっかに行かない？」

「あ……い、いいね！　うん！　行こう！」

一瞬、驚いたような表情で固まってから――拓人からそんな提案が出るとは思っても

みなかったのだろう――それを振り払うかのように、トレードマークであるポニーテールをぴょんと跳ねさせつつ振り返り賛同したのは、霧島姉弟の姉の方、双葉である。

拓人の事を陰で――といっても気付いている人間の方が圧倒的に多いが――慕っている彼女にしてみれば、彼の提案は願ったりかなったり、棚からぼた餅、降って湧いたような幸運、であったろう。

長いようで短い高校生活――御堂高校で過ごす時間ももう残り少ない。

卒業後は、同じ大学にでも行かない限り、顔を合わせる機会も減ってしまう訳で――拓人に懸想する双葉にしてみれば、今の内に少しでも仲を進展させておきたいと思うのは当然だ。

まあ彼女の場合は進展も何も、恋愛関係はてんで奥手――拓人との関係は、お友達からまだ一歩も出ていなかったりするのだが。

なんにしても、緒に何処かに出掛けるとなると親密度を増すチャンスも増える。日帰りでもいいが泊まりがけだとなお良い。

場合によっては告白、でもってその先とかその先の先とか――なんて事も……！

「行こう行こう！　是非行こう！」

と盛り上がる双葉。

だがその横で――

『でも何処に行こうかって話なの』

とノートに書き示すのは鈴穂である。

連休ともなると行楽地は間違いなく混み合うだろう。高校生の懐事情でそう遠くに行けるはずもなく――近場なら連休でなくてもいつでも出掛けられる訳で。

「みゃ――海！　海がいいのである！」

と拓人の隣でぴょんぴょんと飛び跳ねつつ、何かの宣誓のように手を挙げながら主張するのは、タナロットである。

『――ってタナ郎は言ってるんだけど』

「この冬場に？」

と双葉。

グアムだのハワイだのまで出掛けるならともかく、国内旅行でこの時期に海に出掛けて何が楽しいのか。

「海には海の幸が一杯なのである！　マグロにタコにイカにカニコロッケを、取れたてを喰うのである！」

「いや……カニコロッケの取れたては無理だと思うけどね」

と苦笑する拓人。

「みゃっ!?　無理であるか？　それはやはりカンキョーハカイが原因なのであるか!?」

「いやそうじゃなくて」

『タナ郎――カニコロッケがあのまま海の中を泳いでいるとでも思ってるの？』

「みゅ――違うのであるか!?」

がーん、という書き文字付きの背景なんぞ

背負ってる感じでよろめくタナロット。この分だとウナギは開かれて串打ちされた状態で河を泳いでいるものだと信じているかもしれない。

「タナちゃんの国って内陸部なんだっけ？まあ山国の育ちとかだったら、海の幸とかよく知らないって事はあるかもね」

苦笑して言う双葉。

ちなみにタナロットは建前上――双葉達を含む一般人に対しては、どこぞの外国から来た留学生という事になっている。

だが、実際には拓人が召喚実習の失敗で『生成』してしまった未分化魔神で、実年齢はまだ二歳にも満たないお子様である。なのでしょーもない知識はわんさか吸収している反面、ごく当たり前の事を知らなかったりもするのだ。

まあそれはともかく。

ここまでは……わりといつものやり取りではあった。

大抵は、おかしな事を言うタナロット、それに突っ込む鈴穂と拓人、更に常識的に話をまとめる霧島姉弟、というのが彼等の会話の基本パターンである。

ところが。

「んー……」

いつもならば姉と一緒に話をまとめにかかる霧島姉弟の弟――葉月が、今日は何故か反応が悪い。

「葉月？」

拓人が首を傾げて、友人の横顔を――高校生とはどーにも思えない位に、厳つくて角張った顔を覗き込む。

すると……

「悪ィ。俺はパス」

と葉月は言った。

「え？　そうなの？」

「俺は俺で予定があってな」

ぽりぽりと後頭部を掻きながら葉月は言う。

「随分前から先約が入っててな。だからまあ――ちと勘弁してくれや」

「先約？」

「ああ」

葉月はまるで定期検診か、正月の挨拶回りの如く、慣例行事のような何気ない口ぶりでぽそりと言った。

「彼女とデートの約束してんだよ」

でもって。

「……」

沈黙する拓人。

「……」

沈黙するタナロット。

「……」

沈黙する鈴穂――はまあいつもの事だが。

でもって次の瞬間。

「えええええええ

だが勿論、霧島葉月という人間を構成している要素は他にもある。

例えばネット社会。

互いに本名も素顔も、下手をすると性別すら欺き合いながらも密接に絡み合う電子の社会。そこにおける葉月はハンドル・ネーム〈くれせんと・むーん〉として多方面で活躍しており、春の新作アニメのOPを使ったMADムービー製作から、バレたら両手が後ろに回りかねない場所への侵入行為まで、なんでもござれのパワーユーザー——いわゆるハッカーとして知られていたりする。困った事に。

あるいは傘下にケーキ・ブランド〈アイランド〉及び〈ミスト〉を持つ食品会社キリシマ・フーズの内部では、まだ学生ながらキャンペーン企画だの何だので父親の右腕として活躍する将来有望な御曹司として認識されている。まあキリシマ・フーズはそう大きな会社でもないので、これは極めて小さな母集団ではあるのだが。

とにかく——

まあ葉月とはそういう人物である。

色々な意味で超高校生級というか、おまえほんとに高校生か？　と疑いたくなる側面をたんまり抱えている少年だ。

でもって。

「私も初めて聞いた時はびっくりしたわよ」

とは後日の——双葉の弁である。

「我が弟ながらあの面相であの性格でしょ。どう考えてももてるとは思えないし。正直、最初はうちの財産狙ってる性悪女に引っ掛かったのかとも思っちゃったのよね」

まあ前述の通り霧島姉弟の親は小さいながらも一国一城の主——会社経営者だ。大富豪と呼ぶには少々無理があるが、それなりに財産家ではある。

「でも写真見せて貰ったけど、これがもー見るからに線の細い御嬢様って感じで。ほら、なんていうの、サナトリウム文学のヒロインとかやってそーな、夏の高原とか、白いワンピースとか似合いそうな感じの」

その写真は拓人達も見せて貰った。

確かにそこに写っている少女は見るからに清楚可憐で華奢な雰囲気をまとっていた。両手で鍔広の帽子を持ち、カメラに向かって恥ずかしげに微笑む様は、あまりにも『清楚可憐な御嬢様』のイメージにハマり過ぎていて——一種、出来過ぎの感さえあった。

「話を聞いてみると……どうも家は本当にでっかい洋館で、お金持ちらしいのよね。まあ田舎の方に住んでるらしいから、実際にはそんなお金持ちじゃないのかもしれないけど」

同じ大邸宅でも東京近郊と田舎町では全く建設と維持にかかる金が違う訳で。

「正直、信じられない感じだけど、まあ実際葉月は何度も会ってるみたいだから、ネカマに騙されてるとか、美人局とかの類でもないみたいだし……」

「なるほど」

まあ姉の双葉としてはいまいち面白くないというか『私だってまだ彼氏いないのに』とか言いつつちらちらと拓人の方を見てはいたが——朴念仁チャンピオン級の拓人としてはやはりそれには気付かず。

毎度の如き人の善さで葉月とその彼女の幸せを願ったりしていた。

そういう訳で。

この話は大体この辺りで終わるはずだったのだ。はずだったのだが——

●

がたん——と椅子が鳴った。

「先輩？」

拓人は怪訝な表情を浮かべて馴染みの先輩である処の佐久間榮太郎を振り返った。

佐久間榮太郎。

魔法使い達の集う学舎〈学園〉において準教師という中途半端な立場にいる特濃オタク魔法使いである。

ぱっと見は美形の名にふさわしい容姿なのだが、何処か何か緩んでいるというか、重要な部分のネジが一本抜けているかのような、一枚目になりきっていない部分があったりす

る。

まあ彼の場合はこれが愛嬌になっていたりもするのだが。

で――

「……」

その佐久間榮太郎は。

「あの……先輩？」

首を傾げる拓人の視線の先で、愕然とした表情で立ち上がっていた。まるで――まるで街中で人食い鮫に出会ったかのような、衝撃と恐怖がその眼にはある。

彼が呆然と見つめているのはノートパソコンの画面だった。

そこには一枚の写真が掲載されている。デジカメで直接撮ったものではなく、スキャンしたような――いや、写真を更に撮影したもののような、何処かくすんでぼやけた感じがある。

でもってそのノートパソコンからは一本のコードが伸びていて、その先には一人の少女がちょこんと座っていた。

ファルチェ・ザ・ヴァリアブルワンド。

拓人の愛用する魔法機杖の精霊化――擬人化した姿である。長い翠の髪の、おっとり系美人で、彼女が側にいるだけで空気が和やかになるような少女であった。

まあそれはさておき。

ファルチェはコードの端っこをくわえている。要するに彼女の記憶野からの映像出力をパソコンの画面に映しているのである。まあ魔法機杖の化身である彼女がこういう事をするのは珍しくもないし、驚く事でもない。

なので榮太郎の驚愕の元はもっと別の処にあるはずなのだが――

「どうしたんですか？」

「……」

榮太郎は答えない。

代わりに――

「――どうなさいました？」

と――部屋の奥から出てきたメイド姿の娘が首を傾げる。

エーネウス・ザ・バージェスト。

黒犬獣の化身にして榮太郎の使い魔――同時に常に《学園》マドンナ・コンテスト（不定期開催）で上位入賞をキープする清楚で優美なメイドさんである。

彼女はひょいと主と同じくノートパソコンの画面を見て――

「……」

やっぱり固まった。

「ちょ……エーネウスさん!?」

さすがにエーネウスまでとなると拓人もこれが尋常ではない状況だと気付く。

榮太郎とエーネウスは一体何をそんなに驚いて――しかも怯えているのか。

画面には一人の女の子が映っているだけだ。

葉月の『彼女』である。

正確に言えば葉月が先日『俺の彼女』と見せた写真の映像記録だ。

長くしっとりとした黒髪を風になびかせ、少女は鍔広の白い帽子を飛ばないようにと両手で押さえながら、はにかむようにして微笑んでいる。

着ているものはこれまた白いワンピース。

化粧っ気はほぼ皆無だが、そんなものは多分まるで必要ないと誰もが思う位に、白く滑らかな肌と、目鼻立ちの整い方をしているのが、写真越しにもはっきりとわかる。

印象は可憐の一語に尽きる。

可愛い。物凄く可愛い。

何というか、腰から上――いわゆるバストショットの写真を見ただけで、反射的に『一夏の想い出』とか『華奢で身体の弱い御嬢様』とか『ササトリウム文学』とかそーゆー設定（？）がぽこぽこ脳裏に浮かんできそうな少女だった。

この少女の姿の何が、榮太郎やエーネウスに衝撃を与えたのか。

元々は榮太郎が見たいと言い出したので、ファルチェが自分の記憶野から映像を引っ張り出したのである。クリスマスのパーティも含め、榮太郎は二度ばかり葉月と面識があるので、彼の『彼女』とやらに興味を持ったらしかった。

だが――
「……」
「……」
栄太郎とエーネウスの顔にじわりと汗の珠が浮かぶ。
でもって――
「あの。先輩」
『どうしたんですか?』
と隣にいた鈴穂も書いて尋ね、タナロットも不思議そうに栄太郎達を見つめている。
だが。
「それが……それが葉月君の彼女だってのか……?」
栄太郎は呻くように言った。
「え? ええ。葉月はそう言って――」
「みゃ? どうしたのであるか?」
タナロットが尋ねる。
それがまるでスイッチだったかの様に――
「――知らねぇ!」
喉を潰しかねないような大声で栄太郎は喚いた。喚いたついでに眼の前の現実すら否定しようとするかのようにイヤイヤと何度も首を振ったりもした。
「は?」
「知らねぇ! オラなんにもしらねえだ!」
「……何故に田舎言葉……?」
とりあえず突っ込む拓人だが、そんなものはまるで耳に入っていない様子で栄太郎は悶絶するように身を震わせて喚き続けている。
「知らん! 知らないったら知らない! 知らないんだあああああああっ!?」
「……」
栄太郎の狂乱ぶりに驚いて――尋ねるようにエーネウスの方を見ると、やっぱりこの、いつも冷静で優雅な態度を崩さない使い魔のメイドさんも、ふるふるふる……と首を無言で振った。
まるで――何かに怯えるように。
「……一体何が……」
栄太郎がここまで錯乱するのは、拓人の記憶にある限り、愛の筋肉テロリスト・天使ハプシエル事件以来の事である。
それに加えてエーネウスまでこの怯えよう。
一体これはどうした事か。
葉月の『彼女』と佐久間栄太郎。
どう考えても接点などなにもなさそうなのだが――知り合いか何かなのだろうか? 栄太郎の錯乱ぶりは、どう考えてもただ事ではないのだが――
「知らない! 俺は知らない! 知らないったら知らない! 知らない~俺は知らない~知られちゃいけない~!」
なんか恐怖が一回りして脳のおかしな処に入ったのか、盆踊りのような動きで歌い始めた栄太郎。でもってその脇で目を伏せて黙り込んでいるエーネウス。

どちらも、とてもまともに話を聞ける状態ではなさそうだった。

という訳で――

●

電車に乗る事一時間余り。

サスペンド状態にしたノートパソコンを鞄に放り込み、同じ姿勢で座り続けてそろそろ痛み始めた腰を伸ばし――葉月は席から立ち上がった。

「んー……」

列車の車内を見回す葉月。

この時間帯、この路線、ほとんど乗客の姿は見受けられない。葉月の他には精々が二人か四人といった処で、いずれも年寄り――それも風呂敷包みに今朝とれたての大根だの何だの包んで背負っていたりするような、地元の年寄りばかりだ。

「相変わらずの田舎だねえ」

苦笑しつつ呟いて彼は列車を降りる。

乾いた冬の寒気を貫いて降る日差しが妙に眩しく――葉月は眼を細めて手を額の上にかざした。

葉月の言葉通り田舎である。

他にもう表現しようのない位に典型的な田舎の無人駅である。

線路に付随するかのように、申し訳程度の屋根が付いた小さなプラットフォームがあり、そこに更に付随するような感じで小さな駅舎がくっついている。しかも改札に人はおらず、代わりにキップを放り込む箱が置かれているだけ。

でもって周りに見えるのは山とか畑とかで、ビルの類は見渡す限り何処にもない。

都会のそれとは明らかに質の違う、のんびりまったりした空気が辺りに満ちている。何処かで空高く輪を描いて飛ぶトンビの声が聞こえてきた。

「……さて」

ごとんごとんと野暮ったい駆動音をたてながら彼の背後で電車が発進する。改めて端から見ると二両の単線で――まあこれもいかにも田舎らしい。

「此処まで来ればあと一歩――」

呟きながら歩き出す葉月。

彼が改札を通り抜けて駅から出ていくのと、まるで機を揃えるように電車はプラットフォームから離れていき――

「……」

先程まで葉月の他に誰もいなかったはずのプラットフォームには四つの人影がわだかまっていた。恐らく扉が閉まり列車が発車する、ぎりぎりの瞬間に降りたのだろう。

「ふう……」

それは――怪しい集団だった。

「長かったね」

それが……それが葉月君の彼女だってのか……？

呻くように言うのは――私服姿の拓人である。
その傍らには鈴穂、タナロット、そしてファルチェの姿もある。
全員が私服姿なのはまあ休日なので当然として――彼等の姿を激烈に怪しく見せているのは、揃いも揃って付けているサングラスその他の『変装道具』だった。
十代の高校生が、普段着にスニーカーでサングラスを掛けているだけでも充分以上に違和感があるのだが――これに加えてファルチェはいかにも『尾行中ですぅ～』と言わんばかりに髪をまとめてハンチング帽なんぞを被っているし、鈴穂は風邪引き用のマスクなんぞをしているせいで、そのまま銀行に入ったら問答無用で警察に通報されちゃいそうな感じである。タナロットに至っては何故か妙に立派な付けひげをしていたりするが――一体何をどう勘違いしているのやら。
まあ見ての通り……拓人達は変装して葉月を尾行中なのであった。
「しかし御主人様～」
ファルチェが首を傾げて言う。
「さすがにこれはプライバシーの侵害なのでは～？」
「まあ――それはそうなんだけどね」
溜め息混じりに言う拓人。
「心配なんだよ」
「心配……ですか～？」
「みゅ。そうなのである。そもそも不自然なのである」
腕を組んでタナロットが言った。
「ハヅキのカノジョは実は誰も会った事がないのである！」
「はあ……」
「カノジョが本当にいるのかどうかもあやしいのである」
「ハヅキさんが見栄を張って嘘をついていると……？」
『そうは思ってないけれど』
と鈴穂。
『確かに写真は見せて貰ったけど、そんなのネットとかでマイナーなアイドルの写真とか引っ張ってきても私達にはわからないし』
とにかく葉月の彼女についてはその一枚の写真と葉月の自己申告しか、その存在を証明するものがない。
つまり――
「人間じゃない可能性だってあるんだよ」
と拓人。
なんだかんだ言って拓人がこんな田舎までやってきたのは、やっぱり気にはなったというか、ぶっちゃけ興味があったからと――別の意味で葉月が心配だったからである。
あの栄太郎達があまで姿を見ただけで恐れおののく相手。
それこそ、そこらの天使とか悪魔とか精霊とかなら、鼻歌交じりで手玉に取りそうな栄太郎が、あんな反応を示すとなると……どう考えてもこの葉月の彼女、ただ者ではない。
（まあ葉月の話じゃ今までも何度か会ってるみたいだし――大丈夫とは思うけど）
万が一、葉月に危険が及ぶようなら、どうにかして助けてやらねばならない――そう思ったからこそ拓人はこんなデバガメな行動に出ている訳だ。
……まあ単純に、あの葉月がどんな顔と態度で彼女と話すのか、そういう純然たる興味も何パーセントかあったりもするのだが。
「そうなのである」
タナロットが腕を組みながらまた頷く。
「ひょっとしたら『脳内彼女』かもしれないのである」
「――へ？」
と眼を瞬かせる拓人。
「の――脳内彼女って」
『あ。この間、テレビでやってたの』
鈴穂が書き示した。
『現代日本のネット中毒とかコンピュータ中毒とか、なんかそういう特番で。ネットやゲームに耽溺しすぎて、現実と仮想の区別がつかなくなる人達が特集されてたりして、そこに』
「脳内って――つまり現実にはいないって

まかでみ・らでぃかる

事？」

さすがにそっち系の想像はしていなかった拓人である。

『うん。ギャルゲーとかエロゲーとかやりすぎてまるで、自分の理想の彼女がそこにいるかのように思い込んじゃうっていうか――そういう人達って、もう本当に想像の彼女がそこにいるんじゃないかって思い込んじゃって、その通りに行動しちゃうみたいよ』

「……それってあれかな。佐久間先輩のシャドウ妹みたいなもんかな」

頬を掻きながら自信なさげに言う拓人。

「ゲームは危険なのである！」

とこれまた唐突に拳を握りしめてタナロットが言う。

「戦争もテロも犯罪も税金が高いのも郵便ポストが紅いのも女性のミニスカートが短いのも全部ゲームのせいなのである！　ゲームな脳でぜーんぶ説明できるのである！　荒れる十代、キレる若者なのである！」

「……どこの大学教授だよ」

うんざりした表情で言う拓人。

まあタナロットは根が素直なので、ネット上の根拠皆無のデマとか、思い込み九五パーセントのトンデモ本の内容とかを簡単に信じ込んでしまう悪癖がある。

「まあ家に引きこもってネットゲームばっかりやって、現実の人と会わなくなると、そういう事もあるかもしれないけど……」

まあお隣の某国では、ネットゲームのやりすぎで死んだりする人間が出る御時世である。正常な判断力が侵食される事も場合によっては有り得るが。

「さすがに葉月はそんな状態にはならないとは思うよ」

葉月は確かにエロゲーだのギャルゲーだのも大量にやり込んでいる様子だが、かといってそういうのに耽溺して現実と物語の区別がつかなくなるような感じではない。というかそういうタイプの人間は間違ってもゲームの構造解析して、ゲーム本体をプレイせずに、グラフィックだけぶっこ抜くよーな身も蓋もない真似はすまい（よい子は真似しないように）。

「先輩のシャドウ妹だって、区別がついてないとかじゃなくて、わかってやってるんだろうし……」

『それはそうよね』

「みゅう。違うであるか」

「でも……とにかく気にはなるんだよね」

なんにせよ――葉月の彼女の写真を見たときの栄太郎の反応も含めて、拓人の感覚に引っ掛かるものがあるのは確かなのだ。

「御主人様～」

そういう訳で……

「一定の距離を置かないと尾行が露見してしまう可能性はわかりますし～、一応、追尾の魔法は仕掛けてありますけれど～」

ふとファルチェが言ってくる。

「そろそろ追い掛けないと有視界で見失ってしまう可能性がありますよぉ」

「あ。うん。行こう」

四人は葉月の後を追って歩き出した。

●

かちん。こちん。かちん。こちん。

薄暗い洋館の中に旧式の――振り子時計の音が延々と響いている。

家具はいずれもアンティーク。灯具もいずれもアンティーク。絨毯もアンティーク。階段の手摺りも手沢によって鈍い輝きを帯びており、壁紙ですらビニール製が当然のこの時代に、わざわざ白い布地が使われている――洗剤の類が使えないので、汚れを落とすにはわざわざ食パンで拭わねばならないような。

全て貴族が貴族として贅沢な毎日を謳歌していた時代の代物である。

「……ふふ……」

何もかもが旧時代の空気を引きずっているかのような空間。

そこに白い少女は佇んでいた。

「……ふふっ……」

微笑を薄紅色の可愛らしい頬にたたえて少女は背後を振り返る。

飾り気の少ない——しかしそれ故に主の姿を引き立てる白いワンピースの裾がふわりと揺れた。
決して華やかではない。
殊更に艶やかでもない。
むしろ無地のワンピースや装身具の一つも身に帯びないその姿は、見方によってはひどく質素にも見える。
それなのに少女の姿は違和感なく屋敷の内観に溶け込んでいた。いや——それどころか周りの歴史ある品々が、己の存在を主張せず、脇に徹して少女の存在を引き立てているかのようですらある。
小柄な少女の姿は——洋館に満ちる薄闇の中でむしろ光を放っている風にすら見えた。
「……もうすぐ」
少女は夢見るような口調で言う。
「もうすぐ彼が来る——」
頬を僅かに赤らめて少女は時計を見つめる。
そうして見ていれば、急かされた針が速く回って時間もそれだけ進むとでも思っているかのように。
ぎい——と何処かで何かが鳴った。
それは扉が開く音か。
あるいは——
「——少佐」
関節の軋む音か。
何処か重々しく——不吉な響きである。

「……」
少女は背後を振り返る。
そこに立っていたのは——人形だった。
比喩でも何でもない。
人間を象りながら人間でないもの。人の似姿であり紛い物。
それとわかるのはメイド服の半袖から伸びた腕が明らかに作り物であったからだ。
それは肌の質感から色彩から恐ろしく丁寧に再現された芸術品とも言うべき代物であったが——まさか本物の人間に球体関節はあるまい。
人形は、白い少女とまるで対を成すかのようによく似た顔立ちをしていた。もしこの人形を製作するにあたってモデルがいたのだとすれば——それは間違いなくこの白い少女なのだろう。
「……大尉」
少女は微笑しながら人形の方を振り返る。
清楚な令嬢を思わせるその表情の下で、何か別の印象を帯びたものがもぞりと動いた。
「此処ではその呼び方は禁止と——あれ程に言ったでしょう？」
人形が——ぴくりと身を震わせる。
糸もなく。恐らくは動力もなく。そもそもそこに自立している事そのものが不可思議としか言いようのない人形が——まるで生きた人間が怯えたかの如くに。

「申し訳ございません——御嬢様」
「よろしい」
少女は鷹揚に頷く。
その仕草は何処か女帝の如き威厳と風格を備えていたが——次の瞬間、少女は姿に似合った可憐な仕草で首を傾げてみせた。
「で——？　何か用があって来たのではないの？」
「……は」
人形は頭を垂れた。
「我が軍の警戒領域内——いえ本家の敷地内に招かれざる客が侵入した模様です」
「……勿論それは葉月さんとは別に」
「イエス、マム」
「……」
少女は溜め息をついた。
そして——
「排除しなさい」
「イエス、マム」
ひどく端的な指令に人形は恭しい一礼で応えた。

●

田舎の冬は厳しい。
勿論その程度の事は拓人も知識として知ってはいた。豪雪地帯では雪によってしょっちゅう電線が切れたり交通が麻痺したりして死活問題に発展するし——そもそも民家の数

も少ないので、町や村からちょっと離れただけで容易く雪中遭難したりもする。
そう。知ってはいたのだ。
だが――
「はい御主人様～きりたんぽですよ～」
「い……いつも済まないね……」
「おとっつぁん――もとい御主人様～それは言わないプロミスですよ～」
がちがちとカマクラの中で震えながら拓人はファルチェの差し出したきりたんぽを受け取る。何処から調達してきたのか、ファルチェの前には小さなカセットコンロがぐつぐつと小さな鍋を温めていた。
「しかし……なんなんだ一体」
「不自然と言えば不自然ですねぇ」
とファルチェはカマクラの入り口から外を眺める。相変わらず周りは猛吹雪で数メートル先さえ見えない状態である。まあその一方で時折、閃光とかが走ったり、轟音が響いたり『死ねえええ！』とか『みゃあああ！』とか『秘技コウテイペンギン！』とか『そんな技に俺がやられクマ――！』とかなんだか色々聞こえてきたりもするが、まあそれはさておき。
「葉月……大丈夫かな」
拓人は呟いた。
葉月を尾行しておよそ半時間。
彼が向かっている先は――どうやらこの先にある『お屋敷』らしい事は、途中、通り掛かった地元の人に尋ねてわかった。
だがこのお屋敷というのが曲者だった。
地元の誰も所有者を知らないらしい。誰かが住んでいるらしいのは間違いないのだが、一体何処の誰がそこに住んでいるのかは、全く知られていないとか。
どんな人間が住んでいるのであれ、地元の人間が全く知らないという事はかなり不自然である。生きていれば生活必需品の一つや二つ買いに出るだろうし、たとえ全てを通販に頼っていたとしても、宅配業者の集配所に勤める人間位は、屋敷に行って中に住んでいる人間と顔をあわせる事になるはずだ。
「誰も知らない山奥の洋館～そして唐突に発生する吹雪～まるであつらえたような舞台ですねぇ」
「でも葉月は問題なく移動してるんだよね」
「はい～」
こっくり頷くファルチェ。
「少なくとも追跡用の魔法ではそう出てます～特にバイタルサインに異常もなく～」
「となると葉月は招かれて、僕等は招かれざる客って事か……」
吹雪は唐突に発生した。
それこそ拓人達に対応の間もない位に、いきなりの事だった。突然、視界が真っ白に染まったかと思うと、急激に気温が低下――数秒後には猛烈な勢いで雪と風が、葉月を追跡中だった拓人達を押し包んだのである。
どう考えても尋常な現象ではない。
「これってやっぱり～〈学園〉絡みとか～〈連盟〉絡みとかなんですかね～？」
「まあそうだろうね……」
と――そこまで言って。
「みゃあああああああっ！」
「――あ」
ずぼり、とカマクラの天井ぶち抜いて降ってきたタナロットが、カセットコンロと鍋を吹っ飛ばした。
「みゅう。油断したのである。恐るべしスズカの秘技なのである」
「一体どんな……」
ととりあえず突っ込んでから。
「タナロット～」
「みゃ？　タクトなのである」
そこで拓人の存在に初めて気付いた様子で眼を瞬かせるタナロット。でもって彼女はその横にそっと寄り添ったりなんかしちゃってるファルチェも見て。
「みゃ？　ファルチェ――何だかよくわからないけど抜け駆けはずるいのである！」
「でもあのままだと御主人様は凍死なさってましたし～」
言われてタナロットは首を傾げ――すっかり忘れていた当初の目的を思い出した。

「みゃあ！　あっためるのである！　人肌なのである！」
「あああああめれえええええっ!?」
でもって拓人が悲鳴を上げる処に――
「はーははは！　とどめだタナ郎――」
突っ込んでくる鈴果。
「……っててめえ、また性懲りもなく何やってやがる！」
「みゅふふふ。肉を切らせて骨を断つ、試合に負けたが勝負には勝ったのである。当初の目的のタクトの存在を忘れ果てたスズカの負けなのである！」
自分も忘れ果てていたくせに胸を反らして大いばりのタナロット。
「訳わかんねえ事言ってんじゃねえ！」
怒鳴って鈴果は〈ワルプルギス〉を振り上げる。
その瞬間――
「えっと」
ふとファルチェが眼を瞬かせながら言った。
「先輩方～伏せた方がいいかと思います～」
「みゃ？」
「なんだ？」
「だってあれ～」
言ってファルチェが指差す先。
そこには何やら白い尾を引きながら吹雪を貫いて飛んでくる塊が――
「ミサイルじゃないでしょうか～」
と。
ファルチェが宣った瞬間――雪面に着弾したミサイルは大爆発を起こして一同をなぎ倒した。

●

「……うん？」
遠雷のような音に　何処か遠くから響いてくる轟音にふと首を傾げて振り返る葉月。
何処かで工事でもしているのだろうか。それとも何処かで雪崩でも起きたのか。
だが……振り返ってみた処で見えるのは延々と続く白い雪景色ばかりである。
「……」
まあ雪崩だろうが工事だろうが、今の葉月にとってはもっと優先すべき事柄がある。すぐに彼は興味を失って視線を前方に戻した。
道の果て、白く染まった森の中にどでんと建っている――でっかい洋館に。
深い森の奥にある事といい、典型的な外見といい、夜中に来ると猟奇殺人が起こったりどっかの多国籍企業謹製の動死体が襲ってきたりしそうな感じだが――とりあえず今は昼間で陽光が燦々と降り注いでいる為、そうおどろおどろしい雰囲気はない。
でもって。
「――葉月さん……！」
「あ――」
館の方から駆けてくる小柄な人影が一つ。
白い少女。
清楚可憐という概念をそのまま具現化したようなその少女は、ワンピースの裾が必要以上に広がらないように、帽子が飛んでしまわない様にと、それぞれ片手で押さえて気にしつつ、葉月に向かって走ってくる。
よく考えればこの寒い時期に正気を疑うような格好であるのだが――そういう細かいツッコミを寄せ付けないような、完璧なまでの『清楚可憐な御嬢様』空気をその少女はまとっているのだった。
「――葉月さん……！」
愛おしそうにもう一度そう叫んで。
でもって――
ぼす。
「――あう」
その場で少女はこけた。
どうもかなり鈍臭いというか――ドジっ子属性も備えているようだ。とりあえず薄く積もっている雪のせいで顔面を強打するような事はないようだったが……
「ちょっ――」
慌てて葉月が駆け寄ると、少女は身を起こし、顔や身体に付いた雪を叩いて落とす。
「大丈夫か？」

「はいっ――」
にっこり笑って。
でもって少女はそのまま両手を伸ばしてきゅっと葉月に抱き付いてきた。
「いやっちょっと待――」
「待てません♪」
少女は言ってぎゅーっとそのまま葉月に抱き付いている。別に他人の眼がある訳ではないのだが、さすがにこれには葉月もやや頬を赤らめざるを得ない。
あるいは――少女が雪以外は特に何もないところでこけたのも最初からこれが狙いであったのかもしれない。
「普段はオンラインでしか会えないんですもの――たまにこうやってオフラインでお会いする時位は、美夏の好きにさせてくださいまし♪」
「いやまあ……そりゃいいけどな」
葉月は頬を掻いてから、ひょいと少女の小柄な身体を抱き上げる。いわゆるお姫様だっこという奴である。
軽い。ちゃんとものを食べてるのかと首を傾げたくなる位に軽い。
「――ちゃんと飯喰ってる？」
「食べてますよぉ」
「ならいいけど――」
「でもでも」
「うん？」
「会えない葉月さんの事考えると――美夏、胸がきゅうってなって、沢山御飯食べられないんです」
「ふふ……困った奴だな」
「だってぇ～♪」
葉月の胸にすりすりと頬を擦り付けながら少女――美夏は言った。まるで飼い主に甘える猫のような仕草である。
何というか――葉月と美夏の周りにだけ、チョコパフェにシロップぶっかけて喰うかのような、激甘時空が発生している。双葉辺りが側にいたら背中の痒さに転げ回って悶絶していた事だろうが――生憎と今は周りに誰もいない。
「ところで」
そのまま美夏を抱き上げて歩きながら、ふと思い出したように葉月は言った。
「何かさっき爆音みたいなのしてたけど」
「え？　そうですか？」
美夏は大きな眼をぱちくりさせて不思議そうに言う。
「近くで工事とかやってんの？」
「どうでしょう――やっているかもしれません。採石場も近くにありますし」
よく考えればこれはおかしい。
採石場が近くにあろうがなかろうが――この雪では操業しているとは考えにくい。まして山の近くでダイナマイトなんぞ使えば、それこそ雪崩を引き起こしかねない訳で、たとえ操業していたとしても爆音が響いてくることはまず有り得ない。
だが――
「そっか」
「はい♪」
そのまま葉月は音の事には興味を失った様子で、美夏を抱き上げつつ屋敷の方に歩いていく。
まあお姫様だっこなので、密着度は高いが意外にこの状態だと相手の表情が見えなかったりもする。
なので――
「……」
腕の中の美夏が一瞬、やたらめったら鋭い目付きをした事に、当然ながら葉月は気付いていなかった。

●

咄嗟に防御魔法を展開できたのは、予め不安感というか危機感があったからだ。
予めファルチェの中にロードされている防御魔法の術式は、拓人の一声で彼の魔力を使って展開される。
いざ術式が発動すれば防御力場の構築に要する時間はわずかに一ミリ秒。
お陰で発生した爆発力の大半はこれによって相殺する事ができた。

ただし――

「いきなり何なんだよ!?」

と半分ばかり雪に埋まりながら呻くように言うのは鈴果である。ちなみにタナロットもその隣でどっかの連続殺人事件の被害者みたいに、上半身を雪に埋めた状態で倒立していた。

「わからないけど――」

拓人達の周りには、今や完全に吹っ飛んで消滅したカマクラの代わりに、半球状の防御力場が展開されている。するすると呪文文字列が循環する半透明のドームの中で、拓人は身を起こしつつ既に杖状態に変化しているファルチェを構えた。

「とにかく尋常じゃないね」

表情を引き締めて拓人は言う。

「追跡用の魔法も何だか妨害されているみたいだし」

「それって……」

「やっぱり葉月が危ない。助けないと。鈴果――悪いけど手伝ってくれる?」

「へっ――」

赤くなった鼻をごしごしと手の甲で擦って、にやりと笑う鈴果。彼女は手を伸ばしてずぼりとタナロットを雪の中から引きずり出すと、言った。

「いちいち頼む必要なんかねぇよ。アタシ達にとっても葉月の野郎は友達だしな」

「みゃ?/みゅむむ。なんだかよくわからないけど、我もねぇよ、なのである」

と逆さ吊りのままこれまた言ってくるタナロット。同時に彼の頭の中にファルチェの『私もです~』という声が響く。

「――ありがとう」

頭を下げるように大きく頷くと――拓人は決然と立ち上がった。

●

――などと。

熱く燃える友情で、拓人達が葉月の為に戦う決意を固めていたのと同じ頃。

「これは……ッ!」

葉月は戦慄していた。

彼がいるのは美夏の住む屋敷の庭――正確にはそこに面するオープンテラスである。

どう考えても時期的に真冬真っ盛りのはずのその庭には、まるで神話や伝説の桃源郷の如くに色とりどりの花が咲き乱れ、庭の向こうに見える雪景色と明らかに噛み合わない情景を作りだしていた。辺りにはほんのりと春めいた陽気すら漂い、耳を澄ませば小鳥のさえずりさえ聞こえてきそうな場所であった。

だが……

「これは伝説の……ッ!」

葉月が戦慄しているのは、実は周りの風景に対してではなかった。まるでなかった。というか見ちゃいなかった。思わず「気づけよ!」と突っ込みたくなるが――彼は微塵も気づいていなかった。

それよりも何よりも心奪われるものがそこにあったからだ。

彼が震えながら凝視するそれ。

それは――

「ふふふ」

驚愕する葉月に美夏はちょっと悪戯っぽい笑みを浮かべて首を傾げる。

「美夏、一度やってみたかったんです……葉月さんと♪」

葉月と美夏の間に置かれたもの。

それは大きなグラスだった。

やたらめったらでっかい――ドンブリ並みの容量を誇るであろうそれの中には、見るからにトロピカルな感じのドリンクが満たされ、縁にはカットされたオレンジが添えられている。

そしてとどめとばかりに差し込まれているのは、二本の互いに絡み合いながら紆余曲折してハートマークなんか描いちゃっているストロー……!!

「駄目……ですか?」

上目遣いに少し拗ねたような表情を見せる美夏。

だが――

「……美夏……おまえってやつは……」

ぐらりと葉月はよろめいた。だが倒れる寸前で葉月は踏み止まると、号泣するかのような声で叫んだ。

「くそう、おまえってやつはなんてツボを押さえて可愛いんだチクショーッ!?」

「うふふ♪」

嬉しそうに微笑む美夏。

このまま放っておくと、砂浜で追っかけっことか、硝子越しにキスとか、見ている方が『どうか勘弁してください』と土下座しそうなバカップルぶりに雪崩れ込みそーな感じだが、勿論、葉月に否はない。

というか——美夏程の美少女に上目遣いでお願いとかされた日には、大抵の男が羞恥心や理性なんぞディスポーザーに放り込むだろう。

ただ——

「——御嬢様」

こんこん……と扉を叩く音と共にひどく冷静な声が投げ掛けられる。

「あ。葉月さん。ちょっとごめんなさい」

言って美夏はその場に葉月を残し、たたた——と小走りに部屋の外へと出る。

そこには……先程、葉月が来る前に美夏の事を『少佐』と呼んだ少女人形の姿があった。

ついでに言うと——

「……」

少女人形は増えていた。

五〇体ばかりの、同じ顔で同じメイド服の少女人形達が同じ姿勢でずらりと並んでいるのだ。

古色蒼然とした屋敷。

その廊下で——同じ顔に同じ無表情を凝らせて並ぶ少女人形五〇体。

はっきり言ってホラーが苦手な人間は見た瞬間に泣いちゃいそうな光景ではあった。

「お楽しみ中の処、申し訳ありません——マム」

一歩前に出てそう言ったのは——やはり先程美夏に『大尉』と呼ばれた少女人形なのだろう……多分。断言を憚るのは見分けがつかないからだ。

「なんだ？　何かあったのか？」

美夏はまるで別人のように鋭い眼で少女人形達を一瞥する。まるで怯えるようにざわりと少女人形達が一斉に身じろぎした。

「イエス、マム。排除命令を賜った侵入者ですが。第二次防衛線を突破、警戒エリア2に侵入しつつあります、マム」

「警戒エリア2？　エリア1の責任者は？」

「ファズエル軍曹であります、マム」

「奴は伍長に降格。訓練校からやり直せと伝えろ。私が直々にしごいてやる。泣いたり笑ったりできなくしてやると伝えておけ」

「イエス、マム！」

直立不動でメイド姿の少女人形は言った。

じろりと——視線を相手の顔に抉り込むようにして首を傾げて少女人形を眺める美夏。

「で——貴様も私の命令がなければ何もできないノロマなのか？　大尉？」

「ノー、マム！　まずは御報告をと」

「ならば次は排除完了の報告だけを持ってこい。いいな？」

「イエス、マム！」

「よろしい。では調子に乗っているであろうクソ共に我等、神の軍団の力を見せてやれ」

『イエス、マム！』

少女人形達が一斉に答える。

満足げに頷いて美夏は更に言った。

「人形共め！　主を愛しているか!?」

『ハレルヤ！　ハレルヤ！　ハレルヤ！』

更に少女人形達が答える。

まるでそれは何かの祈りの如く、繰り返す毎に熱を帯び——

「世界を育むものは、何だ!?」

『信仰！　信仰！　信仰！』

怒号となり。

「お前達の商売は、何だ!?」

『殺戮！　殺戮！　殺戮！』

絶叫となり。

「大声を出せ！」

『殺戮!!　殺戮!!　殺戮!!』

咆吼となる。

「ふざけるなッ！　大声を出せッ！」

『殺戮ッ!!!　殺戮ッ!!!　殺戮ッ!!!』
「よし――行け、我が《光輝満つる備品》ジェーン共ッ!!」
美夏の叫びと共に――五〇着のメイド服が宙に舞う。そしてそこに残るのは色こそ白いが明らかに戦闘服と思しき衣装を着た人形少女達五〇体。
だがそれも一瞬の事。
次の瞬間、人形少女達はまるで存在自体が幻であったかのように四方八方へと跳んで消え、後にはただ美夏だけが残される。
そして――
「――美夏？」
なかなか帰ってこない彼女を不審に思ったのか、ひょいと扉を開いて葉月が顔を出す。
「どうかしたのか？」
「いいえ。なんでもありません♪」
言って美夏は可愛らしく微笑んだ。

●

「これが――」
眼の前にそびえる巨大な――そうそれはもう巨大としか言いようがなかった――屋敷を眺めて呆然と拓人は呟いた。
豪雪の中にもかかわらず、自らは一片の雪も帯びず傲然と建つその建築物は、最早、屋敷と呼ぶよりも城、あるいは要塞と呼んだ方が相応しい偉容を備えていた。
これで裏が断崖絶壁になっていて、上に稲妻なんかが走っているとも一完璧な感じである。どう完璧なのかはさておき。
「葉月……！」
いかにもな現場を前に、友人の安否を気遣い、悲壮な表情を浮かべる拓人。
彼の頭の中では謎の敵――吸血鬼とかゾンビとかキ●ガイ科学者とか世界征服を企む悪の組織とか――に捕まり、解剖台みたいな処に縛り付けられて絶叫する葉月の姿が、必要以上のリアルさで既成事実っぽく描かれたりなんかしていた。
「行くよ……！」
もう一刻の猶予もない（拓人的視点）。
策を練っている時間もない（拓人的判断）。
拓人はファルチェに攻撃魔法を装填しつつ右にタナロット、左に鈴果を従えて屋敷の正面玄関に突っ込んだ。
ばん！　と左右に開かれる扉。
ばばばっ――と中に転がり込んでから、それぞれに身構えて周りを警戒する拓人達。
そして――
「タクト！」
鈴果が叫ぶ。
彼女が指し示す先には……やたらと幅広く、緩やかに湾曲しながら左右に広がる階段があった。よくミュージカルなんぞで出てくるいかにもな……空間と資材を無駄とも言うべきふんだんさで使用した階段である。
その上に――
「――よくぞ此処まで来た」
腕を組んで傲然と立つ少女が一人。
いや違う。人間ではない。
それは――人形だった。
顔立ちは人間かと見紛うばかりに整い、肌の質感も生々しいのだが……手足の関節が明らかに球体状になっている。
でもって。
普通この手の球体関節を採用したアンティーク系のドールと言えば、着ているのはフリル付きのドレスが定番で――さもなくばいっそ裸体というのが多いのだが。
この人形少女は――
「……なんでボディ・アーマー……？」
拓人の呟き通り、陸軍の兵士とか民間軍事会社のオフィサーなんかが着けている防弾仕様の衣装を素肌――といって良いのかどうか人形なので微妙だが――に着けていたりする。
「だが此処までだ。何者か知らぬが少佐……もとい御嬢様の征かれる道に立ち塞がるクソ共を放置する訳にはいかん！」
「……何だかよくわからないけど、葉月を返せ！　葉月を連れて帰る――僕達の目的はそれだけだ！」
「それはできんな」
少女人形はじろりとその硝子球の眼で拓人

達を見下ろす。
「貴様等は此処で果てるのだから」
少女人形が告げたその瞬間。
ぞわりと拓人達の周囲の空気が変わる。
そして――
「うそっ!?」
悲鳴じみた声を上げる拓人。
階段の上から。
置物の陰から。
戸板の陰から。
円柱の陰から。
拓人達から見て死角となっていたありとあらゆる場所から、同じ顔をした少女人形達が銃を片手に顔を出す。
その数――五〇。
じゃきんと音を立てつつ五〇の銃口が遮蔽物のない玄関ホール真ん中にいる拓人達へと向けられる。
そして――
「――狙え！」
大尉と呼ばれた少女人形は言った。

●

「……あれ？　また爆音とかしてね？」
場所は先程と同じく――屋敷のテラス。
怪訝そうな表情で葉月は顔を上げる。
だが――
「葉月さん」
ぷっと頬を膨らませながら美夏は言った。
白い少女は手を伸ばして葉月の厳つい、モアイの親戚みたいな顔面を自分の方に向ける。
「ちゃんと私を見てください。せっかく久しぶりに会えたのに――」
「う。ごめんごめん。許して」
「ヤです」
ぷいっと横を向く美夏。
葉月は困った様子で後頭部を掻いてから、拝むように両手を合わせる。
「許して。この通り」
「……」
彼の方をちらりと見てから……美夏はちょっとはにかんだ表情を浮かべて言った。
「ぎゅって――」
「うん？」
「ぎゅって、美夏の事、抱き締めてくれたら許しちゃいます」
「……」
「駄目……ですか？」
切なげに伏せた目元でふるふるとまつげが揺れる。恥じらいと――そして僅かな媚びを含んだ絶妙の一撃。
「んな事ねえだろ！　ミカ――ッ!!　畜生もう可愛いぞおおおお!?」
「きゃあ♪」
などと。
同じ屋敷で繰り広げられている修羅場なんぞまったく関係ない感じで、バカップルは誰に憚る事もなくいちゃいちゃしていた。

●

そこは戦場だった。
屋内だが間違いなく戦場だった。
ジョニーが行ったりして、メリークリスマスで、絆な感じの場所だった（意味不明）。
「だあああああああああああッ!!」
先陣をきったのは鈴果だった。
右手に〈ワルプルギス〉、左手に力場障壁を展開する〈アイギス〉を携え、蒼い髪の少女は真っ直ぐに階段へと突撃する。
当然のように彼女を追尾する銃口の群れ。
何十もの赤い光点が彼女の身体を舐めるようにして這い回り――レーザー・サイトの狙点だ――それらがぴたりと左胸と頭部に集中する。
だがその瞬間――
「――らぁッ！」
〈アイギス〉を握った手で鈴果は胸元に揺れていたペンダントを叩いた。
「――む!?」
人形少女達が驚きの声を漏らす。
鈴果の姿が――ぶれた。
一瞬、それは眼の錯覚のようにも見えて、しかし二重になった少女の身体は、どちらも消える事なく左右に分離。

鈴穂と鈴果。
ペンダントの力を使えば彼女等は一時的とはいえ二人に分離できるのである。
動揺を如実に示して、二人の少女の間で赤点が右往左往する。その隙を見逃す鈴果ではなかった——というか最初から彼女が先頭で突っ込んだ狙いはそれだった。
「喰らえッ!!」
〈ワルプルギス〉が唸り階段に突き刺さる。
鋼鉄の塊をも容易く切断する力場刃は、そのまま斜めに振り抜かれ、翻って壁をも切り裂いていく。
「撃てッ!!」
号令と共に銃弾が降り注ぐが、それらはジャンプ傘のように、瞬時に展開された〈アイギス〉の力場盾に阻まれ、跳ね返された。
更に——
「みゃあああああああああッ!!」
跳躍してすっ飛んできたタナロットが鈴果、鈴穂の頭上を越えて階段の上に着地。手近な人形少女から捕まえてはぶん殴っていく。
「気をつけて！　彼女等の使ってるのは対神魔用ミスリル・チップのはずだから——」
叫びつつ拓人も走る。
基本、ファルチェで防御力場を展開しつつ、雨あられと降り注ぐ銃弾を辛うじて食い止め、鈴果や鈴穂の後を追う。
彼が主に展開している術式は〈祝福〉の魔法だ。対象となる存在の周囲の可能性を操作する特殊な魔法で——これを掛けられた者は、存在の性質として、銃弾に当たりにくくなったり、常に最善の力を出せたり、カートンごと箱買いしなくても激レア・カードが当たったりするようになるのだ。
だがあくまでこれは可能性操作。
彼我の実力差を可能性で誤魔化すのにはやはり限界がある。
故に——
「くっ——」
肩をかすめる銃弾の熱さに呻く拓人。
彼は階段を登り切り、先に二階に辿り着いていた鈴穂と鈴果の側へ——彼女等が盾にしているでっかい銅像の陰に滑り込む。
一瞬遅れてタナロットもそこへ駆け込んできた。
途端——集中する銃弾の群れ。
時折、しゅぼん、と間の抜けた音と共に飛んできては轟音と熱風をばらまくのは、榴弾砲の類だろう。到底屋内で使うような武器ではないはずだが、元より常識が通用するような連中ではない。
爆煙と。火炎と。衝撃と。粉塵と。轟音と。
その他諸々——押し寄せる戦場の空気が拓人達をその場に釘付けにする。
「連中、プロだな」
忌々しげに言う鈴果。
人形少女達の放ってくる銃弾は、数種類の——一発一発にそれぞれ、別の特性が仕込まれており、一種類の防御力場では全てを防ぐ事ができないのだ。汎用の防御力場でなんとか防いではいるものの　汎用だけに効果はそれなりでしかない。拓人の魔法と、〈アイギス〉と、そして銅像、三重の防壁があるからこそ、辛うじてまだ凌いでいられるのである。
もっとも……それも時間の問題ではあるだろうが。
「まずいな……」
相変わらず〈祝福〉の魔法は機能しているが、これだけ圧倒的な火力を集中させられると、可能性も何もあったものではない。むしろ銅像がまだ盾としての役割を果たしているのは、この〈祝福〉の魔法のお陰だろう。
「くっ——此処まできて」
「ちいっ——こうなったら」
鈴果が予備の発電カートリッジを〈ワルプルギス〉に装填しながら言った。
同時に——
「——警告。本機の作動モードが〈オーバーロード〉にセットされました」
〈ワルプルギス〉のシステム・ヴォイスがそんな事を言ってくる。
「本モードでは周囲に甚大な被害をもたらす可能性が高いので、使用者は細心の注意を払い、屋内での使用は避けてください——」

「制限解除！」
喚いて鈴果が〈ワルプルギス〉を掲げる。
「す――鈴果？」
「タクトッー　タナ郎ッ！　ちょっと荒っぽくいくぞっ！」
ぶぉおおおおんッ――と音を立てて〈ワルプルギス〉の力場刃が伸びる。
長く。長く。更に長く。
禁断のオーバーロード・モード。
通常の二倍以上の発電カートリッジを消費して発生させる刃の長さは実に五〇メートル。使用者が制御できる刃長を明らかに越えまくっているそれは――別名〈イデ●ンソード・モード〉とも呼ばれ（命名者・佐久間栄太郎）、屋内で迂闊に使うと建物そのものを一気に倒壊させかねない。
つまり――
「ちょ……鈴果、それはまずい――」
「うりゃあああああああああああああああああああああああああああああああああッ!!」
ぶん回される不可視の力場刃。
それは拓人達の視界を斜めに横切る一線を刻み――
「――――」
次の瞬間……屋敷の屋内風景が、その一線に沿って斜めにずれた。
違う。
壁やら柱やら、ありとあらゆるものが――斜めに輪切りにされた建物の上半分と下半分が、滑ってずれたのだ。
となると当然――
「わあああああああああああああああああああああああああああああああああッ!?」
拓人の叫び声と共に――均衡を失った建物は場に居合わせた者全てを巻き込んで、一気に崩壊した。

●

ちょうどその頃。
「ほらほらほらほら」
「きゃあっ！　やりましたね？」
「はっはっは。もっとやっちゃうゾ？」
「やだもうっ！　だったら私も！」
「はっはっはっは」
「あはははははは」
とかなんとか……海辺で追い駆けっこそしていなかったものの、葉月と美夏は屋敷の裏に出て、そこに積もっていた雪で二人だけの雪合戦をしちゃったりなんかしていた。
「えいえいえいえい♪」
「あーやったなあ♪」
「もひとつえいっ♪」
「じゃあこっちはこうだっ♪」
「きゃあっ♪」
尋常な神経なら背中が痒くて痒くてとても側に居合わせる事さえできない感じのノリで、じゃれ合う葉月と美夏。
だが――
「……なんか騒がしいな」
「うーん。そうですね」
ふと手を止めて屋敷の方を振り返る葉月と、さすがに同意してやっぱり屋敷を振り返る美夏。
さすがにすぐ間近で轟音だの爆音だのが響き始めると、『貴方以外何も見えない』状態の絶賛ラブラブ中バカップルでも無視はできなくなってくる。
「……あちこちに防音防震動の術式を仕込んであるはずなのだが……大尉め。何を手こずって……」
「ん？　なんか言ったかいマイハニー？」
「え？　いえ、なーんにも♪」
とにっこり笑う美夏。
だが――次の瞬間。
「――え？」
「……あ？」
間抜けな声を漏らす葉月と美夏。
呆然と二人が見守る中――美夏の屋敷は上半分がずるりと斜めにズレたかと思うと、次の瞬間には轟音と共に崩壊を始めていた。
「な……なななな……なんだ!?」
さしもの葉月も呆然とその様子を見守り、一方その屋敷の住人である処の美夏は――

「……」

すすす――と葉月の背後に忍び寄ると、すとんと軽い仕草でその首筋にチョップをかました。

声も漏らさずあっさり昏倒する葉月。

倒れる彼をさっと伸ばした右手一本で平然と支えながら、美夏は忌々しげな表情を浮かべて言った。

「人形の依り代に能力を制限されているとはいえ、天使の軍団一個小隊、五〇柱だぞ？普通の人間に後れをとるはずもなし。かといって〈学園〉や〈連盟〉が一般人の事情に絡んでくるとも思えないが。一体――何者だ？」

●

もうもうたる塵煙が収まるには――およそ一〇分程かかった。やたらにでっかいその屋敷は下半分を残して完全に崩壊し、まるで建築模型のように輪切りにされた断面をさらけ出していた。

でもって――

「……」

瓦礫の山の一部が崩れ、ぽこりとそこから顔を出したのは、埃まみれになったタナロットであった。

「みゃっ……」

右見て。左見て。

既に人形少女軍団が何処にもいない――というか皆巻き込まれて何処かに埋まっているのだろう――のを確認すると、タナロットはずぼりと手を瓦礫に突っ込んで、そこから拓人と鈴穂を引っ張り出した。

とりあえず鈴穂が両手にそれぞれ〈ワルプルギス〉と〈アイギス〉を持っている処を見ると、鈴果は鈴穂の体内に戻っているらしい。

「ううっ……」

呻く拓人。

防御力場を展開したままだったせいか、あるいはまだ〈祝福〉が多少なりとも効いていたせいか、傷らしい傷はない。これは鈴穂の方も同じだった。

ぽん、と拓人の手から離れたファルチェが小爆発を起こして変形――少女形態になる。

「御主人様～大丈夫ですか～？」

屈んで尋ねるファルチェに拓人は短く呻いて頷いてみせる。タナロットは自分の手柄でもないのに満足げに頷いていたりする。

「みゅ。上手くいったのである」

「……そ……そうかなあ」

息も絶え絶えな感じで言う拓人。

そこへ――

「――貴様が侵入者か」

声が掛かった。

眼を回したままの鈴穂を除き、拓人、タナロット、そしてファルチェと二対の眼がそちらの方向を向く。

そこには――

「――君は」

白い――少女。

白いワンピースと白い肌。対して髪だけは闇のように黒い。

その容姿は何処までも清楚かつ可憐な印象なのだが、しかし今のその少女の眼にはそれだけではない、強烈な鋭さが宿っていた。

「何者か知らんが」

少女は言って腕を組む。

次の瞬間――切り裂かれた空気が音を立てて悲鳴を上げ、白いナイフの如き閃光が少女の左右に迸る。

それは次の瞬間、折り畳まれていたものが展開するかの如く広がって、巨大な一対の羽となっていた。

白い羽を背負う者。

それはかつて、自らの信じる対象を権威付けする為に、信徒達によってでっち上げられたものであるとも言われているが……

「私を怒らせた以上、ケツの穴でミルク飲むまでしごき倒し――……」

そこまで言って。

少女は眼をぱちくりと瞬かせながらその場に立ち尽くした。

「――あれ？」

「――え？」

間の抜けた声を漏らす少女と――そんな少

女の反応の意味がわからず、やっぱり間の抜けた声を漏らす拓人。
そして――
「せ――《聖母》!?」
愕然とした表情で白い少女は言う。
「え、ちょっと、なんで、なんで《始源的神魔創造者》が此処にいるの!?」
「……」
「……」
顔を見合わせる拓人とタナロット。
「ファルチェ――これって」
「魔力計測と神格値計測から」
ファルチェは首を傾げながら言った。
「彼女は――熾天使級の天使かと思われます」
「……」
「……」
そして落ちる重苦しい沈黙。
その後――
『――なんで?』
少女と拓人の声が被った。

●

「――そういえば」
紅茶のポットを片手に振り返ってエーネウスが言った。
「同じく人間界にいるのに、最後にミカエルと会ったのは随分前になりますね」
「……」
榮太郎が苦虫を噛み潰したような表情で動きを止める。
「……苦手なんだよな」
「珍しいですよね」
とエーネウス。
まあ確かに榮太郎が露骨に嫌がったり怖がったりするのは――エーネウスが知る限り、天使のハプシエルと、同じく天使のミカエル位のものである。
もっともミカエルの場合はハプシエルの場合とかなり榮太郎の苦手意識の中身が違う感じだったが。
「なんつーか外見は非の打ち所のない美少女の依り代使ってるくせに、中身はどっかの先任軍曹そのまんまだし」
「……私もあの下品トークはちょっと……」
「冗談通じねぇし、怒ると見境ないし。本気で『目玉抉って骸骨で●●●してやる』とか言ってたし」
「……いえ、あれは御主人様も悪いと思いますけど……」
「いや、だってお前、人間界で活動するのに、なんか適当な名前考えろって言うから、『じゃあシャーリーン』でって……」
「ですからその太った海兵隊のM14ライフルみたいな呼び方がいけなかったのでは」
「うーん。でもあの二重神格のカマトトぶり

がなぁ。萌えないというかなんというか。なんであれが〈正義の大天使〉なんだか」

「本当に……」

そこだけはまあ同意なのかエーネウスと榮太郎は揃って溜め息をついた。

●

「――つまりですね」

奇跡的に屋根が――というか二階の床部分が――残っていた為に部屋の体裁を保っていた応接室にてその白い少女は言った。

「その……ほら、私達って、どれだけ力を向こう側に置いてきても、二界条約とかで行き来を制限されちゃうじゃないですか」

「それはまあ……」

曖昧に頷く拓人。

少女の名前は美夏――ミカエル。

位階は熾天使。四大天使とも呼ばれ、ガブリエル、ウリエル、ラファエルと並んで超有名な一柱である。

そもそも熾天使といえば天使の中でも最上級――かつてはルシフェルでさえそこに位置したと言われる天使階級の頂点だ。その力は尋常でなく、うっかり本来の力を保持したまま人間界に来てしまえば、くしゃみ一つしただけでも、どんな影響が出るかわかったものではない。

「だからお忍びで……こっちに来てるんです、私。勿論、力のほとんどは向こう側に置いてきてますけど……」

「はあ……でもどうして？」

「それは……」

ちょっとはにかむようにしてもじもじする美夏。そのやたらと初々しい仕草は、先程の、『ケツの穴云々』と言っていた少女と同じ人物とは思えないが――

「ネットでちょっと知り合った人が――」

「ネットって」

「最近は神界にもブロードバンドが来てるんですよ？　神界だけに光通信が基本です」

「……」

恐るべしインターネット。

「とっても優しくて親切で……で、会ってみたら、すんごく私の――その、タイプで」

照れ照れしながら言う美夏。

拓人は――数秒、呆けたように固まっていたが、次の瞬間、驚愕の表情を浮かべて言った。

「それって――それが葉月!?」

「はい♪」

両手で頬を押さえながら身をよじる美夏。

「……」

拓人としては絶句するしかない。

ある意味で葉月に彼女がいたのも充分に驚きだが、それが天使――しかも四大天使に名を連ねるような大物となると、本気で想像の

彼女は――熾天使級の天使かと思われます

外であった。
いやまあ、葉月は良い奴だとは拓人も知っている。知っているが――
「で、あの、お願いがあるんですけど」
美夏は上目遣いに拓人達を見ながら言った。
「葉月さんに、私の正体黙っていて欲しいんです」
「それは……まあ」
拓人達としても、〈学園〉絡みの話は隠さねばならないので、わざわざ美夏の正体を葉月に告げるような事はない。
結局――なんのことはない、ミカエルは単に葉月と邪魔の入らない処でイチャイチャしたかっただけであるらしい。その為に近付いてきた者に吹雪の結界やら、部下の小隊やらを差し向けるのはどうかと拓人は思ったりもしたが、迂闊に突っ込むと話がややこしくなりそうなので黙っていた。
ただ――
「えっとミカエ――」
「美夏。こっちでは」
と――拓人の台詞の頭を押さえるようにして美夏が言う。
「じゃあ美夏さん。一つ訊いていいですか？」
「なんですか？」
「葉月の、何処がそんなにタイプなんですか？」
「勿論――全てです」
きっぱりこんと即答である。
「でも何よりも」
美夏はうっとりとした表情で言った。
「あの、凛々しくてソリッドな感じのお顔が、とっても……」
「……」
顔を見合わせる拓人、タナロット、鈴穂、そしてファルチェ。
微妙な沈黙が一同の間にわだかまり――
「まあ、好みは人それぞれですから～」
とりまとめるようにファルチェが言った。
（おしまい）

◆シリーズ情報◆

『まじしゃんず・あかでみい』

一見、平凡な少年にしか見えない羽瀬川拓人は、実は〈学園〉に通う魔法使い候補生。そんな拓人が強力な力を持つケモノ耳美少女を召喚してしまって――!? 神一郎×BLADEが贈る大人気ハイブリッド学園ラブコメ!!

「まじしゃんず・あかでみい I 女神降臨!?」

「まじしゃんず・あかでみい II 聖母抹殺!?」

「まじしゃんず・あかでみい III 魔王発生!?」

「まじしゃんず・あかでみい IV 聖夜爆走!?」

「まじしゃんず・あかでみい V 雪原帝国!?」

「まじしゃんず・あかでみい VI 乙女分裂!?」

「まじしゃんず・あかでみい VII 父親降臨!?」

「まじしゃんず・あかでみい VIII 学園閉鎖!?」

『まかでみ・らでぃかる』

シリアスありギャグあり、涙あり笑いあり、表あり裏あり、百○あり○×あり……というくらいなんでもありの「まかでみ」短編集。BLADE先生の描き下ろし4コマまで収録しちゃう超豪華絶対満足保証付きなのだ!!

「まかでみ・らでぃかる1 誘われちゃったんですけど。」

「まかでみ・らでぃかる2 復活の先生なんですけど。」

「まかでみ・らでぃかる3 正体不明なんですけど。」

「まかでみ・らでぃかる4 妹なんですけど。」

「まかでみ・らでぃかる5 テロリストなんですけど。」

BLADE

PROFILE

BLADE●ぶれいど
東京のはずれに生息する漫画家兼イラストレーター。「まかでみ」では榊先生と趣味全開？強力タッグで大暴走。仕事に忙殺されつつも、ケモノミミへの深い想いを胸に今日も猫々しく生き抜いている。初画集「ZEALOTIC BLADE ZERO」絶賛発売中。

特別対談

〝まかでみ〟で語ろう！

PS2でのゲーム化、BLADE先生の画集、新シリーズ『まかでみ・えくすぺりめんと』の開始と、いろいろな広がりを見せ始めた『まかでみ』シリーズ。著者の榊一郎先生とイラストレーターのBLADE先生に『まかでみ』裏話や今後の展開について「ぶっちゃけ話」をうかがった。

著者と絵師のコラボがポイント

――『まじしゃんず・あかでみい』（以下『まかでみ』）は、どのような経緯で誕生したのですか？

榊◇『まかでみ』の前にファミ通文庫で書いていたものが思い切り暗いハードボイルドだったので、次は実験的に明るいものをということで出した企画でした。イラストは、明るい話にしたいので女の子を可愛く描ける人で「この絵はこの人」とわかる個性がある方。あと、話をビジュアル化するだけでなくいっしょに悪ノリできる人がいいなあ、と編集部にお願いしました。いわゆる正統派の魔法の話を書くつもりはなかったので、メカデザインもできる人、ということで。

BLADE◇僕はそれまで榊先生の作品を知らなかったので、参考に『ストレイト・ジャケット』を読んでみたんですけれども。

榊◇また極端にハードな話を（笑）。

BLADE◇だから「これは重いシリアスな話を書かれる方だなあ」と思って最初はシリアスなラフを出したんです。でもコミカルなほうが

榊一郎

PROFILE

榊一郎●さかきいちろう
1998年「ドラゴンズ・ウィル」でデビュー以来、いくつものヒットシリーズを生み出している人気作家。代表作に「スクラップド・プリンセス」（富士見ファンタジア文庫）、「ストラグル・フィールド」（ファミ通文庫）、「神曲奏界ポリフォニカ」（GA文庫）などがある。

いいというお話だったので意図的に絵柄をコミカルな方向に変えて、キャラクターデザインから出し直したんだったと思います。そのときエーネウスさんのラフに冗談で「モップの反対側にはツッコミ用の剣がついてる」と描いたら、それがお話に反映されていて。デスキンなんですけど（笑）。「僕のネタも使ってくれるんだ！」と思って、それからちょっと悪ノリしだした。そのノリでここまで続いてきている感じです。

――ほかには、どんなネタがありましたか？

BLADE◇タナロットの振り袖で、全身トラ縞、袖の重量が200キロくらいあるのはどうか？とか、描きましたね。「小説家さんが話を書く前にこっちがネタを出していいのかなあ？」と思いながら。

榊◇いやいや。情報量が多いと書き手としても助かるんですよ。「彼女が振り袖着てました」で終わらせるわけにはいかないので。どんなバカバカしい振り袖を着てるんだ、という描写までしないと。

BLADE◇ああ、そういう意味では僕も同じです。榊さんはお話の中に出てくる車や銃の名前とかを細かく書いてらっしゃるので、イメージがふくらませやすいんですね。まあ、逆に言えば……。

榊◇制限が大きい（笑）。

BLADE◇「この車、知らないよ!?」と慌てて資料を探したり。あとほかの作品のパロディもよく出てきますよね。時々「これって読者はわかるのかなあ？」と思うんですけど、榊さんのサイトの掲示板ではそのネタで盛り上がってたりするので、意外とみんな知ってるんだなあと思って。

榊◇いや、「まかでみ・らでぃかるー」で「太陽に○えろ！」のパロディをやったときに吹っ切ったんです。知り合いの作家さんに「読者はわかるだろうか？」と聞いてみたら「ネタだとわかるように書かれていれば今の世代はネットで調べてくれるから大丈夫！」と断言されて。

BLADE◇ああ、なるほど。

榊◇元ネタ探し、みんな好きなので「最終日東館壁際」とかも入れてしまう（笑）。大げさに言えば、いわゆる双方向な感じになればおもしろいかなと思って。

キャラクターは違和感があるように

――キャラクターデザインや挿し絵で、特に苦労したことはありますか？

榊◇「毎回」とか言われると立場がないんですけれど（笑）。

BLADE◇いやいや（笑）。自分でいうのもなんですけど、僕は挿し絵の仕事は合っていると思うので仕事自体が大変ということはない……締め切り云々は別として（笑）。挿し絵といっても僕の場合は文章を絵で再現してるわけじゃなくて、お話を読んで自分が感じたものを

「映画を作っている感覚があるんですよ デザイナーとか撮影はBLADEさんで」

描いているので、文章と合っているかどうかという見方はしないんですよ。だからラフを出すときも「これで合ってますか?」というよりも「こういうネタを仕込んだけどどうだろう?」みたいな感じなんです。

榊◇そうそう。

BLADE◇アガリアレプトもそうでしたよね。服は特攻服みたいなイメージだと聞いたので「特攻服」で検索をかけたら、おもしろいのを見つけて(笑)。「こういうのはどうだろう」と描いたら、それが偶然榊さんの知り合いの作家さんのものだった。それで「それは知り合いで、こんなネタがあって」と絵と関係ないほうに話が膨らんでいって、結局そのとき話したことも採用に(笑)。

榊◇悪魔とか天使とか、みんな何かのオタクにしようという話があったので、じゃあコイツはなんだろう。美形の大悪魔が特攻服を着て、どこにいたらいちばん違和感ある? それはエロゲーの販売コーナーだろうって(笑)。

BLADE◇でも彼は僕の理想なんですよ。このカッコ悪さが、すごくカッコいい。

榊◇「俺はこれが好きなんだ」って堂々としてるところがいいよね——と。イタいんだけど、アガリアレプトだからカッコいい。最新巻では「鋼鉄○白兎騎士団」の絵をペイントした痛車(イタシャ)に乗ってますけど(笑)。

——女の子キャラについては、どんな方向で考えてらっしゃるのですか?

榊◇ごった煮的な話なので、いろんなキャラを出していこうと思っていました。たとえば元気系とおとなしい系と。元気系っていってもパワーがあるほう。それはどんなパワーだろうとか。おとなしい子なら、あまり喋らないだろうけれど小説は喋らないと存在感が出ないからノートに何か書かせよう、とか。鈴穂は、最初は眼鏡をとると人格が変わるようにしようと思ったんです。でも眼鏡とったら、眼鏡っ子としてのアイデンティティがなくなるという指摘もあって。

BLADE◇ああ! なるほど(笑)。

榊◇なので「そうか、眼鏡は取っちゃダメなんだ」と思って、代わりにリボンにした。たしかに考えてみたら、眼鏡をかけたおとなしい顔のままべらんめえ口調で喋る、その対比がおもしろいのであって、眼鏡をとっちゃったら意味ないよね。

「計画的萌え」と「感覚的萌え」

BLADE◇タナロットは最初から「褐色でカットジーンズで耳が尖った女の子」ということだったので、榊先生が僕を慮ってくれたんだろうかと思ったんですが……?

榊◇BLADEさんに合わせてキャラを作ったわけじゃないんですが、ヒロインが元気系の女の子なので詳細を合わせようとは思いました。おもしろがって描いてもらえないと意味がないので。でも、けっこう戦々兢々としてるんですよ、「なめんな」って言われそうで(笑)。

BLADE◇正直、「元気で褐色でカットジーンズならいいってわけじゃないんだよ?」(笑)というこだわりがありつつも、そういうふうに配慮してくれているのがわかるので、やる気も出ようというものです。

榊◇なんかね、映画を作ってる感覚があるんですよ。デザイナーとか撮影はBLADEさんで。お話の構成上で必要な造形はこちらから注文をつけますけれど、それ以外の部分はよく知ってる人に任せたほうがいい、みたいな。私は理論で「萌え」を書いているとか、よく言われてますので(笑)。

BLADE◇「萌え」というのはたしかに理屈じゃなくて、なるべく可愛いものと、ある意味考えを放棄して勢いで描いている部分がなくもないですね。でも榊さんの「計画的萌え」というのは、むしろうまいなあと思いな

がら見ているんですけれど。

榊◇感覚で書いている部分は私もあるんですけれど、キャラクターを増やしていろんなネタを入れていく場合、わからないこともツッコまなきゃならない。こういうのを好きな人のツボはどこだろうと考えて組み立てるので、ある程度分析は入ってきますね。

BLADE◇そういう意味では僕も同じかなあ。僕はたしかにタナロットみたいな小さなキャラが好みなんですけれども、エーネさんとかミヤビさんとか頭身が高い人も描かねばならん。そのときに、自分だけでなくほかの人の目を意識しながら描いていくうちに自分の感覚的萌えの範囲が広がっている感じはありますね。最初はメイドさん萌えとか全然わからなかったので1巻のあとがきでは「めがねさん、メイドさんもいいですね」という心のこもらないコメントを書いてたんですけど(笑)。描いていくうちに「なるほど！　こういうところが榊先生のツボなんだなあ」というのがわかるような気がして。

榊◇実は、BLADEさんの好きなタイプって、タナロットとは微妙にズレてるでしょ？

BLADE◇それは……そうですね(笑)。

榊◇BLADEさんの同人誌や漫画を見ると、要するにBLADEさんが好きなのはネコなんだと思って。原稿にいたずらして、怒られるとじっと上目遣いに見ていたりして。

BLADE◇たしかに僕が好きなのは「ネコ耳少女」というより「ネコ」かもしれない。

榊◇「ネコっぽい行動」ですよね。その記号としてネコ耳がついていると可愛いという話で。タナロットは、ある意味イヌでしょう。勝手なことはしてますけど拗ねたりはしないし、基本的に拓人に忠実ですから。実はね、私がネコタイプを書くのが苦手なんですよ。だから『まかでみ』のキャラはだいたいイヌなんです。

BLADE◇エーネさんとかが、たぶん榊先生的にはいちばん魂が入って書いてらっしゃるキャラだと思うんですけれど……。

榊◇まあ、いちばん趣味ですね(笑)。

キャラの意外性がオチを呼ぶ

――今までの巻で、どの巻が印象にのこっていますか？

榊◇個人的には4巻が、突っ込んだネタのバランスとネタの落ち方がきれいにまとまって、いちばん『まかでみ』らしいんじゃないかと思っています。主人公はひたすら漫画を描かされていて、ほとんど出てこないんだけど(笑)。

――トナカイの服が印象的でした(笑)。

BLADE◇あれもたしか「サンタ服とトナカイ服を着てる」ということを先に教えていただいて、僕がラフをお送りしたら……。

榊◇そのラフを見ながら書いてました(笑)。

BLADE◇小説を読んだらすごく細かい描写をしてあるので「俺はすごいエロいモノを描いてしまったんだなあ」と思って(笑)。自分の絵柄で描いていると肌の露出が多い服でも違和感がないんですよ。それをほかの人が描写してるのを見ると「なんてハレンチな！」とか思うんです、改めて(笑)。

榊◇BLADEさんの可愛い絵で、なおかつエロい描写をしてるから相乗効果で両方広がりますけど、劇画タッチのエロい絵でこれをやったらもう戻ってこられない(笑)。

――BLADE先生は今までにいちばん印象に残ってることはなんですか？

BLADE◇やっぱりネタのやりとりの話になるんですけど、マジキューの『まかでみ』の漫画でケモノ耳が大好きな教授の話を描いたんです。『まかでみ』というネタを使って自分が好き

「僕の脳内の帝国からいちばん可愛い国民を選んで出荷しているイメージなんです」

なことを描いただけというような漫画だったんですけど、そのあと小説にもそのシュタイン教授が出てきて。自分が好きで描いたものに目を留めてもらえるというのが、すごくありがたかったです。

榊◇私の発想だと、あのキャラは出てこないんですよね。せっかくおもしろいヤツを描いてもらったんだから、小説でも使わせてもらったほうがおもしろいでしょう。ただ小説のシュタイン教授はBLADEさんが描いたシュタイン教授とは微妙にずれてくると思うんですけれど。『まかでみ』の5巻で鈴穂を助けにきたときみたいなカッコいい部分は、たぶん最初はなかったでしょう？

BLADE◇そうですね。でもあそこは、ズレてるっていうより「わー、シュタイン教授ってほんとはこうなんだ。カッコいい！」と思いましたけど(笑)。

榊◇「コイツが助けにくるの!?」という意外性がいいんです。寒河江教授が助けにきても、当たり前でおもしろくないでしょう？

BLADE◇そうですね。『まかでみ』のキャラって悪魔と天使と先生は大体なにかのオタクなので、必ずなにかオチがある。それがいいんですよね。

脳内にある「可愛いもの帝国」

――今年はBLADE先生の初画集、『まかでみ』のゲーム化など、MAプロジェクトが加速している感じですが、まずは画集のお話を聞かせてください。

榊◇自分の画集って、どんな感じでしたか？

BLADE◇自分の作品というよりは「うわ、なんかイラスト集みたいだな」という気分になりますねえ。編集とかデザインとかほかの人の手が入っているせいか、自分で描いてきた絵なんだけど目新しく見えるような。

榊◇客観性が出ますよね。

BLADE◇そうですね。改めて見ると「俺、左向きしか描いてねえ」とか(笑)。昔の絵ばかりなんですけど、いろいろ新たな発見がありました。

――カバーのイラストは、どういうイメージで描かれたのですか？

BLADE◇「僕の脳内にはこういう可愛いものがいっぱいいる帝国があるんだ」という感じです。タナロットにしてもカードゲームのイラストにしても、僕の脳内の帝国からいちばん依頼に合っていると思われる可愛い国民を選んで出荷しているんですよというイメージなんです。

榊◇傭兵システムなんだ(笑)。可愛いもの軍団。私は、カバーのイラストを見てまず思い浮かべたのがロボダ○チとか、サンダー○ード基地みたいなプラモデルでね。「ここを押したらこれが出てきます」みたいな。あれのネコ版だなあと思った。

BLADE◇僕の秘密基地みたいな。

榊◇秘密基地！　そうそう(笑)。

BLADE◆よくプラモデルの作例で戦車のジオラマみたいなのがあるじゃないですか。あんな感じの殺伐としたもので、でも兵隊はネコ(笑)。そういうのをイメージして、描きたいと思ってるんです。

動いて声がつくと羞恥プレイに？

――ゲームも間もなく発売ですが、ゲーム化に当たって意図したのはどんなことですか？

榊◇学園観光案内です。迷宮倉庫とか食堂とか図書館とか、学園の中を回って見せていく仕組みになっています。あと、そのうち短編で使うつもりだったネタもいくつか放りこんであります。いちおう原作者が噛んでいる以上、原作とのリンクがあちこちにあるというのが私的にはウリですね。『まかでみ』最新巻でもゲーム

中の事件に言及したりしてるので、そのへんも楽しんでもらえたら。

BLADE◇製作途中の画面を見せていただいたら、タナロットが攻撃するときに手をぶんぶん振ってからパンチしていたりして「すごい！　ゲームみたい！」と思って(笑)。

榊◇いや、ゲームなんですけど(笑)。でも絵が動いて声もつくと、恥ずかしいですよ。なんていうんだろう……小説家に対するいちばん簡単な拷問は本人の小説を目の前で朗読することだという話があるんですが……。

BLADE◇漫画も同じですよ。漫画友だちを脅すときに「おまえの漫画を音読するぞ！」って言いますもん(笑)。

榊◇セリフだけでもキますか？

BLADE◇キツいですねえ。

榊◇やっぱりそうですか。声優さんの演技は、みなさんプロなのでエッジが立ってて気持ちいいんですけれど、それとは別に羞恥プレイっぽいですよ(笑)。

BLADE◇ゲームのキャッチフレーズの「おもしろければジャスティス！」、文字だと平気なんだけど女の人の声で「おもしろければじゃすてぃーす♪」って言われると「うあぁぁぁ、恥ずかしいいい」と思う(笑)。

榊◇コメディだからよけい恥ずかしいというのがあるんですよ。自分が言ったギャグを他人がいつまでも繰り返しているような感じ。それはもう勘弁してくれと(笑)。だから『まかでみ』がなんらかの形でメディアミックスされるなら、その人の感性で勝手にやってくれたほうが僕は楽しい。「これもあるんじゃない？」「オーケイ、オーケイ、好きにしてください」みたいな感じです。

まだまだ広がる『まかでみ』ワールド

――今回、この本で初めて書かれた『まかでみ・えくすぺりめんと』は、どういった位置づけのものですか？

榊◇『まかでみ』の新しいシリーズです。そろそろ拓人も高校を卒業するころなので主役を交代させようということになりました。〈マジシャンズ・アカデミイ〉が似たような学校をもう1校造って、そこで実験をしているという設定なので『えくすぺりめんと』なんです。

――〈学園〉もあって拓人たちもいるけれど、別の主人公のお話なんですね。

榊◇たぶん今から3年後くらい、拓人は大学生になっていて主人公に示唆を与える先輩みたいな形で出てくるかもしれません。榮太郎やエーネウスは引き継いで、2、3人新しいキャラを入れます。それ用の仕込みは2、3巻前からやっていますし、実は新シリーズのヒロインはゲーム版『まかでみ』に出てくるあるキャラの妹だという設定になっています。

BLADE◇榊さんは普通の高校生の男の子が女の子に囲まれてドタバタして終わりというんじゃなくて、ちゃんと設定を決めてストーリー自体をおもしろく書かれるので、『えくすぺりめんと』が待ち遠しいです。今やっている仕事が疎かになるほどに(笑)。

――今後の展開を楽しみにしています。最後に読者にメッセージをお願いします。

榊◇『まかでみ』の拓人のシリーズは、あと1巻で終わりますが、始まりがあれば終わりがある。終わりがあれば始まりがある(笑)。『えくすぺりめんと』も始まりますし、MAプロジェクトはまだ続くみたいですので、楽しみにしていただけると嬉しいです。

BLADE◇『まかでみ』のように、作品がおもしろくて、なおかつこちらのネタをネタとして受けてもらえる仕事は少ないので、この引き合わせにはすごく感謝しています。今後ともよろしくお願いします。

榊◇こちらこそよろしくお願いします。

――ありがとうございました。

“まかでみ”秘蔵ラフなんですけど。

BLADE先生の手による初期デザインやラフを大公開!
タナロットの振り袖やデスキンなど設定メモにも注目だ!

羽瀬川拓人

• マカデミ服仕様

• 拓人 ver.1.05

エータロー様っぽい

茶髪

ナイスガイ

黒髪直毛
チャウシ○チー?

前の髪型
で長髪

タナロット

• RPG風タナ郎 拳闘士(ボクサー)担当

タナ郎が新年早々暴れないた
めの振り袖型強化魔導拘束衣
というのはどうでしょう。

• タナ郎G.M.M.S(ギブミーモアセクシー)ver.

羽瀬川鈴穂

・イージスの盾01

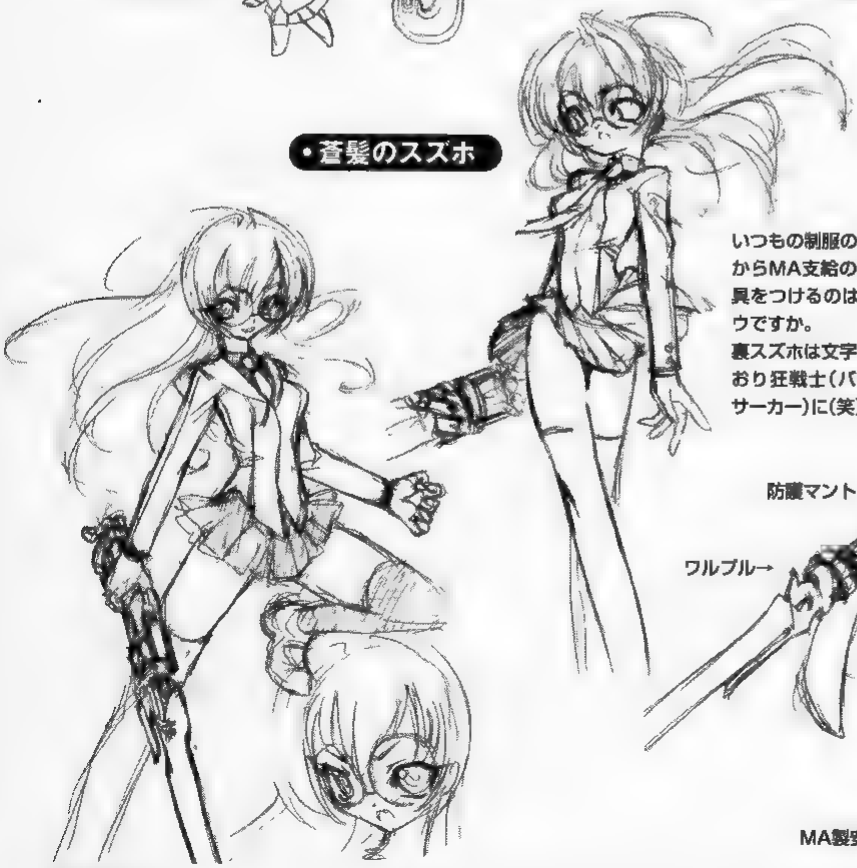
彼女の美顔を傷つける
物から絶対防御！とか。

・スズホ ver.1

・アイギス02

雨の日も安心。

・蒼髪のスズホ



・RPG風スズホ 戦士担当

地下マップの案内兼
盾「ポータヴル・イズ
モ」(地下のカギ役で
も面白いかも)

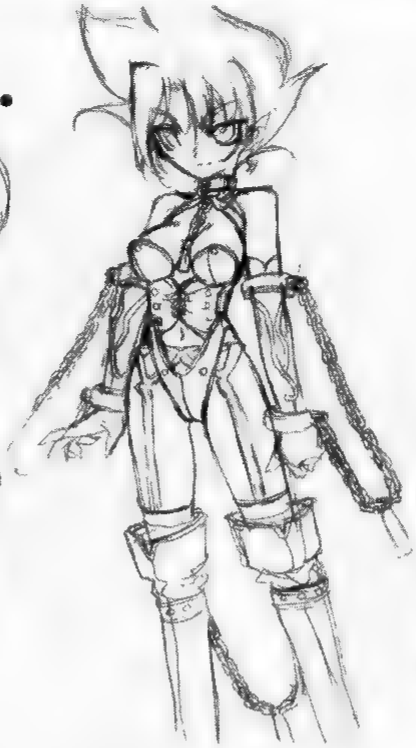
いつもの制服の上
からMA支給の防
具をつけるのはド
ウですか。
裏スズホは文字ど
おり狂戦士(バー
サーカー)に(笑)。

エーネウス

• 《バリエーションも豊富にッ》

佐久間榮太郎

麻雪



シンクラヴィア

ファルチェ

アルバイト用サンタ服＆トナカイ服

アガリアレプト

• 阿我臨03

裏地赤
表黒

• 阿我臨02

文字黒字に金の刺繍

• アガリン01

（編集部注／背中「全魔界暗黒萌アニメ連合初代総長　亜我裏阿零腐闘」左袖「暴空乃孤闘和衆零帝苦醒砕」右胸「臨時隔離板」左胸「夢狩人」）

羽瀬川彰彦

• タクトパパ01

CV田中○幸なカンジ。
（マスク装着時は大○透）

フェルミ

エミット

タウ

髪かざり

• タウ01

アレフ

• アレフ02

氷室明人

• アキト&アレフ01

金髪
肌白？　褐色？

髪銀 or 白 or 灰色？
瞳黒

• アキト02

マトリ○スレボリューションのネオの服みたいなの。

ミハイル

セ○ビッチ&ドワ○スキー
イメージCVは藤○啓治と玄○テッショーw

色黒。
モーフィ○ス。

ガント

マリエラ

ドロ○ジョさま、あるいは屈強な漢2人を引き連れた子供みたいのでもいいのかもしれません？

シスマゲ☆まかでみい

超妹召喚!?なんですけど。

古橋秀之
イラスト/内藤隆

「妹が欲しいよう!」
佐久間優太郎の魂の叫びが、
いま、究極の妹を呼び出す!
古橋秀之が書く
「超妹大戦シスマゲドン」×「まかでみ」の仰天ストーリー!!

シスマゲ☆まかでみい

「『妹には血の繋がりが必要』などと、いったい誰が決めたのか!?　ああ、はたして誰が決めたのかッ!!」

どどーん！　と逆巻く日本海の荒波（イメージ映像）を背負いながら言い放ったのは、教職員用の黒い上着を肩に引っかけた、長身長髪の青年。人呼んで〝ザ・先輩〟、またの名を〝歩く混沌〟、あるいは〝万能の変人〟、はたまた〝ほら、あの、例の〟こと、〈学園〉準教師、佐久間榮太郎。

まるで〝切れ者の美青年〟のイメージをそのまま物質化して組み上げたものの、最後に大事な螺子を一本締め忘れたような……よく言って春風駘蕩、悪く言えばどこか間の抜けたその物腰が、現在は変な電波を受信してノリノリになっている。意図してか、はたまた天然か、この人は時々こういう風になる。

一方、

「はあ」

目の前に突きつけられた指先を見ながら答えたのは、いかにも平凡な少年だ。身長、体重、容姿などなど……すべて人並み。強いて言えば、いかにも人当たりのよい態度が特徴ではあるが、それすらも〝無難〟のひと言で片付いてしまう。

「『誰が決めた』とか言われても……きょうだいって、そういうものでしょう？」

榮太郎の問いに対する答えも〝普通の反応〟の見本でしかない。

〈始源的神魔創造者〉羽瀬川拓人。

この世の理を担い、それゆえ本質的に不生不滅であるはずの神族や魔族を、文字通り無から発生させる――あらゆる魔法技術を超え、神界・魔界を含めた〝世界〟のバランスをも崩壊させ得る力。その潜在能力を持つ地上最大の危険人物が、このような平凡きわまる〝ただの善人〟であることは、生きとし生けるものにとって得難い幸運か、はたまた神魔の知恵さえも及ばぬ天の摂理によるものか――

だが、榮太郎はその〝普通〟が気に入らないのか、ため息混じりに大きくかぶりを振る。

「いかん、いかんぞ拓人……固定観念は魔法使いの大敵だ。おまえはこの非常事態においてなお〝普通〟や〝当然〟といった常識に囚われ続けるのか？　はたしてそれが魔法の徒の取るべき態度と言えるのか!?」

どどーん！　と、今度は本物の衝撃で部屋全体が揺れ、頭上からぱらぱらとコンクリートの欠片が落ちてきた。先ほどから、天井には大穴が空き、青空がぽかりと見えている。そして、野外から遠く響いてくる、幾重もの悲鳴とビルの解体工事を思わせる破壊音、それに砲撃や攻撃魔法の起動・発射音。すべてが榮太郎の言う〝非常事態〟を示している。

だが、この危機的状況にも増して拓人の心を揺るがしたのは、榮太郎の言葉そのものだ。

どこまで行ってもただ〝普通〟でしかない自分――そんな立場から抜け出すために、自分は魔法の道を志したのではなかったか。

ふたたび榮太郎に向き直った拓人の顔には、ためらいがちな、しかし明らかな決意の表情が浮かんでいた。

「……分かりました。その……僕にできることがあるなら――」

「よく言った」

榮太郎はにやりと笑うと、ひとつのアイテムを差し出した。犬の首輪ほどの大きさの、機械的な構造を持つ金属製のリングだ。

「然らば――刻を超え、血縁を超えて！　今こそ選べ、おまえの妹を！」

「は……？」

リングを両手で受け取って、怪訝な顔をする拓人。

対する榮太郎は、どこからか取り出したマイクを片手に、実に楽しそうに宣言する。

「レッツ！　妹オーディショ――――ン!!」

ずどどーん！　と、再び部屋が振動した。

＊

――話は六日前に戻る。

「うわーん！　妹が欲しいよう、欲しいよう！」

なんでも、先日アキバで購入したナニの登場人物が彼のハートに火を点けたとかで、佐久間榮太郎は初回限定特典の等身大シーツで作った抱き枕を抱いて悶え狂い、かつ転げ回っていた。それにしても、泣くほどか。

ミヤビとシンクラヴィア――瑞獣白虎と魔鳥セイレーンの化身は、そんな榮太郎の姿をちらちらと見ながら、顔を見合わせた。

元々は《始源的神魔創造者》羽瀬川拓人を狙って、それぞれ神界と魔界から派遣された刺客であった彼女らは、現在は榮太郎の監督下に置かれることを条件に《学園》に留まっている。つまり、佐久間榮太郎はふたりの後見人であるわけだが……。

「あの……小さくて可愛いものがお望みなら、プチネウスがいくらでもいるのでは？」

巫女装束の虎人・ミヤビが、そろりと言った。その足元を、ぬいぐるみじみたケモノ耳メイド姿の小型ゴーレム・プチネウスが数体、掃除道具を持ってちょこちょこと駆け抜けていく。なるほど、確かに愛らしい光景ではある。

だが、榮太郎はガバリと起き上がり、

「ちがーう！　ぜんぜん違うッ！　プチキャラはプチキャラ、妹は妹だ！　おまえは分かってない！　この俺の胸の内をまったく理解しておらん!!」

バシ、バシバシ！

どこから取り出したのか、巨大なハリセンでミヤビの頭をしばき倒した。

「あ、や、にゃッ!?」

東方神族の中でも確固たる地位を持つ〝四神〟の一柱、必要とあらば人の命など存在ごと消し飛ばしてしまえる力を持つミヤビだが、この青年にばかりは頭が上がらない。

ミヤビが叩かれた猫のようにケモノ耳を伏せてうずくまると、榮太郎は視線を中空にさまよわせ、

「ただミニっこいだけでなく、もっと、こう……『もう子供じゃないんだからねっ』とか『兄妹なのに……こんな気持ち、変だよう』とか『なんであたし、お兄ちゃんの妹に生まれちゃったのかな……』とか……うぅっ、せ、せつねェ～～～～ッ!!」

再びごろごろと転げ回る。

「え、あノ、よく分からナイんですケド」

今度はボンデージルックの半人半鳥・シンクラヴィアがおずおずと手を挙げる。

「……その〝妹〟ッテ、栄太郎様がただ想像してるだけですヨネ？」

シスマゲ☆まかでみい

最初からいないものに対して、なにをどうせつながっているのか――当然と言えば当然のその疑問に対し、

「なにィッ!?『よかった、病気の子供はいないんだ』だとう!? **おまえはなにを言っているのだッ!?**」

バシ、バシバシ！

「あッ、イタ、イタタ!? こ、子供……!?」

「いなかったらどこかから調達してこい！ さもなくばこの場で作れ！ 産め！ 卵でもなんでもポコポコとッ！」

「そんな無茶ナ」

「む……いや……作る……？」

シンクラヴィアをしばいていた手が、ふと止まった。自分で発した言葉がなにかのヒントになったようだ。

「そうだ……作れば！ 作ればいいではないか！ この佐久間榮太郎の全身全霊全技能を以て、おしゃまでキュートでプリティでキュアキュアな〝理想の妹〟を、この手で創造すればよいのだ……！ そうだな、エーネ！」

突然呼びかけられたケモノ耳のメイド――榮太郎の使い魔たる、黒犬獣の化身・エーネウス・ザ・バージェストは、自らをモデルにして作られたプチネウスたちに手際よく掃除の指示を出しながら、表情も変えずに答える。

「ええ、そうですね」

無関心と無責任がありありと見える投げやりな相づちに対し、しかし榮太郎は伸びをするように両手を広げ、

「ふはははは、よぉ～し、お兄ちゃんはがんばるぞ！」

ミヤビとシンクラヴィアはふたたび顔を見合わせ、そっとその場を離れようとした。なにがなにやら分からないが、十中八九ややこしいことに決まっている。

だが――

がしっ、と、左右の手でふたりの首根っこを押さえると、榮太郎は屈託のない笑顔で言った。

「まずは素材の調達からだ！」

＊

そして、二日後――

「あの……先輩……？」

榮太郎の研究室を訪れた羽瀬川拓人は、鼻を刺す異臭に、思わず口元を押さえた。

普段は異国のカフェと老学者の書斎とオタクの六畳間を混ぜたような、雑多ながらもどこか居心地のよい雰囲気を持つ研究室が、現在はガレージか工房のようなありさまになっている。

広くむき出しにされた打ち放しの床には工具や機械部品が乱雑に置かれ、その合間合間にこぼれた溶剤（これが異臭の原因だ）や樹脂

“理想の妹”を、
この手で創造すればよいのだ……！

の削りかすがまだら模様を作っている。
　部屋の中央には、可動式のマネキンのような等身大の人形が支柱に固定されていた。頭部や手足の先など、いくつかのパーツを取り去られているが、かろうじて子供か小柄な女性を模した体型であることが見て取れる。
　また、そこから数歩離れた位置に立っているのは、見慣れた榮太郎の姿――だが、なにやら様子が変だ。傍らの空間に向かって、親しげに話しかけたり、手を伸ばしたりと、不可思議な動作を繰り返している。
「……なにやってるんですか、先輩？」
　歩み寄ろうとする拓人を、肉球と白毛を備えた獣の手が制した。
「お静かに――」
「あ、ミヤビさん」
　肉球の主、巫女姿の白虎・ミヤビは、拓人に向かってうなずくと、榮太郎に目を向けた。
「栄太郎様は今、シャドウ妹に集中なさっているのです」
「え？　シャドウ……なんですって？」
　拓人は訳も分からず、ミヤビと榮太郎を交互に見た。よく見ればミヤビも榮太郎も、顔のあたりに疲労の蔭を色濃く浮かべ、目には異様な光を宿している。
　しかも、黙って聞いていると、
「……うふふ……今日はお兄ちゃんは、あたしだけのお兄ちゃんなんだからね……
おいおい、そんなにくっつくなよ……
ねえ、あだしたち、恋人みたいに見えるかな……
……ははは、こいつぅ……」
　榮太郎はなにやら一人二役でぶつぶつと台詞をつぶやきながら、パントマイムのような動きを演じている。
　つまり、これが〝シャドウ妹〟。または〝エア妹〟とも言う。
　シャドウボクシングの〝ボクシング〟を〝妹〟に換えた行為、と言えば分かりやすいだろう。妹とのふれ合いを想定したイメージトレーニングだ。
　しかも――
「え、あれ……？」
　拓人は目をこすった。一瞬、榮太郎が話しかけている相手の姿が見えたような気がしたのだ。なにか、幽霊のような……？
　いや、幽霊などではない。それはあくまで純粋なイメージ。榮太郎の桁外れの妄想力による完璧な演技が、端で見ている者にまで、妹の姿を幻視させるのだ。
　身長一四〇センチ。女性らしい肉づきを得る寸前の、妖精のような細い体。両おさげにした長い髪をゆらしながら、くるくると動く瞳で兄を見上げ――
「――見えたかッ!?」
「ハイッ!!」
　突然振り返った榮太郎に、背後でなにかの作業をしていたシンクラヴィアが答えた。手にした物体にシュシュシュシュシュ、と紙ヤスリを掛け、ふっと削り粉を吹き払うと、榮太郎に向けて差し出す。
「いかがでショウッ!?」
「うむッ！」
　榮太郎は素早く手のひらを突き出すと、物体――〝人形〟の胸部パーツにひたりと当てた。
　一同は榮太郎の反応を待ち、一瞬、室内がしんと静まりかえる。
　そして、
「……見事ッ！　一分の隙もなく手のひらのくぼみに収まる、このつつましくも絶妙な曲面――はぶッ!!」
　言いかけた榮太郎が、見えない手に張り飛ばされたように顔を背けた。
「もう、お兄ちゃんのエッチ！　……急にそんなことされたら、びっくりするじゃない……ははは、ごめんごめん……」
　ふたたびシャドウ妹に突入する榮太郎。この反応はつまり、シンクラヴィアの仕事が〝合格〟である、ということらしい。
　緊張から解放され、ふう、と息をつくシンクラヴィアだったが、次の瞬間にはふたたび榮太郎の檄が飛ぶ。
「ぼやぼやするな！　すぐに型取りだ!!」
「ハイッ!!」

シスマゲ☆まかでみい

ぴょんと跳び上がったシンクラヴィアに、駆け寄ったミヤビも加わって、彼女らは粘土を詰めた容器にパーツを埋め込み、調合した樹脂を流し込み始めた。シンクラヴィアの作った原型を別の素材で複製して、〝人形〟の本パーツとするらしい。

「……で、あの――」

作業の合間を見計らって声を掛けると、今気づいた、という様子で榮太郎が手を挙げた。

「お、どうした拓人」

「ええと、寒河江教授のことづけで来たんですが」

拓人は片手に提げていた小型のアタッシェケースを持ち上げて見せた。その中身は、先日、〈迷宮倉庫〉の何度目かの整理をした際にその片隅から出てきた、来歴不明のアイテムだ。

そうしたもののほとんどはなんの価値もないガラクタだが、ごくまれに、記録も残っていない太古の強力なアーティファクトが封印の劣化によって解き放たれ、甚大な被害をもたらすことがある。

それゆえ、寒河江教授や榮太郎は不明アイテムが発見されるたびに、慎重に解析し、魔法解除や再封印を施している。誰に強制されているわけでもなく、〈学園〉と〝世界〟という居心地のいい場所を守るために、彼らが自主的に行っている活動だ。

その最新のひとつであるこのアタッシェケースは、先月まで榮太郎が手元に置いて調べていたが、その後寒河江教授に預けていたものである。

「教授、なにか分かったって？」

「いえ、先輩が言っていた以上のことはなにも――だそうです。念のため、しっかり封印しておくように言われました」

「了解、了解」

言いながら、榮太郎はケースを開いて中身を確認し、拓人はそれを横からのぞき見た。黒いスポンジの中に、機械的な構造を持つ金属製のリングと、家庭用ゲーム機のコントロールパッドのようなものが埋め込まれている。リングはそのサイズからして――

「首輪……？」

榮太郎がうなずくと、拓人は言葉を続けた。

「対神魔拘束具ですか……タナロットがつけているような？」

現世に受肉した神や魔物を拘束するアイテムが、象徴的効果を見込んで鎖や首輪の形を模して作られることは多い。特に首輪や腕輪などの〝リング〟は、その構造自体を一種の結界として、霊的存在の中枢をトラップすることができる。

しかし、

「いや、ちょっと違うんだ、これが」

と言って、榮太郎はにやりと笑った。

「アイモートロン・システム〟とかいうらしいんだがな。普通、拘束具は自分の魔力で自分自身を締め上げるように、力場が内向きに働くように作られてるだろ？　ところがこれは、力が外向きに発散するように作られてる。身体強化魔法に類する効果を狙ったものらしい」

「らしい……？」

こと、魔法技術に関しては最高レベルの知識と確信を持っている榮太郎が、その分野において憶測でものを言うことは珍しい。

拓人の懸念に気づくと、榮太郎は苦笑して頭を掻いた。

「魔力以外の精神的エネルギーで動く仕組みらしいんだが、少なくとも俺には動かせない。ひょっとしたら――」

「はい？」

ふと言い淀んだところに拓人が聞き返すと、榮太郎は気をそらすように手を振った。

「いや、ともかくこのリングは完全なオーパーツ――この世はおろか神界・魔界にすら属さない、まるっきり異次元のアイテムってことだ」

「はあ、異次元……ですか」

「ま、要するに『よく分からんものだ』ってことだけどな。まあ、あとでまた調べてみるからその辺に置いといてくれ。今はちょっと手が離せん――あ、そうそう」

栄太郎は作業場の中央へと歩いていき、にやりと笑いながら〝人形〟の肩を抱いた。先ほどの〝妹〟に対する仕草と、寸分違わぬ動きだ。

「それと、寒河江教授にゴーレムの礼を言っておいてくれ」

＊

〈学園〉随一の〝傀儡使い（ゴーレムマスター）〟寒河江教授より譲り受けた、少女型保健ゴーレムの一体――その機体に徹底的な魔改造を施し、佐久間栄太郎の〝妹〟が完成したのは、さらに三日後のことだ。

「おお拓人、いいところに来たな！」

授業の帰りに研究室を訪れた拓人は、出来たてだというそれに対面させられた。

両おさげの髪に、すらりと細い手足。先日の〝シャドウ妹〟のイメージと寸分違わぬ外見を持つそれは、現在はうつむき加減に椅子に座った姿勢で目を伏せている。ちなみに服装はなぜか体操着だ。

「ふはははは、どうだ、このリアリティー特製シリコンボディの妖しい弾力はあなたを天国へと誘（いざな）いますっ！」

ここ数日寝ていないという栄太郎は、やつれた顔に目ばかりをぎらぎら光らせながら不気味に笑う。部屋の奥ではエーネウスが機材の片付けをし、ミヤビとシンクラヴィアが、仮眠とも気絶ともつかない様子で、折り重なるようにぐったりと倒れている。

「や、なんか……」

拓人はやや身を引きながら、言葉を濁（にご）した。

この〝妹〟のベースとなった保健ゴーレムや、仮想神格トリンシアの外部活動用義体、それらの制作者たる寒河江教授自身の憑依型（サイコ・パペット）傀儡人形、その他、精霊化した人形や錬金術製の人造人間などなど、〈学園〉には人形ベースの〝肉体〟を以て活動している者も多い。拓人の見知る彼らの姿は〝人間と見まごう〟ものではあっても、注意深く見れば、人工物としての均整を備えている。彼らは人間の模造品などではなく、あくまでも、人形としての完成品なのだ。

しかし、今、目の前にいるそれは――栄太郎の妥協（だきょう）を許さぬ姿勢によって、ハリウッドの特殊メイク並みの精度で細部まで完璧に仕上げられたその〝妹〟は、人形の域を超え、体温や肌の匂いまで感じられそうだ。今にも生命を持って動き出しそうなそれが、しかし微動だにしないありさまは、まるで人間そのものの肉体から、魂のみを抜き去ったような――

つまり、

「……死体みたいで、ちょっと怖いですね」

思わず正直な感想を漏らした拓人が、ひょっとして不興を買ったかと振り返ると、栄太郎は意を得たりとばかりに笑って言う。

「まあ実際、今はまだ、ただの死体（ボディ）に過ぎんな。『妹作って魂入れず』という奴だ」

はて、そんな諺（ことわざ）があったろうか、と思いつつ、

「魂……ですか」

拓人が相づちを打つと、栄太郎はもう一度にやりと笑い、部屋の奥に呼びかける。

「よぉーし、休憩終了！　最後の仕上げだ！」

その声につつかれるように、ミヤビとシンクラヴィアがのろのろと立ち上がった。

――栄太郎の言う〝仕上げ〟とはすなわち、完成した改造ゴーレムの機体に、自らのイメージする〝理想の妹〟の魂を宿（やど）らせることだ。

術としては降霊術に近いものだが、独立した個性を持った神魔や精霊を呼び出すのと違って、人工的な精霊を〝器〟に合わせて構成することになる。

通常のゴーレムメイキングであれば、ただ命令通りに機体を動かす程度の疑似精霊で事足りるが、栄太郎が求めている究極的に純粋な〝妹〟は、自然精霊に匹敵する存在だ。すなわち、天然の霊的環境において数百年から数千年の時間を掛けて人格を成す高級精霊に等しい存在を、高度な術式と強力な霊力場で強制的に発生させようという、なかなかの力業である。

シスマゲ☆まがでみい

エーネウスとミヤビとシンクラヴィア、それに拓人にまで手伝わせて、妹ゴーレムを中心に結界端子を――通常の降霊術より数段複雑な魔法陣を構成しつつ――設置すると、榮太郎は魔法儀式の起動呪文を唱えた。

「我が名と技を背に我は創造す！　我はサクマ・エイタロウ――超常なりし法と理の使い手なり！　妹よ、未だ在らざる女と書いて妹よ、次元の壁を隔てて今、小さな寝息をたてる妹よ、ちっちゃくって可愛くて、スイートキュートな妹よ、いざ、いざ！　いざ我が眼前に顕れ出でよ――**お兄ちゃんだよ!!**」

すると――結界端子が複雑なリズムを打ちながら次々と起動し、室内に作られた小結界の内部を高圧の霊場に変えていく。

まばゆい光に包まれたその中心で、妹ゴーレムがその目をわずかに開き――

――その時。

羽瀬川拓人の傍ら、部屋の隅によけられた作業台の上で、見覚えのあるアタッシェケースが、小刻みに振動を始めた。

「……？」

確か、その中に入っているのは――

（〝イモートロン・システム〟が……起動してる？）

ほぼ同時に、シンクラヴィアが異変を感じ取った。

〝歌〟を操る魔鳥セイレーンの眷属である彼女は、魔法陣の奏でるリズムの、ほんのわずかなずれに気がついたのだ。

端子の同期が狂っている。これは、つまり――

「……結界が不完全デス！」

そして、次の瞬間には、榮太郎を始めとする、鋭敏な霊的感覚を持つ者たち――つまり、拓人以外の全員――が、明らかな異常事態を察知していた。

結界の隙間から、なにか巨大なエネルギーを持つ存在が、ゴーレムの体内に呼び込まれている……!?

壊れた機械のようにガクガクと全身を震わせながら、妹ゴーレムが顔を上げた。

「……ア……」

その視線は中空をさまよい、自ら発する振動と轟音に半ば掻き消されつつ、わずかに開いた口から小さな声が漏れる。

「……ア、ニ、キ……!!」

次の瞬間には、すさまじいエネルギーの内圧に耐えかねて、ゴーレムの機体は結界ごと弾け飛んだ。

*

佐久間榮太郎らしからぬ失態ではあった。

〝理想の妹〟に対する執着と一週間近くに及ぶ突貫作業の疲労が、彼の注意力をわずかに損ねていたのかもしれない。

異次元のアーティファクトと高度な依代としての精度を持つ妹ゴーレムが相互作用を起こし、瞬間、未知の時空間への召喚経路を形成したのだ。

その結果、現世に呼び込まれた異次元の魔神は、炎の龍の如きエネルギーの奔流と化して荒れ狂い、〈学園〉を蹂躙した。

魔法によって補強された〈学園〉の建築群が、次々と打ち砕かれ、蹴散らされていく。それはあたかも、人類の積み上げた叡智の塔が神罰の一撃で崩壊する様のようだ。

即座に風紀ゴーレム部隊が、続いて重機動ゴーレム部隊が投入されたが、それらはみなすすべもなく大破し、あるいはエネルギー塊の直撃を受けて溶け崩れた。

続いて、有力な魔法使いたる〈学園〉教授陣による魔法攻撃及び封印が試みられたが、これも功を奏することなく、むしろ〝それ〟を刺激し、ますます荒れ狂わせる結果となった。

魔力値測定不能。神格値測定不能。属性は――〝妹〟。

その桁外れのエネルギーもさることながら、最大の問題は〝それ〟がこの世の法と理に従う存在ではないということだ。

厳密に言えば、〝それ〟は〝魔神〟ですらない。魔力とは異なるエネルギー体系に依って

成り立つ超生命体とでもいうべきものだ。
故に、通常の魔法的対処はすべて無効。
また、神界や魔界に籍を置き、その法に従う者ではないため、それらの社会の上層部との交渉によって行動を制限することも不可能――

「やれやれ、なんとも厄介な……〝タナロット事件〟を思い出すよ」

とは、寒河江教授の弁である。

＊

そして、現在――

「タクト！」

『タクちゃん！』

「拓人様！」

三者三様の声を上げて研究室に飛び込んできたのは、羽瀬川拓人の同居人である、二人の娘たちだ。

〈属性未分化魔神〉タナロット。

〈魔力侵奪能力者〉羽瀬川鈴穂。

〈一級可変型魔法機杖〉ファルチェ。

どのひとりをとっても、世界のバランスを歪ませるほどの恐るべき力を秘めた少女たちだが、とりあえず現在は、羽瀬川拓人を中心に、時に牽制し合い時に協力し合う、微妙な関係を保っている。

彼女らと拓人は、最近根を詰めている榮太郎の様子見がてら、この研究室で待ち合わせることにしていたのだが――

『あ、あの、今、外がすごい大騒ぎになってて、みんなここが大元だって言うし、あのあの』

泡を食ってノートにボールペンを走らせる鈴穂に対し、

「うむ。外はお祭り騒ぎでぴーひゃらどんどんなのである。実に楽しそうなのである。我も参加希望なのである」

「みなさん、ご無事ですかぁ」

タナロットとファルチェはあくまでマイペースだ。

そして、

「うん、まあなんとか無事……」

部屋の奥から、娘たちに向かって、そう答えて出てきたのは、拓人本人。

先ほどの妹爆発の圧力の大部分は、魔神と共に天井をぶち破って空へ抜け、おかげで榮太郎ら一同には大した怪我もなかったのだ。

そこに、

「お、来たな来たな！　妹候補者たちよ！」

と、榮太郎も出てくる。

『はい？　妹って……？』

「うみゅ？」

「なんですの？」

「あ、うん、ええと」

きょとんとする二人娘に、拓人が説明した。

シスマゲ☆まかでみい

「なんか……僕の妹役をひとり選ぶんだって」
　所在なげに言いながら、拓人は先ほど榮太郎に手渡された金属製のリングを胸の前に掲げる。
「そう、そして選ばれし妹は、その〝イモートロン・システム〟を身に着けて、異次元の魔神と戦うのだ！」
　榮太郎の言葉に、三人はさらに首をかしげた。
「うみゅ？」
「あら」
『え……それってなに？　なんで？　どういうことですか？』
「ふふふ、つまりそれは――」
　榮太郎は不敵に笑い、
「かの魔神の属性は〝妹〟！　妹を倒せるのは妹だけだからだ!!」
　と、いうわけで――
「エントリーナンバー1番！　タナロットである！　我はタクトの妹である！　お兄ちゃん好き好きだーい好き、なのである！」
　タナロットが拓人に飛びつくと、榮太郎がぐっと拳を握った。
「なかなかいいぞ！　ひねりはないが、元気印は妹の定番キャラだ。よし、次！」
「エントリーナンバー2番、ファルチェです。うふふ、お兄様～、わたくしたち、禁断の関係なのですわ～」
「うむっ、演技はこなれていないが、関係性への着眼は悪くない！　次、鈴穂！」
『エントリーナンバー3番』
　拓人に歩み寄った鈴穂がふと立ち止まり、ためらいがちにノートに文字を書き始めた。
『お兄ちゃ』
　だが、その字を終いまで書かず、くしゃくしゃと線を引いて潰してしまう。
　うつむいた顔が、真っ赤だ。
「……鈴穂？」
「どうした？」
『……無理。恥ずかしい』
　鈴穂はうつむいたままノートにペンを走らせ、頭の上に掲げる。
『だって、タクちゃんはタクちゃんだし……私、年上だし……半年くらいだけど』
「……そう」
　拓人はうつむいた鈴穂の肩に手を置いた。
「まあ、どのみちこじつけみたいなものだから、別に気にすることないよ」
「ふむ、鈴穂ちゃんは棄権か。ではタナロットとファルチェのどちらかということになるな」
　そう言う榮太郎に拓人は振り向き、
「あの……このイモートロンなんとかって、先輩が使ったほうがいいんじゃないですか？　もともと『妹、妹』って言ってたのは先輩

妹を倒せるのは
妹だけだからだ!!

ですし……」
「できればそうしたいんだがな」
栄太郎は答える。
「元来がこの世の理の外にあるアイテムだ。おそらくは、理を書き換える資質を持つ〈始源的神魔創造者〉にしか扱えないだろうよ」
「はあ……」
納得が行くような、行かないような……。
生返事を返す拓人の両腕に、タナロットとファルチェが左右からしがみつく。
「お兄ちゃん、お風呂もいっしょ、寝るのもいっしょ、なのである！」
「お兄様、ふたりでどこまでも堕ちていくのですわ～」
「お兄ちゃん、である！」
「お兄様、ですわ～」
「わ、わ」
左右から強く引かれて、よたよたとよろめく拓人。
そこに――
どしっ、と、正面から鈴穂が組みついた。
「え……鈴穂？」
『……やっぱりイヤ』
顔を拓人の胸に押し当てたまま、鈴穂はノートを差し出す。
『私はずっとタクちゃんといっしょにいたんだもん。私はずっとタクちゃんの近くにいたんだもん。私が一番じゃなきゃ、やっぱりイヤ』
「あら、まあ」
ファルチェが腕の力を抜いた。
「むむ、それはずるいのである。いっしょにいた時間で決めるなら、年喰ってるほうが有利に決まってるのである」
腕を組んで抗議するタナロットの頭をぽんぽんとなでながら、拓人は言った。
「うん……そうだね。タナロットもファルチェもいい子だし、家族みたいなものだと思ってるけど……鈴穂とは、それよりずっとずっと昔からきょうだいだったんだもんね」
拓人の胸の中で、鈴穂がうなずいた。
「……うむ！」
栄太郎がはたと膝を打った。
「鈴穂の幼き独占欲こそは妹心の神髄！　また、それを慮る拓人の心もまた兄心！　その心の絆の前にはどちらが年上かなど問題ではない！　妹認定！」
『え……？』
「あの……認定とか……妹って、そういうものなんですか？」

＊

魔法使いやその見習いたちが一般に護身の術に長けていることを差し引いても、死者や重傷者がまだ出ていないことは僥倖と言うべきだろう。
恐るべき未知のエネルギーの渦動、異次元の妹魔神の力はますます勢いを増し、〈学園〉全体を平地に均してしまおうとでもいうように、風を巻いて荒れ狂っている。
その進路上、狂風にさらされた尖塔の頂上に、ひとりの少女が立っていた。
長い二つ編みのおさげを風に揺らし、片手には銃とも長剣ともつかない奇妙な武器を携えている。そして、首元には金属製のチョーカー――
「行くよ、鈴穂……！」
少女――羽瀬川鈴穂の足元から、羽瀬川拓人が声を張り上げた。
鈴穂は無言でうなずく。
「えーと……イモートロン・システム起動……！」
拓人が不慣れな手つきでコントローラーの主電源スイッチを入れると、鈴穂のチョーカーが発光し、唸りを上げ始めた。
鈴穂の体に、魔法による身体強化に似た、しかしそれよりはるかに強力なパワーがみなぎる。これこそが、異次元の魔法具、イモートロン・システムの力だ。
拓人がコントローラーのレバーを倒すと、鈴穂の体が弾かれたように前方に飛び出した。
塔の頂上から、もうひとつの〝生きた塔〟、エネルギーの竜巻の形態を取る妹魔神に飛び掛

かる。

鈴穂は空中で手持ちの武器――機剣〈ワルプルギス〉を起動し、プラズマブレードをトリガーした。光と熱の刃が一気に二〇メートルほども伸張し、竜巻を唐竹に割る。

が――生きたエネルギー流はプラズマの刃を絡め取ると、鈴穂の体ごと投げ飛ばした。

「……ッ！」

「鈴穂……ッ!!」

拓人はとっさにコントローラーの三角形のボタンを押した。妹のパワーを爆発的に増幅させる〝シスター・ブースター〟だ。

地上に叩きつけられる寸前、鈴穂の全身から金色の炎のようなオーラが噴き出し、クッションとなった。二度、三度と地面を穂のように跳ねたのち、鈴穂は二本の足で着地する。金色のオーラは未だ噴き上がっており、その内圧で髪留めのリボンが弾け飛び、おさげの三つ編みがほどけた。

ざあっ――と、長い髪が蒼く染まり、おとなしげだった表情が一変する。

「……ざけんなァッ!!」

鈴穂はひと声吠えると、魔神に向かって突進した。

その周囲で、魔法的補強によってかろうじて形を保っていた建物が次々と崩れていく。

第二人格の覚醒に伴う〈魔力侵奪能力〉の発動――あらゆる魔法使いと魔法的生命にとって致命的な〝魔力の真空状態〟を作り出すその力は――しかし、魔法ならぬ力で動く異次元の魔神には効果がないようだ。

だが、そのような判断は、狂戦士と化した鈴穂の関知するところではない。鈴穂は全力で疾走しながら再びプラズマブレードを伸張――いや、それはプラズマではない。全身から噴き出すオーラを〈ワルプルギス〉の剣身に沿って集中しているのだ。

すなわち、オーラブレード。

「――ッらァッ!!」

鈴穂は高々と跳躍し、〈ワルプルギス〉を振り抜いた。

確かな手応え。オーラの刃は、魔神の纏うエネルギーの一部を確実に斬り飛ばした。

生きた竜巻が身をよじり、苦悶し、そして次の瞬間には、全身から何十発というエネルギーの塊を打ち出した。

「――ック！」

その一発一発が、未だ空中にある鈴穂に打ち当たり、その体を弾き飛ばす。鈴穂はオーラの刃を体の前に構えて防御。身体にダメージはないが、軽い体ははるか後方に弾かれ、流される。

やがて、ようやくエネルギー弾が途切れ、鈴穂は再び着地した。そして、〈ワルプルギス〉を中段に構えオーラを集中する。強く、堅く――

見たところ、魔神のエネルギーと鈴穂の纏うオーラは同じものだ。より強固に集中した者が、相手を貫き、砕く。

と――

魔神の体を構成するエネルギー流もまた、細く引き絞られ始めた。塔のようだったものがやがて、ひと抱えほどの太さに。そしてまた、上下に縮み、直径一・五メートルほどの輝く球体に――

球体の中に、人影が見えた。鈴穂よりいくらか年少の、小柄な少女だ。

これが、魔神の〝本体〟……？

いや、そうではない。あくまで、エネルギー体が凝縮し、このような形態を取っているのだ。

それにしても――塔のような巨体をあそこまで畳んだということは、そのエネルギーの密度は今、どれほどのものになっているのか。もはや、先ほどまでのオーラブレードでは、傷ひとつつけることはできないだろう。

（負けるか……！）

鈴穂はオーラの刃をさらに強く集中した。

相手は超エネルギーの怪物。こちらの不利は承知の上だ。

だが――針のひと刺しとて、巨獣の目を潰すことは可能なはずだ。

ただ一瞬、ただ一点。

鈴穂はその瞬間に備え、全身の力を集中し

――その時。

『ソラ――――ッ!!』

地上からスピーカーの大音声が発せられるや、

魔神の――少女の全身から噴き出していた金色の炎が、ぴたりと止まった。

「……ひゃ？」

オーラの噴出により空中に浮遊していた少女は、突如空中で足場を失い、

「わひゃあああああああっ!?」

ずでん、と、地上に尻餅をつく。

「いたたた……」

と、這いつくばって尻をさする少女。

その頭上に、

「隙ありャアアアアアッ!!」

〈ワルプルギス〉を振りかぶった鈴穂が飛び掛かった。

が――

「わ、鈴穂、ストップ、ストップ……！」

横から飛び出してきた拓人がコントローラーを操作すると、鈴穂は空中でバランスを崩し、着地に失敗して、ずでん、と尻餅をつく。

「いたたた……」

魔神の少女の隣に同じ格好で這いつくばり、鈴穂は自分の尻をさすった。

＊

「制御不能の異次元存在に対抗する際には、まず相手の所属世界にコンタクトを取って情報を得るのが基本だからな。とりあえず鈴穂たちに時間を稼いでもらいながら召喚経路（ポータル）を辿って通信してみたら、向こうでもこっちを探していた……というわけさ」

――と、榮太郎が状況を説明し、

「紹介しよう、こちらは烏山（からすやま）サトル氏。魔神のお嬢さんの兄君だ」

寒河江教授――の、少年型憑依型傀儡人形（サイコ・パペット）――が言うと、榮太郎の広げ持ったノートパソコンのモニターの中で、拓人と同年代ほどの少年が、

『お、どうも』

と、片手を上げた。

『ワープ中に迷子になったと思ったら、妹がそちらでご迷惑をおかけしてたそうで』

「こちらこそ、不用意に門（ポータル）を開いてしまったようだ。お嬢さん――ソラ君は責任を持ってそちらに送り返すよ」

上の人間同士が話をつけている間、魔神の少女――名前は〝ソラ〟というらしい――は、破壊の跡も生々しい周囲の景色を、きょろきょろと見回している。こうしているとただの人間にしか見えないが、彼女はタナロットに匹敵する破壊力を持つ怪物なのだ。

やがて、ソラは榮太郎のノートパソコンに顔を近づけると、兄・サトルに向かってひそひそと言った。

「あのさ……あたし、ひょっとして、なんかやっちゃった？」

『ま、不可抗力だ。気にすんな』

「気にするなって言っても……」

そこに、タナロットがひょこりと顔を出した。

「わ、なに？」

「ふむ。ソラはたくさんあばれたのであるな。楽しかったであるか？」

なにが気に入ったのか、タナロットはソラの背中を楽しそうにぺちぺちと叩き、

「今度やる時は我も混ぜるのである！」

と――

それを見ていた拓人と鈴穂が、同時に手をぱたぱたと振った。

「「……それは勘弁して」」

＊

その後もしばらくの間、

「お兄ちゃーん、である」

「お兄様、ですわ～」

と、羽瀬川家では〝妹ごっこ〟がちょっぴり流行ったりした。

シスマゲ☆まかでみい

お兄ちゃんお兄ちゃん言ってると鈴穂が乗ってこないので、いつもより余計に拓人にベタベタできるのである。

そして、その様を遠巻きに眺めながら鈴穂は口を尖らせ、

（だって、「お兄ちゃん」なんて変じゃない。タクちゃんはタクちゃんなんだし……私、年上だし……）

なぜか赤面。

＊

一方その頃、榮太郎の研究室では――

「いやあ、今回の事件では妹というものの恐ろしさの片鱗を味わったぜ。もうこりごりでござるよ」

革表紙の魔道書を開きながら榮太郎が言うと、

「そうですか」

本棚にハタキを掛けながら、エーネウスが答える。

「いや、ほんとに」

「そうですか」

「いや、ほんとに」

「そうですか」

「……」

「……」

ふたりの間にしばし沈黙が漂い、やや離れた位置で、ミヤビとシンクラヴィアが顔を見合わせる。

やがて、エーネウスがふっと小さなため息をついた。

「……それで、今度はなんですの？」

「よくぞ聞いてくれた」

音もなく移動していた榮太郎は、部屋から逃げだそうとするミヤビとシンクラヴィアの首根っこを左右の手でがしっとつかみ、晴れやかに笑った。

「こんどは弟がクると思うんだ――女装してるやつが！」

シスマゲ☆まかでみい　超妹召喚!?　なんですけど。完

だめあねまかでみ！
アニレオンなんですけど。

葛西伸哉
イラスト/うなじ

だめあねの産婆ちゃんが
思いついてしまった恐るべき新商売
それはマジシャンズ・アカデミイ！

それは一つの教育機関になるはずであった。
ただしそれはいわゆる学校教育基本法上の定めに則って造られる組織ではない。そもそも社会通念や一般常識には縛られる事のない領域にそれは生まれる。
この国の公文書の何処を探してもその機関の名前は記されないだろう。
この国のどんな地図を紐解いてみてもその機関の所在地は掲載されないだろう。
何故ならこの教育機関が教えたい事は一般社会とは相容れないものであったからだ。人が人として社会を営む上で切り捨ててきたものが堆積してできるであろうものだからだ。
だが捨てる者が居れば拾う者も居る。
というか他人が捨てたモノに妙な価値を見いだしてしまう人も居る。
そこは一般社会の常識からは見捨てられてきたものを探し出してきた者とそれに続こうとする者達が学ぶための場所だ。利便性。効率。経済効果。確実性――無味乾燥とした実利主義の陰で忘れ去られているはずの不可思議なる、しかし厳然たる真実を身に付ける為の場所になる予定だ。
故に設立者は様々な想いを込めてその教育機関をこう呼ぶ。
現代に隠れ住みし魔法使い達の学園――〈藍ちゃんのマジシャンズ・アカデミイ〉と。

始まりは、寒河江教授からの唐突な呼び出しだった。
「スパイ……ですか？」
不満と驚きが入り混じった表情で羽瀬川拓人は呟いた。中肉中背。取り立てて美形でもなければ不快を催す顔立ちでもない。強いて言えば、あからさまなお人好しっぷりがにじみ出ているのが特徴か。平凡という形容を形にしたような若者だ。
ただ、彼には極めて大きな特徴がある。現代社会の背後、神や魔とも交流し、魔法を極め尽くそうとする者たちの一員。〈学園〉の生徒であり、本物の魔法使いなのだ。
「そうだ。これを見てくれたまえ」
教授の白く華奢な手から渡されたのはごくありふれた、新聞に折り込まれていそうな二色刷りのチラシだった。
『教師&生徒大募集！　本物の魔法を教える〈まじしゃんず・あかでみい〉世界初開校☆』
「これって……？」
「もちろん〈学園〉は関与していない。調べた限りにおいて〈連盟〉とも無関係だ」
無用の混乱を避けるために一般社会と接触を避ける方針の〈学園〉とは異なり、魔法使いを選良と自任し、魔法を極めるためには持たぬ者たちを支配すべきと考える結社も存在する。拓人も不本意ながらその敵――〈連盟〉と戦った事もある。
「関係者の記憶を操作してしまえという声もあるが、チラシを見た全員が相手だと対象が多すぎる。根本的な問題が解決されなければ再発の危険が残るしな」
〈学園〉とは言っても人間界から距離を置いた研鑽の場、隠れ家という性格が強い。隠蔽工作が大規模になりすぎて目立っては本末転倒だ。
「トラブルが増加傾向にあり、尻拭いの手間も増えているのも事実だ。芽吹く前に問題の種を潰してしまえという考えに走りたがるのも理解できない訳ではない」
某アニメの司令官よろしく机に両肘を突き口元を隠したポーズで、教授は目を光らせた。
拓人にも、自分が台風の目という自覚はあるのだ。もちろん不本意だが。
「羽瀬川拓人。君はなぜこの〈学園〉が成立するか考えた事はあるかね？」
思いもかけない根元的な質問に、拓人は首を傾げるしかない。
「魔法は教える事も学ぶ事も可能だからだ」
「ああ……そういう意味なら、分かります」
以前に教わった。素質は必要だが全てでは

ない。

魔法には一定の法則や定石があるからこそ他人が身に付けたものを参考にし、応用する事ができるのだ。ある意味でスポーツや芸術に似ている。いずれ独自の到達点を目指すにしろ、最初は先人が積み上げた方法を模倣して基礎を身に付けるところから始まる。

体質や病気にもなぞらえられる超能力とは違う。あちらは完全に生まれつきのものだから、鍛え、磨き、あるいは馴れる事はできても学び教わるのは不可能なのだ。

「我々は可能な限り魔法の素質がある者を探し、迎え入れて来た。だが完璧はあり得ない。知らないところで魔法を実用化した者がいないという保証はないし、単なる詐欺でも魔法を名乗っているなら、それはそれで放置する訳にもいくまい？」

だからチラシの学校に探りを入れた方がいいのも分かる。

「それに〈学園〉関係者で一般社会に生活の軸足を置く者は多くない。迂闊な者を送りこめば調査どころか余計に騒ぎを大きくしたり、魔法の存在を知られる恐れもある」

「それは……そうですね」

拓人にも心当たりがある。実際にいるのだ。騒ぎの種は絶対に見逃さず、お祭り騒ぎが大好きで、問題を大きくして面白がる特定個人の心当たりが――。

「常識があり、トラブル慣れもしている。君が適任というのが結論だ。よろしく頼む」

そんな訳で、拓人は〈藍ちゃんのマジシャンズ・アカデミイ〉に仮入学する事になったのである。

看板を出しているのは三階建ての小さなビルだった。外見は地味でとても魔法を教える場所にも詐欺師の拠点にも見えない。魔法なんて謳い文句で他人を騙そうとするなら霊感商法のようにもっと仰々しく飾り立てるものではないだろうか。逆にそういう予断を利用して信頼感を高めるために地味なのか。

どちらも成り立つ話だ。結局のところ外から見ているだけでは判断はつかない。

「うみゅ。さっさと行くのである。〈学園〉の偽物の悪の巣窟は叩きつぶすのである。きっとマフラーが黄色かったり爪先が尖ってたりするのである」

拓人の右手を小柄な女の子がぎゅっとつかんだ。

目立つ外見だ。猫科の獣を思わせる愛嬌と活力を漂わせている。鮮やかな赤毛のショートカットに健康的な褐色の肌。染髪や日焼けではなく生来のものだ。もちろん日本人ではない。それどころか人間でもない。

彼女――タナロットは拓人が召喚したというか、創造してしまった魔神なのだ。

『落ち着きなさい。騒ぎを大きくしたらクロちゃんが困るでしょ？　だいたいマフラーとか爪先って何よ？』

拓人の左側でもう一人の少女がプラカードを掲げた。

こちらは地味だ。黒髪を丁寧に編みこんだお下げに、これまた無地のリボンを結んだだけ。シンプルな眼鏡がおとなしい雰囲気を強調している。タナロットが動物ならどこか植物的とさえ言える娘だった。

羽瀬川鈴穂――それが彼女の名である。同じ姓からも分かる通り拓人の従姉妹だ。

「みゅ？　しかしタクトに与えられたのはインポッシブってるミッションでスパイな大作戦なのである。という事は敵地に侵入して中枢を破壊して速やかに脱出するのである。驚は舞い降りて飛び立つのである」

『タナ郎、あなた最初の指示を全然聞いてないでしょ？』

「大丈夫である。危険な任務だからこそ我が同行したのである。スズホだけがついていくと危険がぐんとグレードアップのポイント三倍セールになってしまうのである。具体的に言うと貞操の危機である」

『やっぱり聞いてない！　スパイだから目立たないようにしなきゃいけないの！』

「ぼら、鈴穂もスパイとか大きく書かないで」

『こ、こめんなさいっ』

鈴穂は慌ててスパイの三文字をぐりぐり塗りつぶす。

考えなしに二人を同行させた訳ではない。〈藍ちゃん〉側が強硬手段に出た場合、拓人の魔法は半人前で頼りない。

タナロットは魔神だけあって文字通り人間離れした体力と腕力を持っていて、多少の物理的な障害は正面突破で粉砕できる。

鈴穂の方はリボンを解けば〈魔力侵奪能力〉ともうひとつの人格が解放される。彼女の周囲では魔力が吸収され魔法の行使が不可能になるのだ。これは能力ではなく体質だ。どれほど熟達した術者でも技で対抗する事はできない。相手が本当に魔法絡みの場合、鈴穂は最終兵器になる。手にした楽器ケースの中身も〈学園〉が彼女のために用意した機剣〈ワルプルギス〉である。

もっともそれ以前に二人の方から「拓人が危険な任務に就く」と聞いたらついていくと立候補して、どちらか片方だけというのが不可能になってしまったからなのだけど。

ビルにはガードマンもおらず、ただ『入学希望者はこちら』という看板が出ていただけだった。据え付けてあるノートに名前を記入してから矢印に従って進んでいくと『一年♠組』と表示された教室だ。

「いい？　さっき鈴穂も言ったけど調査が目的だからね。タナロットも騒いだり警戒されるような事しちゃ駄目だよ」

「了解なのである。作戦行動中は上官の命令に従うのである」

大げさに敬礼するタナロットに一抹の不安を覚えながら、拓人は静かにドアを開けた。

「失礼します」

雑居ビルの一室とは思えない教室らしい部屋だった。

正面には黒板、後ろには掲示板。並んでいる机も椅子も見慣れた学校用だ。教材資料を見せるためか、ＡＶ機器も基本的な物が揃っていた。

先に着席している先客は三人。年齢は拓人たちと同じくらい。男一人に女の子が二人。奇しくも同じメンバー構成だった。

「……えっと……あんた、入学希望者？」

「そ、そうですけど？」

窓際の席に座っていた少年が振り返った。取り立てて美形というほどではない平凡な顔だった。同じ平凡でも拓人とはタイプが違う。背は高め、ざっくり切った短めの髪のせいもあって気さくで頼もしげな印象がある。

「悪い事は言わない。今なら間に合う。さっさと帰った方がいいぞ」

少年が小声で耳打ちしてきた。

「え？　でも、ここは魔法教える学校で、あなたたちも入学希望者なんですよね？」

「好きで来た訳じゃない。やむを得ない事情っつーか、いろいろあって仕方なく」

恥ずかしそうに少年は告げた。やむを得ない事情というのなら拓人もそうなのだが。

「みゅ？　これは本物であるか？」

拓人が目を離した隙にタナロットが一人の少女に話しかけていた。一見の印象は似ているがタナロットが虎の仔ならこちらは普通の猫といったところか。そんな連想してしまうのは彼女がツインテールの髪にネコミミのアクセサリーを着けているからだ。

「あはは、まさかそんな事ある訳ないじゃない？　本物のネコミミが頭から生えてるなんてマンガじゃないんだし」

「いる所には結構いるのである」

「面白いね。そんなのが本当にいるなら会ってみたいよ。ボク、潮末瑠。よろしくね」

「我はタナロットなのである。なるほど着脱可能なのである」

ぽっちん。

未瑠と名乗った少女が笑っていると、タナロットがそのネコミミカチューシャをつかんで引っこ抜いた。

「タ、タナロットっー」

制止しようとしたが、タナロットと未瑠はすっかり意気投合してしまったらしい。

「こーいうのって着けてるとかわいいでしょ？」

「ふむ？　つまり未瑠はシュタイン教授の同

類であるか？」

まさか未瑠という少女は自分が話している相手も人間ではなくて、本当は尖った耳の持ち主だとは気づきもすまい。

ふと視線を移すと、鈴穂ももう一人の女の子と何やら話しこんでいた。もちろん筆談に相手が応じる形だが。

おとなしく真面目そうな雰囲気ではあるが、鈴穂ほど地味ではない。頭の両脇に結んだ極細のリボンもお洒落な感じがする。最近は回復傾向にあるが深刻な対人恐怖症を経験している鈴穂から声をかけたとは思えないから、相手の方が話を切りだしたのだろう。

「ああ、若奈は――十四屋若奈っつんだけど、クラスでも委員長とかやってるからさ。あいつ、一人で困ったり戸惑ったりしてる人を放っとけないタイプなんだ」

少年が説明する。人見知りが激しい鈴穂がちょっとぎこちないけれどそれでも微笑んでいるところを見ると、若奈という少女は単なるお節介ではなく本当に親切でコミュニケーション能力が高いのだろう。

スパイなのだから、ちょうど二対二で情報を収集できるのは好都合かもしれない。

この状況で拓人が若奈や未瑠にコンタクトを取ったら鈴穂とタナロットが暴れ出しそうだし。

「あ、自己紹介が遅れたな。オレは水町玄。高校一年」

「僕は羽瀬川拓人です。高二。あっちはタナロットと、従姉妹の鈴穂」

差し出された手を握り返す。

「あ、年上だったのか。タメ口で失礼しちゃったな。ごめんなさい、羽瀬川さん」

「ひとつ違いだし、そんなかしこまらなくても『拓人』でいいよ」

「んじゃ、拓人さんって事で」

頭を上げた玄は笑っていた。

「えっと……玄くんは魔法とか興味あるの？」

「ンな訳ない」

拓人が入れてみた探りを、玄は一言の下に拒絶した。

「え？　でも、こんな学校に来るくらいだし……」

「オレも若奈も未瑠も、魔法なんて信じてねえよ。常識で考えてあり得ないって」

「はは……そうだね」

実際に魔法を学び、それなりとは言え使いこなす身としては苦笑するしかない。

「でも、だったらどうして？　さっき事情とか言ってたけど？」

「……言いたかないが、この学校を作ったのはオレの姉貴だ。オレたちは学校が上手くいくかどうかのテスト用に生徒役やらされてるわけ」

男らしい眉毛を段違いにする表情で、玄は吐き捨てた。

「お姉さん……？」

拓人が首を傾げていると、教室前方のドアが開いた。

「はぁーい、生徒諸君っ☆　入学希望ありがとうっ、理事長の水町藍です」

若い女性だ。二〇歳くらいだろうか。ストレートのロングヘアで明るい雰囲気の美人。ただしどこか緊張感に欠けるというか緩んだ雰囲気がある。

しかも服装が変だ。鍔広とんがり帽子に黒マント。今どき《学園》でも見かけない超正統派の魔女スタイルだった。ただしマントの下はマジシャンはマジシャンでも奇術師を思わせる燕尾服風のレオタードに網タイツ。おまけに腰には何故かソロバンが吊されていた。しかもかなり見事なプロポーションなので、はっきり言って目の毒である。

「社長の秘書――もとい、理事長秘書の湖浦智乃ですっ！」

続いて現れたのはかなり小さい。ひょっとしてタナロットよりも小柄ではないだろうか。アップにした髪型は大人っぽいのだが、体格は小学生だ。藍とお揃いのコスチュームが絶望的なまでに似合っていない。

タナロットは好奇心いっぱいの目で二人を見つめ、鈴穂はぽかんとレンズの下の目を丸

くしている。
「……あれが、ウチの姉貴だ」
玄が小声で呟く。ため息混じりの声には絶望の響き。
「さて、皆さん。募集広告にもあった通り、我が校は本格的な魔法を研究し、教える学校です。まだ文部科学省の認可とかはありませんけど。現代の科学合理主義の中で忘れられている真実を明らかにし、その英知を実用できる人材を広く育てる事を……」
「発案の現場を見てたオレの前で、堂々と建前を言うか？　本当は全然違うだろーがっ！」
一応はまっとうな——というか本物の《学園》と同じ趣旨を述べる藍に、玄は頬杖を突いたまま横槍を入れた。
「うん。確かにきっかけは『ハ○ー・×ッター』を読んだのと、『ド○えもん』映画のCMとオンラインのクイズゲームよ。魔法学校とか魔法世界に憧れる人はたくさんいるのに実際にはどこにも無いんだから、これって大きなビジネスチャンスじゃないっ」
「さすがです、社長っ！　毎度ながら余人には想像できない鉱脈を探り当てる天才的直感と発想力っ！　この智乃、感動のあまり全身のあちこちが熱く潤う次第ですですっ！」
ぴしっとソロバンを振り下ろした藍の隣で、智乃がぱちぱち拍手する。
「こーいう姉貴だよ。思いつきでロクでもない事を始めて、いろんな人間を巻きこんで面白がるだけなんだ」
小声で告げる玄の言葉に、拓人は微妙な既視感を覚えた。そういう人間像には実によく見覚えがあるというか何というか。
「さて生徒諸君っ！　皆さんはもしも本当に魔法が使えたら何をしたいですかっ？」
ビシ、ビシ、ビシ、ビシ、ビシ、ビシッ！
シャカシャカ珠を鳴らしながら、藍のソロバンが六人を順繰りに指していく。
「では羽瀬川拓人くんっ」
「え……えーと」
いきなり名指しされて口ごもる。何しろ「もしも本当に」どころか魔法使えるし。だいたい最初は素質があるから《学園》に引っ張られたのであって、拓人の方から魔法を使いたくて門を叩いた訳ではない。あの時点では魔法の実在なんて信じていなかったし。
「ぴ。ぴ。ぴ。ぶーっ！　はい、時間切れっ。魔法って夢を叶える力なんだから目的をよーく考えておくように。じゃ、次は若奈ちゃん」
拓人が悩んでいると、藍のソロバンは若奈に移った。
「え？　えと、えーと……。やっぱり好きな人に振り向いてもらうっていうか……」
「うんうん。女の子の基本よねー」
律儀に起立して答えた若奈に藍は満足げに頷いた。
「あー、若奈ちゃんがそういう事言うんだったらボクも」
『そういうのってあまりよくないと思う』
未瑠も対抗して大きく手を振ったが、鈴穂は控えめに反論を提示した。それはそうだろう。彼女はそういうアイテムの害を被った事もあるのだし。
「じゃ、次は玄ちゃんっ！」
「何にもねーよ。そもそも魔法なんてあり得ない。二〇歳にもなってそういう夢みたいな戯言をほざくのは止めろ」
「玄ちゃんこそまだ若いのに夢がないね」
「オレは姉貴とは違うの！　あくまで平凡、堅実がいちばん。真人間としての人生を歩みたいんだよ。だいたいなぁ、魔法を教える学校が実在しないのは、教えられる人間がいないからだ！　そのくらい常識で考えて理解しろ！」
いや。学校あるし、教師もいるんだけど。常識通じないところに——
思わずツッコみそうになって拓人は、慌ててタナロットに視線を向ける。鈴穂はともかくタナロットは真実をうっかり口にしかねない。
だが——。
「ウサギ、イヌ、キツネタヌキコアラミミズクなどにそれぞれの魅力があるのは言うまで

〈藍ちゃんのマジシャンズ・アカデミイ〉
講師の佐久間榮太郎です

もないとして、ケモノミミはネコミミに始まってネコミミに終わるのである。釣りにおけるフナと同じと教授は言っているのである」

「へぇー。ボクもいろいろ持ってるけど。ね、今度そのキョージュって人に会わせてよ」

「うむ。ネコミミ大好きっ娘との邂逅となれば教授も喜ぶのである」

一切合切無視してネコミミ談義が続いていた。

「ちっちっち。玄ちゃん、甘いわね。おねーちゃんは抜かりないのよ」

満面の笑みで、メトロノームのようにソロバンを振る。

「ちゃあんと魔法を教えてくれる教師も一緒に募集して、見事ホンモノの魔法使いをゲットしたのよっ！　先生、どうぞっ！」

「初めまして。〈藍ちゃんのマジシャンズ・アカデミイ〉専任講師の佐久間榮太郎です」

だっ！

拓人は席を蹴り、唐突に現れた長身の黒マントをドアの外――廊下へと押し戻した。

「ははは、拓人。急に何をするんだ？」

美形は美形だがどこか締まりのない顔で榮太郎は笑った。

「何するじゃないでしょ、先輩！　何でここにいるんですか！」

佐久間榮太郎。準教師という気楽な地位で好き勝手な日常を楽しんでいる折り紙付きで札付きの魔法使い、そして拓人にとっては直接の師の一人でもある。

「魔法を教えられる人募集ってチラシがあったからな。ほら、俺って条件ぴったりだし？」

「ひょいひょい一般人に知られていいモンじゃないでしょ！」

榮太郎がひらひらと振り回したチラシを見て、拓人は小声で抗議した。

「それに彼女がやってる事には前からちょっと興味があってな。メイド寿司やメイド銭湯、ブルマ復活計画――二次元にはあっても現実じゃ無理っぽい萌えを実際にビジネスにするなんて面白いじゃないか？　しかも本人が美人若社長だぞ」

改めて痛感させられる。この人は筋金入りのオタクだという事を。

「力説しないでください。〈学園〉の事とかバレたらまずいでしょ？」

「大丈夫大丈夫。この俺が信じられないのか？」

「先輩だから、信じられないんですけど……」

あまり話しこんでいても怪しまれる。拓人は取りあえず――無駄だとは思いつつ――視線で念を押した後、教室に戻った。

「あの人、拓人さんの知り合い？」

「知り合いっていうか……まあ、ちょっとした先輩というか……」

あんな行動を取ってしまった以上、見ず知らずの他人などと嘘をつけばかえって混乱する。玄の問いかけに拓人は曖昧に言葉を濁した。

「……オレには分かる。あいつはアクティブダメだ。ウチの姉貴と同種の人間だ」

「それには思いっきり同意するよ」

本人が何もしないので周囲が余計な「手間」を取らされるのがパッシブダメ。やらなくてもいい事だけを積極的にやるので周りが「迷惑」を被るのがアクティブダメである。確かに水町藍と佐久間榮太郎は、同じタイプの生き物らしい。

「はぁーい。藍ねぇ……じゃないや。理事長に質問っ」

未瑠が手を挙げた。

「どうして佐久間先生が魔法使えるって分かったんですか？」

「うん。いい質問ね、未瑠ちゃん。では、教師採用試験のビデオを見せましょう」

藍がどこから取りだしたのかビデオテープをデッキに挿入する。再生された映像には榮太郎以外何人もの教師志願者が集まっていた。どこの国ともつかない妙な民族衣装風やら顔を覆面で隠したのやら『私は胡散臭いです』と看板を出してるような連中がいる中で、ごく普通のシャツ姿の榮太郎は逆に目立っていた。

『……では……吾輩が……このように一〇〇円硬貨をタバコで貫いて進ぜよう……』

やたらもったいぶった口調のインド人風が宣言の通り実行する。拓人の目から見てもあからさまな手品だが、ビデオの中の藍は『わーっ、すごいすごい』と本気で感心していた。

『単純なトリックだな。本職の手品師どころかパーティグッズの店で売ってる』

偽インド人の芸を榮太郎はあっさり見破り再現する。他の連中も同じだ。小道具に仕込んだトリックだけではなくストリングやマニュピレーションによるもの、カードを使ったメンタルマジックも残らず看破したのだ。

しかし榮太郎がやった行為を模倣できた者は誰もいない。文字通り何もない空中に萌えキャラのガシャポンフィギュアをいきなり出現させるという単純なものなのだが。

拓人には分かる。何の偽装もない。本物の魔法で物体を召喚しているのだ。

『はいはい。皆さんお帰りください。奇術や手品、まあ魔術までは名乗っても構わないけれど本物の魔法使いを自称するってのはまずかったな』

『すごーいっ、佐久間さんっ☆』

「魔法使い」たちが逃げ帰る中、スーツ姿の藍が榮太郎の手を取り飛び跳ねた。

「そう言えば……前に聞いた事がある」

ずっと黙っていた若奈が口を開いた。

「自称超能力者のトリックを見破ろうとする時、科学者は簡単に騙されるけどマジシャンはそうじゃないって」

『どういう事？』

ノートの文字で鈴穂が訊ねる。

「実験とか論文って、基本的に公正なデータが提出されているのを前提とするでしょ？それに学者って他人を騙す専門家じゃないから。他人の目を欺いて、あり得ない事が起きたように見せるのはマジシャンの方が得意だもの」

『同じ事ができるだけでトリックつて断定していいの？』

本物の魔法を日常的に目撃している鈴穂には当然の疑問だった。

「うん。だからマジシャンにできるのは『同じ事はトリックを使っても科学的に可能だ』って証明だけ。でも超能力者の方は再現不可能な事をやって見せないと『これは科学を超えた現象です』って胸を張れないわけ」

「的確な説明だ、十四屋若奈くん。で、実際に俺は他の手品師たちのトリックを見破り、連中には真似できない事を実行した訳だ。これを魔法と言わずに何と言おうか？」

「確かにその通りですけど……」

「ほーらね、すごい先生でしょ？」

「お誉めに預かって光栄です、理事長。わははは」

「本物の魔法使いを確保した以上、今回も大成功間違いなしよっ、藍ちゃん偉いっ」

藍と榮太郎が肩を組んで笑う。見た目だけは美男美女の名コンビなのだが、アクティブダメ特有の危険でマヌケなオーラが漂っている。危険極まりない二倍セールだ。

「こらーっ！　社長――じゃなかった！　理事長に近づくでないですっ！　あなたと理事長はあくまでも雇用者と被雇用者の関係っ！　智乃と社長の間の深い絆に横入りしてスキンシップを取るなど許されない事ですっ！」

背伸びした智乃が、手にしたマジシャン用ステッキで榮太郎の背中をぺちぺち叩く。

「うむ。理事長もいいが、君もなかなかの逸材だ」

「ほへ？」

いきなり真顔で見下ろされ、智乃が頭のてっぺんから出したような声を上げた。

「戸籍上は二〇歳なのに見た目は小学生っ！『このゲームの登場人物は全て一八歳以上です』という文言を実現した素晴らしい逸材！黄色い通学帽が似合おうと縦笛で『アマリリス』を吹こうとまぎれもない成人！　何という素晴らしさ！」

「ひいっ！　貞操の危機ですっ！　そんな事は許されないのですっ！　この智乃は身も心も完全に社長に捧げているですっ！　市場独占率一〇〇%、他社の介入は決して許されないのですっ！」

「うむ。そーやって怯えるところがまたいい」

ぱちこーんっ！

熱弁を振るう榮太郎の後頭部に、何かが命中した。余勢でへらへら美形顔が教卓に叩きつけられる。

「ご主人様。ほどほどにしてください」

いつの間にどこから現れたのか。漆黒のワンピースと純白のエプロン、そして頭にはフリルのヘッドドレス。手には長柄のモップ。クラシカルなメイドスタイルの上からも分かる調和の取れたプロポーション。そして、犬耳。

榮太郎の使い魔であり、黒犬獣の化身であるエーネウス・ザ・バージェストである。

「はっはっはっ、痛いじゃないか。エーネウス」

頭からだらだら流血しているのに榮太郎は満面の笑みで身を起こした。

「少しは慎むように申し上げているのです。ここにいる皆さんはご主人様のなさりように免疫がないのですから」

「うむ。ちょっとだけ自制しよう」

ちょっとだけですか――と言いかけた拓人の口が止まる。いきなり犬耳のメイドさんなんてモノが出現したのだ。一般人である玄や若奈、未瑠は平気なのだろうか。

「あの……玄くん、変な知り合いでごめんね」
「いいよ。ああいうブレーキ役がいるだけで、ターボ役がくっついてる姉貴より安心だ」
「安心って……安全装置はメイドさんなんだけど」
「前にウチの姉貴はメイド寿司とかメイド銭湯とかやったしな。あのくらい普通――とは言いたくないが、馴れた。大切なのは見た目より中身だ」
「あの時はわたしたちも着せられたのよね。エーネウスさんのってシックで素敵だな。ああいうのなら、もう一回くらい着てもいいかな？」
真面目でおとなしそうな若奈があっさり口にする。
「でも犬耳も着いてるけど」
「ボクもコレだし」
未瑠が自分のネコミミをちょいちょいと引っ張った。
「それにどこからともなく現れたよ？」
「ふっふっふ。いきなり現れるなどこの智乃にも造作もない事っ！　怪しげなワザで理事長の気を引き、お心を奪おうとしても智乃がいる限り絶対不可能なのですっ！」
そう言いながら、智乃は小さな身体をさらに小さく折り畳んで教卓の引き出しの中にするると収まっていった。まるでヨガというか、ほとんど変形ロボット玩具だ。
「ああいうのって唯さんもよくやったりしない？」
「そうそう。急にどこからともなく現れたりしてね」
女の子が進んでメイド服を着たがったりネコミミを常用していたりというのは、拓人の常識の中には無いパターンだった。
違う。何かが違う。「こっち」は常識と条理の世界ではなかったのか。
「さて、どうやら生徒六人は既に顔見知りのようだし、余計なオリエンテーションなどに時間を取られるのは無駄だな。さっそく授業に入ろうではないかっ！　まずは全員制服に着替えるように！」
「はいはーい、先生の言う事にはちゃんと従ってね。理事長も授業は見学するから」
という訳で男女それぞれ更衣室で着替えさせられたのだが――。
「姉貴っ！　何だ、これは！」
教室に戻って玄は藍に猛抗議した。自分の――男子の制服はさほど奇妙な物ではない。蝶ネクタイとインバネスは多少恥ずかしいが、それ以外はわりと普通のツーピースだ。
しかし女子のは違う。そもそも全然揃っていないのを制服と呼んでいいのだろうか。
四人が身に着けているのはそれぞれデザインが違う。うち二人に共通しているのはフリルひらひらパステルカラーのミニスカートと派手なステッキという点だ。未瑠だけは気に入ったらしくターンしてスカートを翻しているが、鈴穂と若奈は真っ赤な顔で裾を引っ張って少しでも露出を隠そうとしている。
「さ、さすがに高校生でこれはちょっと恥ずかしいよね」
若奈に言われて鈴穂は無言で頷く。
「うむ、見事な魔女っ子スタイル。やはり何でも形から入るのが基本だからな。魔法を使うためには魔法を使う格好をするのが一番」
「エータロー、これも魔女っ子であるか？」
タナロットが疑問を抱くのも当然だろう。彼女のはミニはミニでも豹柄でワンショルダーのワンピースだったからだ。似合っているという点では一番似合っているのだが。
「もちろん魔女っ子だ。シリーズの中でも傑作の誉れ高い一本に挟まれている上、元々ジャンルが全然違う原作をアレンジしちゃったせいもあって世間的な評価はいまいちなんだがな。八〇年代の魔女っ子アニメを語るのならば、アレはアレで見落としてはいかん。せっかくだから鈴穂ちゃんにこっちを着せてミスマッチな羞恥プレイを楽しむという考えもあったんだが、やはり最初は基本を押さえておくべきで――」
ずがごんっ！
後頭部にまた一撃。今度は横薙ぎの殴打で

はなく柄の先端での突きが入った。
「えーと、佐久間先生？　八〇年代って、おいくつなんですか？」
「はっはっは。男の歳を訊くのは野暮ってモンですよ」
藍の質問に榮太郎は胸を張って答える。ちなみにまだ流血中。見た目は二〇代半ばくらいだから、知らない人からすれば当人が生まれた頃のアニメという話になる。
「姉貴、言っただろ。人を雇う時はちゃんと履歴書を確かめろって」
「えー、でも書類じゃ人柄なんて分からないし。やっぱり人間味溢れるビジネスを目指すあたしとしては実力本位で採用するべきだと思うの」
「そりゃ履歴書にはこーいう人間性は現れないだろうけどな」
玄ががっくりと肩を落とす。
いいんですか？　その程度の追求でいいんですか？　あなたたちの目の前で今、とっても非常識な事が繰り広げられているんですけど――拓人は叫びを呑みこむしかない。
「さて、理事長」
榮太郎が手にした杖で藍を指す。
「魔法を学ぶためにはまずどういう訓練をしたらいいと思いますか？」
「お前はそれを教えるために雇われた身ですっ！　ちゃんとレクチャーしないで理事長に水を向けるなど職務怠慢にもほどがあるですっ！　解雇ですっ！　追放ですっ！　試用期間だから退職金も無しですっ！」
閉まったままだった引き出しから智乃が出てきて叫ぶ。
「いや。理事長が単なる帳簿上のやり取りに目を奪われ、教育の現場に無知であるのは問題っ！　自分の学校がどういうカリキュラムで何を教えるかを熟知してこそ真の学校経営者と言えるのではないか？」
「つまらぬ屁理屈ですですっ！　書類や経理は全部この智乃が預かるですっ！」
じゃあ藍は何をするんだ――と拓人は思う。
「まあまあ、智乃ちゃん。佐久間先生が言うのも一理あるし、あたしも興味あるから授業に同席してるんだしね。で、魔法の練習でしょ。えーと……どっかで男の子が二〇歳まで童貞だと魔法が使えるようになるって聞いたような」
「なななな……っ！」
拓人と玄の声がハモった。
「みゅみゅみゅっ？　タクトは二〇歳どーてーなのであるかっ？　桜少年なのであるか？　DTBであ……むぎゅっ！」
「タ、タナロットっ！」
慌てて口を塞ぐ。この文脈でその発言はつまり「拓人は魔法が使える」と肯定しているようなものではないか。
しかし拓人の狼狽は無意味というか不要だった。事情を知らない玄たちのグループは誰もタナロットの発言なんか聞いていなかったからだ。
「えーと……じゃあ玄にぃはあと一四年も我慢しなくちゃいけないわけ？　それは、ボクとしてもちょっと問題だなぁ」
「み、未瑠っ！　お前女の子が何言ってる！　そーいう冗談はやめろ！」
「そ、そうよ。恥ずかしい」
「じゃ、若奈ちゃんはそーいうのに興味とかないの？」
「そ、それは……。だけど、一人で考えてるのと人前で声に出すのは違うっていうか……」
「ほーら。やっぱり考えてるんだ」
「はっはっは。お嬢さん方の楽しい歓談が続いているようだが、残念ながらその方法では魔法は使えない。どっかの掲示板で生まれた伝説というか、ただの冗談」
どこに仕舞っていたのか。日の丸扇子を開いて扇ぎながら榮太郎が笑う。それをきっかけに、一応混乱は収まった。
「その方法じゃ魔法は使えないんじゃ、別な方法を考えなきゃダメね。えーと……じゃ、早口言葉なんてどうかな？」
「何たよ、それ。姉貴、本気か？」
「ほら。魔法って呪文唱えるんでしょ？　だったら正確かつスピーディに発音できるのっ

て重要だと思うの。あ、でも別に声に出すだけじゃなくて書いた物もいいのかな？　魔法陣とかお札とかを使うっていうのもマンガや映画であるし」

「そんな安直な話があるかっ！」

玄は容赦なくツッコむが、基本的には藍は正しい。言葉など既存のコード体系を利用するのは基本的な魔術制御だ。戦闘などでは高速詠唱ができる方が有利。一方で本質的には発声する必要がないという点も間違っていない。

「いやぁ、さすが理事長。慧眼です。魔法の基礎訓練に早口言葉は欠かせません」

それにしたって不可欠という訳でもないのだけど、魔法の実態をごまかすつもりなのか、榮太郎はにこにこと藍の肩を抱いた。

「理事長から離れるですっ！　しっしっ！　貴様のような不実で不埒な性獣は駆逐するですっ！　きっとあんな事やこんな事など、同性である智乃にはやりたくてもできないような行為を社長相手に目論んでいるに違いないですっ！」

犬でも追うように智乃が杖を振り回す。

「心外だな。そこまでの事は考えていないぞ」

ぱんっ！　ぱんっ！　ぱぱぱんっ！

カンフー映画の組み手のように、智乃のステッキを榮太郎は片手で軽やかに捌いてみせる。

そう言えばいつも萌え萌え言っててギャルゲーやアニメの女の子に入れあげている榮太郎だけれど生身の女性相手の恋愛というのはどうなのだろうか。エーネウスはさておき、ミヤビやシンクラヴィアもいじって遊んでるだけっぽいし――そこまで考えて一瞬頭が真っ白になる。以前、自分が女性化した時の事を思い出してしまったのだ。

「では、みんな繰り返すように。生麦生米生卵生麦生米生卵っ！」

「簡単である。二種類だけでなくもっと言えるのである。生首生脚生魚なのである」

「違う違う。生が付く言葉を並べるんじゃなくて、同じ言葉を繰り返すの」

「みゅ？　では生娘も違うのであるか？」

「そんな言葉どこで覚えるの！　ごめんね。ほら、日本語に不慣れっていうか」

きょとんと首を傾げるタナロットを注意して、玄たちにも詫びる。

「別に気にしなくていいよ。ウチの姉貴なんて純正日本人なのに日本語怪しいし」

「ほら。体育祭の時に来てたアメリカの人とかもすごかったよね」

「ああ、ケイト・プリューワーね。うんうん」

本当ですか？　本当によくあるパターンなんですか？　普通の現実ってもうちょっと地に足が着いたものじゃありませんか？

叫びたい気持ちを拓人は押さえこんだ。

「なまむぎなまもめ……ありゃ？」

「なまぶ……じゃねえや。もう一度」

「なばぶびなばぼべなばばばぼなのである！」

いざ始まってみるとみんな苦労している。

「ほれほれどーした。生麦生米生卵生麦生米生卵生麦生米生卵っ！　東京特許許可局！　隣の竹垣に竹立てかけたのは竹立てかけたかったから竹立てかけたのだっ！」

『生麦生米生卵生麦生米生卵生麦生米生卵。東京特許許可局。隣の竹垣に竹立てかけたのは竹立てかけたかったから竹立てかけたのだ』

榮太郎のスピードと正確さに対抗できるのは鈴穂だけだった。滑らかに読みやすい文字でややこしいフレーズを誤字もなく書き連ねていく。

「むーっ、ずるいのである。書くのだったら舌を噛んだりしないのであるるっ！」

拳を振り上げるタナロットは大きくベロを出していた。しっかり噛んだ跡がある。

「でもさぁ。書いてそれだけのスピードってのはすごいよ。字も上手いし。ボク、くせ字だから教えてほしいくらい」

未瑠に誉められ、鈴穂は照れくさそうにうつむいた。普通の人は書くより喋る方が速い。だから速記術なんてテクニックもあるのだ。

しかし鈴穂は筆談で他人と滞りなくコミュニケーションが取れるようになっている。身近すぎて拓人も意識していなかったが、特技や芸と呼んで差し支えないレベルだ。

「うむ、見事だ。第一講、早口言葉はこれで充分と言えるだろう」

「え？　これで？　やっぱあんたインチキなんじゃねえの？　姉貴がバカやるのはいつもの事だけど、騙してつけ込もうとかいう腹なら承知しねえぞ！」

一応は律儀につき合っていた玄が栄太郎を睨む。身長は同程度だが細身で飄々とした栄太郎に比べて、玄の方は肩幅が広めで胸板も厚い。

「玄ちゃんっ！　おねーちゃんが認めた人よ？　信じられないの？」

「姉貴を信じるくらいなら空飛ぶスパゲティモンスター教を信じるわ！」

「はっはっは。怖いなぁ」

笑いながら、栄太郎はパチンと指を鳴らした。

くるん――玄の身体が空中で一回転して背中から着地する。

「痛てて……。何のトリックだ？」

「て言うか、本当に文字通り指一本触れてないように見えたんだけど」

反射的に身構えていたのは未瑠だ。どうやらこちらに格闘技の心得があるらしい。

「だから魔法なのよ」

「いーやっ！　そんなのはないっ！　何かのトリックに決まってる」

「あ、あの玄くん」

慌てて拓人は玄に耳打ちした。

「魔法じゃないのは本当だけど、先輩も悪気がある訳じゃないんだ。悪気がないけれど悪人よりも酷い事をするっていうか人に迷惑かけても何とも思わないっていうか……」

事実を話す訳にはいかないので、どうしても微妙にツイストした説明になってしまう。

「ん……嘘じゃないんだろうけど」

「それにしても……玄くんってお姉さん思いなんだね」

拓人は一人っ子だ。事情があって従姉妹の鈴穂とは兄妹同然に育ったが、それでもやはり本物の兄弟姉妹というのとは違う。正直憧れるような気持ちもある。

「バ、バカっ！　そーいうんじゃねえよ！　あいつをほっとくと周りに余計な迷惑がかかるから、それくらいなら身内のオレが我慢した方がマシだっていうか……」

赤い顔でそっぽを向く。

「はいはぁーい。そこ、生徒同士の私語は慎むようにー　玄ちゃんも先生に暴力とか揮っちゃダメよ。正式開校前に校内暴力なんておねーちゃんは悲しいわ。じゃ、次はあやとりね」

「……早口言葉の次はあやとりか？　どーいう基準だ、それはっ！」

「ほら、魔法使いって呪文唱えるだけじゃなくて指で印とか結んだりするでしょ？　それにあんな風にただの紐がいろいろ形を変えるのって魔法っぽくない？」

「ねえよー　いっさい魔法とは無関係！」

玄はあっさり否定したが、これも大筋では正しい。印も呪文同様多用されるし、位相幾何学の形態変換はさまざまな術式で応用されている。水町藍という女性、素人のフリをしてるが実は魔法の基礎理論を理解しているのではないか。まさか栄太郎が教えたとか。

「みーっ！」

で、さっそくタナロットが全身がんじがらめになっていた。

「これは難しいのである。日本人は伝統的に一人SMを嗜んでいるのであるか？」

『そうじゃないってば』

鈴穂も指の間に糸を張った状態では筆談が難しい。この課題は若奈が一番だった。

しかしもっと上手い人もいる。

「ふふんっ、こんな事は智乃にかかればお茶の子さいさいですっ！」

「初めてですけどこれを――こうすればよろしいのですか？」

どういう展開なのか智乃とエーネウスの間であやとり合戦が始まっていた。

「智乃ちゃん、頑張れーっ！」
「ふふふ。ウチのメイドだって有能さでは負けんぞ。何でもできる」
藍と榮太郎による部下の有能さ自慢らしい。
『こっちの気持ちに気付いてるはずなのに優柔不断っていうか。はぐらかされてるようなところがあって』
「それでもわたしたちよりマシよ。こっちのはもう恋愛に最初から関心がないみたいだし」
「うみゅみゅ。スズホは卑怯なのである。ジャングルで孤島なのである。幼なじみ特権を濫用しているのである」
「でもさー。ボクも幼なじみだけど、逆に妹扱いしかされない事もあってねー。コレはコレで苦労なのよ、ウン」
向こうでは女の子四人が妙に意気投合しているみたいだし。
そんなこんなでクロスワードパズルやら反復横跳びやら階段ダッシュやら、さすがに役に立つのか立たないのか分からない訓練をひと通りやった後、榮太郎が宣言した。
「よーしっ！　厳しい訓練によくぞ耐えた。我が精鋭諸君っ！」
「いや。厳しくも何ともないんですけど」
「後は俺から教える事は何もないっ！」
「これで終わりかよ！」
玄の疑問も当然だ。これで魔法が使えたら誰も苦労しない。〈学園〉なんて必要ない。
「残るは実戦っ！　即ち極限状態に諸君を追いこんで秘めた力の解放を期待するのみ！」
「ひょっとしてアレ？　イヤボーンって奴……って、あれ？」
未瑠が訊ねるのと同時に鈍い機械音を立てて教室そのものが下降していく。
「まるごとエレベーターか？　姉貴、またこういう無駄遣いして！」
玄が抗議する間にも部屋は下がっていく。地下を五階分も下っただろうか。
「わぁ……」
「ふみ？　誰かが作った疑似空間であるか？」
タナロットが奇妙な感想を漏らすのも無理はない。降り立った先に広がっていたのは荒涼たる岩山や怪しい古城、鬱蒼とした森などが連なる風景だったからだ。ただし圧倒されたのは一瞬だけ。冷静に観察すると天井や壁があり、城も二階建ての大きさしかない。三日月はプロジェクターの映像だ。
「……にしても大がかりだな。姉貴、こりゃ何のつもりだ」
「魔法学校なら実習設備も必要でしょ？　ムードある方が生徒のやる気も出ると思って」
「いつの間に作った？　ここは購入するまでただの雑居ビルだったはずだぞ」
「建設会社の人には榊一郎先生の一四倍くらい働いてもらったかな？　船頭多くして船山に登るって言葉もあるし、ポーランド人が一〇〇人いれば電球だって取り替えられるわ。力を合わせれば不可能なんてないのよっ！」
「それは死ぬ。十中八九死ぬ。人間に耐えられる労働量じゃねえ」
ことわざもエスニックジョークも誤用して胸を張る藍に、玄はぽつりとツッコミを入れた。
「先輩がやったんですか？」
「違う。俺は手出ししてないよ。普通の突貫工事。じゃ、後は生徒たちで頑張ってくれ」
小声で訊ねた拓人に答え、榮太郎は藍や智乃と一緒にエレベーターで上がっていった。
「え？　ちょ、ちょっとぉ！」
「みんなの課題は、そこに現れた敵を魔法とか使ってやっつける事だからねー。佐久間先生が極限状態を用意してくれてるからー☆」
『敵？』
「多分ゾンビとかゴブリンとかじゃないの？　こういう舞台設定なんだし」
「甘いよ。藍ねぇなら雑魚とかじゃなくていきなりドラゴンとか出してくるって」
「む？　ドラゴンであるか？　それなら楽勝なのである」
「ははっ。頼もしいね」
腕をぶんぶん振り回すタナロットに、未瑠が笑う。まさか本当にドラゴンとかとも顔見知りだとは思ってもいないだろう。

『さて、生徒諸君』
どこかに仕掛けられたスピーカーから栄太郎の声が聞こえてきた。
『君たちが戦うべき敵は――これだっ！』
「ばんがおーっ！」
宣言と同時に床が開き「それ」は現れた。
二メートル近い長身。古代ローマの戦士を黄金で鍍金したような輝く肉体。目も口もないフェイスガードに荒々しくたなびく鬣。
「アニレオンかっ！」
「玄くんも知ってるの？」
「ああ、毎週見てたからな」
一歳違いなら玄も知っていて当然か。拓人が子供の頃にファンだったヒーロー番組『超愛戦士アニレオン』の主人公だ。
『ちなみにそいつ、本編と同じ能力に設定してあるからなー』
『みんな頑張ってね～』
「げ」
拓人と玄は顔を見合わせた。見ていた子供ならみんな知っている。アニレオンは強い。とにかく強い。無茶苦茶に強い。苦境から逆転する不屈の闘志よりも圧倒的な力で敵を撃滅する痛快さが魅力のヒーローなのだ。
ズガンっ！
デモンストレーションのつもりか、アニレオンのパンチが足元の岩盤を――実際にはコンクリートで模造されたものだが――割り砕く。
「何でコレなんだ！　魔法使いの敵っつーたらドラゴンとか魔王だろ！」
『玄ちゃん、さっきの若奈ちゃんの解説覚えてる？　トリックを見破るのは奇術師』
「それがどーかしたのかっ？」
『佐久間先生に聞いたよ。アニレオンって科学的に無敵のヒーローなんでしょ？　だったらこれを倒せば科学じゃ無理な事を実行した＝魔法の力って事になるじゃない』
「何で姉貴はそーいう無駄なところだけ屁理屈通すっ！」
風を切るアニレオンの正拳をかわしながら、玄は絶叫した。
「みゅみゅみゅっ！　任せるのであるっ！」
ぶんぶんパンチを振り回しながらタナロットが突進する。
ばごーんっ！
カウンター気味に繰り出された裏拳が小さな身体を弾き飛ばした。
「危ねえっ！」
玄が飛び出し、タナロットを庇う。キャッチした勢いで背後の壁に激突する。
「ゲン、ありがとーなのである。しかし大丈夫なのである」
「バカっ！　女の子が無茶すんじゃねーよっ！」
「水町くんこそ無茶しないで！」
「こーいうのはボクの領分っ！」
勇んで飛び出したのは未瑠。魔女っ子ミニスカートを翻してハイアングルの回し蹴り。
しかし、敵は避けも受けもしない。女の子のキックなんて通用しないのだ。
ぶんっ！
「ひゃっ！」
黄金の脚から繰り出される前蹴りを未瑠はスウェイ・バックで回避する。
「こいつ、パワーだけっ！　技はあんまりないよ」
「そんなところまで原作通りかよ！」
本物のアニレオンもアクションはパワー系だった。
『どうしよう？　リボン解けば……』
「ちょっと待って」
手を開き、鈴穂が出したノートの文字を覆い隠す。あのアニレオンは多分栄太郎が魔法で作り出したものだ。一種の簡易ゴーレムか、幻影と力場を組み合わせて実体のように振る舞わせているのか。いずれにしても鈴穂の〈魔力侵奪能力〉を解放すれば停止、最悪でも弱体化できる。
しかしその手を使えば玄たちに魔法の存在を知られるし、混乱も広がる。記憶操作は最後の手段だ。
「先輩も何を考えてるんだ？」
魔法の事は一般人には秘密――その大原則

は栄太郎だって充分理解しているし、身内相手には思いっきり羽目を外しても土壇場の一線は守る人だと思っていたのに。

タナロット、未瑠、それに玄の肉弾派二人が入れ替わり立ち替わりアニレオンの相手をしているが、気を逸らすのだけで手一杯だ。

「みゅっ！」

タナロットのパンチも通じない。避けた向こうのパンチが壁を砕く。

「死ぬっ！　あれ当たったらさすがに死ぬよ！」

悲鳴を上げているのは未瑠だ。当然の感想である。

いつまでもアニレオンと戦い続けている訳にはいかない。栄太郎の手加減に期待するべきか。それとも鈴穂の能力を――。

「本物と同じ能力のアニレオンなんてどーやって作ったんだよ」

『すごいでしょー。佐久間先生の魔法だよー☆』

「魔法なんてあるかっ！　トリックだトリックっ！」

スピーカー越しに玄が姉に抗議する。

「そ、そうだよね。トリックだろうけど、先輩が作ったのには間違いないと思うけど」

一応魔法の事は否定しなければならない立場だ。何とかフォローしてみる。

「……そうだ、拓人さん！　あいつって凝り性か？」

「え？　凝り性って言えばまあものすごい凝り性というかこだわり派というか――」

「だったらそいつが作ったアニレオンは、限りなく本物に近いよな？」

「多分そうだけど……そうかっ！」

玄の言いたい事を理解して、拓人も急いでタナロットと鈴穂に耳打ちする。

鈴穂、タナロット、若奈、未瑠――四人は何の構えもなくずんずんと真正面からアニレオンに近づいていった。

『正義の味方が無抵抗な女の子を攻撃しちゃまずいですよね？』

「うみゅみゅ。そうである。マハトマとは偉大な魂という意味なのである」

「悪と戦うのが使命だけど、わたしたち悪い事してないし」

「そーだよねー」

動きが止まる。

思った通りだ。あのアニレオンは原作をモデルに単純な行動パターンを組みこまれただけの魔法的自動機械に過ぎない。だったら弱点も原作と同じではないか。

拓人や玄には周知の弱点――本質的には気弱で善良な事。戦闘力が圧倒的な反面微妙に気弱な事。そこを突けば。

「だりゃあああああっ！」

アニレオンが女の子たちに気を取られている間に背後に回った玄が攻撃を仕掛ける。それを合図に、タナロットと未瑠も飛び出す。

「〈魔弾〉！」

鈴穂のプラカードがブラインドになって玄からは死角になる位置で、拓人は基本的な攻撃魔法を放った。呪文は小声、エネルギーそのものも不可視にアレンジする。

不意をつかれたアニレオンは反応できない。原作でも唯一の弱点だった、龍で言えば逆鱗にも当たる僅かなポイントへの玄の一撃とタナロットのパンチ、未瑠のキック、そして拓人の魔法が直撃する。

二、三度痙攣した後、アニレオンはその巨体を横たえた。

「あはは……ガキの頃のヒーローに勝っちゃうって、何か不思議な気分だな」

「うん……。絶対に無敵だと思ってたんだけどね」

サムアップする玄に拓人も笑顔で答える。

『あっはっは。負けちゃったなぁ』

『やっぱり無能ですっ！　解雇するですっ！　とっとと放逐して、二度と理事長に近づくでないですっ！』

スピーカーの向こうでは栄太郎が笑い、智乃が非難している。

『でも、結局魔法でやっつけた訳じゃないよね』

不思議そうな藍の声が聞こえた。どうやら

彼女も拓人の呪文には気づいていない。
『ただの暴力で同じ事ができるなら、苦労して魔法覚えなくてもいいって事にならない？』
「その程度でやめるなら、最初っからやるなーっ！」
玄の抗議ももっともである。
『うむ。まさしくその通り。魔法なんて使わなくても何とかなるもんです。よくぞそこに気づきました、理事長！　もう俺が教える事は何もないっ！』
『という訳でコレは引き取ります。どうもお騒がせいたしました』
げぎんっ！
エーネウスの冷たい声と打撃音。それっきりスピーカーから榮太郎の言葉が聞こえてくる事はなかった。

「という訳で〈藍ちゃんのマジシャンズ・アカデミイ〉開校は中止になりましたとさ」
数日後の〈学園〉。寒河江教授の前で榮太郎は報告する。隣には拓人も一緒だ。
魔法が役に立たないと思った藍が急速にやる気を失い、智乃が一所懸命に「役立たず」の榮太郎を追っ払ったおかげで事業計画はポシャってしまったのである。
「ご苦労……と言いたいが、佐久間準教師の独断行動は誉められたものではないな」
「個人的興味があったんで。ま、結果オーライって事で勘弁してください。後は記憶をいじったりする必要ないでしょ？　あいつらにとっちゃあの程度は日常茶飯事みたいだし」
榮太郎は笑って右手をひらひら翻す。記憶操作の魔法は万全ではない。どうしても細かい矛盾が残るので使わないで済むならそれに越した事はない。納得したのか諦めたのか、寒河江教授は大きくため息をついた。
地下ダンジョンは白和院財閥が買い上げ、テーマパークとして改装営業するのだとか。
「強硬意見を主張していた連中も納得はするだろうから、確かに綺麗に収まったと言えば言えるのだがな」
「ま、ひとつはっきりしてるのは〈学園〉も安泰じゃないって事ですな。自分たちだけが崇高な挑戦者とか思ってると足元すくわれますよ」
「？」
「分かるだろ、拓人。不可能を可能にする手段は、魔法に限らないって事だ」
魔法は使えなくても科学力で、経済力で、あるいは純然たる創作能力や体力で、人間は不可能に挑み、可能にする。
人間を月に到達させようとする事。昨日まで不治だった病の治療法を追い求める事。白いキャンバスの上に無から湧き出した己のイメージを定着させようとする事。何の賞賛も栄誉も報酬もないのにひたすら階段を突っ走ってコンマ一秒でもタイムを縮めようとする事。これらを試みる者と魔法使いたちの間にはどれほどの差異があるのか。
魔法は単なる手段のひとつでしかない。それを選ぶのは趣味の、あるいは境遇の問題なのだ――拓人はそれを知っている。否、異なる運命の中で経験さえしている。人が不可能を超越しようとするのは、必然なのだ。
玄たちにも、拓人が知っているのとは違う日常があって常識がある。魔法はなくても信じられない事なんていくらでも起きる。いきなり地下にダンジョン建設したり、ネコミミ常用してる女の子とタナトロットが談笑したり、鈴穂が初対面の相手とうち解けたり。
「ま、普通の意味では役に立たない事に入れあげてこだわり、実現する。考えてみりゃ〈学園〉にオタクが多いってのは必然だな」
「そうやって自分を正当化しないでください」
この人はどこまで本気で、どこから予定のうちだったんだろうか――毎度の事ながら拓人は疑問に思うのだった。

『アニレオンなんですけど。』おしまい

Macademi Gallery

まかでみ・ぎゃらりぃ

illustrated by BLADE

「まかでみ」でおなじみBLADE先生の画集
「ZEALOTIC BLADE ZERO」は、もう見てくれたかな？
画集ではページ数の制約で涙をのんで割愛した「まかでみ」イラストを、ここで大掲載だ！

初出：『まかでみ・らでぃかる1』口絵イラスト

初出：まったみっく☆るこ　同・ラフトより

初出：まったみっく☆るこ　同・ラフトより

セイボヲ マッサツ セヨ。

P.118 初出：ましゅんず あかでみい II 口絵イラスト

初出：ましゅんず あかでみい II

まだまだあるゾ「まかでみ」成分200%増量（当社比）のBLADE先生初画集「ZEALOTIC BLADE ZERO」も絶賛発売中

まじしゃんず・あかでみい
The Magiclan's Academy

3倍オモシロく、3倍ジャストテイス!!
これぞ「あかでみ」流シミュレーションRPGだ★

メーカー　エンターブレイン
対応機種　PS2
発売予定日　6月7日(木)
価格　7,140円(6,800円+税5%)
ジャンル　MM-SRPG
（萌え萌えシミュレーションRPG）
CERO　A全年齢対象

© 2002 Ichiro Sakaki PUBLISHED BY ENTERBRAIN INC.
© 2007 ENTERBRAIN,INC.

6月7日発売!!

面白ければ許されるのか!?
許されるんです!
萌えるならそれでいいのか!?
いいんです!!
原作の魅力+αを
詰められるだけ詰め込んで、
ついにPS2ゲームでお届けなのである!!

シミュレーションRPGなんですけど。

ファミ通文庫で大人気「まじしゃんず・あかでみい」が満を持してついにゲーム化！　ドタバタあり、愛と笑いと感動あり、そしてもちろん「萌え」アリアリの「萌え萌えシミュレーションRPG」でお届けなのだ！　榊一郎先生×BLADE先生の原作タッグ、さらに豪華声優陣フルボイスで展開されるゲームオリジナルストーリーにオリジナルキャラクター（美少女！）も登場して、これはもう何か起きないわけがない！

〈学園〉がなんだか一大事なことになってるんですけど。

〈学園〉の量子コンピュータ〈フィロソフィア〉が何者かによってハッキングされ、学園の入り口「イズモ」が機能停止となった。〈学園〉の危機を察知したエーネウスから、拓人たちに調査の依頼が入るのだが、風紀委員の御狩谷はるかに侵入者と判断され、いきなり戦闘突入なんですけど!?

沈黙する「イズモ」。一体誰の仕業　？

いきなり戦闘をふっかけられ、どうする!?

学園に何が起こったのか!?　侵略を企てた存在の目的とは……!?

ノルボイスの会話シーンに加えて、要所ではBLADE先生描き下ろしのイベント画面が満載！　下にその「ほんの一部」を紹介しておこう。もっと萌えたい人はズバリ、プレイあるのみ!!

さらにBLADE先生描き下ろしイベント画多数!!

一致団結で戦闘なんですけど。

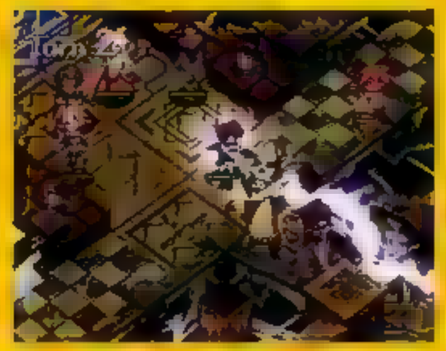
プレイヤーは各マップでの出撃キャラを最初に決め、戦闘を展開していくことになる。各キャラそれぞれに特徴があるので、注目して、有効に活用していきたい。

序盤のうちは戦力が心もとないので、慎重に。シナリオが進めば仲間も増え、選択の幅も広がってくる。

次のページで紹介する「萌え精霊」の存在も見逃せないぞー

出撃キャラ選択。基準は実用？　愛？　萌え？

タナロットは接近戦が得意。迫る敵は殴るのである。あるいは接近してボコるのである



拓人の持ち味は魔法攻撃。広域攻撃も使えるので敵の動きを見て効果的に仕掛けよう。

主要キャラONE POINT

●羽瀬川拓人

（声　小橋達也）

HPと防御力が低めなので、最前線に出しすぎは危険。魔法を有効に使って攻撃しよう。

●タナロット

（声　斎藤千和）

HP攻撃力が高め。前線に出して、接近戦でガンガン敵を蹴散らしていこう。

●羽瀬川鈴穂／鈴果

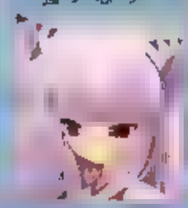
（声　新谷良子）

「乙女分裂」を習得するまでは非力。序盤は回復役に徹することになるかも。

●ミヤビ

（声・矢野明日香）

「迷宮倉庫」をクリアすると仲間になる。攻撃力はタナロットに次ぐ心強い味方。



●シンクラヴィア

（声　佐藤利奈）

ミヤビ同様、迷宮倉庫」クリア後仲間に。攻撃が多彩でオールマイティなキャラだ。

●エーネウス

（声　たかはし智秋）

アイテム使用でちょっとだけ戦闘に参加してくれる。しかもこれがめっちゃ強い！

●佐久間榮太郎

（声　寺島拓篤）

戦闘以外でおいしいところ取りの人。終盤にえきなポイントを握る登場をするらしい。

魔法倉庫で萌え精霊なんですけど。

本編マップとは別に用意されているサブマップ「魔法倉庫」。ランダムで300以上存在するこのマップでは、レアアイテムに加えて「萌え精霊」をゲットすることができる。

かわいいだけじゃなく、しっかりパーティの戦力になってくれる萌え精霊たち。戦力に不安を感じたときも、そうでないときも、ぜひ「魔法倉庫」に寄ってみよう！

萌え精霊は50体以上。戦力も萌え魂も満たします。

アイテム合成で愛の結晶なんですけど。

このゲームには、レベルアップという概念が存在しない。魔法を除き、基本的にキャラは、マップクリアによって入手できる各種アイテムの装備によって強くなるのだ。

さらに、これらのアイテムを「合成」することによって、より強力なアイテムを産み出すことができる。

何ができるかは　試行錯誤の末でのお楽しみ！

たとえば♥

金塊
ねこみみみ改　→　ねこみみG

琥珀
■■■■　→　サンバイザー

きれいな砂
再行動試薬　→　衝撃の真実

これ以外にも
いろいろありますのよ～

こんな萌え精霊の皆さんがお待ちです！

ベノムスティング
レイニーデイジー
熊猫包娘
アメビス
キュービ
ヴァルキリア
アルテミスアイズ

初回特典でスティックポスターが4本セットがもらえる！

URL　http://www.enterbrain.co.jp/game_site/MA/

戦う美少女総力特集!

FILE.01 美麗☆絢爛最強乙女戦記

鋼鉄の白兎騎士団

著／舞阪 洸　イラスト／伊藤ベン

日頃からあられもない姿で猛特訓！

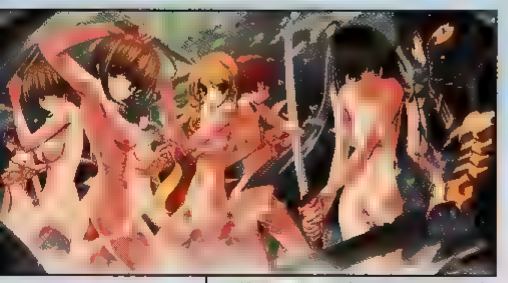
麗しき先輩白兎たち。だが仲間同士で命を狙い合うことに

『鋼鉄の白兎騎士団』これまでの歩み

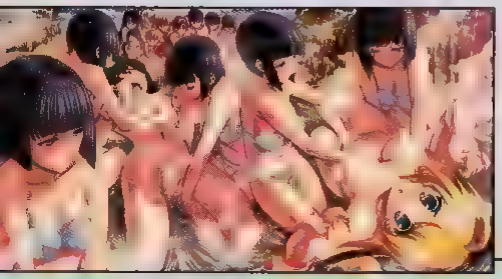
いまだ神々の居た残滓が残る世界、エスペリテ・ウモルの一角バスティア大陸。主人公ガブリエラは、亡き母への誓いを胸に、誉れ高き『鋼鉄の白兎騎士団』への入団を目指していた。侍女のレオチェルリや大貴族の令嬢ドゥイエンヌ、身体能力に優れたジアンなど同期の受験生とともに試験に挑戦したガブリエラは、見事難問を突破し合格を果たす！

しかし、問題児ばかりの彼女たち『雛小隊』は、入団早々騎士団を揺るがす陰謀に巻き込まれていく。団員が殺害され、副団長のレフレンシアさえ命を狙われる危機に、ガブリエラが導き出した首謀者は――何と、団長のマリエミュールその人であった！誰が敵で誰が味方かわからない中、ガブリエラの奇策により、反乱分子であるシギルノジチ派を一掃することに成功した白兎騎士団。結果、団長は降伏の上自害、内乱は収拾されたものの、団員の半数と金庫の全てを失ってしまう。事態を憂慮した団長代理レフレンシアの命により『遊撃小隊』に任命されたガブリエラたちは、寄付金集めに諸国行脚に旅立ったのだが……。

密かに陰謀を巡らすジギルノジチ一派

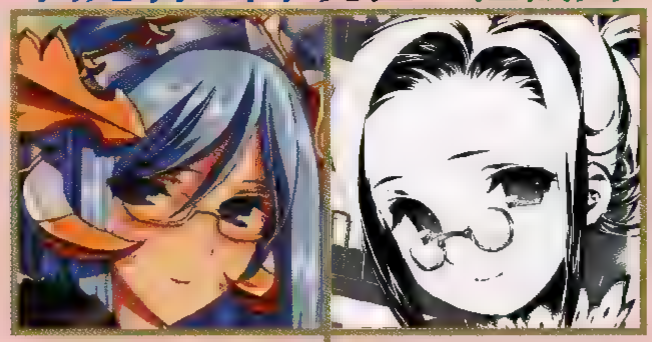


ハダカでも、一歩も引かないのだ！



旅先でガブリエラたちを待っていたのは……!?

白兎騎士団 現在の組織図



団長代理
レフレンシア

副団長代理
マクトゥシュ

番隊
（一番隊～五番隊）

庶務分隊

救急分隊

特務分隊

警邏隊

小隊長 ドゥイエンヌ

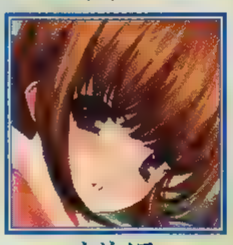
主人公 ガブリエラ

ジアン

アフレア

レオチェルリ

マルチミリエ

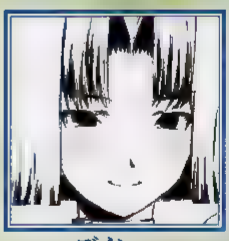


セリノス

ノエルノード

雛小隊改め 遊撃小隊のメンバーを紹介!

ウェルネシア



デイレィ

第Ⅳ巻までででは明かされていない、ガブリエラの母エリエオラとは!?

気になる 毎回巻頭で描かれているガブリエラ戦役の行方は!?

『鋼鉄の白兎騎士団V』は 2007年秋発売予定!!

FILE.02

戦嬢の交響曲（せんじょうのシンフォニア）

築地俊彦が描く！壮大なる乙女たちの戦い、第二楽章開始！

著／築地俊彦
イラスト／赤賀博隆

第1巻 雪風との出会い

普通の男子高校生・敷波佑鹿の転校した先は、なんと三瀧女子高等学校！　驚く間もなく、霊機と呼ばれる怪物に襲われる佑鹿だったが、長大な日本刀を構えた少女・香椎雪風に命を救われる。実は三瀧高校は、謎の生命体・霊機を倒せる唯一の手段、思春期の少女だけが持つアニムス」を武器として戦う少女を養成する機関なのであった。しかも佑鹿は、無口で無愛想な雪風のパートナーとなってしまい…

孤独な戦いを続ける雪風だが……

そして第2巻 雪風の妹、登場！

最新巻 好評発売中！

寄宿舎同士の対抗戦が行われることになり、章義舎からは、佑鹿・雪風たちの班も参加することに。一方、敵となる寄宿舎チームには雪風の双子の妹・榛名と、葉島野分がいた。姉妹で闘うことになった2人だったが、なぜか榛名は雪風にべったりと付きまとう。また、野分は佑鹿に向かって「雪風と一緒にいると死ぬぞ」と忠告するのだった。果たして姉妹同士の勝負の行方は!? また佑鹿は雪風の支えとなれるのか……!?

佑鹿と雪風2人の関係は……!?

ラブコメ風特別短編
FBOnlineにて公開中！

雪風と佑鹿が鍋パーティ!?

戦嬢の狂詩曲（ラプソディ）

章義舎から道沿いに、二瀧池へと向かう。

しばらく歩いていると、湖のような水面が目に入ってきた。

二瀧池はかなりの面積を誇っている。貯水と水害防止の人工池で、設計をミスって大きくしてしまったらしい。そうなると逆に活用したくなるのが人間というもので、ボートに乗ったり釣りを楽しめるようになっていた。

池の縁、というか湖畔に、バーベキューのできるスペースがある。草が刈り取られていて、レンガやコンクリートブロックが置いてあった。

適当な場所を選んで荷物を置く。まったく人がいないわけでもなく、遠くで2組が同じことをしていた。

佑鹿はブロックを使って、かまどを作った。風通しを良くし、倒れないようなものにしなければならない。

炭と古新聞を入れて、点火の準備。

「……ありゃ」

彼は袋の中を見直した。

「まじいな、マッチ忘れてきた」

ポケットも探ったが、やはりない。

「雪風、ちょっとここにいてくれ。マッチ取ってくる」

彼女は黙ってマッチを差し出した。

「使え」

「……わりい。なんで持ってんの？」

「別に」

佑鹿が用意したものと違うから、自分で持ってきたのだろう。

「準備がいいんだな」

「お前が忘れすぎる」

「そういや紙コップも……」

「ある」

彼女の持った袋の中に、用意されていた。

やけに手回しがいい。よく見ると、一通りの準備はされているようだ。無関心だったから来たくないのではとも思っていたが、そうでもなさそう。

「……お前、ひょっとして、楽しみにしてた？」

（本文より一部抜粋）

x6suke
とりしも
カヅキレン
オカアサハ

「狂乱家族日記」4コマ劇場

ファミ通文庫の人気絵師たちが、「狂乱キャラ」で4コママンガに挑戦！

とりしも先生の月香、カヅキ先生の優歌、オカアサハ先生の千花、
そしてx6suke先生は凶華＆風火ネタで大爆笑!?
本編ではけして見られない人気キャラたちのあんな姿やこんな姿が満載！

イラスト／x6suke ©Akira

大正解

狂乱クイズ
イキナリ王者決定Q
また セットまで
作って…
おうか
ゆうか

いいですか凶華
本編じゃ雷蝶やら
宇宙人やらで
大変なこの時期に
ふざけてる余裕は……
くど
くど

では第一問——
凶華!!
人の話を聞きなさい
ガタッ!!
正解!!!
おうか

〝全知全能で宇宙一の
美少女と言えば!〟
正解は凶華様だぁ!
さっぱり
スゴイよ〜
いや、
あのですね…
ゆうか

大回転

狂乱家族サービス
ルーレットスタート!
ピピピピピ…
いつのまに…
おうか
ゆうか

ペカーン
凶華さまの
家事肩代り
できました!!
凶華様の家事を
全部肩代わりっ!

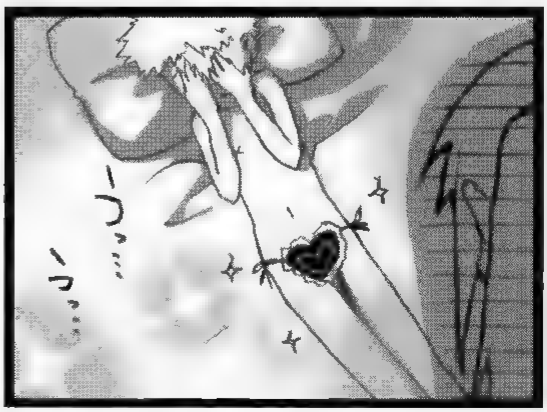
え?
する方?
うん、
する方

乙女決戦

無理強いはよくないけど
常にアプローチは
しておくべきよね♥
いつか女の子のよさに
また目覚めるかも
しれないし
モゴ
じたばた

銀一さんのために
カワイイ下着つけて
あげたの
ステキ
でしょ？
ぬぎ

さぁ
銀一さんも
ぬぐわよ！
ぶばば
いやーアアア
犯されるっ
すぽぽぽ


ーっ…
っ…

乙女対決

何で私よりかわいい
下着つけちゃってんの
かしら……
がく
がく
エヘ♥
え……
普段着よぅ

何よ私だって一生懸命
かわいいの選んだのに……
銀一さんのバカァ！

ごめんなさい
千花ちゃん……
アタシので良かったら
好きなの一着あげるから

ばち
ちんがあああっ!!
あいたっ

乙女日常

あれっ銀一さん？
近くまで来たから迎えに来ちゃった♥

誰ですかその男
どどどど
お姉さまガメェエエ!!

私達のお姉さまを守るのよォォ!!
えっ？
わっ
キャ

わっしょい
わっしょい
ワアアアア

乙女発案

モテモテね千花ちゃん
ぼろ
ええ……最近はホントにレズさんもいて困るのよ……

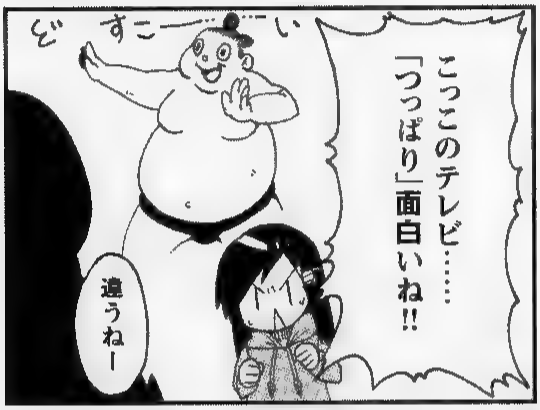
……ん？
レズさん……

そうだわ！女の心の銀一さんがレズさんになって
それで私を好きになればいいのよ！

ややこしい上に間違ってる気がするわ千花ちゃん……
それでいいの

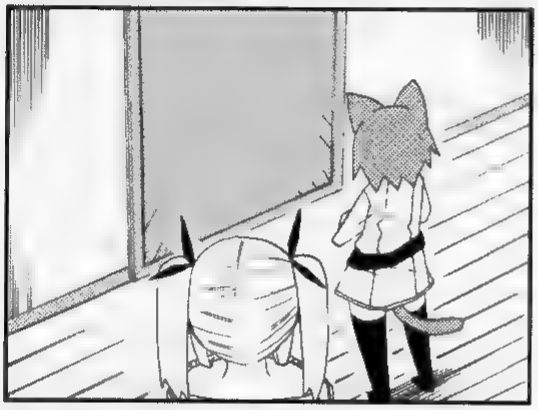
狂乱優歌小日記 壱

狂乱優歌小日記 弐

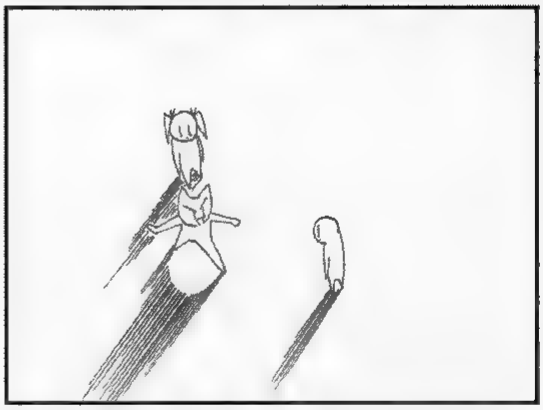


狂乱優歌小日記 参

狂乱優歌小日記 四

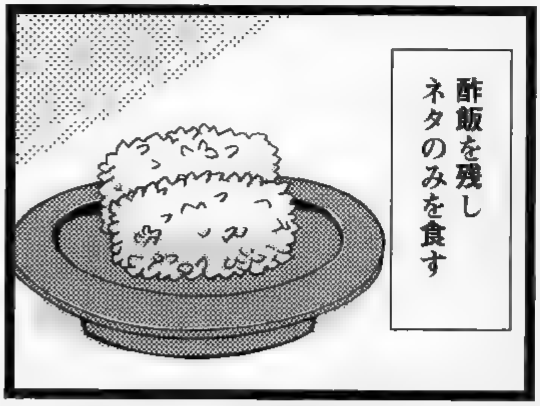


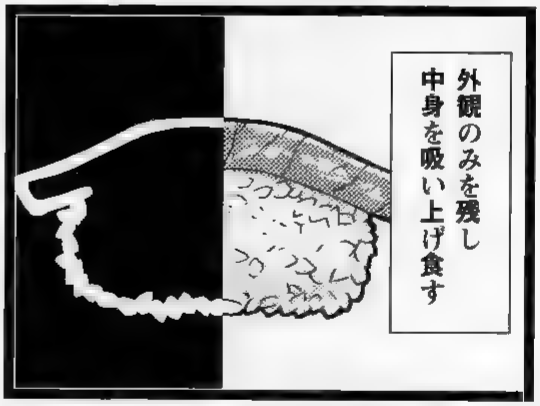
狂乱優歌小日記 伍



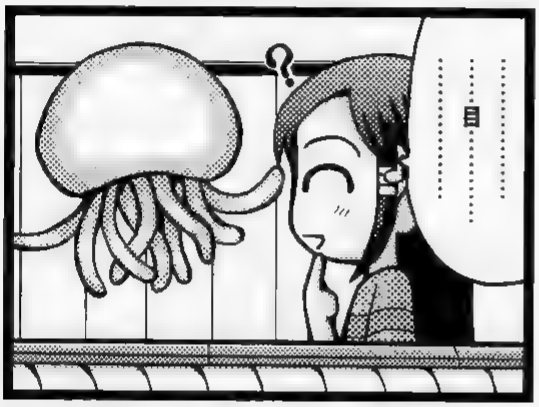
狂乱優歌小日記 六

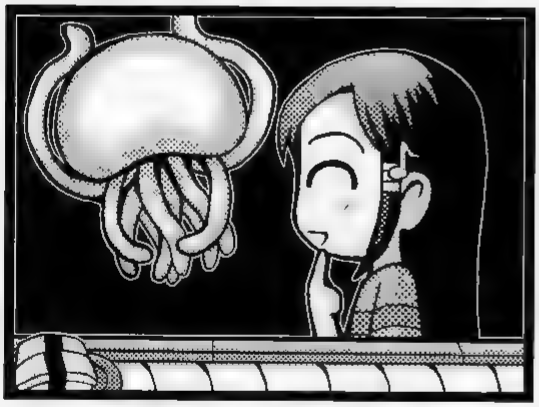
宇宙人的たしなみ

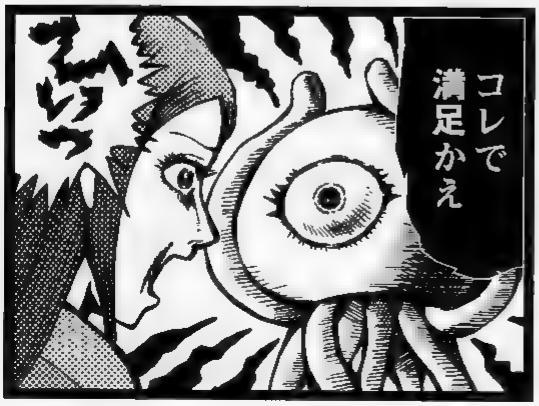




耳も鼻も口も







ガーゴイル＊おるたなてぃぶ 0 ZERO

高原さん家の昔話

田口仙年堂

イラスト／日向悠二

開かずの書斎に入った喜一郎に、
遠い昔の家族とガーゴイルとの日々が蘇る――！

カビの臭いがする地下室に案内するのは気が引けたが、当人がどうしてもと言うので連れて行った。カビよりも知識のほうが大切だ。それはそうだが。

「なんだ、大したことないじゃないか」

書庫を目にした高原喜一郎は、平然と言い放った。

『しかし、この部屋はもう五ヶ月は手をつけておりませぬ。我が主は小生にも手をつけるなと仰いましたので……掃除をする習慣がないお方ですので』

恥ずかしそうに弁明するのは、ケルプ。

「俺の実家は、江戸時代から続く蔵があった。戦争で全部焼けたが、汚さはここの比じゃない。というか、五ヶ月だったら別におかしくないんじゃないか？」

『五ヶ月も掃除をしないというのは、その部屋を放棄するのと同義でございます』

強く主張するケルプに苦笑する喜一郎。

ケルプとしては、見せること自体はばかられるのだ。ケルプにとって、こんなに汚い部屋を他人に見られるということは、人間にしてみれば裸を見られるのと同じくらい屈辱なのである。

その部屋には埃をかぶった書物がずらりと並んでいた。

東宮天祢の祖父、雅臣の研究の成果である。本社のコンピュータには全てデータ化されてインプットされてあるのだが、中には秘匿している情報もある。父や兄弟にも見せていない本がいくつもあった。

そんな本を適当に手に取り、中を調べる喜一郎。

『何をお調べになりたいのです？』

「錬金術師の情報だ」

『貴方様は未だに錬金術師を憎んでいらっしゃるのですね』

「……ああ」

もともとケルプと刃を交えた理由は、それだ。

太平洋戦争で使われることのなかった、錬金術を用いた兵器。それを見た喜一郎は、父や母が作っていた全てのものが信じられなくなったのだという。

「だが、少し変わった」

『ほう？』

「錬金術それ自体の責任と、錬金術師の責任の違いだ」

『それはまぁ、当然でしょう。刃物が人を傷つけても、刃物職人に罪はありますまい』

「似たようなことが、古科学者にも言えるようになったからな。明日は我が身だ」

彼曰く、古科学者の中でも分裂が起きているらしい。それに東宮の姪のひかるが巻き込まれているのである。

「だがあの兵器を作った人間だけは許せない。必ず探し出して、責任を取らせる」

戦争を生き抜いた喜一郎にとって、憎むべき相手が明確になったようだ。

だが彼の言い分は、ケルプに冷や汗をかかせる。

当時、錬金術師と言えば二人しかいなかった。東宮雅臣と、喜一郎の母である高原イヨ。もう少し遡れば出征した喜一郎の父、高原潤がいる。錬金術を利用して兵器を作れる人間など、日本にはこの三人しかいなかった。

そして——東宮雅臣は、当時兵器産業にも手を貸していた。

可能性があるとすれば、彼が一番高い。

喜一郎はそれを知りたくてこの書庫を見たがったのだ。

もしも東宮雅臣があの特攻兵器を作ったのであれば、孫の天祢はどうするつもりなのか。とぼけるつもりなら、喜一郎にここを開放しないはずだが。

「……懐かしいな」

本を捲る喜一郎の手が止まる。

『雅臣様がですか？』

「ああ。父や母と同じくらい、雅臣さんには世話になった」

ここはその雅臣の書斎をそっくり移した部屋。錬金術だけでなく、当時の雅臣の趣味が表れている。

一冊の童話集が目にとまった。これだけ他の本に比べて新しい。ある有名な童話作家の全集だ。

「――先生」

その本に見覚えはない。

だが、本の内容は知っていた。

『その方もご存じで？　雅臣様が古くから師事していたという話ですが』

「俺も一度だけ世話になった。こうして読むとあの頃を思い出す。一番古い記憶は――」

自分たちが生まれるずっと前のことを夢想する喜一郎は、憎しみや辛さなどとは無縁の、優しい若者の顔をしていた。

*

「なー喜一郎さんや」

駅の側に立てかけられてあるガイドマップを見つめる高原喜一郎。冬まっさかりで、体の芯まで冷える寒さだというのに、マントのように羽織っているコートに袖を通しもしない。

「ボクたちって、何しにいくところなんだっけ？」

イヤミっぽく尋ねるカンジ。こちらもいつも通りコートを着ているが、それでも寒そうに両手をこすり合わせている。仮面から白い息が漏れているが、中の顔は蒸れないのだろうか。

「聞いていなかったのか？」

「聞いてたつもりなんだけどね。分からなくなった」

「ここだ」

喜一郎が指さしたのは、マップの一点。記念館がある。この土地の人間ならば誰でも知っている、超有名人の記念館だった。

「ここだったっけ、ボクたちの目的地って？」

「いや」

簡潔に答える喜一郎。

「本当の目的地は青江さんの家だ」

「だよね、最初にそう話したよね!?」

安堵するカンジ。

「じゃあなんでここに行くわけ？」

「私用だ」

「私用？　喜一郎が？」

「おかしいか？」

「うん、すげーおかしい」

素直に頷くカンジに、喜一郎は言い返せない。自分でも奇妙な行動だと思っている。

ちょうどバスがきた。喜一郎は歩こうと言ったのだが、カンジは乗ると言い張った。言い合っているうちにバスが発車してしまい、カンジは泣く泣く徒歩で歩くことを了解した。

東宮ひかるという錬金術師に出会ってから、喜一郎の目的は大きく変わっていた。彼女がミズチとかいう連中に目をつけられている理由はまだ不明だが、巻き込まれた戦いである程度の情報を得ることができた。

お七という古科学者。あの老女の足取りを掴めば、ミズチに近づけるのではないか。そう思って調査を始めようとしたのだが、そんな喜一郎の元にカンジが戻ってきた。カンジもカンジで、別の古科学者――前野の行方を捜していたのである。

お互いに調査の報告をした。

どちらも、満足な結果は得られなかった。古科学者は隠れるのが上手いのだ。歴史から隠れ続けてきた実績がある。古科学者同士ですら、そう簡単に追えない。

「どっちか一つに絞ろう。二兎を追う者、なんとやらだよ」

カンジの提案に賛同した。

お七の方は、きっと東宮ひかるが捜すだろう。だとしたら自分たちは前野と、彼についていたサリーを着た女を追うべきだ。たぶん、どちらもミズチに繋がっている。

情報が欲しかった。自分たちの知らない情報が。

そのために人を頼りたい。だが前野ほどの善良な古科学者ですらミズチの毒牙にかかったのだ。迂闊に尋ね歩くこともできなくなっ

た。

そこで名前が挙がったのが、青江という刀鍛冶である。

彼はどこまでも真っ直ぐな人で、刀を打つこと以外に興味がない。彼ならばミズチの手には落ちないと思ったのだ。それに彼を守る必要もある。喜一郎とカンジが襲われたように、ミズチの軍門に降らない人間は抹殺されるかもしれないから。

そんなわけで、東北にある青江の家を目指していたのだが——喜一郎は何を思ったのか、途中の岩手県で立ち止まったのだ。

もう岩手にも雪が積もっている。今年は例年に比べて寒いと言われており、普段あまり雪が降らない地方でも雪遊びができると聞いた。ましてや北東北の岩手県だ。車通りが多い駅前なのに、道路脇に雪が積み固められていた。

「さっきから何キョロキョロしてるんだ？」

「ん、ああ」

カンジの問いに答えるように、ある看板を指さす喜一郎。

そこにはこの町で一番有名な詩人の名前が書かれてあった。

「有名になっているみたいだな」

「いや、有名っつーか……知らない人はいないだろ」

「そうなのか？」

「知らないのは喜一郎くらいだろ。つか、知ってるの？」

最後の質問は、その人物と関係があるのか、という意味だ。

喜一郎は頷く。

「父と母が昔から」

「えええっ!?」

驚くカンジだったが、すぐに考え直して、

「でもあの時代だったら、あり得ない話じゃないか」

カンジは喜一郎の過去を知っている。というか本人から聞かされた。あまり歴史には興味がないカンジだが、その時代に何があったかは何度も聞かされた。

「先生と会ったことは一度だけだ。だけどあの時の衝撃は今でも忘れられない」

それきり、喜一郎は黙って歩き続けた。

彼の名が書かれた看板は一つだけではない。彼が教鞭を執った学校への案内板や、彼の童話にちなんだグッズが売っている店などが見られる。

それらの看板と一緒に、建物の数も少なくなった。山と田んぼしかない道。今は雪で真っ白に染められている。

——やっぱりバスで来た方が良かっただろうか。

振り返ると、カンジの足取りもどんどん遅くなっている。今頃になってちょっと後悔する喜一郎。

「……カンジ」

「なに？」

ものすごく不機嫌な声。

「あそこからバスに乗ろう」

天の助けか、目の前にバス停が見えた。やっとの思いでそこに辿り着くと、次のバスまで約二十分。休むには丁度いい時間だ。寒さを気にしなければ。

バスを待っている間、喜一郎はカンジに話を始めた。

カンジが一番聞きたがっていた先生の話だった。

*

現在とは真逆の暑い日だった。

どこまでも続く田んぼの真ん中に、その小さな駅はあった。長旅だったが、初めて乗る汽車が楽しくて、喜一郎は眠らずに外の景色ばかり見ていたものだ。

耳がもげそうになるほど大きな汽笛の音を見送ると、喜一郎は出迎えに来た大男をゆっくりと見上げた。

高原喜一郎、五歳。

まだ子どもだというのに、とても冷めた目

をしていた。
「やあ先生！　お久しぶりです！」
喜一郎の横で、父とその友人、東宮雅臣が元気に頭を下げている。
下げた二人の頭を、先生と呼ばれた大男は思いっきりはたいた。
「先生ってガラじゃねぇって言ってるだろ、高原！」
「いたたた……何言ってるんですか、学校の先生が」
「昔の話だよ」
苦笑した先生は、首の辺りをボリボリと掻く。
そうして喜一郎と目があった。
「ひっ……」
冷静を装っても、子どもは子ども。その毛むくじゃらの男に見られただけで、自然と足がすくむ。
「お、オメェが喜一郎か」
後になって考えれば、先生は喜一郎を素直に可愛がろうとしたのだ。ところが巨大な手が自分に向かって伸びてくると、喜一郎は尻餅をつきそうになってしまう。
そんな喜一郎を庇うようにして飛び出した影。
「き、きいちゃんをいじめないで！」
三つ編みの女の子だった。
「ユキ……」
喜一郎同様、足が震えている。それなのに喜一郎の前に立ちはだかった。
ユキの服を摑む喜一郎。
「わはははは、こいつぁいい！　凛々しい娘さんだな！」
大笑いする先生。父や母も笑っていた。
自分が笑われたのだと、喜一郎は思った。
「ユ、ユキにそんな真似はさせません！」
なけなしの勇気を振り絞って、ユキの前に立った。
「ダメ！　きいちゃん危ないよ！」
「ユキも危ないだろ！」
いつしか自分が前に出る、と摑み合いを始める子どもたち。十秒も経っていないのに、もう当初の目的を忘れていた。子どもなどそんなものである。
「はいはい、あんたたち。もうそれくらいにしなさい」
ユキ共々、母に首根っこを摑まれた。
ふくれっつらをするユキを見ていると、少し落ち着いた。
改めて先生を見ると、もう怖くなくなっていた。
「この娘さんも、お前さんたちの子どもかい？」
「違います。近所に住む子で。親が仕事でいないので、ちょうどいいからと連れてきたんです」
「そうかい」
父の話を聞いて、何か納得したように頷いている先生。
そしてユキは母に首を引きずられたまま、喜一郎の袖を引っ張る。
「すごいね、きいちゃん」
「ん、なにが？」
「あの熊、しゃべるよ」
その言葉には大人たちだけでなく、喜一郎まで爆笑させられてしまった。
子どもの無邪気さも手伝ってか、先生とはすぐに打ち解けることができた。父母は先生の関係者に挨拶に行き、残った喜一郎とユキの面倒をみたのは先生だった。
「ほい」
渡された真っ白なダイコン。
この歓迎の仕方は汽車の中で両親から聞いた。だまされたと思って食べてみろ、と力説するので、ユキの手前もあり、一口食べてみた。
「あ、おいしい……です」
とはいうが、いつも食べているダイコンの味だった。たまにどこかから野菜が送られてくるが、それは先生からだったのだ。
このダイコン一つとっても、先生の人柄が窺える。こんなに美味しい野菜を作るのだ。

きっと繊細な人なのだろう。
「わぁ、おいしい！」
それを初めて食べるユキは、目を丸くして驚いていた。あまりに美味だったのか、パリパリと一気に食べてしまう。服にこぼれ落ちるカスを払う喜一郎。
「ハッハッハ、まるで本物の兄妹みたいだな！」
笑う先生。
「いつも、こんなですから。ほっとくと何するか分かりませんし」
「あ、ひどい！　きいちゃんだって人のこと言えないじゃない！」
ダイコンを頬張ったまま怒るユキに、喜一郎の顔もほころぶ。
そんな喜一郎の頭を、先生の大きな手が撫でた。
「俺にも妹がいたんだ。今のお前さんたちみたいに仲が良かったよ」
「今は……何をしてるんですか？」
「死んだよ。結核で」
寂しそうな先生に、喜一郎はかける言葉が見つからなかった。
しかし先生はすぐに元気を取り戻し、
「だからこそ、兄妹の大切さは分かっているつもりだ。いいか、これから戦争は激しくなる。そんな時、妹の一人も守ってやれない男はダメだ。日本を守ろうなんて考えるな。その娘さんを守れるくらい強い男なら、それで充分だ」
熱心に語る先生だったが、五歳の喜一郎にはよくわからなかった。ただ、ユキを守れと何度も言っているように聞こえたので、強く頷いた。
隣のユキは何も考えずにダイコンを食べている。いつの間にか喜一郎の分まで食べ始めているではないか。
「っと、いけねぇいけねぇ」
思い出したように身体を起こす先生。
「いや、どうも俺は子どもにも難しい話をしちまう癖があってな。話し出すと止まらなくなっちまうんだ。すまなかったな」
「そんなことありません」
難しいとか簡単とか、そんなことは喜一郎にとっては関係なかった。どんな話でも聞こうと思った。この人がどういう人なのか、それは頭を撫でる優しい手と、いつも食べる野菜の味で知っていたから。
その時の喜一郎は、先生が高名であることを知らなかった。いや、先生の偉大さを知っている者は当時ほとんどいなかった。彼が詩人として有名になったのは死後かなりの年数を経てからである。この時は岩手のとある町で詩と畑に全てを捧げた、ただの男だ。
先生は喜一郎たちに星の話をした。夏の太陽が輝く空を指さし、まるで見えているかのように星の配置を教えてくれる。そして星にまつわる外国の話や、自分の童話の話を教えてくれた。
その話は、今でも覚えている。
太陽に隠れた星を、喜一郎は目の内側でくっきりと描くことができた。
そのうち両親が挨拶から帰ってきて、やがて別れる時間となる。
「いい土産ができた」
見送る側の先生が、そう言った。
どこへの土産なのか、喜一郎は次の年になって知った。

先生の訃報を母から聞かされた時、喜一郎は深く悲しんだ。
たった一度しか会っていないのに、逝ってしまった。これから夏には彼の元に通って、色々なことを教えてもらうはずだったのに。
肺炎だったという。兆候は去年からあったという。
初めて会ったあの時から知っていたのだ。本当なら立って歩いて話すことも難しい病気だった。平成の現在ですら危険な病気だ。当時は死の病として恐れられていた。
五歳の喜一郎にとって、身近な人間の死に初めて触れた経験だった。
だが喜一郎の両親はそれ以上に傷ついた。

訃報を聞いた夜、珍しく父が酒を飲んでいるのを見た。

「ぼくが……もっと、錬金術で……！」

手紙に向かって、そう呟くのを物陰から聞いた。父は錬金術師として、先生を救える薬を開発していたのだろう。

薬だけではない。両親は戦争や飢饉で命を落とす人のために、錬金術で様々な発明をしていた。その成果は小さいながらも、確かに上がっていたのだ。

喜一郎にとって、父は尊敬すべき人だった。どんなことでもできる、英雄だった。同時に母は、知らないことなど何もない賢者だった。その両親ですら救えないものがあると知り、歯がゆい気持ちになった。

喜一郎はその日から両親には内緒で、錬金術の書物を読むようになった。それが両親の知るところになると、簡単な仕事なら手伝わせてもらえるようになった。やがて日中戦争が勃発し、父が出征するまでにはそれなりの知識を持っていた。

喜一郎が十歳になった、ある夜のことだった。

ちょうど先生の命日で、母と一緒に岩手に行き、帰ってきた日のことだ。喜一郎は先生の童話をいくつか譲ってもらった。あの時話してもらった事が、今なら理解できるのではないかと思ったからだ。

あの暑い夏の日、先生が話してくれた短い話。奇妙な童話。

布団の中で童話を読んでいたら眠れなくなり、喜一郎はそっと床から抜け出した。

目指すは、母屋からわずかに離れた場所にある蔵。

蔵に入ると、持ってきていたランプをつける。これも父が開発した、燃料なしで点るランプだった。その代わり灯りは小さい。

『喜一郎か』

蔵の奥に、その石像はあった。

翼の生えた犬の形をしている石像。

動かないはずの石像なのに、鎖で何重にも繋がれていた。その石像は赤い目を輝かせながら口をきいた。

『どうした。このような夜更けに』

「眠れなくて」

『そうか』

喜一郎が生まれる前から、この石像はあった。

なんでも制作した直後に暴走してしまったという。普通だったら、こういうものは破壊するのが常なのだろうが、なにしろ破壊できないように作ったのだ。考えればとても罪深いことなのではないだろうか。

この石像が暴走したまま、世界を滅ぼしたかもしれないのだ。

『体温が下がっている。そのままでは病気になる可能性がある』

「大丈夫」

と、喜一郎は持ってきたドテラに袖を通し、湯たんぽを抱える。

長期戦の構えだ。

『何をするつもりなのだ』

「これなんだけど」

喜一郎が取り出したのは、本だった。

『汝らがいつも話している、先生とやらの著作か。それをどうするつもりだ』

「お前さ、確か情報はなんでも入力できるんだよな」

『然り。吾の記憶能力は、現代の機械を凌駕している』

「よかった」

喜一郎は本を開き、石像に見せた。

『これを記憶しろというのか』

「できないか？」

『可能だ。しかし意図が分からぬ。何故、汝はこれを記憶させる？　これは防衛に役立つ情報なのか』

「いや、全然」

『では意味がない。吾が作られたのは、ひとえに防衛のためだ。大日本帝国を諸外国から守るための能力を、そのような雑事に使うことはできぬ』

「そんなこと言うなよ」
喜一郎は本で石像を叩いた。
「そんなだから、封印されるんだぞ」
『むぅ……』
石像は気まずそうな声。
「いいか、これからの兵器は学問もできなきゃダメだ。軍人ですら知識人が増えているんだ。だったらお前だって学を身につけなきゃ」
これは父と、その友人である東宮雅臣の受け売りだった。
ただ戦闘技術だけあっては、戦争に勝てない。いつもいつもそう言っていた。仮に戦争に勝ったとしても、知恵がなければ敵国を統治できないのだ。
『そういうものなのか？』
「そうだよ。みんなそう言ってる」
十歳の子どもに、自分の意見など期待してはいけない。尊敬する人物の言葉を覚えることで精一杯なのだ。
『だが、なぜその者の著作なのだ？』
「……先生のことは、ずっと忘れないで欲しいから」
当時、先生の知名度は全くと言っていいほどなかった。彼の名が世界中に知れ渡るのは、死後何十年も経ってからである。
喜一郎は恐れた。このままでは先生の著作が読めなくなってしまうのでは、と。先生の活字がこの世から忘れ去られるのは、とてもいやだった。
「だから先生の本は全部覚えるんだ。ほら」
改めて本を開く喜一郎。
「どうだ、この話？」
『むぅ、奇妙な話だ。信号機が恋愛する話か』
「お前だってもしかしたら恋愛するかもしれないだろ」
『汝ならいざ知らず、吾にそのようなことは決してない。吾には感情がないからな』
冷たい反応。
石像はこう続けた。
『だからこの信号機たちが羨ましくもある。吾にはないものを持っているからな。吾にとっては不必要なものでも、この信号機たちにとっては大切なものだ』
「……そっか」
『次は何を覚えればよいのだ』
喜一郎は先生の作品をすべて覚えさせた。それが終わると、次はこの蔵にある蔵書を全て覚えさせた。石像はそれらの本を造作もなく記憶し、そらんじることができた。記憶容量に限界はなさそうだった。
こうして喜一郎は毎日、夜になると石像のいる蔵へと通った。
石像と話すと、論理的な見地から助言をくれることがある。書物を読んだせいか、喜一郎の感情を踏まえて説明することもできるようになった。自分は感情を持っていないから、書物に登場する人間の行動原理から導き出した、データ的な感情なら理解できるようだ。
やがて喜一郎は、ある本を持ってくる。
『今日は何を覚えるのだ』
「これ」
図面が描かれた本だった。
「お父さんの錬金術の本」
『ほう。錬金術で作られた吾に、錬金術を学ばせるつもりか』
「学ぶっていうか……お前、守るための石像なんだろ？　だったら、少しは役に立てるかなって思ったんだ」
『それは良い。書物は吾の可能性を広げてくれるからな』
そうしてまず最初に石像が興味を示したのは、父が作ったある品物。
それは液体から熱を放射させ、硬い鉄を切る道具だった。兵器として使うには道具が大きすぎるため、工業用に使われるものだ。
『これは応用が利きそうだ』
「えっ？」
すると石像の目が輝いたかと思うと、何かが放出された。
ドロリとした液体。それが目から噴射されて蔵の壁にぶちまけられる。次の瞬間、液体は幻のように消え去った。
『ふむ。なかなか難しいな。吾が生まれた直

後は可能だった気がするのだが。記憶を全消去されてからは、訓練が要る』

「何をするんだ……？」

『次はうまくいく』

また石像の目が光った。

今度はハッキリと分かった。あの書物のように、目から熱線を放出しているのだ。まっ赤な光線は蔵の壁に当たり、霧散する。

「す、すごい……」

腰を抜かしそうになる喜一郎。

『吾の手にかかれば、威力、速さともに自在になる。鉄を切ることもできる。これなら戦闘機を撃ち落とすことも容易だ』

興が乗ったのか、石像はさらに書物を調べる。

次に目を落としたのは、爆撃から家を守る傘だった。

『吾ならばこうする』

石像の周囲に、赤い光の壁が生まれた。

喜一郎が触ってみると、本当に壁のように固い。試しに全力で石を投げたが、傷一つつかなかった。攻撃だけでなく、守ることもできるのだ。

「すごいな、その光」

『吾の中にある、様々な物質を混ぜ合わせたものだ。吾の処理能力があれば、大抵のことはこなせる。喜一郎よ、次の書物を見せるのだ』

言われるがままに、喜一郎は錬金術の本を見せた。

石像は知識よりも実践が好みらしい。覚えた錬金術の道具を、自分なりに改変して技にする。そんな作業が続いた。

『喜一郎よ』

光でできた球体を目の前に浮かび上がらせながら、石像は呟く。

『感謝する。この力の使い方が分かった。これならば吾は日本を守ることができる。汝も、汝の家族も、汝の友人も守ることができるぞ』

「ダメだ」

わずかに声が弾む石像だが、喜一郎はぴしゃりと言った。

「ユキとお母さんは俺が守る。そう約束したんだ」

『先生との約束か』

「うん」
『承知した。ならば吾は汝が守りやすいように、敵国の兵隊を皆殺しにしてこよう』
「またそれか……」
ことあるごとに石像は鎖からの解放を望む。その暁には、必ず敵国人を皆殺しにすると言い出す。それでは何も変わらないことは、喜一郎でも分かる。
必要な知識は与えた。
今度は、心だ。
まだ時間はある。石像と話して、ゆっくりと心というものを理解させよう。そうすれば守るということの大切さが分かるはずだ。

*

バスに乗って数分で、記念館にたどり着いた。あのままバスに乗っていなければ、急勾配の坂をのぼり続けていたことになる。カンジが一番ホッとしていたが、乗り合わせた他の乗客は異様な二人組の乗車に慌てたことだろう。
後から調べてみると、もっと近い駅があった。そのことでもカンジに色々急痴られたが、喜一郎だってこのあたりの路線図を正確に覚えているわけではない。多少ギスギスした雰囲気になりながらもケンカをしなかったのは、喜一郎の昔話を聞いていたからだ。
もともと先生の生家だった記念館は、当時の面影は残っていない。昔はもっと田畑ばかりの土地だったが、それらはビルや民家で見えなくなっていた。
「でもさ」
記念館の外にあるベンチで一休みしつつ、カンジが尋ねた。
「さっきの話が本当だったら、ガーゴイルがそんなに強い理由って、喜一郎が色々教えたからなの？」
「今になって考えればそうかもしれん。あいつに便利な道具を見せ続けたのは俺だからな。今でも後悔はしていない。そのおかげで守れた命もあっただろう」
――守れなかった命もあるが。
口には出さず、喜一郎は思う。
「錬金術嫌いなのに、後悔してないんだ？」
今話した喜一郎の話は、すべて錬金術がらみだ。尊敬する父と母、そして錬金術で作られた石像。
それなのに今の喜一郎は、錬金術を憎んでいる。滅ぼそうとも思っている。
「……なあカンジ。さっき話した女のことを覚えてるか？」
「東宮ひかるちゃんだっけ？　お七さんとやりあった」
「あいつを見ていると、錬金術師に対する考えが変わってきた」
「そんなに面白かったわけ？」
気楽に言うカンジ。
「使い方次第だ、ということだ。基本は古科学でも現代科学でも同じ――錬金術だって、薬の発展に役立ったわけだからな」
「古科学は闇の世界でしか発展しなかったけどね」
喜一郎がここまで錬金術を憎むようになったのは、戦争のせいだ。あの地獄のような戦争を助長した錬金術師がいる。未完成だった兵器のひとつに、錬金術を利用したものがあったのだ。
錬金術そのものに対する見方が変わっても、あの兵器を作った錬金術師だけは許せない。必ず見つけ出して、この手で裁くつもりだ。
たとえそれが尊敬していた両親であったとしても。
「怖い顔してるね。いけないな。君はもっといい顔ができるはずだよ」
優しい声に顔を上げた。
誰よりもこの場所が似合っている男が立っていた。麦わら帽子にTシャツという格好はそのままだが、さすがに身体を動かしていないと寒いのか、シャツの上にジャケットを羽織っている。
前野だった。
「どうして……!?」
捜していたのはこちらのはずだった。方々

捜しても見つからないから、手がかりを得るために東北まで来ていたというのに。

喜一郎もカンジも立ち上がり、すぐに前野から離れた。

「偶然だよ。いや本当に」

前野がここにいるということは、サリーを着た女も近くにいるのか。

視線を巡らせると、いた。記念館の壁にもたれかかって、顔を伏せている。よくよく見れば、泣いているではないか。

「オゥ……ナント悲しいのでショウ！　こんなに偉大なヒトがもういないだナンテ！」

どうやら喜一郎たちより先にここに来ていたようだ。中の資料を見て感動したのだろう。たしか彼女も植物学者だったか。

そして顔を上げると、今さら喜一郎たちに気づいたようで、

「ハッ!?　キーチローさんたち！　キグーですね！」

などと大げさなリアクションで叫んでいる。こんなオーバーアクションの人物を、東宮ひかるの近くで見たような気がするのだが、なぜか思い出せない。

見た目は美しいが、態度はバカ丸出しだ。

だがすでに喜一郎もカンジも得物を構えている。この女、黒魔術の使い手だという。その怪しげな技は一度見たら忘れられない。

その技で前野を誑かしたのだろうか。いや、違う。洗脳が得意な人間は他にいたはずだ。

――洗脳という言葉がひっかかった。

「おい、そこの女」

「アリーシャといいマス」

殺気だった喜一郎に、丁寧にお辞儀をする女――アリーシャ。

「なにしにここに来た……！」

柄を握る手が怒りで震える。

返答次第では、即座に切り捨てるつもりだ。他の人間ならいざしらず、先生の場所を汚した者は許さない。

周囲に人はいない。みんな記念館の中を見学しているのだろう。

斬ったら斬ったで、喜一郎も先生の場所を汚すことになるのだが、今の喜一郎は冷静ではない。先生のことで頭がいっぱいだった。

「喜一郎くん、刀を収めてくれ」

両手を見せて懇願する前野。

「ここには本当にたまたま寄っただけなんだ。アリーシャさんが日本の農学者について調べたいと言っていたから」

たしかこのアリーシャという女、植物学の研究者でもあったか。

先生は詩人でもあり、また農学者でもあった。敵にすら尊敬されるのであれば本望だが――だからと言ってハイそうですかと見過ごすわけにはいかない。

「それジャ、そういうコトで～！　アディオース！」

なのに手を振って帰ろうとするアリーシャ。

「ちょ、待て待て！」

慌ててカンジが折り鶴を投げる。鶴はアリーシャの足下に着地すると、羽が刃のように伸びた。本当に切れるのだろう。巨大なマキビシのような折り鶴だ。

「オーゥ、見逃シテはくれまセンか？」

「見逃せないな。お前たちには聞きたいことが山ほどある」

それに先生のことを知った彼らがこれからどうするか知りたい。もしも先生から学んだ技術を使って悪事をはたらくのであれば、やはり斬る。

喜一郎はずっと刀の柄を握っていた。いつでも抜刀できる。

「悪いけど、喜一郎君」

前野の手が伸びた。

反射的に抜刀しようとする。が、できなかった。右手になにか液体のようなものがかかる。トリモチのような粘着力で、手を封じられた。

「これは……！」

ヤマイモの汁だった。前野は植物学者ではあるのだが、それよりも古科学を使って作物を育てることに生き甲斐を感じる人だった。

カンジに言わせれば「食べられるものを作らせれば最強」とのこと。

喉笛を狙ったニンジンにかじりつき、「いただきます！」

このヤマイモも古科学で作ったのだろう。大した粘着力だ。

「少し動けなくなってもらうよ」

前野が腕を回すと、ヤマイモが喜一郎の身体を一周する。両腕をも封じられ、バランスを崩して倒れる喜一郎。

「喜一郎！」

うろたえるカンジ。カンジはもともと戦いに向いていない。荒事は喜一郎の専門なのだ。しかし前野とアリーシャの二人を相手にして、戦うことも喜一郎を救出することも難しいだろう。

「アナタにも、ちょっと眠ってもらいマショーウ」

アリーシャがビンを取り出した。中に入っているのは、何かの粉。眠らせると言っているが、どうなってしまうのか。

「ちょ、ちょっと待って！」

カンジが後じさるが、もう遅い。アリーシャがビンを投げつける。ビンはカンジの頭にぶつかり、地面に落ちた。咄嗟に目と口を閉じる喜一郎と、顔を庇うカンジ。

そしてゴロゴロと転がるビン。

「……」

「……」

しばらく気まずい静寂。

「ダメデス！　センセーの言ったトーリに、硬いビンに入れて来たノニ！」

頭を抱えるアリーシャ。このベタベタな展開、やはり見覚えがあるのだが、どうしても思い出せない。誰か似た性格の人物がいなかったか――

と、今はそんなことを考えているヒマはないのだった。

「カンジ、下がれ！」

抜刀し、前野に斬りつけた。

喜一郎の刀を受けたのは、真っ白なダイコン。

「おや、もうヤマイモから抜け出したのかい」

「簡単さ」

喜一郎の攻撃に驚いていない前野。だが全力の斬撃を受け止めた手は、達人の域だ。それに刀を受け止めるダイコンもまた、古科学の産物。

まだ腕周りがベタベタするが、文句を言っても仕方がない。

「ふんっ！」

胴を狙って斬りつけるが、ダイコンに阻まれる。どう見てもあっちの方が振り回しにくいのに。普段から触り慣れているということか。

「マエノさん！」

アリーシャが慌てながら、何かを呟いた。日本語ではない。さらに彼女の真下の地面が輝く。

「やめろ！」
喜一郎は叫んだ。先生の土地を汚されたくはなかったから。
ところが、答えたのはアリーシャではなかった。
「アレ？」
なんの変化もない地面。
棒立ちのまま首を傾げているアリーシャ。
なんだか知らないが、術が失敗したらしい。
まぁこういうことは誰にでもある。錬金術師や古科学者だって失敗続きの人生だ。
しかしこの好機を逃すわけにはいかない。
「っ！」
喜一郎の刀が閃いた。今度は油断したのだろう、受け流すこともできず、前野のダイコンに刃ががっちりと食い込んだ。
だがそのままでは喜一郎のピンチだ。刀を取られてしまう。
「もらった！」
前野が左手に持っているのは、ニンジン。それを短刀のように喜一郎の喉に突き刺そうとする。ダイコンがあれだ。きっとニンジンもナイフのように鋭いのだろう。
しかし喜一郎は怯まない。
「いただきます！」
頭を後ろに反らし、反動で思いっきり顔を突き出した。
喉笛を狙ったニンジンにかじりつき、首をひねる。刀をも受け止めるだろうニンジンは、喜一郎の歯であっさりと折られた。
「もうひとつ！」
刃の刺さったダイコンにもかぶりつき、半ばで折る。刀が呪縛から解け、同時に前野の武器は全て使い物にならなくなる。
前野は野菜を育てることに命を賭けてきた古科学者だ。それは全ておいしい野菜を作るため。前野が作るもので、食べられないものは存在しない。
だから刃物を通さない野菜でも、歯ならば効くのではないかと考えた。
「やるな、喜一郎くん」
「……」
咀嚼しているので答えられない喜一郎。食べ物を粗末にするということは、彼の選択肢にない。ちなみに失敗しても喜一郎は不死身なので、リスクは少ない。もしもヤマイモで口をふさがれていたら、どうなっていたか分からなかった。
たっぷり一分ほどかけて飲み込む。
前野もアリーシャも抵抗しなかった。その間にカンジの手から伸びた折り紙のチェーンが、ふたりを縛り上げたからだ。紙でできているはずなのに、鉄よりも硬い。
「アーア、捕まっちゃいマシタ」
ふたりとも抵抗する素振りは見せなかった。もともと戦いに向いていない二人だ。アリー

シャもカンジと同じで、肉体労働は苦手らしい。

紙のチェーンで縛った二人をそのままにしておくわけにもいかず、とりあえずさっきまで喜一郎たちが座っていたベンチに座らせることにした。これなら周りからも目立たないだろう。

「答えてもらうぞ」

周りの人たちに見えないように刀を突きつけ、喜一郎がぼそりと呟いた。

「何が知りたいんだい？」

前野は落ち着いている。こうなることが分かっていたみたいに。

「聞きたいことはたくさんあります。何から聞こうか――」

今度は前野の話を聞く番だった。予想以上に大量の情報を得ることができた。ミズチという組織の事。その中心人物はやはり平賀らしい。らしい、というのは、前野たちですらよく分かっていないからだった。

「ミズチには洗脳の得意な人がいてね」

薬を作るということまでは、前回聞いていた。

「早い話が、自白剤の強力な奴だね。それを作るための触媒が欲しかったんだ」

「その薬で、誰を洗脳するんだ」

「たぶん古科学者以外の人間じゃないかな。技術はあるけど、ミズチに反抗的な」

古科学者は平賀がいるから、洗脳するまでもないということか。しかしそんな危険な人間たちを集めて、どうしようというのか。そこまでは前野も知らないという。彼らも末端の人間だ。

それからアリーシャのことも聞いた。

彼女も前野も洗脳されていたわけではないという。アリーシャははるばるエジプトの大学から日本へ、植物学を勉強しにきたのだという。しかし学んだのは魔術と植物学を融合する技術。そちらの方が、よりよい植物が作れると思ったらしい。

それで古科学者の前野に近づいたのだ。純粋に学ぶために。

アリーシャの都合は分かった。

「じゃあ、前野さんはなんのために……？」

喜一郎が聞きたかったことを、代わりにカンジが聞いてくれた。

前野は言いにくそうな顔。誰よりも優しかった古科学者の前野が、喜一郎を攻撃することが、そもそも信じられない。よほどの理由がない限り、誰かを陥れる薬を栽培するなんて、前野に限ってあり得ない。

「それは……」

前野が話そうとした時だった。

「ンーーー!!」

突然、アリーシャが奇妙なうめき声を上げる。何事かと顔を見れば、汗びっしょりではないか。病気か何かか。

「ダメデスー　どーシテモ上手くいきマセン！」

「……何やってるの、お姉ちゃん？」

「マジックですヨー　ワタシ、何回も何回も試しているノニ、全然動きマセン！　ホワーイ!?」

魔術のことか。あの奇っ怪な技がまともに発動していれば、喜一郎もカンジもやられていたかもしれない。逆に言えば、そのおかげで容易に捕らえられたのだが。

「それは無理だよ、アリーシャ」

優しい声の前野。

「君の黒魔術は、大地の怨みを使っているからね。ここにそういうものはないんだ」

「大地の怨み――」

原理はよく分からないが、その言葉を使われたら喜一郎でも分かった。

ここの土地は幸せなのだ。なんたって、先生の土地だから。

「怨みがない土地……なんてスバラシイ」

アリーシャも感心している。

「日本はいいデスねぇ。ワタシの国も神様に守られてイマスが、こんなに幸せな土地は本当に珍しいデスよ。血を流さなくてヨカッタデス」

「そうか」
褒めているのは敵である上に、自分のことでもないのに、喜一郎は嬉しかった。
「ダカラ、こうシマス！」
アリーシャの身体から煙が吹き出した。サリーの中が爆発したかのような、白い煙。油断していたから思い切り吸い込んでしまった。
魔術ではない、植物の粉だ。花粉――いや、もっと強力なものだ。胞子かもしれない。
「ゲホッ、ゲホッ！」
咽せている間に、前野もアリーシャもいなくなっていた。彼らは逃げ足だけは速い。まるで忍者だ。しかもアニメのようにドロンと消える。
咳とくしゃみが収まるまで、喜一郎もカンジも喋れなかったが、ようやく口がきけるまで回復すると、まずカンジがこう言った。
「追いかけるとか言うなよ。そんな元気でないよ」
「言わない」
催涙ガスのようなものだ。完全に戦意を失ってしまった。喜一郎はどんなに傷つけられても再生するが、痛みは常人並みだ。だからこういう武器に弱かったりする。
さっきまで彼らが座っていたベンチに、座り直す。まだ目が痛い。
聞きたかった事はある程度聞けた。
これからどうすべきか、よりハッキリとした。
「とりあえず、目を洗ったら青江さんのところに行こう」
「うん」
「その薬とやらで、青江さんまで洗脳されたらかなわん」
「うん」
さっきから相づちしか打たないカンジ。仮面の中に手を入れて目をこすっている。それは逆効果なので、記念館のトイレを借りてくるように言った。
やがてカンジも落ち着くころには、日が暮れかけていた。記念館から出るシャトルバスが最後の便になる。
「喜一郎、乗ろうよ」
「ん」
ベンチから立ち上がる喜一郎。カンジはすでにバスに乗り込んでいた。
前野とアリーシャは、今後現れるだろうか。いや、きっとどこかで会うだろう。ミズチという組織にいるかぎり、彼らのような優れた技術者はきっと何かをやらされる。洗脳用の薬を作り終えたら、次はなんだろう。
バスに乗ろうとして、振り向いた。
先生の記念館には、結局入らなかった。
「……先生」
記念館に頭を下げる喜一郎。
「すみません。俺は、先生が望んでいた人間にはなれませんでした」
もしもこの場に先生がいたら、どんな説教をするだろうか。その熊のような手で殴って欲しかった。大切な人すら守れずに、何をやっているのかと。
そうして喜一郎はシャトルバスに乗り込み、座席に座る。サイフを出そうと懐を探ると、半分に割れたダイコンが出てきた。
「持ってきてたの？」
驚くカンジだが、その場に捨てていくわけにもいくまい。
さっきと同じように、ダイコンにかぶりつく喜一郎。
「生で食うなよ……」
「最近の若者はなんでも火を通したがるな。前野さんのダイコンはうまいぞ」
証拠隠滅とばかりに、ダイコンを丸ごと食べる喜一郎。
やはり先生のダイコンが一番だ、と心の中で呟きながら。

*

「違う――か」
本を閉じる喜一郎。閉じただけで埃が舞うが、気にしない。
『お探しの物は見つかりましたか？』
物憂げな喜一郎に優しく問いかけるケルプ。

彼が首を横に振る前から、想像はついていた。彼が探しているのは、東宮雅臣が戦争に荷担していたという証拠だろう。確かに雅臣は軍事産業にも手を染めていたが、錬金術で兵器など作らなかった。

唯一の例外が、ケルプの前身であるドミニオンだ。その理念はガーゴイルと同じ、本土を守ること。そんな目標を持っていた雅臣が、攻撃的な兵器など作るわけがない。

「ふう」

溜息をつく喜一郎。

『ご安心いただけましたか』

「ああ。雅臣さんが俺の思っていた通りの人で、安心した」

『それは結構。これで錬金術に対する怨みも和らいで頂ければ、なお宜しいのですが』

「悪いが、それはまだ時間がかかりそうだ」

本を棚に戻し、喜一郎は書庫を出た。

彼の言葉を意訳するならば「努力はする」ということだろう。様々な出会いが、喜一郎の心をわずかだが溶かし始めているようだ。

同時にケルプは思う。喜一郎をここまで変えた、その錬金術師は何者なのかと。もしもその特攻兵器とやらをケルプが見たならば、喜一郎と同じ感情を抱いたことだろう。そんな錬金術師がこの世にいることも許し難い。

もしも、それがケルプの知っている人物ならば――

『む……』

思考が中断された。本棚の上に無造作に積まれた本が落ちたのだ。落ちた本は、今度は床に積まれた本の山を崩し、崩れた本の山が本棚を揺らす。揺れた本棚から、また本が落ちた。

『やれやれ……喜一郎さん。先にお部屋までお戻りください。小生はやるべきことができました』

「……すまない」

『いえ、これは喜一郎さんのせいではございません。手をつけるなという言葉に甘え、小生がこの部屋をほったらかしにした責任でございます』

まずは本を虫干しするところから始めなければ。

掃除が終わったら、読書でもしてみよう。

童話もたまには悪くない。

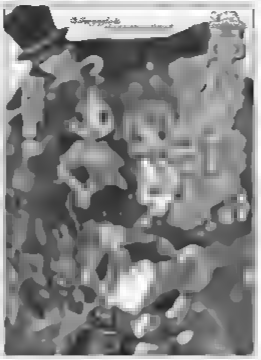
『高原さん家の昔話』おしまい

◆シリーズ情報◆

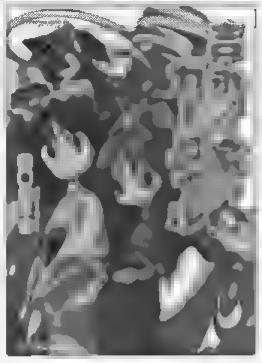
「吉永さん家のガーゴイル」

●吉永さん家のガーゴイル

●吉永さん家のガーゴイル2



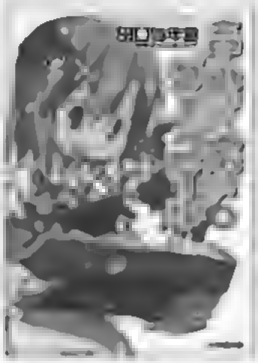
●吉永さん家のガーゴイル3



●吉永さん家のガーゴイル4

●吉永さん家のガーゴイル5

●吉永さん家のガーゴイル6



●吉永さん家のガーゴイル7

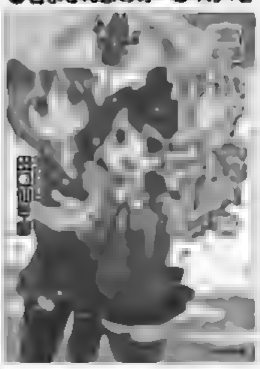
●吉永さん家のガーゴイル8

●吉永さん家のガーゴイル9

●吉永さん家のガーゴイル10

●吉永さん家のガーゴイル11

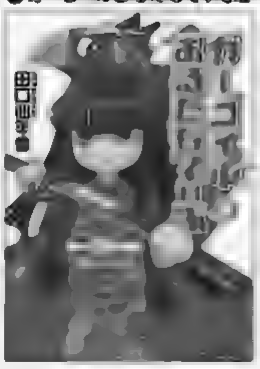
●吉永さん家のガーゴイル12



「ガーゴイルおるたなてぃぶ」

●ガーゴイルおるたなてぃぶ

●ガーゴイルおるたなてぃぶ2



学校の階段

Gakkou no Kaidan

～夜明けの階段～

櫂末高彰

イラスト／甘福あまね

天井決定校の体育祭が無事のうちに幕を閉じ、
天ヶ原市では、女の子だけの打ち上げ
――お泊り会が開かれようとしていた！

九月一八日　PM7：27

「ただいまー」
神庭幸宏が玄関ドアを開けると、従姉の美冬が靴を履いていた。
「お帰りなさい」
言いながら、スポーツバッグを肩に掛ける。引っ掛かりそうになったツインテールの髪を無造作に払い、今度は美冬の方が「いってきます」と言う。
「いってらっしゃい……」
美冬を見送り、幸宏は靴を脱いだ。希春が「お帰りなさーい」と廊下をスルスルやって来る。満面の笑顔で話しかけてきた。
「今日は体育祭、お疲れさま。ご飯にする？　お風呂にする？　それとも――」
「希春姉さん。今日、友だちが泊まりに来るんだ。適当にやるから気にしなくていいけど、ちょっとうるさくなるかもしれないから、ごめんね」
幸宏は希春の言葉を遮って告げた。「あら」と希春は目を丸くし、
「美冬は天ヶ崎さんの家でお泊まりですって。みんな、体育祭の余韻に浸っているのね」
どこか懐かしそうに言う。幸宏は「ああ」と頷いた。そういえば、以前そんなことを言っていた気がする。幸宏の部活の先輩、天ヶ崎泉は大企業グループの会長を祖父にもつお嬢様だ。きっとすごい家に住んでいるんだろうなあと想像してしまう。
「じゃあ、そういうことで。別に何もしなくていいからね。放っておいていいからね」
幸宏は念のためにもう一度釘を刺した。希春はニコニコと笑顔で「大丈夫よ」と答えたが、何となく信用ならない。とはいえ、これ以上言っても効果はなさそうなので、幸宏は着替えと部屋の掃除を済ませるために階段を上がった。
今日は、けっこうみんな騒ぐみたいだなあ。
着替えながらぼんやりと考える。幸宏の通う天栗浜高校は、今日、体育祭だった。色々あったが、概ね楽しいものだったと思う。ただ一つの汚点を除いては。
「ああ、そうだった……。先に風呂に入らないとな」
Tシャツを脱いだところで昼間の悪夢がありありと蘇ってくる。あれは一体何だったんだろうか？　担ぎ上げられた自分が、一番理解できない体験だった。
「まったく……」
幸宏の全身には、乾燥して所々剝がれた赤ペンキがしっかり残っていた。

PM7：56

遅くなっちゃったな。
美冬は自転車で夜道を進んでいた。天ヶ崎家での「体育祭お疲れさま会」は七時から始まっているはずだ。帰宅自体、少し遅かったのだけれど、色々準備しているうちに大分遅れてしまった。
……でも、この壁、どこまで続くのかしら？
来るのは初めてだけれど、いずみの家は地図で見てすぐにわかる場所にあった。というより、一区画ほど丸ごと敷地になっているので、近くに行けば迷いようがない。後は入り口まで辿り着けば良いはずなのに、肝心の入り口が見えてこなかった。
……あ。あれかな？
点々と並ぶ街灯の先に、ぼんやりと大きな明かりが見えた。少し気合いを入れ直して速度を上げる。果たして、到着したのは巨大な観音開きの木製扉前であった。門柱には古めかしい字で「天ヶ崎」と書かれた札が張り付いている。門扉のあまりの大きさに呆然としていると、門がひとりでに内側へ少し開いた。中から声が掛けられる。
「こんばんは。いずみ様のご友人でいらっし

やいますね」

美冬は自転車を降りて会釈する。黒のスーツをピシリと着た二十代後半ほどの女性が、丁寧にお辞儀を返してきた。たまに見かける「西園寺さん」ではない。もちろん、これほどの豪邸なのだから使用人もたくさんいるのだろう。女性は「お荷物をお持ちします」と言って、半ば強引に美冬のスポーツバッグを手にしてしまった。「こちらです」と脇の道を示される。

女性に案内され、自転車を押して敷地内を行く。緩やかに曲がりくねる飛び石の道が風流だ。遠目に美しい紅葉が見てとれた。池の側を通る。近くの灯籠に照らされて、ゆらりゆらりと錦鯉が泳いでいた。

……すごいなあ。想像以上かも。

思わずキョロキョロしてしまう。先導していた女性が振り返ったので、すぐに前を向いた。「自転車はこちらに」と言われて目を向けると、車庫の裏側なのだろうか。広いスペースに自転車がきちんと並んで停められていた。「天栗浜高校」のシールを貼ったものが目立つ。皆、すでに来ているようだ。

「失礼かと存じますが、あなたが神庭美冬様ですか？」

自転車を停めていると、不意に話しかけられた。「はいっ」と答える声が少し裏返ってしまう。でも、女性はその返事に感じ入ったように数度頷き、「あなたが」と呟いた。

「あの。どうかしましたか？」

「ああ、失礼致しました。いずみ様があなた様のことを大変心待ちにしているようでしたので。以前、本当にお世話になったそうですね。私どもからも御礼申し上げます」

深々と頭を下げられ、美冬は困ってしまう。そんなに大したことをした覚えはないし、それに初対面の人にお礼を言われても、どう答えて良いのかわからない。

ともかく、再び女性に連れられて歩く。途中で石畳の道に変わり、奥の方に明かりが見えてきた。音楽が遠く聞こえてくる。生い茂る木々の間を抜けると急に視界が開けた。

「わあっ……」

目の前に広がったのは、それまでの古式ゆかしい日本庭園には似つかわしくない三階建ての洋館であった。煌々と明かりが点り、中からは優雅な音楽とともにたくさんの話し声や笑い声が聞こえてくる。玄関の側に座ってお喋りしていた少女たちが振り返り、美冬に向かって手を振った。

「美冬、おっそーいー　さっきメールしたよー。気づかなかったー？」

見城さんもまだなんだよねー。せっかくうちらの二女神勢揃いと思ったのにー」

「ね、ね、信じられるー？　ここ、パーティー用に建てた別館なんだって！　本当の家は別のところにあるらしいよっ。ありえない大きさだよね！」

同じテニス部の同級生である。響子に奈々美に民江。近づくなり、彼女たちはペラペラと陽気な調子で話し始めた。答えに迷っているところへ、美冬の荷物を手にした女性が「こちらは部屋にお運びしておきますね。何かご入用のものはございますか？」と声をかけてきた。「ないです」と答えると、一礼して建物の中に入っていく。自然だが、全く隙のない物腰だ。

「すごいよねー。天ヶ崎さん専属の使用人さんだってよー。あんな人が何人もいるんだよ。ありえなくない？」

「私も欲しー。響子様、お食事の準備が整いました。とか言われたーい。それがダンディなおじ様とかだったら最高っ」

「ほら、美冬も早く入ろー。みんな盛り上がってるよ！」

「お酒がないのが残念だけどね。天ヶ崎さん、真面目なんだもん」

背中を押され、会場に押し込まれる。「お疲れさま会」という名前からは想像できない豪華なパーティー会場には、靴のまま入ることができた。室内に足を踏み入れると、一瞬眩暈を覚えてしまう。高い高い天井にはドラマでしか見たことのないシャンデリアが吊り下がっており、細部にまで彫刻の施された内

装と品のある調度品の数々が華やかさと格調の高さを演出していた。十代の少女ばかりが集まり、お喋りに花を咲かせているのが不自然に感じられるほどである。

「あっ。美冬！」

声に振り返ると、いずみが駆け寄ってきていた。ラフに見えるけれど、仕立ての良さそうな部屋着を着ている。嬉しそうに飛びついてきた。

「遅くなってごめんね。待った？」

「ううん。今来たところ」

美冬の挨拶に、いずみは軽口で答えた。ヒシと抱き合い、二人してクスクス笑ってしまう。周りで「きゃあっ」と黄色い歓声が上がった。

「ああっ、まさにシャッターチャンス！」

言葉と同時にどこからか立て続けにシャッター音がする。新聞部の人たちが来ているみたいだ。

「何てこと！　美冬は私のものだったのにっ」

「何でやねん！」

「お姉さま！　私もっ」

「あんたはうるさいっ」

周囲の女子が楽しげに騒ぎ出す。中には頬を真っ赤にして見入っているものまでいた。

「いずみ。みんなが見てるわ。続きはまた後でね」

「そうね。夜は長いものね」

美冬といずみはそんな冗談を言い合い、また笑った。

PM 8：12

「こんばんは！」

「はーい！　お待ちして――」

「だからっ。わざわざ出てこなくていいって！」

玄関に飛び出してきた希春をかろうじて押さえ、リビングに押し戻す。幸宏は吉田を自分の部屋に案内した。階段を上がりながら、早速冷やかされる。

「お姉さんにちゃんと挨拶しておかないとなあ」

「いいからっ。それ、来る奴全員に言われたよ」

「俺が最後？」

「うん、多分。井筒に渡辺に石井君に前田君でしょ。来る予定の人は吉田で全部だね」

「真打登場ってわけだ」

「みんな、もう適当に始めてるよ」

幸宏は自室のドアを開けた。吉田が重厚な木製扉に目を丸くしている。ノッカーをゴンゴンと鳴らしてみたりしていた。これも来た者全員がやる反応である。

「うーっす。吉田遅いって。俺ら完全に出来上がってんよ」

「素面で酔ってます、こいつ」

部屋の中では井筒たち男四人が、テーブルの上に広げたスナック菓子とジュースのペットボトルを囲んでいた。最後の一人である吉田が座るとコップに炭酸飲料が注がれ、改めて乾杯の場となる。

「んじゃ、全員揃ったところで一言っ。場所を提供してくれた神庭さんにお願いしましょう！」

渡辺が威勢良く振ってきた。幸宏はコップを手にして正座する。何を言おうか少し考え、おもむろに言葉を紡いだ。

「今日はみんな――」

「「「「かんぱーい！」」」」

コップがガチガチと打ち鳴らされる。幸宏は軽く項垂れながらぼやいた。

「……まあ、お約束だけどね。わかってたけどね」

「いやあ、お疲れお疲れ。とくに神庭はお疲れっ」

「よくやった！　来年も期待しているよ」

前田や吉田からお褒めの言葉をいただく。全然嬉しくない。ふと目をやると、井筒がテレビの前で何かしていた。振り返り、つまらなそうに言う。

「何かエロいビデオとかねえのかよ」

「漁るなっ。ないよ、そんなのっ」

「えーっ。それは間違ってるだろぉ」

「いい子ぶってんじゃねえぞ、神庭！」
「よし、探せ」
「やめろって！」
家捜しを始めようとするクラスメイトたちを牽制し、幸宏は机の前に立った。「ジョーク、ジョーク」と笑っているが、誰一人信用ならない。
「んじゃ、とりあえず何する？」
吉田が携帯電話をいじりながら言った。
「全くのノープランだな」
「ま、適当にだらだらしようぜ。勢いで集まっただけの集団だし」
前田や渡辺がスナック菓子をパリパリ食べながら答える。「そうだなあ」と全員が賛同した。
「そもそも、俺ら何で集まったんだっけ？」
「んー、気分か？　たまたまその場にいたからだろ」
「そうそう。教室に残ってた寂しい奴らで集まろうという話になったんじゃなかったか？　で、何となく神庭の家に決定と」
「自分で『寂しい奴ら』って言うな」
全員集まってからものの五分で、だらけモードに入ってしまう。幸宏は「一応」とテレビゲーム機の存在をアピールしてみた。
「てか、テレビつけようぜ。何、静かに菓子食ってんの？　俺ら」
「何か面白い番組やってたか？」
「日曜って何あったっけ？」
リモコンでうろうろとチャンネルを変え、最後にはグルメ番組に落ち着いてしまった。リポーターに対するダメ出しをしながら、どうでもいいことを喋り続ける。
「おっ。シバからだ」
吉田が携帯電話を眺めてニヤニヤした。幸宏が振り向くと、
「『雷の女神様』の家に侵入を試みているらしい。奴も頑張るねえ」
と言う。
「そういえば、美冬姉さんも行ってるよ。今日は泊まりだって」
「女子限定だろ？　侵入を試みている奴はシバの他にもけっこういるんじゃないかな」
「せめてパーティーくらいは男も参加オッケーにしてもらいたかった」
渡辺が残念そうに遠くを見つめる。前田が激しく同意していた。
「俺らはシバの健闘を祈るとしましょう」
吉田がそう答え、菓子を一つつまんだ。

PM9：07

夜も九時を回り、「お疲れさま会」はひとまず終了した。この後は宿泊する人だけで、場所を変えてのんびり過ごす予定である。美冬たちはいずみに二階へ案内された。柔らかい絨毯を敷き詰めた廊下を歩き、角を曲がると左右にドアの並ぶ長い廊下へ出る。いずみが道を空け、悪戯っぽく微笑んだ。
「部屋割りは勝手に決めさせてもらったの。ドアに名札がついているから、自分の部屋を探してね。荷物も中に入ってるわよ」
「えーっ？　すごーい！　もしかして一人一部屋とかいうの？」
「ちょっとそんな贅沢な。って、何この名札。本物だよー」
わらわらとドアに群がった女子たちは、ドアの表面にきちんと差し込まれたプレートを見て歓声を上げる。名札といっても張り紙程度の簡素なものをイメージしていた彼女たちの予想は完全に裏切られた。
「ここはパーティーに来てくださった方のための客室なの。今日はもちろん私たちだけのものよ」
「いやーっ！　ちょっと何これー。ありえない豪華さなんですけどー！」
自分の部屋を見つけた奈々美が、中に入って奇声を発する。何だ何だと美冬たちも後に続き、あんぐり口を開けてしまった。
入ってすぐの部屋はリビングルームというのだろうか、ソファや丸いガラスのテーブルが置かれてあり、対面にオーディオ機器等が据えつけられている。窓には今、分厚いカーテンが引かれているが、窓を開ければバルコ

ニーに出られるようだ。左手のドアを開けるとバスルーム。右手のドアは寝室に続いていた。しかもベッドはダブルベッドである。一人がベッドに飛び乗り、「おおっ」と驚嘆の声を上げる。

「これ、女子高生の泊まる部屋じゃないよ」

「ありえないよー。ありえないレベルだよー」

奈々美は瞳をうるうるさせていた。

「これ、一人一部屋って逆に辛くない？」

「何かみんなで一つの部屋に集まった方がいいかもー。私には広すぎるわ」

わいわい騒いでいると、いずみが心配そうに尋ねてきた。

「不便なところがあった？　ちゃんと準備させたんだけど……」

「あああ、そうじゃなくってね。そうじゃなくて何ていうか、私には勿体ないっていうか、もっとこう庶民的な方が良いというか」

「違うのよ。こう、もっと、もっと、そう！　もっといずみさんと密着して過ごしたいっていうの？　せっかくの夜なんだし」

「密着って……」

「私はお姉さまと同じベッドで寝たいのっ」

「あんたは、どさくさに紛れてなんてこと言ってんのよっ」

若干間違った発言も混ざりつつ、主張する。いずみはしばらく小首を傾げてから、

「じゃあ、二階の部屋を使う？」

と言った。

「二階は、どんな部屋なの？」

「和室があるから、そこに布団を敷いて寝ることができるわよ」

「そっちにしましょう！」

大半の賛同により、美冬たちは部屋から自分たちの荷物を担ぎ出して二階に移動することとなった。

「ここからは上足禁止になるの」

階段を上がり切ったところにドアがあり、中に入ると下駄箱スペースがあった。もちろん、下駄箱と表現するにはあまりに上品な雰囲気の空間である。若干申し訳なく思いながらスニーカーを納め、いずみの後に続いた。二階の廊下は板張りで、二階がホテルの雰囲気をもっているとするなら、ここは高級旅館の佇まいである。いずみが部屋の一つを開け、皆を中に誘う。半ば予想はしていたが、ここも軽く五〇畳を越えていた。

「うわー……。広ーい……」

段々感覚が麻痺してきたのか、リアクション自体は薄い。けれど皆、入り口付近で呆けていた。いずみは押入れを開けて布団の数を確認し「大丈夫みたい」と嬉しそうである。

「ここなら全員で寝られるわよね。ひとまず荷物を置いて、他の部屋でゆっくりお話ししましょうか。あ、着替える？　先にお風呂からしら？」

「……天ヶ崎さん。ちなみに、お風呂はどこに」

「やっぱりこの階のがいいかしら。みんなで入れるし。あ、もちろん、さっきの部屋のバスルームも使えるから、どちらでも好きな方を使って」

「……」

美冬は友人たちを見回した。泊まる人は、飛び入りも含めて二〇人弱いる。そんな人数が全員入れると、いずみは断言したのだ。

不意に肩を掴まれた。響子がすすり泣いている。

「ごめんなさい。懺悔します。私、天ヶ崎さんのことを甘く見てました……」

よく見ると、他の人たちも様子がおかしい。ハイになって室内をあちこち見て回っている人もいれば、呆けたまま突っ立っている人、響子と同じように打ちのめされて項垂れている人もいた。美冬は「ふう」と息をつき、せめて自分だけはしっかりしなければと思った。

PM10：43

「おいおい！　さっき神庭先生に会っちまった」

「マジでっ？　本当に一緒に住んでんだな」

「当たり前だって。千秋姉さんだっているよ。

あんまり騒いでたら殴り込まれるからね」
トイレに行っていた前田からの報告に、ゲームの手が止まる。対戦格闘ゲームを延々繰り返していた幸宏たちは、やおらスナック菓子に手を伸ばした。
「いや、でも、まったりしてきたねえ。俺らも」
「そういえば、どうやって寝る？」
幸宏は自分の部屋を見回した。六人が寝るには手狭である。布団を敷いたら二人が限界だろう。
「てか、お前寝る気だったの？」
井筒が意外そうな声を上げる。
「完徹に決まってんじゃん」
「寝たら油性マジックで容赦なく落書きするからな」
渡辺や吉田まで楽しそうに同調してきた。幸宏も何となくそうだろうなと思っていたので、あえて反論はしない。
「そういや、石井遅くね？」
「補導されてんじゃねえの？　もしくはコンビニで絡まれてる」
「ありそうで怖いから、そういうこと言うな」
前田の言葉に、皆、時計を見やる。先程ゲームで負けた石井が「買出し」に向かってから二〇分ほど経っていた。石井が巻き込まれたであろう災難の数々をでっち上げていると、本人が帰ってくる。ペットボトルとお菓子の入った袋を両手に持ち、「チャレンジ失敗しましたー」と部屋に入ってくるなり叫んだ。
「何？　チャレンジって」
幸宏は石井を見上げた。彼は苦笑し、
「チューハイくらい買ってこようと思ったんだけど。一人じゃなんか厳しいって」
「まさか、それで遅かったの？」
「軽く立ち読みしまくってきた」
「ゼッテー、不審人物だよ」
「まあまあ。石井君はバドミントン部だし。変なことしたら退部になるだけじゃなくて、うちのバドミントン部にも迷惑がかかるでしょ」
幸宏はフォローしてみたが、前田たちは「えーっ」と不満そうだ。
「だってバドミントンってマイナーだし」
「マイナーとか言うなっ。否定しにくいけど」
「バドミントン部が認めちゃったらダメだろ」
お菓子の袋を開け広げつつ、そんなことを言い合う。再びゲーム対戦が始まった。吉田は一人ベッドに座り込み、幸宏のマンガを読んでいる。ふとポケットから携帯電話を取り出し、開いた。笑い出す。
「シバからメールだよ。雷の女神様の家に潜入するの、失敗したらしい。やっぱ新聞部からの公式発表を待つしかないのかあ」
「くそーっ。やっぱ無理だったか。女子限定パーティーに宿泊だろぉ。絶対、すんごいことになってると思ったのにいっ。ガードは固かったかー」
渡辺が悔しがる。幸宏は苦笑せざるを得なかった。
そういえば、美冬姉さんたち、今頃何してるんだろうな……。
何となく時計を見上げる。一一時になろうとしていた。

PM11：26

そこは旅館の大浴場だった。
「出たー！　ライオンだよっ。ライオンの口からお湯が出てるよーっ」
給湯口に駆け寄り、絶叫している人がいる。美冬も広々とした湯船に目を見張っていた。とても個人宅の風呂とは思えない。周囲の壁にはシャワーと蛇口が並び、本当に一〇人以上が軽く入れる設備が整っていた。
「ありえないよーっ。完璧、どっかの旅館だよー。泳げるよー。むしろ泳ぐべき？」
「パカッ。そんなことしたらつまみ出されるわよ。全裸でっ」
「全裸でっ？　それは寒い！」
「別の意味でもさむいしっ」

皆、わいわい騒いでいる。美冬はひとまず蛇口の前に座った。洗面器にお湯を満たしていると、「おおお」とどよめきが起こる。顔を上げるといずみの姿が目に止まった。

彼女は本当にきれいな肌をしている。すらりと伸びやかな手足も美しく、腰は細いのに、胸は自分より大きそうだ。美冬は一人、胸に手を当ててみた。姉二人は大きいのに、自分のだけは全然育っていない気がする。

「お隣、いいかしら？」

自分の胸を見下ろしていると、いずみが隣にやってきた。反射的に胸を隠してしまう。いずみはちょっと目を丸くし、それから微笑んだ。意地悪く胸を張ってみせる。

「ああっ。すごい絵だわ！　女神様の一騎打ちよっ」

「お隣失礼しまーす！」

「ああん。お背中お流ししまーす！」

「あんたは下がってなさいっ」

あっという間に他の女子も群がってきた。恥ずかしい。

「やーん。でもでも天ヶ崎さん、本当にすべすべー」

「美冬もつるつるー。同じテニス部でこの差は何なのよーっ」

亜紀や響子が遠慮なしに腕を撫でてきた。思わず「ひゃっ」と声を上げてしまったから良くない。「美冬ちゃん、敏感なのね？」などと言われ、背中を撫でられる。

「何してるのよっ」

小声で文句を言ったけれど、効果はない。小さくなっていたら、いずみが髪を撫でてきた。

「美冬、きちんとシャンプーしてる？　とってもきれいなんだから、大切にしないと」

優しく手櫛をかける。いずみは微笑み、「シャンプーしてあげる」と言った。

「え……。えと」

「キャー！　いいわよ、いいわよー。そういうのが欲しかったのよ、私はっ」

周りがはしゃぎ出す。声が浴室にほわんほわん響いて変な感じだ。美冬が返事をする前に、いずみはシャワーヘッドを手にして背中に回る。耳元で「目を閉じててね」と言われ、おとなしく閉じてしまう自分が情けない。いずみは丁寧にシャワーで美冬の髪を洗い始めた。

「美冬。少し枝毛が目立つわ。テニスで紫外線を浴びているんだから、もっと髪のお手入れに気を遣わないとね」

いずみの柔らかい指先が髪をゆっくり撫でつけ、美冬の髪のほつれをなくしていく。一通り準備を終えると、いずみは泡立てたシャンプーを手の平に取り、美冬の頭皮を丹念にマッサージするように洗った。ゆるゆるとさするようないずみの指の感触に、つい身を委ねてしまう。ふと、顔の前に誰かのグーが出てきた。

「神庭さん！　今のご気分はいかがですかっ」

「……」

美冬は黙ったまま、その手を押しのける。笑い声が起こり、

「天にも昇る心地だそうですっ」

と勝手なコメントをつけられてしまった。

皆に冷やかされながらシャンプー、リンス、おまけにトリートメントまで。頭にタオルを巻かれておかしなお団子頭になってしまった。美冬はガラスの表面を拭いてそれを確認し、怖々手を伸ばす。いずみがペシッとその手を叩いた。

「ダメよ。しっかり馴染ませないと」

そう言って、隣に腰掛ける。「今度は私の番」と自分の髪を撫でるので、美冬は焦ってしまった。

「私、そんな、丁寧じゃないし……」

「ダーメ。私が洗ってあげたんだから、美冬も洗ってくれないと不公平でしょ」

いずみは美冬の手を取り、自分の髪に触れさせる。するりと滑らかな指触りが心地良い。美冬のものとはハリもツヤも違う。

「ああああ、お姉さまっ。ぜひとも私に――」

「はいはい、あんたは泳いでなさいっ」

後ろの方で、誰かが湯船に投げ込まれた。派手な水音がする。

「……じゃあ」
自信はないけれど、美冬はいずみの後ろに回った。もう一度、長く艶やかな黒髪を手に取る。何だかドキドキした。
「お願いします」
いずみが背筋を伸ばしてみせるので、つい笑ってしまった。

「あー……。生き返るー」
「何、そのオッサンくさい台詞」
湯船に浸かり、側で響子たちが喋っている。美冬は首までお湯につかり、足を伸ばしてぼんやり天井を見上げていた。何だか、くたびれている。
「美冬。のぼせてない？」
隣にまたいずみがやってきた。美冬はふるふると首を横に振り、頭のタオルがずれそうになったので慌てて押さえる。いずみがにっこり笑み、身を寄せてきた。
「美冬、可愛い」
「……今日のいずみ。絶対キャラが違う」
「フフ、そうね。私もそう思うわ。ちょっと浮かれてるみたい」
「珍しいわね」
「美冬のせいよ」
「……やだ、もう」
「フフフ。でもね、こんなこと初めてだから。今まで友だちを家に呼んだことってなかったの。友だちの家に泊まりに行ったこともなかったし。だから、きっと浮かれてるのよ。そして、そのきっかけを作ったのは美冬。あなただもの」
そう言って、いずみは自分の頭に手をやった。美冬と同じお団子スタイルだけど、いずみの方がちょっと大きい気がする。
「……そんなこと、ないよ」
小さく答えると、いずみは肩をぶつけてきた。ちゃぷちゃぷお湯が跳ねる。何となく笑みが零れてしまう。
「もう。やめてよっ」
反撃とばかり寄りかかった。いずみの滑らかな肌の感触がじかに伝わってくる。自分の腕と彼女の腕が絡み合い、お互いの肌に触れた。湯気に混じって、仄かに甘い香りがする。
「……体も、洗いっこしたかったね」
いずみが囁いた。美冬は「エッチ」と呟き、いずみを上目遣いに睨む。さっきは懸命に拒んだけれど、もし、もし次があったら、背中くらいはいいかもしれない。
キャーッと周囲で同級生たちが声を上げた。鼻息荒く迫ってくる人がいる。
「いよいよ『第一回巨乳選手権』の開催ですかっ？　揉んじゃう？　揉みまくっちゃう？」
民江が両手の指をワキワキさせながら湯船の中を突き進んできた。狙いはいずみと美冬らしい。
「タミー、エローい！」
「あああ、シャッターチャンスがっ。シャッターチャンスがああっ」
「やっぱり、大きさの比較はしておくべきだと思うのよねっ。人としてー」
「人としてって。それ、どこ基準？」
周りの騒がしい声を背に、民江はずんずん迫る。美冬はあわあわと逃げ出した。
「ダメよっ。美冬は私が守るわ」
その背中にいずみが飛びついてくる。背中にむにゅりと柔らかい感触があった。やっぱり自分のより断然大きい。
「むむっ。身を挺して美冬のことを守ろうだなんて。天ヶ崎さん、やるわねっ」
「お姉さま！」
「あんたは黙ってろっ」
さっきから妙な声が混じっている。ともあれ美冬たちは長々と、姦しい入浴タイムを過ごした。

お風呂から上がり、髪を乾かしながら寝室に戻る。部屋にはすでに布団が人数分敷かれてあった。荷物もきちんと脇に寄せてある。
「嘘っ？　いつの間に」
「すごいよ。至れり尽くせりだよー」
皆、驚きの声を上げながら自分の寝る場所を確保しに歩き出した。美冬は皆に押されて

中央付近の一つに収まった。右隣がいずみである。新聞部の人が、デジタルカメラ片手に不敵な笑みを浮かべていた。

「さあ、撮るわよー。すごい映像撮っちゃうわよー」

「ちょっと美知子。良識的な範囲に抑えておきなさいよっ」

「だ、大丈夫よっ。でも、でも、正直女神のお二人には、キスシーンくらい、お願いするかもしれないわ！」

「何でよー」

「それいいっ」

何故か賛否両論出てしまう。

「じゃあ、とりあえず一枚撮るわねー」

カメラを向けられ、美冬といずみは寄り添った。そこに皆が飛びついてくる。写真を撮ったところで新聞部の人がぼそりと洩らした。

「にしても、色気のないパジャマばっかりよねー。誰かネグリジェとか着てくれれば面白かったのに」

「そんな女子高生いるの？」

「てか、あんたのそれ、スウェットじゃない？」

「私、家では基本、裸なんだけど」

「わかったわ、剝いてあげる」

「あーっ、ストップストップ！」

互いの服装を批評し合う。美冬はいずみをチラリと見た。特別な格好をしているのかと思いきや、自分と同じパジャマ姿である。美冬の視線に気づき、いずみは「もっとお嬢様っぽい格好にすれば良かったかしら？」と微笑んでみせた。

「そうね。いずみだったら、せめてシルクのパジャマが良かったかな」

「実は普段、紫のガウンを着ているの」

「……渋い」

クスクスクスクス、二人で笑い合う。

「ああっ。女神様たちが何気に二人だけの世界よっ。私たち凡人なんかにゃ用はないんですって！」

「ひどいわっ。せっかくポッキーゲームしてもらおうと思ってたのに」

「だから、何であんたはそっち方向に行きたがるの？」

美冬といずみは、たちまち会話の中心に置かれてしまった。他愛のないお喋りが続く。そのうち一人、一人と布団の中に潜り込み、「一階の部屋で寝てもいい？」と二人で二階に降りていく人たちも出てきた。一時を回った頃、「一一時過ぎて起きてると、お肌に悪いよ」と今更ながらな発言を誰かがして、ようやく消灯となる。

「はいっ。明かりは全部消す派の人！」

照明スイッチの前に立った亜紀が手を挙げてみせる。パラパラと手が挙がった。美冬といずみも手を挙げる。続いて「豆電球にする派」が手を挙げた。一見してこちらの方が多い。

「うーん。人数的に豆球の方が多いけど、いずみと美冬が全て消す派なので、この勝負、全て消す派の勝ちです」

「どんな理屈よっ」

「あたしらに聞く意味ないじゃないっ」

「でも、真っ暗な方が色々ばれないしっ」

「だから何なのよ、あんたはっ」

沸き上がる不満やら何やらを一蹴し、亜紀は電気を全て消した。

電気が消えると、意外に皆、大人しくなる。もちろんすぐに寝てしまうわけではなく、小声で近くの人とお喋りを続けるのだけど、眠たい人への気配りも忘れない。

「ね、ね。当然起きてるよね」

枕を抱え込んだ姿勢で、数人がほふく前進みたいな動きで美冬といずみの側に寄ってきた。誰かいずみの布団の中に入ろうとして、首根っこを摑まれる。ひそひそと話が始まった。

「あのさっ。美冬さんの従弟がいるじゃない」

軽い話題が続く中、一人がそんなことを口にした。美冬の心臓がトクンと跳ねる。

「今日、ってか昨日になってる？　あの赤組の応援してた？　受けたよねー」

「知ってる、知ってる。何て名前だっけ？」

みんなの目がこちらに向いたのを感じたので、美冬は仕方なく「幸宏」と答えた。
「そうそう、幸宏君。最近、私の中でヒット中なんだよねー」
「えっ？　あの褌姿が」
「そうそう、男らしくってってバカ！　そうじゃなくて、けっこう可愛くない？」
「あー、童顔かもね。あんた好きそう」
「でも、同じ階段部なら刈谷さんがいいなあ」
亜紀が枕に顎を乗せたまま呟く。
「あの人、九重さんと付き合ってるんじゃないの？」
「えー？　そうなの？　私の希望としては遊佐さんと親密なご関係かと」
「あんたの妄想には付き合えないわ」
「でも、アリだよね」
「だから、鼻息荒いって」
「実際のとこはどうなの？」
瞳を爛々と輝かせ、何人かがいずみを見た。いずみは小首を傾げ、
「刈谷先輩と部長は幼馴染だそうよ。遊佐さんとは同じ執行部の出身なんでしょ」
と答える。「きゃっ」と黄色い声が上がった。
「幼馴染なんだっ。そういうの、本当にいるんだっ」
「刈谷さんレベルならいいけどさあ。実際、ガキっぽくない？　同い年って」
「あんたはオヤジ趣味だから」
「そういうことじゃなくて、一般的な話よ」
「それで、幸宏君なんだけど」
話題がスルリと戻ってきた。上手く話がずれていったと思っていた美冬は、意表を突かれてドキッとする。
「ぶっちゃけ、どうなの？」
おまけに、そんなことを聞かれるものだから美冬は困る。「どうって？」と聞き返すと、ニマーッと気持ちの悪い笑顔になり、相手は顔を近づけてきた。
「付き合ってる子とかいるのかって話よっ。同じ家に住んでるんでしょ。そのくらいわからない？」
「え……。いないんじゃない」
呟くように答え、布団の中に首まで潜り込む。相手は「そうかー、いないかー」と感慨深そうだ。
「てか、真理子。本気で狙ってるの？」
「うーん、そうねえ。とりあえず押さえておこうかしら」
「うわっ、何様のつもり」
「私、可愛い年下の子って大好き」
「あんたの趣味はわかんないわ」
「オヤジ趣味の響子に言われたくないわね」
コソコソコソコソ……。お喋りは続く。美冬は徐々にまぶたが重くなり、いつしか眠りについていた。

九月、九日　AM2：06

「イエス！　驚異の、○連勝っ」
「お前、最後のは反則だろーっ。てか、飽きた」
「さきいか美味え。意外と美味えよ、さきいか」
「神庭ー。これの一二巻は？」
「ジュースなくなってね？　買出しに行こうぜー」
深夜を回り、井筒たちは絶好調だ。幸宏はため息をついた。
「ねえ。もうちょっと静かにしてよ。すぐ近くの部屋で姉さんたちが寝てるんだから」
「んあー？　何ですとー」
「そうだっ。千秋コーチの部屋に潜入しようぜー！　日頃の恨みを晴らしてやろうじゃねえか！」
「バカ、渡辺ー　死にたいのかっ。それよりも『氷の女神様』だよっ。神庭、頼む！　女神様のお部屋に入ることを許してくれ！」
「頼むうっ」
吉田と渡辺が土下座をする。
「許せるわけないだろー　何考えてるんだよ、二人ともっ」
「チャンスは今しかないんだっ」

「チャンスとか言うな！」
怒鳴っていると、突然石井が上着を脱ぎ捨てた。
「バドミントン部なめるなよっ。触ってみろ、この筋肉！」
井筒と何やらもめていたらしい。腕の付け根辺りを触り、井筒は「うおっ」と目を剝いた。
「マジで硬え！　何だ、これっ」
「おらあっ。これがバドミントンの成果だ！　半端ねえぞっ」
「マジで、ちょっと腕相撲してみっ。こいつの腕、異常だぞ」
前田に急かされ、井筒がテーブル上のスナック菓子の袋やコップを脇に寄せる。即席の腕相撲スペースが作られた。
「レディー、ゴー！」
「うらっ」
「ふおっ」
一瞬で決着がつく。石井の圧勝だった。
「おらー！　バドミントン最強ーっ」
「腕、痛っ。何だこいつっ」
「……だからあ」
静かにしてくれよ。幸宏が途方に暮れていると、ドアがコンコンとノックされた。ぎくりとする。さすがに騒いでいた野郎どもも口を閉ざす。
ギイイイイイ……。
不吉な音をさせ、ドアが僅かに開かれた。その隙間から、二つの目が縦に並んで鋭い光を放つ。小夏と千秋だった。
にゅるり。突き出された腕が「おいで、おいで」と幸宏を呼ぶ。幸宏は真っ青になりながらも、抗うことのできぬ力によって廊下へ出ていった。ドアが一度閉まる。
「……！」
「！　……!?」
「!!」
何かがぶつかる音と小さな悲鳴。静寂に包まれた室内で、男たちは廊下での凄惨な光景を想像し、身震いをした。
「げふっ……」
戻ってくるなり、幸宏は床に崩れ落ちる。井筒たちは彼に駆け寄り、その周りで泣いた。
「神庭！　お前の死は無駄にはしないっ」
「お前は立派だったぞ」
「神庭二等兵に、敬礼！」
ビシイッ。五人が揃って敬礼をする。幸宏は倒れたまま「二等兵なんだ……」と自分の階級の低さを嘆いた。
「さ。続きやるか」
「あ、そうそう。これの一二巻が見当たらないんだけど」
「格ゲー確かに飽きたな。次、何する？」
「こらーっ！」
幸宏はガバッと身を起こし、それでもなるべく声を低くして叫んだ。
「何にも変わってないじゃないかっ。今、小夏姉さんと千秋姉さんに怒られたばっかりだろ！」
「いやあ、でもねえ」
「若いエネルギーは止められないっつうの？」
「あ、そうだ。ジュースなくなってんだ。買出しに行こうぜ」
「ダメだーっ」
全く反省した様子もなく騒ぎ続ける井筒たちに、幸宏は頭を抱えた。

AM4：12

唐突に目が覚めてしまった。
天ヶ崎は上半身を起こし、くるりと周りを見回す。皆、ぐっすり眠っているようだ。時間を確認すると四時過ぎ。まだ朝と呼ぶには早い。けれど、全く眠気がなかった。
布団からそっと抜け出し、窓際へ寄る。障子を開けると板の間の小さな部屋があった。小机の前に一人掛けの籐椅子が二脚、向かい合わせに据えてある。背もたれに掛けてあった半纏を羽織り、腰掛けた。カーテンを少し押し上げ、窓から外を眺める。まだ真っ暗で、少しぼんやりした自分の顔が窓ガラスに映っていた。
「……」

カーテンから手を離し、今度は閉じられた障子の向こうに目をやる。見えるわけではないけれど、クラスメイトや同級生たちの息遣いが聞こえてくるような気がした。

不思議だな……。

そんなふうに思った。

少し前の自分では、考えられないようなことをしている。中学時代は、いや高校に入ってからも、家に友だちを呼んだことは一度もなかった。唯一、階段部の皆を別荘に招待したことがあるけれど、それでも自宅の敷地外の話だ。

それまでは、セキュリティの問題があるからと思っていた。自分が常に警護されている実感は小さい頃からあったから。西園寺や他の使用人たちは決して口にしないけれど、自分のために相当たくさんの人が動いてくれていることも感じていた。それが凄く苦痛だったときもあった。

だから、自分が変に友だちを家に呼んだりして面倒を増やしてはいけないと、そんなことを知らず知らずのうちに考えていた。

……ううん。そうやって、言い訳してただけなんだ。

本当は、家に友だちを呼ぶくらいどうということもなかったはずなのだ。周囲に遠慮して、という大義名分を掲げて、自分の臆病な部分を隠していた。今は、そんな気がする。

もっと早く、たくさんの人たちと仲良くなっていれば、自分の人生も、また違ったものになっていたのかもしれない。

「……でも」

もう一度、障子の方を見やる。

後悔はない。回り道をしてしまったのかもしれないけれど、そのお陰で美冬や階段部の皆と、天栗浜の人たちと出会えたのだから。

そう。もし違う人生を歩んでいたとして、私は美冬や部長たちに出会えたのかしら？

そんなことを考えると、何か、とても恐ろしい感じがした。今のみんなと出会えていない自分は、一体どんな人生を歩んでいたのだろう。

AM4：57

テーブル上に散乱した、スナック菓子やジュースのコップ、マンガ、トランプ、ティッシュ等々。

部屋の隅には上着が乱雑に放り出され、広げられたままの雑誌や空になった菓子の袋が転がっている。

フローリングの床には五人の少年。ベッドの上にもう一人。全員、寝転がって身動きしない。

エアコンの低い稼動音だけが、室内に流れ続けている。

幸宏たちは軒並み撃沈していた。フローリングの床に適当に寝そべり、寝ているのか起きているのかわからない状態でだらだら時を過ごしている。

「……ふおっ？」

いきなり井筒が奇怪な声を上げて身を起こした。彼は幸宏のベッドに顔だけ押し付けるような格好で半分寝かかっていたようだが、頬を二、三発引っ叩き、側に倒れていた前田の脇腹を足で突く。

「起きろっ。起きろ前田ー　寝てんじゃねえっ」

「うあっ？　ああ、うん……」

「起きろっ。コラッ！　石井も、渡辺もっ。おい、神庭！　てか、吉田！」

幸宏のベッドを完全に占拠して爆睡していた吉田にダイブをかます。「ぐえっ」と悲鳴を上げて吉田が目を覚ました。

「あ？　何？　……眼鏡歪んだ？」

「起きろって！　てめえら気合いが足りねえぞ！」

「……何だよ、井筒。もう寝た方が良くない？」

まどろんでいた幸宏は、室内の明かりの眩しさに目を細める。顔をこすると僅かにべたっとした。脂が出ている。ついでに首筋に汗もかいていた。少し寒い。

「気合いが足りねえっつってんだろうが！

起床、起床！　このままじゃいかん！　このダラダラ感を打開するため、今からガチンコバトルを開催するっ」

井筒は机の上にばら撒かれたトランプの束を引っ掴み、高らかに宣言した。

「題して、『ガチンコばば抜き大会』！」

「いえーっ……」

石井がやる気なさそうに腕を振り上げる。

「テンション低いぞ、お前らっ。そうだな。敗者には飛びきりきつい罰ゲームを課そう。それでどうだ！」

「どうだって……。何をするの？」

幸宏があくび混じりに聞くと、井筒は少し考えた後、ニヤリと笑った。

「よし、それじゃあな……」

罰ゲームを発表する。それを聞いた瞬間、全員の眠気が吹っ飛んだ。

「待て待て待てっ。それはマジで嫌だ！」

「てか、メチャメチャ迷惑じゃねえ？」

「だからいいんじゃねえか！　お前ら、目が覚めただろっ」

「俺は嫌だっ。もっと軽い奴にしようぜ」

「それじゃあ気合いが入んねえだろうが！　やるぞ、オラ！　やらない奴は不戦敗だっ。全員強制参加だからな！」

「せめて罰ゲーム二人にしない？　一人でやるのは辛すぎるって」

「いーや、一人だ！　一人でやるから意味があんだろうがっ」

何を言おうと、井筒は譲らない。散らばっていたトランプをかき集め、数を数えてから切り始める。幸宏たちも観念してテーブルの上を軽く片付けた。トランプが配られていく。

「ガチで一回勝負だからなっ。誰が負けても恨みっこなしだぞ！」

井筒が宣告する。全員、息を飲んで配られたカードを掴んだ。まずはペアになっている手札を場に捨てていく。幸宏は一組だけ揃っていたスペードの5とハートの5を場に捨てた。これで残り七枚。

「え？　ちょっと待った待った！　マジで俺ラッキー！」

前田がカードを捨てまくり、残り一枚になる。「うおおおおおっ」とカードを一枚握って震えた。

「順番次第でいきなり上がりじゃん！　さすが、日頃の行いがいいと違うねっ」

「マジかよっ。俺、一枚も合ってないんですけど。やべー……」

渡辺が九枚のカードを手に凹んでいる。石井や吉田は無言だ。井筒が六枚のカードを扇型に開き、睨みを飛ばす。

「よし。じゃあ、スタートはじゃんけんで」

「待った。右回り？　左回り？」

「右だろ？　右にカードを取っていく」

「右の奴のを取るのか？」

「右のを取って左に回すんだろ？」
罰ゲームがかかっているので、スタート前のルール確認も真剣になる。じゃんけんで勝った人が右隣の人のカードを引いてスタートすると決まった。
「よし！　石井勝てっ。頼む」
石井の右隣に座っている前田が、祈りの声を上げた。
「じゃーんけーん」
「ぽん！」
スタートは前田の右隣にいる井筒からになった。「くそーっ」と前田が寝転がる。
「よし、行くぞ！　ガチンコばば抜き勝負！」
井筒の掛け声とともに、戦いは始まった。

およそ一〇分後、勝敗は決した。
敗者、井筒研。

「いやったあああー　助かったあー！」
吉田が最後の一組をテーブルに放り出して諸手を挙げる。バンザーイ、バンザーイと皆に祝福された。
「……何で」
そして、井筒はジョーカー片手に項垂れている。
「やっぱ、こういうのは言い出しっぺが負けるってお約束だよな」
「そうそう」
石井が笑い、前田が頷く。渡辺が「さて」と立ち上がった。
「それじゃあ、罰ゲーム遂行に行きますかっ」
「そうだな。早いとこ済まさないと、人が増えてくるし」
「人多くてもやってもらうけどな」
「……お前ら、鬼だな」
がっくりと力をなくした井筒を、吉田と石井が容赦なく立たせる。脱いでいた上着を羽織り、幸宏たちはうっすら青みがかってきた外へと出かけていった。

AM5：13

人の気配がしたので振り返ると、障子がスーッと開いた。髪を下ろしたままの美冬が、まだ幾分寝ぼけ眼で立っている。
「ここにいたの」
「ええ。目が冴えてしまって」
答えながら、天ヶ崎は美冬に椅子を勧める。背もたれの半纏を美冬も羽織り、向かいに腰を下ろした。
「何、考えてたの？」
「ん？　うん。ちょっとね。美冬と出会えた奇跡について考えていたの」

美冬と出会えた奇跡について考えていたの

「奇跡？」
美冬が小首を傾げながら微笑む。そんなおおげさな、と顔に書いてあった。
「ねえ、美冬。全世界の人口を、本当はもうちょっと多いんだろうけど、仮に六〇億と仮定して、一人一人に一秒ずつ顔を合わせていくとするでしょう」
天ヶ崎は、それまでぼんやりと考えていたことを話してみる。
「随分と短いのね。挨拶もできないじゃない」
「フフ、そうね。そのくらいどんどん顔を合わせていくとして、一体どのくらいの時間で全ての人と顔を合わせることができると思う？」
美冬は少し考え、それから「二〇年くらい？」と答えた。
「ざっと計算しても、一九〇年以上かかるの」
天ヶ崎が答えを言うと、美冬の目が見開かれる。
「驚いた？」
「ええ。……でも、それって一生かかっても無理なんじゃないかな」
「そうなのよ。それに、一〇〇年も経ったらたくさんの人が生まれたり死んだりしているわよね。今、この世界に生きている人全てに会うだけでも大変なのに、それを考えると途方もない話になるんだなあって思って」
「そっか。そう考えると、奇跡なのかもね」
美冬が感心したように背もたれに身を預けた。天ヶ崎ももたれかかり、話を続ける。
「私が美冬に出会えたこと。六〇億の中でたった一人の美冬に出会えたことって、本当に奇跡なんだと思う。ほんのちょっと、例えば私が天栗浜に入学していなかったら、美冬には会っていなかったと思うの。こうして仲良くなることはもちろん、その存在すら知らないままに一生を送っていたんじゃないかしら」
言葉に出すと、さっきまで抱いていた恐怖が再び首をもたげてくる。天ヶ崎は自分の腕を抱いた。もし、ほんの僅かでも違う生き方をしていたら、自分は美冬と出会わなかった。そのことが、とても恐ろしい。
「……そうね。出会わなかったかもしれない」
「そうでしょう。私、そのことを考えていたら、急に怖くなったの。美冬やみんなに会えなかった人生なんて、考えられない……」
「でも――」
身を竦ませる天ヶ崎を見つめ、美冬は静かに告げた。
「でも、私はやっぱりいずみと出会っていたと思うわ。違う形でかもしれないけれど、いずみとは知り合って、それで仲良くなって、こうして二人で話している気がする。どんな人生を歩んでいたとしても」
「美冬……」
「いずみの言う通り、私たちの出会いって奇跡よ、きっと。でも、だから必ず出会えていたと思うの。私たち、どんなにしてもどこかで出会って、そして友だちになれたわ。それはもしかしたら中学のときのテニスの試合でだったかもしれないし、同じ大学に進んで知り合うことになったのかもしれない。何十年も経って、お婆ちゃんになってから知り合うことになったかも。だけど、とにかく出会って、もしかしたら初めはお互いに相手のこと嫌ってて、あんな奴とは口も利きたくないって思ってるかもよ。それでも、いつかわかり合って、友だちになるの。最後はそうなるの」
穏やかに語る美冬の言葉に、天ヶ崎はゆっくり心が解けていくのを感じていた。そうだ。きっと出会っている。奇跡のようなこの世界で、自分と美冬は、そしてみんなとも、必ずどこかで巡り合っている。それが途方もない数の人の中で、二人が出会えた奇跡の証明なのだから。
そう思うと、それまでの恐怖が嘘のように退いていった。
「そう。そうね。私たち、きっと出会えていたわよね」

「うん。きっと出会えてた」
「……ねえ。それじゃあ、今まで出会ってきた人も、これから出会う人たちも、みんな奇跡に導かれて出会うのね。すごいな」
「運命って、言うのかな」
「そうね」
自然と笑みが零れる。やわらかなときが流れていく。カーテンの隙間が、うっすら青くなってきた。
「そろそろ朝かしら」
天ヶ崎はカーテンを少し開けてみる。真っ暗だった空が紺から青へと変わりつつあった。ふと閃き、美冬へ向き直る。
「そうだわ。少し歩いたところに神社があるの。ちょっとした丘の上にあって、そこからの眺めはけっこう良いのよ。みんなを起こして日の出を見に行かない？」
「いいわね。行きましょう」
美冬が立ち上がった。天ヶ崎も立ち上がり、寝室への障子を開いた。

AM5：35

幸宏たちは、自転車で少し移動した先のコンビニエンスストア前にいた。
「よし。他に客はいないな」
「マジでやんのかよ？　やっぱやめねえ？」
「お前が言い出したんだろうがっ。ちゃんと実行してもらうぞ」
腰が引けている井筒を、前田たちがせっついている。道路を挟んで向かいにある店の中では、店員が二人、レジの側をうろうろしながら何か喋っている。客もおらず、することもないとみえて、大層暇なようだ。
「よし、行け！　行って男を見せて来い！」
渡辺が指を差す。井筒は「やっぱ二人にしとけば良かった」とブツブツ言いながら、それでもガードレールを乗り越えた。車道には全く車の気配がない。一応、周囲を確認し、それから井筒はダッシュで飛び出した。一直線にコンビニエンスストアへ走っていく。
「行ったー　行きましたっ」
「さあ、見せてくれますか。井筒っ」
「大丈夫かなあ……」
盛り上がる四人。幸宏一人だけが苦笑いになっていた。
井筒は向かいのガードレールも乗り越え、店の前に立つ。そこで一瞬立ち止まったが、一気に自動ドアの前まで踏み出した。ガーッとドアが左右に開く。
同時に、彼は反転してその場に屈んだ。
店員が二人とも振り返り、「いらっしゃいませ」という形に口を動かしかける。
井筒は頭と両手で体を支え、逆立ちをした。足を大きく開く。そして叫んだ。
「犬神家ーっ!!」
店員が、二人とも固まる。それが、道路の向かいからでもはっきり見てとれた。
五人は爆笑してしまった。
井筒が猛烈なスピードで戻ってきた。笑いすぎて腰砕けになっていた五人を放って一人、自転車に乗って逃げ去っていく。幸宏たちも慌てて後を追った。
「ああ、くそ……。俺、二度とあの店に行けねえ」
「まあ、いいんじゃないの？　そのためになるべく遠くのコンビニにしたんだから」
「いやあ、受けた。久し振りに腹が痛くなるくらい笑った」
数分後。幸宏たちは自動販売機の前に集まり、井筒の行為を讃えていた。缶コーヒーを買って飲みながら、先程の話をしては何度も笑う。
「てめえら、覚えてろよ……」
井筒は側の石段のふもとに座り込み、愚痴っていた。幸宏が缶コーヒーを買って差し出してやるも、それを握り締めたまま俯いている。
「まあ、こういうのも体育祭の良い思い出ってことでね」
「でも、受けたよなあ。あの店員の顔も良かった。唖然としてただろ」
「てか、井筒がいなくなってから笑ってたぜ。

良かったな井筒、笑いが取れて」
「よかねえよ……」
「滑るよりかはいいだろう。あれで、素で警察とか呼ばれてたら悲しいって」
「何て言って通報されるんだよ」
「不審人物？」
「店の前で『犬神家』とか叫んでいる人がいるんです！」
また笑い出す。
空が大分白んできていた。
「ところで、この石段ってどこに続いてんの？」
渡辺が井筒の腰掛けている石段を見上げる。左右に木々の生い茂った急な石段は、ずっと上の方まで真っ直ぐ続いていた。真ん中にあるアルミ製の手摺があまり似合わない古臭い雰囲気の石段である。
「神社じゃなかったっけ？　こっちは裏口みたいなところで、反対側にもっとでかい道があるだろ。あそこの神社に繋がってると思うけど」
石井も見上げながら答える。何となく幸宏もそちらに目を向けた。
「だあっ！　くそ！　よっしゃあ、気合い入れてくぞっ」
突然、井筒が立ち上がる。何度か気合いの雄叫びを上げると、石段の頂上を指差した。
「こうなったら、あれだ！　走るぞっ」
「はあ？　今度は何だよ」
前田がぼやく。
「走るんだよ！　階段レースだ！　やっぱこれしかねえだろっ」
「え……。ここを？」
幸宏は石段を示した。「おうよ！」と井筒が頷き、屈伸を始める。何か吹っ切れたらしく、迷いなく続けた。
「もう、こうなったら走るしかねえ！　お前らもやれよ！　全員強制参加だからな。あんな悲惨な罰ゲームをやってやったんだ。そのくらい付き合えよっ」
「やれやれ……。しょうがないねえ」
「いいぜえ。またビリになって泣くなよ」
皆、テンションを上げた井筒に笑いながら付き合う。幸宏も足首を回して準備運動を始めた。上るだけのショットレースだ。一直線だけれど、視界があまり良くないので足下に気をつけないといけない。
「ようし！　お前ら準備はいいかっ」
通り柔軟を終え、井筒が掛け声を掛ける。幸宏以下五人は「おーっ」と軽めの返事をした。六人が横一列に並ぶ。真ん中の手摺を挟んで二対二に分かれる形となった。
「よし……」
全員が構え、石段の上を見上げる。幸宏は生い茂る木々のトンネルの先にある藍色の空を見上げ、
「……ところで、誰がスタートって言うの？」
「スタート！」
疑問を口にした瞬間、誰かが叫んだ。幸宏以外の五人が一斉に飛び出す。完全に出遅れてしまい、幸宏は慌てて石段を駆け上がった。慣れない急角度が少し怖い。二人がぎりぎり並んでいられた右半分では、吉田と渡辺が前を塞いでいた。どこかで隙間を見つけて抜け出さなければ。
左半分では井筒と石井がデッドヒートを繰り広げている。すでに幸宏より五段は差がついていた。幸宏も懸命に駆け上がる。吉田の背中を見つめていると、不意に右へ足を向けたくなった。
ちょっと石段の外に出るけどっ。
盛り上がった土の上に右足を掛けた瞬間、
「わっ」と吉田が足を滑らせる。転びはしなかったが、手を突いて止まってしまった。屈んだ吉田の頭上を飛び越えるようにして幸宏は前に出る。渡辺の隣に並ぶや否や、スパートをかけた。すでに残り半分は過ぎている。ここで勝負をかけるべきだ。
「ふっ！」
二段飛ばしに駆け上がった。一〇段くらい前にいた石井の背中が近づく。その前にいる井筒の後頭部が見えてきた。しかし差はなかなか詰まらない。二人は懸命に足を振り上げ、全力でラストスパートをかけた。

「だあああああっ！　ナンバーワーン!!」
僅差で井筒が一番に抜け出した。
その後を石井と幸宏がほぼ同時に抜け出る。
階段上は随分と広い空間になっていた。駐車場だろうか。
「っつああー！　よっしゃあー」
「くっそ。負けたあ。惜しかったあ」
井筒が両腕を振り上げてガッツポーズを決め、石井は膝に手をついて項垂れる。幸宏もふらふらと慣性で広場の方まで歩いていき、そこで息を整える。汗が吹き出してきた。吐く息が白い。服を摑んで中に風を送ると、思いの外冷たかった。
「あれ？　神庭君っ」
そして、少し離れたところから聞き覚えのある声に呼びとめられた。

AM6：32

美冬たちは神社に辿り着いた。あれから皆を起こし、寝癖がどうの、低血圧がどうのと騒ぐ人たちを半ば強引に着替えさせ、ここまでのんびり歩いてきた。空気が冷えていたけれど、眠気覚ましにはちょうど良かったみたいだ。歩いているうちに皆の気持ちも高まってきて、また他愛のないお喋りに夢中になった。おかげで神社まではすぐだった。
小高い丘を緩やかに上る車道から駐車場への道を行くと、途中で急に見晴らしが良くなった。その分、風も強くなったけれど、火照ってきた体にはちょうど良い。髪が乱れるのには困ったけれど、耳元を吹く風は清々しい感じがした。
神社はけっこう大きいらしく、境内の脇に広い駐車場が設けられている。その端がちょっとした展望スペースになっていて、美冬たちは木製の低い手摺に身を預け、眼下の景色を楽しんだ。夜明けの空を背景に、たくさんの家や建物が広がっている。
「気持ちいいねー」
誰かが口に出して言った。
「太陽、出てる？　まだ？」
数人が日の光を探す。「東ってどっちだっけ？」と少し変な聞き方をしている人もいた。
「日の出の時間っていつなんだろ？」
「何か、あっちの方明るくない？」
町の景色を眺めながら、そんなことを言い合う。あちこち見回しているうちに、すっかり周りは明るくなってきた。
「東、こっちだよー　ほら、多分あの辺からお日様が出るよっ」
「よし、祈ろう祈ろう」
「お姉さまとラブラブになれますように……」
「だから、あんたはー……」
誰かが方角を調べてくれたらしい。皆の目が一方を向いた。日の出を今か今かと待ちわびる。
そのとき——
「だあああああっ！　ナンバーワーン!!」
背後から変な叫び声が聞こえてきた。皆、眉を顰めて振り返る。せっかくの爽やかな朝の雰囲気が台なしだ。
「っつああー！　よっしゃあー」
「くっそ。負けたあ。惜しかったあ」
目を凝らすと、少し離れた場所に下り階段があったらしく、そこから次々と同年代くらいの男子が飛び出してくる。一人がガッツポーズをしていた。その周りに四、五人の男子が集まっている。一人がふらふらとこちらに近づいてきた。
「やだ。変な人たちがいるよー……」
「もー。場所変える？」
不満の声が上がる。美冬も、ああいう人たちとは係わり合いになりたくなかったので、目をそむけた。ところが、そこでいずみが声を発する。
「あれ？　神庭君っ」
その言葉に、美冬は驚いて振り返った。他の人たちも振り向き、いずみの視線を追う。ふらふらと近づいてきていた男子は、紛れもなく幸宏だった。
「うわ。何してんの？　あの人たち」
「もしかして、うちの一年？　恥ずかしいわ……」

嘆く同級生たち。美冬も恥ずかしくて仕方なかった。いずみは幸宏の方に歩いていく。幸宏もいずみに気づいたらしく、それまでふらついていたのに急にしっかり立ってみせた。

「おはよう。朝から元気がいいのね」

天ヶ崎に笑顔で挨拶され、幸宏は恐縮してしまった。徹夜明けの妙なテンションで、意味もなく階段を駆け上がってきたとは言いにくい。

「お、おはようございます。いずみ先輩たちも朝の散歩ですか？」

ごまかすためにそんなことを言いながら、離れたところに立つ女子の集団へ目をやった。そして凍りついてしまう。美冬が、鋭い眼光をこちらに放っていた。

うわー……。怒ってるよぉ。

「いずみ先輩！　おはようございますっ」

幸宏が小さくなっていると、井筒が小走りに寄ってきた。天ヶ崎は「井筒君もいたのね」と頷き、残りの四人にも目を向けた。荒い息を整えている最中だった吉田と渡辺が、ヘコヘコと頭を下げる。前田は嬉しそうに天ヶ崎を眺めていた。石井は女子集団の中に先輩の姿でも見つけたのか、後頭部を掻いて苦笑いを浮かべている。

「朝日を拝もうと思って早起きしてきたの。神庭君たちも、そう？」

天ヶ崎は、穏やかな笑顔でそう尋ねてきた。

「ええ、まあ……」

「そんなとこっす」

悪いとは思ったが、適当に調子を合わせる。天ヶ崎は「そう」と頷くと、

「そろそろよ」

と手招きしてくれた。幸宏たちは、女子の集まっているところへ近づく。「おはようございます」と挨拶すると、少し笑みを含んではいるものの、「おはよー」と好意的に返してもらえた。石井は案の定、先輩らしき人に軽く説教されている。お互いに苦笑いではあったが。

「……」

しかし、幸宏もあまり人のことは言えなかった。美冬がじいっと幸宏を見据えている。周りに立つ女子が「弟君だよー」「噂の彼だよー」と囁いていて、実に居心地が悪い。一応「おはよう」と美冬に挨拶してみたが、彼女はツンとそっぽを向いてしまった。

「いやいやいや、こんなところで二人もの女神様にお会いできるだなんて光栄です」

「今日一日、素晴らしい日になりそうです」

一方、吉田や渡辺は順応力が高い。女子の一団に堂々と入り込み、天ヶ崎と美冬を讃えている。無害な奴と見做されたのか、割りと溶け込んでいた。

「調子のいい奴らだな」

井筒が隣でぼやいた。彼は手摺にもたれかかり、街を見下ろしている。前田も井筒と並んで手摺にもたれているが、こっちの視線は完全に天ヶ崎方向だった。

「あっ。出てきたよ」

女子の中から声がした。振り返ると、白んだ地平の先、ビルや建物の隙間から陽光が放たれる。少しぼやけていたけれど、日の出の瞬間だ。

自然と、歓声が上がった。数人が拍手をし、口笛も鳴った。

「あけおめー」

「何でやねん！」

季節外れの挨拶が飛び、それを突っ込む声もする。他にも「体育祭お疲れー」とか「まだ眠いー」「帰ったら二度寝だー」「お風呂、でかかったー」などと声が飛んだ。誰かが「お姉さま大好きー」と叫ぶと、再び「いい加減にしなさーい」とツッコミが飛んだ。

幸宏は日の光をぼんやりと見つめ、深呼吸をした。まだ空気は冷たいけれど、朝の暖かな日差しを吸い込むことができたような気がする。

スイッと、横に誰かが並んだ。振り向いた瞬間、相手が囁く。

「おはよう」

美冬の横顔が目の前にあった。彼女の頬に日光が射す。ツインテールの髪が揺れ、幸宏

の肩を撫でた。
「……お、おはよう、ございます……」
幸宏はろれつが回らなくなる。美冬はさっさとその場を離れ、天ヶ崎の腕に手を回した。二人して笑う。
……え、えーっと。
日差しが急に暑くなった。視界の隅で井筒と前田がニヤついている。女子に混じって吉田や渡辺、石井も何か叫んでいた。幸宏は顔を多少乱暴に撫でつけ、一つ、ため息をつく。
そうして、月曜の朝を迎えた。

(終)

◆シリーズ情報◆

『学校の階段』
季節は春——高校生活を楽しく送れるラク〜な部活に入るため見学に余念のない神庭幸宏は、ある日、校内を走り回る「階段部」なるものと出会う。学校非公認、邪魔もの扱いの部にムリヤリ体験入部させられた幸宏だったが、ひたむきに「階段走り」にかける部員たちの姿に自分の中に芽生えた欲求に気づく。「とにかく走りたい！」そして幸宏は駆け出した——！ ビバ青春の無駄足！ 真正面から「若さ」を描く話題沸騰の学園グラフィティ!!

待望の最新刊、絶賛発売中！
恋と友情——そして暴走！ 文化祭は青春特異点だ！
『学校の階段5』

既刊も好評発売中！

『学校の階段4』

『学校の階段3』

『学校の階段2』

『学校の階段』

第7回えんため大賞優秀賞を受賞し
2006年1月のデビューから1年半足らずの間に
第5巻まで発売された『学校の階段』は
GWには実写映画も公開され、怒濤の快進撃中!
映画試写会の直後、著者の櫻末高彰先生に
映画のこと、著者視点でのキャラクターのこと
原作の今後の展開などについて、うかがった。

『学校の階段』映画化記念特別インタビュー

「階段」を上った その先に……!

実写映画『学校の階段』は佐々木浩久監督の世界

――原作4巻のあとがきで、なかなか実写映画化を信じられないと書いていらっしゃいましたが、今回試写をごらんになって、実感は湧きましたか?

櫻末◇12月末に撮影現場にお邪魔したとき、スタッフの方に「ほんとにやるんですかねえ?」と言ったら、「いや、ここでなくなったらさすがにマズイよ。人死にが出るよ(笑)」と言われたので、じゃあ大丈夫なのかな、とはなんとなく感じてたんです。さすがに試写を見て「GWには公開するんだろうなあ」と思いましたけれど(笑)。Gyaoで配信されたりDVDになったりするようなことを司会の方が話してらしたんですが、どうなんでしょうね? 地元の知り合いなんかはDVDでないと見られないから、DVDになってくれるといいなあとは思いますけれども。

©2007「学校の階段」製作委員会

「アイドルみたいな女の子たちにあんなに走らせていいんだろうか」

――お客さんの反応はどうでしたか？

櫂末◇それが、いちばん最後に会場に入っていちばん最後に出るみたいな感じでしたし、最前列で見ていて後ろを全然見なかったものですから、よくわからなくて。気持ち的にお客さんを見る余裕もなかったですね。うっかり見て、もし目が合ったりしたらどうしようと思って(笑)。聞いた話では、けっこう年齢層が高めだったということなので、ちょっと驚いたんですけれども。

――佐々木(浩久)監督の名前で興味をもった方が多かったのかもしれませんね。

櫂末◇たぶん、そうですね。あと主演の黒川芽以さんとか出演者のファンの方が多かったんでしょうね。原作の読者の方たちは、もう少し年齢層が下だと思いますので。

――実写映画版『学校の階段』のご感想は？

櫂末◇いちばん印象に残ったのは、全体的に監督の佐々木さんワールドになっているということです。あとはアクションシーンというか走るシーンが印象的でした。すごく真剣に走ってるんですよ。校舎の壁を登って窓から入ったりとか、屋上から飛び降りたりとか。たしかに原作にもあるシーンなんですけど、若い女優さんたちが本気で走っているので「うわ、ほんとに走ってるよ！　登ってるよ！」と驚きました。もちろん、うれしかったんですけれど、アイドルみたいな女の子たちに、あんなに走らせていいんだろうか(笑)。

●神庭幸宏

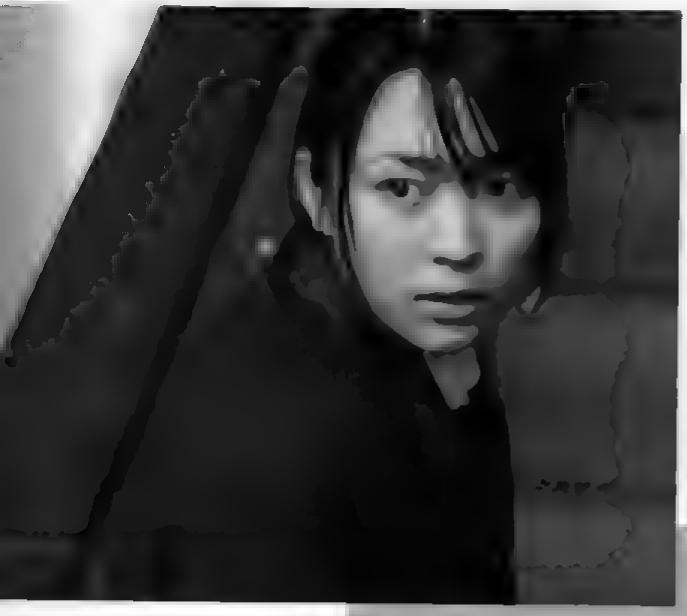
両親を亡くし、親代わりの祖父ともすれ違いがあったりして、厭世的なところがあったんです。それが階段部に入って「人生ってけっこうおもしろい」と感じるようになって、考え方も前向きになってきた。その変化が作品に出せているかどうかが、心配なところですが(笑)。

●九重ゆうこ

話が停滞しているときに、動かしてくれるキャラです。それがいい方向か悪い方向かはともかく(笑)。今後のことは僕にもわかりませんが、好き放題にまぜ返してくれるといいなあと思います。

●天ケ崎泉

努力家でありすぎて無意識に壁を作っていたんですが、そのへんが変わってきたので、女の子と遊んでいるシーンがもう少し増えそうな気がします。ストーリー上では、今後、5巻で登場した波佐間勝一との絡みが出てくることになります。



――実際に生身の人間が階段を走っているのをこうんになって、小説を書いているときのイメージと違ったりしましたか？

櫻末　書いているときは、勢いよくガーッと上っているイメージなんですが、実際には、なかなかそうはいかないものですね。とくに上ってくるところを正面から見ると動きがかなりゆっくり見えてしまうので、階段を駆け上がるのはわりと難しいんだなあと思いました。

原作とは別の作品として続いてほしい
佐々木監督の「学校の階段」

――走るシーン以外で印象に残ったのは？

櫻末　話の流れには関係ない、ちょっとしたシーンが好きでした。たとえば階段部の練習風景で黒川さんが歌を歌ったりするんですけど、その背景でほかの部員たちがちょこちょこ遊んでいたり、休憩中に仲よく笑っていたり　ふつうの学校生活の雰囲気を描いているところが、とてもよかったです。

――映画では、ちづるが生徒会長、刈谷が階段部の部長になっていましたね。こういったキャラの立ち位置の変更については、どのように感じましたか？

櫻末　刈谷は原作では副部長ですけれど、実質的に部を仕切っているのは彼なので部長でも全然違和感はないですね。刈谷を演じた松尾敬伸さんの存在感のためかもしれませんが、原作と同じくらい締まった雰囲気をもっていて、とてもよかったです。ちづるも階段部と対立してるという意味ではポジション的に同じなので、違和感はありませんでした。

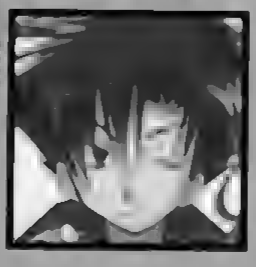
　神庭だけでなく、井筒も女の子になってましたね。

櫻末　映画は原作の1巻をもとにしているんですが、1巻の最後では神庭と井筒がライバルみたいな感じでレースをするので、神庭が女の子なら井筒も女の子なんだろうなあと思ってたんです。ところが試写を見たら井筒はあんまり出番がなくて、キャラとして目立たなかったので、ちょっとかわいそうだったかな（笑）。

●井筒 研

5巻では ゆうことの出会いを含めた井筒の過去の話をやるはずだったんですけれど、結局風景に含まれて、ほとんどなくなってしまいました。なんか、かわいそうなキャラなんです（笑）。

●刈谷健吾



刈谷とゆうことちづるの関係は進展がないままお話は終わり、その後、最後も含めて4人とも同じ大学へ追学して、「またか－」っていう最後になるんじゃないかという気がしています（笑）。

●二枝宗司

4巻で過去話をやったので、今後はお話のメインにはならないかもしれませんね。見城ともそんなにトラマチックなことが起こるわけでもなく、淡々とつきあっていく感じじゃないでしょうか。

「原作者というより一観客として次回作を期待しています」

――ほかに印象に残ったキャラは、いましたか？

檀末◇校長先生役を森本レオさんが演じてらっしゃるんですが、お馴染みの森本キャラで原作に比べると超越している感じがして、映画オリジナルの校長先生になっていると思いました。あと驚いたのが、松尾さんが僕と同い年だということ。高校生で十分通用するなんて、うらやましいです。ぜひ注目してほしいです(笑)。

――映画第2弾への期待はありますか？

檀末◇正直、作ってほしいなあという気持ちはあります。というか、あの終わり方は、やる気まんまんじゃないのかと(笑)。原作とは違った終わり方なので、僕自身、そのあとが知りたくて。映画は原作とはまた別の佐々木監督作品として、どんどん続いていくとおもしろい。僕自身も原作者というより一観客として、次回作を期待しています。

主人公の幸宏はあまりキャラを作らず自分自身と同じような感覚で

――原作は1巻の入学から5巻の文化祭まで進んできていますが、今後どんな流れになっていくのでしょうか。

檀末◇自分の中では、刈谷たち3年生の卒業で終わるんじゃないかと思っています。たぶんキャラクターたちがなんとかしてくれるんじゃないでしょうか(笑)。そもそも第1巻自体、勢いだけで書いたものですから。それが続くことになって、どうしようかとあれこれ考えつつ、担当さ

●神庭希春

4人姉妹がいるところに主人公が来るというのを、やりたかっただけなんです(笑)。無条件に優しいお姉さん、キレると怖い子、積極的に絡んでくる子、無表情な子とタイプは分けていたのですが、お話にどう絡めていくかは考えてなかったので、千秋とか、あとで苦労しました。

希春は、主人公にベタベタするお姉さん。作者の趣味で登場させたキャラです(笑)。

●神庭小夏

ふだんは無口だけどキレると怖いよ～というキャラがほしかったんだと思いますが、書いているうちに勝手にそうなった感じもします。あのお弁当は、担当さんからは毎回わりとダメを出されるんですよ、「いや、これは……」って(笑)。

●神庭千秋

最初は影が薄くて、話に絡めるのに苦労しましたが、たまたま吉田や渡辺がバスケ部だったので、「ちょうどいいや、

「たぶんキャラクターたちがなんとかしてくれるんじゃないでしょうか」

んにダメ出しされたりしながら試行錯誤しているうちに　なんていうんでしょう、2巻のときからそうだったんですけど、自分で展開を考えて書いていても、途中でキャラクターが「いやいや違う」みたいな感じで勝手に動き出すんですよね。そのほうがお話もうまく納まるので、5巻までずっとそんな調子で来てるんです。だから、次も誰かがなんとかしてくれるんじゃないかなあ、と　そんなふうに思っています。

――書きやすいキャラ、書いていて楽しいキャラは誰ですか？

權末◇遊佐はおもしろいですね　単にキャラが好きなのかもしれないんですが、「なんだ、この人は」って思わせぶりなことを書けるのが、楽しいです。

――女の子では、いかがですか？

權末◇やっぱりゆうこでしょうか。よく動くし、別に変なことを言っても「ゆうこだから、まあいいか」という感じがあって（笑）　書きやすいです。

――幸宏は、どうなっていくのでしょう。

權末◇最終的にもってくるネタは僕の中では決まっているんですが……たぶん　それでうまく納まるはずです、きっと（笑）。幸宏はあまりキャラを作っていないんです、作者と同じ、までは言いませんが、かなり僕自身の感覚と近い感じで描いています　1巻から5巻と続いてくるなかで階段レースのタイム自体もどんどん速くなってきていますし、考え方も前向きになってきた。そうやって自分なりの考えを持って成長していってくれるといいですね。

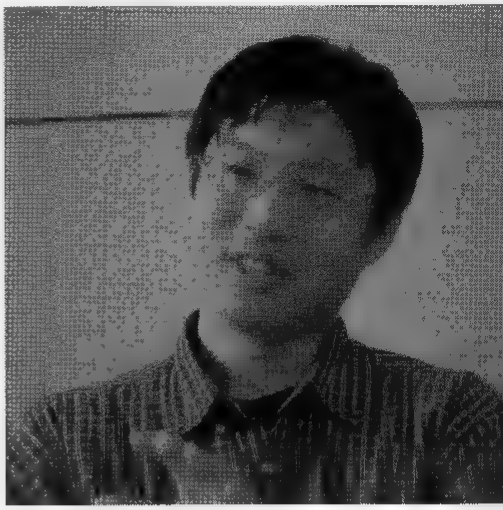
ここに入れよう！と思って　1巻では全然登場していなかったのですが、予想がやっていたスポーツが違っていたり、どうなっていたか　（笑）　見城も偶然バスケ部で　ほんとうによかったです。

●神庭美冬

ツンデレというわけではなく　よの3人との関係で感情を出さないだけなので　このまま最後まで「アレ」なしでもいいかなと思っていたんです　でも美冬は人気があるみたいで　もう少し幸宏と何かないといけないのかなあというプレッシャーを　周りからひしひしと感じつつ　どうなるかは僕にもわかりません（笑）

●中村ちづる

刈谷がすごく好きなので、実際に刈谷とやり合うと弱いんです　で、いつも刈谷と一緒にいる九重が気にくわなくて、さやあさやあ言い合う　そういうところがかわいいと思うんですが　なんか悪いと思われてるみたいで　ちょっと不憫です（笑）



ただの通行人だとしても登場人物には名前と設定を作りたい

――学校が舞台となっているお話のせいもありますが、どんどんキャラが増えていきますね。

櫂末◇そうなんですよ！

――凪原を応援している山田とか、このＦＢＳＰ掲載の短編にも天ヶ崎の友だちの名前がたくさん出てきました。

櫂末◇たしかにキャラを増やしすぎだというのは、ありますね。２巻のときからすでに「名前をつけるとキャラとして認識されるから」と担当さんに言われて、名前を消したり登場させないようにしたり、努力はしているんですけれど。でもほんとうは、僕がわりとアニメを見るからなのかもしれませんが、全員に名前がついていてほしいんですよ。「通行人Ａ」というのがあまり好きじゃなくて。別に表に出てこなくてもいいんですが、登場人物全員に名前があって、設定もちゃんとあってほしいんです。だから油断すると、すぐに名前が出てきちゃうんですけれども（笑）。

――名もない通りすがりでも、先生の中では個人として確立しているわけですね。

櫂末◇そういうキャラ、けっこういますね。ほんとうは、このキャラとこのキャラは付き合ってるんだよなあ、とか。もう名前もなにも出てこないんですけど。

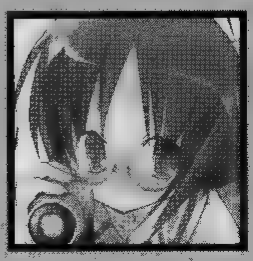
――お話には関係ないんだけど、実は付き合っている。

櫂末◇ええ、まったく関係ないですね（笑）。そういう設定を作るのが好きなんです。

『学校の階段』を書きつづけつつ次の作品を手探りする日々

――去年の１月にデビュー以来、一気に５巻まで続いてきたわけですが、今ふり返って、どんなお気持ちでしょうか。

櫂末◇こんなことを言うとあとが怖いんですけれど（笑）、１年に３冊、４冊書くのが当たり前だと思ってたんですよ。去年は結局３冊書いたんですけど、もうちょっと増やさないといけないんじゃないのか、仕事としてやっていく上で大丈夫なのか、と、ちょっと心配したりしました。だから作業自体はバタバタしていたかもしれないんですけれど、気持ちの上ではそれほど大変でほんとうは、３巻で三枝の代わりに記録係としてＤＶＤプレイヤーを準備しておくキャラが必要だというので、むりやり出してきたキャラだったんです。それがいきなりばっちゃけて、５巻では井筒を押しのけてしまった。セリフ自体は少ないのにキャラとしては意外に主張する子だったんだなあ、と。こんなはずではなかったんですが……作者の予想を裏切ったという点では、いちばんじゃないでしょうか。（笑）。



●遊佐由宇一

基本的には学校や生徒会のことを考えていて、「ほんとうは刈谷が生徒会長にふさわしいのに」というコンプレックスめいた気持ちも抱いている。でもそれを表に出さないで、周りをまぜっ返しておもしろがっているんです。そういうキャラが好きなんですよ。なので、このまま終わってもいいんじゃないかと思っていたんですが、担当さんからは「思わせぶりに置いているんだから、なにかオチをつけないと！」と言われてます。まあ……どうしようかなあ（笑）。

はなかったんです。むしろ『学校の階段』シリーズがいつか終わるとして、その次をどうするか。そっちのほうが気になっています。大先輩の榊一郎先生から「ひとつのシリーズが終わって、次をちゃんと始められてさらにそれが当たって、初めてやっと一息つけるよ」とメールをいただいたりしたので。それを思うと、まだまだですもっとがんばらないと、という意識のほうが強いですね。

PROFILE

櫻末高彰●かいまたかあき
[illegible]年生まれ。大学卒業後、[illegible]に就職。[illegible]しながら[illegible]。[illegible]で電撃小説大賞[illegible]。2006年[illegible]『学校の階段』でデビュー。[illegible]年[illegible]には『学校の階段』実写映画版[illegible]。現在『学校の階段』シリーズは15巻まで発売中。

――次のシリーズの構想で、書きたいテーマはあるんですか？

櫻末　いろいろあるんですけれど、それからちゃんと出版できるものになるかどうかは別問題なんですね。ちょこちょこ書いてはいるんですが、担当さんに「ダメ」と言われつづけたりしているので（笑）。

――『学校の階段』シリーズを書きつづけながら、次を探っている状態なんですね。

櫻末◇そうですね。

――櫻末先生の新しいシリーズを楽しみに待ちつつ、『学校の階段』の続きも楽しみにしている読者に、メッセージをお願いします。

櫻末◇メッセージといいますか、お願いしたいことがあるのですが、本気で階段を走らないでください。これは真面目に、「階段部を作りました」とか、「Vターンやろうよ」と言葉をグキッと捻りましたとかいうお手紙をいただくことがあるんですが、危ないです。「階段を走る」のは読むだけにしましょう。今後、作者ともどもかくキャラクターたちがきっとお話をおもしろくしてくれますので、これからもよろしくお願いいたします。

――ありがとうございました。

●筋肉研究部

そもそもは[illegible]と合わせるためのネタとして出たんですが、一番の[illegible]のときに[illegible]んですが、[illegible]もう[illegible]を[illegible]、[illegible]と言われたんです。「[illegible]んであんなにみんなプレイエルに[illegible]ちのことをいいんですかね？」と言われて、それを読んだみんなが、「なるほど、こういう[illegible]、[illegible]」という[illegible]ってみたい、なんだか、人気がでてきましたみたいで、いつも筋肉研究部のことを[illegible]ます。

●大津先生

「先生キャラがいないね」と言われて出たキャラです。[illegible]部、[illegible]部、[illegible]ではあるんですが、[illegible]ですね。[illegible]ものなんですね。[illegible]ーん、[illegible]を受け[illegible]がいいと思いまして、[illegible]ような気がするんですが、[illegible]先生は[illegible]す。おしゃべりな先生ではないということは、わかってあげてください。

"文学少女"番外編

"文学少女"と恋する牛魔王

野村美月
イラスト/竹岡美穂

遠子先輩二年生、心葉一年生。
清楚で可憐な(?)文学少女をめぐる、ひとつの恋の物語――!?

″文学少女″番外編

「天野遠子おおおおおっ！
好きだぁぁぁぁぁぁ！
大好きだぁあああああ！」

灼熱の夕暮れの河原に、魂の叫びがこだまする。

◇　◇　◇

俺の名は、牛園たくみ。
この春、聖条学園柔道部の主将になったばかりの、筋骨隆々、眉毛ぼしぼし、もみあげばりばりの、好男子だ！
よく練習試合で、他校の教師から、
「引率の先生ですか。今日はよろしくお願いします」
と、バカ丁寧にお辞儀をされるが、それはこの俺の、全身から垂れ流される冒しがたい威厳のためであり、実際の俺は十七歳になったばかりの、牡牛座Ｏ型の、高校二年生男子に間違いない。
人は俺を、炎の闘牛と呼ぶ。
中二のとき、近所の児童公園で飼っていた猪が逃げ出したのを、素手での格闘の末、捕獲したことは、今も伝説となっている。
そんな俺は、恋をしていた。
相手は天野遠子。聖条学園の二年生で、清楚で可憐な大和撫子だ。
はじめて天野を見たのは、ちょうど一年前、高校一年生の初夏だった。
あの日俺は、図書室にいた。
そんな辛気くさい場所、一年に一度訪れるかどうかなのだが、柔道部の先輩から、本の返却を頼まれたのだ。
その先輩は、俺が練習中に力の加減を間違えて、うっかりぶん投げてしまったため、全身包帯だらけになり、入院してしまった。
なので、お詫びのため、俺のできることはなんでもさせてもらおうと、図書室へやってきたのだった。
今ではそのことを、マグマよりも深く感謝している。
何故なら、天野遠子に出会えたのだから。
そのとき天野は、わけのわからん全集が、ずらずら並ぶ棚の前で、本をめくっていた。
腰までこぼれる長い三つ編みは、日本女性にふさわしい黒髪で、ページを見つめる優しげな瞳や、桜色のやわらかな唇や、長い手足やほっそりした腰つきに、俺はいきなり見惚れてしまった。
誰だっ！
あれは誰だっ！
誰なんだぁぁぁぁっ！
頭の中で寺の鐘がゴンゴンと鳴り響き、心臓が鼓動を速め、体中の血液が沸騰し、耳から湯気を吹き出しそうなほどの衝撃だった。
そう、あの瞬間、俺は恋に落ちたのだ。
あれ以来、校内で頻繁に、天野を見かけるようになった。
楚々とした足どりで、廊下を歩く天野。
下駄箱の前で、しとやかに腰をかがめ、靴を履き替える天野。
鈴を振ったような澄んだ声で、友達と楽しそうに語らう天野。
夏服の天野。
冬服の天野。
体操着の天野。
スクール水着の天野。
どの天野も、めまいがするほど素晴らしい。
特に、調理実習中のエプロン姿の天野を、窓からひそかにのぞき見たときなど、あまりの可憐さに、天野との新婚生活を想像し、鼻血を吹いたほどだ。

だが、哀しいことに、天野は俺の存在を知らない。

クラスも、委員会も、部活も別々の、二人の間には、なんの接点もないのだ。

ならば近づきになろうと、この一年、何度も接触を試みたが、すべて失敗に終わっている。

天野は一人でいるとき、大抵本を読んでおり、俺がどれだけ前を横切ろうと、わざとらしく、えへんと咳払いをしようと、**まったく**、ページから目を離さないのだった。

あーその……こういうのを、なんというのだったかな？

本の虫。

いや、文学少女……。

そう、文学少女だ！

天野は、骨の髄まで文学少女なのだ。

登下校の間も、片時も本を手放さず、夢中でページをめくりながら歩く天野に、スルーされること百余回。

ある日、天野が本を読んでいないときを見計らい、その進行方向に、巌のようにどど――んと立ちふさがってみたのだが――。

長い二つ編みや、白桃のように小さな顔を目の前にしたとたん、ケツがむずがゆくなり、汗が滝のように、だくだくこぼれてきて、胃がきりきりと捻れ、背中を向けて、ダッシュで逃げ出してしまったのだった。

猪さえも倒した、最強の男、牛園たくみが！

情けないっ！

情けなさすぎる！

そんな気持ちを、俺は燃えるような夕日に向かって叫ぶ。

「うおおおおお！　天野おおおおおお！

好きだぁぁぁ！　大好きだぁぁぁぁ！」

そうして、写真部の連中から購入した天野のベストショットを切なく眺めては、自分を慰めるのだった。

きっと今に、天野も、俺の存在に気づいてくれるはずだ。

柔道の試合で、投げて投げて投げまくり、勝って勝って勝ちまくれば、俺の勇名は、彼女の耳にも届くだろう。

――わぁ、柔道部の牛園さんですか？　先日の試合の地獄車、感動して涙が止まりませんでした！　大ファンなんです！　握手してください。

そんな風に、天野のほうから頬を恥じらいのピンク色に染め、真っ白な手を差し出してくれる日が、必ず来るっ。

そうだ！　そうだとも！

幸い、天野に片想いしている他の男どもも、片っ端から天野にスルーされ、すごすご引き下がっていたので、俺は胸をなで下ろしていたのだ。

ところが！

二年生に進級した頃から、井上心葉という一年ボーズが、やたらと天野のそばで目につくようになった。

このクソガキは、女のようなめそめそした顔をしており、絞め技をかけたら、骨がぼきぼき折れてしまいそうな貧弱なやつなのだが、なんとっ！　いつの間にか、天野のいる文芸部に入部し、ちゃっかり天野と、先輩後輩の仲になっていたのだった。

くうううううううう。

姑息にも同じ部に入り、天野に取り入るとは――そうか、その手があったか。

しかし、柔道部の主将である俺が、柔の道を捨て、文芸部なんぞに入部するわけにはいかない。

天野は、後輩ができたのが嬉しいらしく、井上のことを、「心葉くん」「心葉くん」と甘い声で呼び、放課後になると、わざわざ井上の教室まで、迎えに行っているらしい。

まるで、母親に送り迎えされる園児のように、天野に手を引かれて、文芸部へゆく井上

〝文学少女〟番外編

の姿を、一度ならず二度、三度と目撃した。
くぉ〜〜〜〜っ、俺の天野と、手っ、手なんぞ繋いでっっっ！　許せんっっっ！
廊下の角に身を潜め、ぎりぎりと歯ぎしりしながら睨みつけ、そのまま文芸部の部室までついてゆき、ドアに耳をあて、中の様子をこっそりうかがうと、天野の声が聞こえた。
「ねぇ、いいでしょう？　お願い、心葉くん」
な、なにを、お願いしてるんだ。
「ねぇ、早く早く〜」
とろけるような愛らしい声。
椅子を、がたがたと揺らす音。
うぉぉぉぉっ、ドアの向こうでなにが起こってるんだ〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！
頭に血が上り、もっとよく聞こうと、ドアに耳をぐいぐい押しつけていたところ、俺を捜しに来た柔道部の後輩に、見つかってしまった。
「あっ、主将！　なにしてるんですか。稽古に行きましょう」
「う、うむっ。ちょっとドアと、組み手をしていてな」
慌てて厳めしい顔で、背負い投げのポーズを決めてみせ、俺は仕方なく文芸部から離れた。
また別の日、同じドアに耳を押しあてたら、今度は、ピリピリ、かさこそと、紙を破るような音（？）がし、天野のすすり泣きが聞こえた。
「ぐす……ひどいわ、心葉くん。先輩のこと、いつもいじめて……こんな……とんでもないものを食べさせて。お、鬼、悪魔」
うおおおおおっっっ！
俺の天野に、なにをしたんだぁぁぁ！
なにを、食べさせたんだぁぁぁ！
とんでもないものって、なんなんだぁ！
井上ぇ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！
殺す〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！
ドアを蹴破ろうとしたとき、また柔道部の後輩がやってきた。
「主将〜、いつまで休憩してるんですか。みんな待ってるんですから、早く戻ってください」
「いやっ、俺は、天野を悪魔の後輩から救わなければ」
「なに言ってるんですか」
もめていたら、天野がドアを開けて、晴れ晴れとした顔で出てきた。
「ごちそうさまでした、心葉くん。明日も、ちゃんと部活へ来てね」
小鳥のさえずりのような声で言い、俺と後輩の横を、はずむような足どりで去っていったのだった。
この翌日も天野は、
「部活の時間よ、心葉くん」
と井上の手を引いて、楽しそうに廊下を歩いていた。
「恥ずかしいから、手を繋ぐのやめてください」
井上が生意気にも、そんなことを言うと、長い睫毛をそっと上げ、不安そうに井上を見上げる。
「じゃあ、手をはなしても、この前みたいに逃げないでね」
「あのとき、校内中を追いかけ回されて懲りました。しかも、途中で息切らして、コケるし」
「わたしは文学少女だから、病弱なのよ」
「ただの運動不足じゃないですか」
「あっ、ひど〜い。先輩への気遣いが足りな〜い。もぉっ、やっぱり、絶対はなさないもん」
「よしてください」
なにやら仲良さげにじゃれあっているのを、俺は壁に両手の爪をがりがり立て、睨んでいたのだった。
ええい、天野からはなれろ、井上心葉！

一年ボーズの分際で、俺の天野と校内で堂々といちゃついて、許せん、許せん、許せ〜〜〜〜ん！

◇　◇　◇

「うおおおおおお！　死なす！
井上心葉〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜！」

そして俺は今日も、河原のど真ん中で、天野への愛と井上への怨念を叫んでいるのだった。

「死なすっ！
死なすっ！
死なす〜〜〜〜〜〜！」

井上は天野と、つきあっているのだろうか？　もう、あんなことやこんなことを、してしまったのだろうか？

二人のあいだには、秘密を共有しているような、親密な空気が漂っているように思える。

「許せんっっっ！　井上心葉〜〜〜〜〜〜！」

夕日に向かって蹴りを入れたとき、背中で声がした。

「人の名前を、河原で連呼するのは、やめてください」

振り返った俺の目の前に、ちょっぴり恥ずかしそうな顔で立っていたのは、な、なんと、井上本人だった。

「うおぉぉ、い、井上っ」

素人のくせに俺のバックをとるとは、生意気な。

とっさにのけぞったあと、これ以上後れをとってなるものかと、眉をギン！　とつり上げ、身構える。

「勝負をしに来たのか？　良い度胸だ。俺はいつでも受けて立つぞ」

「違います。ぼくが、柔道部の牛園さんに勝てるわけないでしょう」

おや？　井上のくせに、なかなか殊勝なことを言うではないか。

「牛園さんは、遠子先輩のことが好きなんですよね？」

「な！　なななななにをいきなり言い出すんだ！」

俺は激しくうろたえた。

「だって、いつも真っ赤な顔で遠子先輩を見ているし、ぼくのことを睨んでいるし」

「うっ、気づいていたのか」

こいつ、侮れん！

井上が肩をすくめ、小声でぼそぼそとつぶやく。

「てゆーか、あんなにあからさまに顔に出されたら、普通は気づきます。気づかないのは、遠子先輩くらいです。あの人は、自分のことには、とことん鈍感だから」

むっ。なんだ、そのいかにも天野のことをわかっているという口ぶりは。やっぱり気に食わん。

「それで？　俺が天野に惚れていると知っていて、なにをしに来たんだ」

戦闘態勢に入ろうとする俺に、井上は真面目な顔で、さらりと言った。

「ぼくが、牛園さんと遠子先輩の仲を取り持ちます」

「なに!?」

目をむく俺に、今度はにっこり笑ってみせる。

「おかしな誤解をされて、殺すの死なすの叫ばれるのは、ぼくも嫌ですから。

ぼくは無理矢理、遠子先輩に文芸部に引っ張り込まれて、おやつの作文を書かされているだけで、彼氏でもなんでもありませんし、いいかげん放っておいてほしいんです。

遠子先輩も、代わりのおやつ係が見つかれば、ぼくにかまわなくなるでしょうから、ちょうどいいです」

「？　？　おやつ係ってなんだ？」

「それは、今は気にする必要はありません。

〝文学少女〟番外編

とりあえず、遠子先輩とうまくいく方法を、ぼくが伝授します」
「おおー　そうか！　井上っ！　おまえ実は、すっっっっごく、いいやつだったんだな！」
大胸筋が震えるほどに感動し、井上の手を、がしっと握りしめると、井上はちょっぴり引きつった顔で言ったのだった。
「なら、明日の昼休みに、図書室へ来てください」

◇　◇　◇

翌日、井上は先に閲覧室のテーブルについて、待っていた。
あらためて見ると、髪がさらさらでお肌がすべすべだ。
うちの部には、いないタイプだな。敵ではないとわかったとたん、可愛らしく思えてくるから不思議だ。
井上は俺に気づくと、「こんにちは」と礼儀正しく挨拶し、やわらかく笑った。
俺が正面の席に、どすんと腰かけると、ノートみたいになっている原稿用紙とシャーペンを差し出し、話しはじめた。
「これから牛園さんに、『三題噺』を書いてもらいます。『三題噺』、ご存知ですか？」
「いいや」
「落語なんかで、三つのお題をもとに即興で噺を作ることです。まず、ぼくが三つ単語を言いますから、それを全部入れて、物語を書いてみてください」
俺は首をひねった。
「むぅ？　その三題なんとかと天野のことと、どう関係があるんだ？」
井上は、微笑んだまま答えた。
「遠子先輩は、甘い物語が、食べてしまいたいほど大好きなんです。だから牛園さんが甘い話を書いてプレゼントしてあげたら、きっと大喜びして、牛園さんのことを好きになっちゃいますよ」
「ほ、本当か！」
「ええ。おかしな話ばっかり書く後輩よりずっとね」
「よぉし！　よくわからんが、書くぞぉ」
「じゃあ、〝自転車〟〝ハンカチ〟〝ひな祭り〟で。慣れてきたら、四十分から五十分で、原稿用紙二、三枚程度にまとめるのが好ましいですけど、今日ははじめてですから、時間がかかってもかまいません。
明日までに書いてきて……って、聞いてます？　牛園さん？」
俺はＨＢのシャーペンを握りしめ、猛然と原稿用紙に文字を書き連ねていた。
「できたぁ！」
「ええっ、まだ、三十秒しか――てか、早すぎ！」
「わはははは、勝負は先手必勝、スピード命だ！」
胸をのけぞらせ高笑いしながら差し出した原稿用紙を、井上が受け取り、読みはじめる。
その顔が、しだいに曇ってゆく。

『ハンカチで、自転車つるりん、あとのひな祭り』

「どうだ？　ハンカチで自転車がすべって、事故って、あとの祭りという意味だ」
「ダメです」
「なにぃ！」
「ダジャレじゃなくて、ちゃんとストーリーを書いてください」
「うむむ……」
「遠子先輩は恋愛小説が好きですから、そういうエピソードを入れると喜びますよ」
「よし、任せろ！」

放課後、俺は井上に、原稿用紙二枚にわたって、ぎっちりみっちりぴっちり書き込んだ、ラブラブストーリーを渡した。
「これでどうだ！」
井上は、なにやら沈痛なおももちで、原稿用紙をめくっている。

「俺は、朝起きた。俺は、便所行った。俺は、快便した。俺は、顔洗った。俺は、鼻かんだ。俺は、歯磨いた。俺は、納豆食った――（※以下延々）――俺は、ハンカチ持った。――俺は、自転車つるりんした。――俺は、彼女とハッピッピした。――ひな祭り、忘れた」

「うーん……」

眉を下げ唸っていたが、しまいに頭を抱えてしまった。そこから上目遣いに、ちらりと見上げて言う。

「基本的なことですけど、文頭は一マス空けてください。改行もある程度してあげないと、文がつまって読みにくいです。〝てにをは〟も、もうちょっと気を配ってあげたほうが……。文末が毎回〝た〟で終わるのも、どうかと……。肝心の内容は……その……」

またうなだれて、口の中でもごもごとつぶやき、

「えーと、とりあえず、これを参考にしてみてください」

一冊の本を差し出した。

「『はつ恋』？　ツルリンゲネフ？　ハツが恋をするのか？　割烹料理店の、板前物語か？」

「ツルリンではなく、ツルゲーネフです。それと、魚のハツではなくて、初めての恋の初恋です」

「おお！　そうか！　そっちの恋か！」

初恋。

胸に迫る、美しい響きだ。

「薄いのですぐ読めますから。こんな感じで書いてもらえば、遠子先輩も牛園さんに、夢中になっちゃうと思いますよ」

「そうかそうか、よぉし！　読むぞ～～～～～」

稽古の合間に、俺は早速ページをめくった。

周りで、ざわめきが起こる。

「主将が、本を読んでいる！」

「『はつ恋』だって！　なにがあったんだ？」

ひそひそ。

どよどよ。

おや？　なにやら耳がこそばゆいな。

親指で、耳穴をぽりぽりほじくりながら、読書を続ける。

と、いきなり、津波のような眠気が襲ってきた。

「ぐー」

「わっ！　主将！」

「しっかりしてください！　主将！」

気がつくと、部員たちに肩をつかまれ、揺さぶられていた。

「ん？　俺は今、眠っていたのか？」

「突然、がくんと倒れたので、びっくりしましたよ～」

「すまん。だが、読書を続けるので、かまわ

『はつ恋』？　ツルリンゲネフ？
割烹料理店の、板前物語か？

〝文学少女〟番外編

んでくれ」
そう言って、またページをめくると、
「ぐー」
「主将おおおお！」
何故か、ページをめくるごとに、強烈な眠気が押し寄せ、頭を強打されたかのように、意識が真っ白になるのだった。

◇　◇　◇

「どうやら、俺は、本を一度に一ページ以上読むことのできない体質らしい」
翌日の昼休み。
図書室で打ち明けると、井上は目を丸くし声を詰まらせた。
「そ……それって、現国の試験のときとか、どうしてるんですか」
「どうもしない。潔く赤点を取得するだけだ」
「潔く……取得……。あのでもっ、入試は……。うち、結構、偏差値高かったはずですけど……」
「受けてない。俺は、見ての通りのスポーツ推薦だ。これまですべての教科は、筋肉で補ってきた」
きっぱりはっきり告げると、井上は感銘を受けたのか、絶句してしまった。
「まぁ、それでも、天野のためなので、二十回ほど休憩をはさみながら、二十ページほど読んでみた」
「……お疲れ様です」
井上が深々と頭を下げ、「どうでしたか？」と力なく尋ねる。
「うむ。いきなり、セルセルなんとかビッチと、ヴラヴラなんとかビッチが出てきてな、ヴラヴラが、十六のときの恋バナをはじめるのだが……、井上よ、ロシア人の名前は、みんなこんなにわかりにくいのか？」
「いや……それは……」
「公園の名前が、また舌を噛みそうでな、ネスクーチヌィとか言うんだ」
「どうして、公園の名前だけ、正確なんですか」
「あんまり珍妙で、何度も口に出して練習したからだ」
「しないでください。早口言葉じゃないんですから」
「おおそうだ！　他にも、なんとかキナキナとかなんとかフェチとか、ジダンダとかいう女がいたな」
「ジダンダじゃなくて、ジナイーダです。せめて、ヒロインの名前くらいは覚えてくださいよ」
泣きそうな顔で訴えたあと、井上が額に手をあてる。
「……すみません。牛園さんの体質までは、

考えていませんでした。それじゃあ、読み終わるまでに、だいぶ時間がかかりそうなので、てっとりばやくいきましょう」

「おお、なにか、秘策があるのか！」

盛り上がる俺に、井上はどこか投げやりな様子で、話しはじめたのだった。

◇　◇　◇

『遠子先輩が目の前に来たら、本を落としてください』

井上の指示は、これだけだった。

正直、よくわからんかったが、翌日の昼休み、俺は『はつ恋』を胸に抱き、廊下で待ち伏せをした。

来たっ。天野だ！

腰まで届くしなやかな二つ編み。ほっそりした手足、楚々とした物腰。

ああ、今日も、なんと清らかで美し～。

俺の傍らを、静かに通り過ぎてゆく天野に、ぼーっと見惚れてしまい、はっとする。

いかん！　天野が行ってしまう！

慌てて手を開き、『はつ恋』を落とす。

とたんに、天野が振り返る。

今まで一度も俺に関心を示すことのなかったあの天野が！

俺の目の前で、ぴたりと立ち止まり、俺の足元に視線を注ぎ、細い腰をかがめてしゃがみ込み、白魚のような手で、俺の本を大事そうに拾い上げた！

「これ、あなたの本？」

鈴を振ったような可憐な声で、尋ねる天野。知的な黒い瞳が、優しく好意的に、俺を見つめている。

「そ、そうだっ」

心臓がばくばくと荒れ狂い、汗が吹き出してきて、そう答えるのが精一杯だった。

天野が、おだやかに微笑む。

「ツルゲーネフの『はつ恋』ね。素敵だわ」

す、すすすす素敵と言ったぞ！

天野が俺のことを、素敵って！

ますます頭が沸騰し、鼻血を吹いて倒れそうな俺に、天野は本を、ぎゅっと胸に抱え、唇をほころばせ、瞳をきらきら輝かせて、親しげに話しはじめた。

「イワン＝セルゲーエヴィチ＝ツルゲーネフは、ロシアの作家よ。母親は広大な領地を所有する女領主、父親は彼女より六歳年下の、没落貴族の伊達男だったわ。

そんな二人の間に、ツルゲーネフは、西暦一八一八年、次男として生まれるの。

一八六〇年に発表された『はつ恋』は、彼の中期の傑作で、主人公ヴラジミールの両親に、彼の両親を重ねることができるわ。そんなことから、ツルゲーネフの自伝的な作品とも言われているのよ」

ああ、天野の声が、俺の耳をこしょこしょとくすぐっている。

ああ、ああ、なんて楽しそうなんだ、天野。

「そう、『はつ恋』はまるで、カラメルソースをたっぷりかけた、焼き林檎のようねー

短い物語の中に、人を好きになる歓びや、ときめきや、切なさが、ぎゅっと凝縮されていて、カラメルのようにほろ苦くて、焼き林檎のように熱くて、噛みしめると甘酸っぱい汁が、バターとラム酒の香りとともに、こぼれ出してくるのよ。

物語は、主人公のヴラジミールが、過去を振り返る形式で語られるわ。

十六歳のとき、ヴラジミールは、彼の屋敷の近くの別荘にやってきた年上の令嬢ジナイーダに、恋をするの。

ジナイーダは、無邪気で奔放で、いつも大勢の取り巻きに囲まれて、女王のように振舞っているわ。

そんなジナイーダに惹かれてゆく、ヴラジミールの様子が、たまらなく可愛くて、どきどきしてしまうの！

ジナイーダにからかわれて、怒ったり、ムキになったり、がっかりしたり、そんな思春期の少年の純粋な気持ちが、うっとりするよ

〝文学少女〟番外編

うな瑞々しい文章で綴られてゆくのよ。
ヴラジミールと、お父さんとの関係が、また切なくていいの！　お父さんのことを気にしていて、ひそかに愛してほしいと願っているところなんて、まるで子犬みたいで、胸がキュンとしてしまうわ。
お父さんへの憧れ、ジナイーダへの憧れ、それがすべて砕かれたときの、痛みと哀しみ……。林檎にかけた苦いカラメルソースが、冷えて飴状になり、それをパリパリと小さな音を立てて噛るように――胸の奥に甘いやるせなさが、どんどん溜まってゆくの。
けど、そこがとっても美味しいのよっ」
天野が目を閉じ、感極まったように、本をぎゅ――っと胸に抱きしめる。
さっきまで、俺の胸に押しあてられていた本が、あ、天野の、天野の、むむむ胸に！
天野の胸は、非常にささやかで、つるりんだ。
けどそんなこと問題じゃない！
いや、むしろ、そこがいい！
美少女は胸も、しとやかに慎ましくあるべきだ！
いやいや、なにを考えているんだ、俺はぁあああっ。
「ああ、後半に向かって加速してゆく切なさに、ときめきが止まらないわ。まさに、青春の一冊ね」
俺も、心臓の高鳴りが止まらない。
そうか、これが青春か！
「あ、天野……っ」
俺は夢中で、声を絞り出した。
今なら言える。いや、熱い血潮が全身を駆けめぐり、言わずにいられない。
「す、すすす、好きだぁあああ！」
おおっ！　ついに告白したぞ。
天野は、名残惜しそうに『はつ恋』を両手で俺のほうへ返し、とびきり可愛らしく――そう、まるで春に咲く花のように、にっこりと、笑った。
「ええ、わたしも、大好きっ」

◇　◇　◇

夢じゃなかろうか。
天野が、天野が、大好きと言ってくれた。
天野も俺のことが、大好きって。
「やった！　やったぞ！　井上！」
次の休み時間、俺は井上のクラスに突進し、目を丸くする井上を抱き上げ、くるくる回った。
「う、牛園さん……っ！」
「わはははは！　作戦は大成功だ！　おまえのおかげだ、井上！」
「そ、それはよかったです。だから、はなしてください！　回らないでください！」
「わはははは！」
俺は、ますますくるくるし、井上の頬に顔を、わしわし押しつけながら叫んだ。
「井上！　俺は俺の心のど真ん中に、恩人であるおまえの銅像を建て、生涯あがめ奉るぞおおお！　ひゃっほー！　俺たちは両想いだ～～～～～！」
「お願いですから、銅像とか建てないでください。両想いとか、叫ばないでください！　はなしてくださ～～～～～い」
井上は、真っ赤な顔で恥じらっていた。
ふっ、謙虚なやつめ。
……けれど、両想いになった男女というのは、なにをすればよいのだろう。
とりあえず、一緒に帰るところからはじめるべきだろうか？

放課後。天野のクラスへ、そわそわと足を運ぶ。
教室の後ろの入り口から、そっと中をのぞき見ると、おお、いた、天野だ。鞄に教科書をつめて、帰り支度をしている。
うつむいた横顔にこぼれる黒い二つ編みが愛らしい。
「あま――」
声をかけようとしたとき、天野がぱっと顔を上げ、俺のほうを見た。

おおっ！

愛のテレパシーが通じたのか！

天野は、抑えられない愛情のこもった花のような微笑みを浮かべ――は、しなかった。

それどころか、頬をぷんとふくらませ、眉を吊り上げ、抑えきれない怨みのこもった、憎らしそうな目で、睨んできた。

俺は激しく動揺した。

何故だっ!?

何故、そんな険しい目で、俺を見る？

まるで、ハブを見つめるマングースのような、クマを見つめるマタギのような、武蔵を見つめる小次郎のような、闘志あふれる眼差しで。

ひょっとして、俺は天野に嫌われているのか？　何故？　昼休みに、両想いになったばかりなのに。

何故、急に、大嫌いオーラを発散させている？

天野は、今にも尻尾を逆立て、ぐるぐる唸り声をあげて飛びかかってきそうだ。

汗がどっと吹き出し、俺はたまらず駆け出した。

「井上えええええ！！！！」

廊下を歩いていた井上をつかまえ、校舎の裏に引っ張ってゆく。

「どういうことだ井上！　何故、俺が天野に睨まれなきゃならんのだぁぁっ！」

「そ、そんなこと言われても、ぼくにもなにがなんだか……うわっ！」

井上の襟首をつかみ上げ、力のかぎり揺さぶる。

「おまえが、天野になにか言ったんじゃないのか！　ええい！　どうなんだぁ！」

井上が、宙に浮いた足をばたばたさせて、

「ぼ、ぼくは、なにもしてないですよぉ」

と叫んだときだ。

「心葉くんをはなしなさい！　この牛魔王！」

振り返ると、頬をふくらませ、目を吊り上げた天野が、炎を背負って立っていた。

なななな何故、天野がここに？

そ、それに、今、牛魔王って……？

驚きのあまり手から力が抜け、井上がどさっと草の上に落ちる。

「心葉くん！」

天野が俺を突き飛ばして、井上に駆け寄り、地面に膝をついて、心配そうに世話を焼く。

「大丈夫？　心葉くん？　ああ、襟元のボタンが千切れているわ。可哀想に。心葉くんが、牛魔王に引きずられていったって聞いて、急いで助けにきたのよ」

井上は、困ったような顔をしている。

どういうことだ？

一体なにが起こっているんだ？

天野は、井上を背中にかばうようにして立ち上がると、顎をそらし、不倶戴天の敵を見る目で俺を睨んだ。

「あなたが心葉くんを狙っていたことを、わたしが知らないとでも思っていたの？　心葉くんのクラスで、くるくる回っていたのを、しっかり目撃させてもらったわ。こんな時期に、新入生の勧誘をするなんて卑怯よ。心葉くんは文芸部のものよ！　柔道部なんかには、絶対に渡さないわ！」

心葉くんは、わたしのものよ！　という声が、頭の中でガンガンとリフレインする。

「何故だ！　天野遠子っ！　大好きと言ったのは嘘だったのか!?」

叫ぶ俺に、天野が胸の前で腕を組み、断言する。

「ええ、ツルゲーネフも『はつ恋』も大好きよ！　けど、いくら好物が同じでも、わたしの大事なおやつ係に手を出すのは許せないわ！」

好物？　ツルリンゲネフ？　それに、また言った！

わたしの大事な心葉くんと――！

「柔道部には、可愛い一年生がたくさんいるじゃない。文芸部には、心葉くんしかいないんだから、とっちゃダメぇ！

〝文学少女〟番外編

そうよ、軟弱な心葉くんには、柔道部より、文芸部のほうが、ずぅぅぅぅっと合ってるんだから！　心葉くんと両想いなのは、文芸部のほうよ！

これ以上、強引な勧誘を続けるなら、文学少女のわたしが、受けて立つわ！　さぁ！　どっからでもかかってらっしゃい！」

天野の後ろで、井上が赤い顔で、口をぱくぱくさせている。

わたしには心葉くんしかいないとか、とっちゃダメとか、両想いだとか、かかってらっしゃいとか、天野がなにか言うたび、胸を巨大な包丁で、ぐさぐさ突き刺され、俺は泣きながら走り去った。

「うわあああああ～～～～～～～～！」

ぐすっ、うぐっ、ひっく、えぐえぐっ、ぐすっ、ずるるるるっ、ひっく、ぐすん……。

河原で、目の幅サイズの涙を流しながら、『はつ恋』の続きを読む。

いつもは一ページで眠気が襲ってくるのに、今日は胸が痛くて、ちっとも眠くならない。

ひっく、ぐすっ、ひどい、ひどい、ひどすぎる。ずっと好きだったのに。牛魔王だなんて。ぐすっ、ひっく……。

夕日が河原を赤く染める頃、柔道部の連中が迎えに来た。

「主将、元気を出してください。主将には、俺たちがいるじゃないですか」

「そうすよ、一緒に全国大会へ行きましょう」

「お、おまえたち～～～～～～！」

「主将おおおお！」

部員たちが次々俺に抱きついてくる。

俺もだくだく泣きながら、そいつらにしがみつく。

そうだ、俺には柔道があるし、素晴らしい仲間たちがいるじゃないか！

天野なんか、天野なんかぁぁぁ！

それでも、涙の向こうにかすむ夕日は、焦げすぎた焼き林檎のように、ほろ苦かった。

しょっぱい涙に濡れながら、仲間とともに明日への誓いをする俺の胸に、さっき読んだばかりの、『はつ恋』の言葉が、ひっそりと浮かんだのだった。

『信じて下さい、ジナイーダ・アレクサンドロヴナ、あなたがたとえ、どんなことをなさろうと、たとえどんなに僕がいじめられたろうと、僕は一生涯あなたを愛します、崇拝します』

〝文学少女〟と恋する牛魔王　おしまい

参考書
『はつ恋』ツルゲーネフ著、神西清訳
発行　株式会社新潮社
昭和二十七年十二月二十五日　発行
昭和六十二年一月二十日　七十二刷改版
平成十八年八月二十日　九十九刷

Cooking of "Bungaku-Syoujyo"

"文学少女"のつくり方

ビター&スイートな"文学少女"の材料は、
野村先生の文章に、竹岡先生のイラスト、隠し味に古典名作を少々……。
ということで、"文学少女"シリーズを語るのに欠かせない、竹岡美穂先生のイラスト。
ここでは、4巻までのキャラクターたちの、秘蔵設定ラフを大特集します!!

"文学少女"天野遠子

Toko Amano

野村先生と担当が惚れ込んだキャララフ。1巻の口絵になりました。

髪型と制服が決まらなくて、もういっそ「大正時代の女学生」からはじめればなにか固まるかもと……。(by竹岡)

野村美月Comment

個人的に、三つ編みが大好きだったりします。ほどいたときのギャップがまた、たまらないのですよ。竹岡さんの描かれる三つ編みも、清楚で可憐でうっとりです。

井上心葉

Konoha Inoue

第1稿

前髪がやや短めで少年ぽいです。

決定稿

文芸部の日常風景。

野村美月Comment

ラフをいただいたとき、えらく美少年だったので、ドキドキしてしまいました。イラストで一番得しているのは、彼ではないでしょうか(笑)。

姫倉麻貴

Maki Himekura

第1稿

麻貴が幼めでふつーのお嬢様に見えます(笑)。

琴吹ななせ

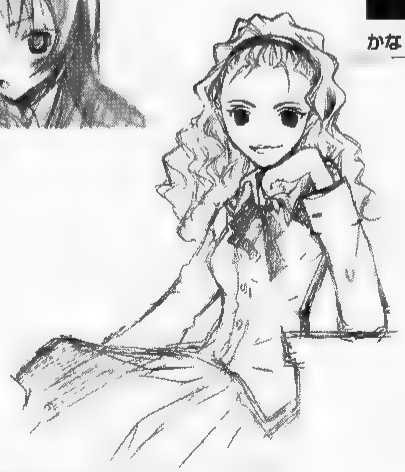
Nanase Kotobuki

分かりにくいですが、パジャマのななせ。2巻口絵の没ラフです。

1巻口絵ラフ。結局、決定稿は1と2の中間になりました。

第2稿

かなり獰猛な感じ。



野村美月Comment

ななせの、"不器用で意地っ張りな、普通の女の子"というイメージは、竹岡さんのこのラフから、固まっていったように思います。麻貴は、逆にどんどん色っぽくなってゆきましたね。

死にたがりの道化（ピエロ）登場キャラ

竹田千愛
Chia Takeda

3巻で再登場しました。
相変わらず子犬っぽい。

添田康之&理保子
Yasuyuki Soeda & Rihoko Soeda

こんなに格好良くて美人なのに、ほとんどイラストにはならなかった可哀想な大人二人。

野村美月Comment

ラフの添田さんがカッコよくて、担当さんと盛り上がりました。もっと見せ場をあげたかった！　千愛は、今後がとっても気になる子です。

飢え渇く幽霊（ゴースト）登場キャラ

櫻井流人
Ryuto Sakurai

第1稿

黒崎保
Tamotsu Kurosaki

決定稿

九條夏夜乃&雨宮蛍
Kayano Kujyo & Hotaru Amemiya

野村美月Comment

このホラー黒崎さんは、非常〜〜〜にインパクトがありました。マズイ、怖すぎて変質者に見えてしまう……と、美形描写をちまちま加えて、イラストもマイルドにしていただいたのでした。

繋がれた愚者（フール）登場キャラ

細眉白面な芥川と、精悍味をプラスした芥川。どちらも、中性的でやや幼い顔立ちの心葉とは好対照。

芥川一詩
Kazushi Akutagawa

前髪の揃った更科は、やや還子にイメージが近づくのでNGに。令嬢風の横分け髪に決定しました。

更科繭里
Mayuri Sarashina

野村美月Comment

やっとイラストになったーと、感無量な芥川くんです。彼はこの先相当苦労するでしょう。更科さんにしといたほうが、よかったかもよ、一詩くん。

穢名の天使（アンジュ）登場キャラ

毬谷敬一
Keiichi Mariya

遠子不在中の天然ボケ＆マイペース担当？

鏡粧子
Syoko Kagami

流行顔というよりオールドシネマに出てきそうなクラシック美女。（by竹岡）

臣志朗
Shiro Omi

決定稿

より心棄と対比のつく、猫っ毛＆色のない髪に。

第1稿

野村美月Comment

臣くんは最初、鬱々～とした、地味な子でしたが、描写を変更して、イラストも白風味にしていただきました。毬谷先生と粧子さんは、いつか幸せになってもらいたいです。

募集!

遠子先輩に捧げる文学レシピ

あなたのお勧めの物語を、〝文学少女〟およびその読者の皆さんに、遠子先輩風に紹介してみませんか？　古今東西の文学作品からライトノベルまで、ジャンルは何でもOK！　お送り頂いた「レシピ」は、〝文学少女〟のショートショートも連載中の、ファミ通文庫ウェブサイト「FB online」にて紹介させて頂きます！

例）『新美南吉童話集』収録「おじいさんのランプ」

新美南吉：著、岩波文庫、岩波書店

倉の隅から見つかった古いランプ。それを手に、おじいさんが、昔、故郷の村にランプを売り、村中に明るい灯を点した、ひとりの男の思い出を語るというこの物語は、じっくり煮込んだ厚揚げと蕪の煮物のようです。

暗い村から出てきて、夜も明るい町を見たときの、少年の感動。そして、その光をもたらしたランプが、今度は電燈によって不要になっていくと悟ったときの葛藤と悲哀、その末の決断は、そっと噛むと熱い出汁がじわりと染みだしてくる厚揚げのように味わい深く、それが蕪のほろほろと崩れるような、切ない歯ごたえと甘みによって引き立てられて、素朴だけれど胸の温もる、美味しい物語に仕上がっています。

by エセ文学少女ゆっきー

■以下の情報を、必ず入れてください。

・書名（複数収録の中の1作品紹介の場合には、「書籍タイトル」収録「短編タイトル」）、著者名・訳者名、レーベル、出版社名
・簡単な内容紹介／味（料理）に喩えると？

■官製ハガキ、もしくはメールにて投稿してください。

住所、氏名、ペンネーム、電話番号、性別、年齢、職業も忘れず明記してください。

<ハガキの送付先>
〒102-8431　東京都千代田区三番町6-1
株式会社エンターブレイン
ファミ通文庫編集部
「遠子先輩に捧げる文学レシピ」募集係

<メールの送付先>
ファミ通文庫ウェブサイト「FB online」のメールコーナーからお送りください。

※「カテゴリー」では「その他」を選び、1行目に「遠子先輩に捧げる文学レシピ」と入れてください。

※ご提供頂くお客様の個人情報につきましては、弊社のプライバシーポリシー（URL:http://www.enterbrain.co.jp/）の定めるところにより、取り扱わせていただきます。

■第1次〆切：2007年6月末日

その他、詳細は「FB online」の「"文学少女"の今日のおやつ」コーナーにてご確認下さい。

◆シリーズ情報◆

『〝文学少女〟シリーズ』

物語を愛するあまり、ホントにむしゃむしゃ食べちゃう文芸部部長・天野遠子――自称〝文学少女〟と、そんな彼女に振り回されつつ、少しずつ成長していく後輩の井上心葉。紡がれる悲しく苦い物語たちに、〝文学少女〟の〝想像〟が、ひと筋の光射すような〝結末〟をもたらす、ほろ苦学園ミステリーシリーズ!!

「〝文学少女〟と死にたがりの道化（ピエロ）」

「〝文学少女〟と飢え渇く幽霊（ゴースト）」

「〝文学少女〟と繋がれた愚者（フール）」

「〝文学少女〟と穢名の天使（アンジュ）」

バカとテストと召喚獣
僕と暴徒とラブレター
井上堅二
イラスト/葉賀ユイ
文月学園の超おちこぼれ・吉井明久の靴箱の中に、
な・な・なぜかラブレターが！

吉井明久さまへ

突然ですが、吉井君にどうしても伝えたいことがあって、お手紙を書かせていただきました。驚かせてしまったらごめんなさい。

吉井君は覚えているでしょうか？　私と吉井くんは小学校三年生のころ、初めて一緒のクラスになったんですよ？　そのときから、ずっと面白い人だなあと思っていました。クラスのムードメーカーで、いつも楽しそうで、なにか問題が起きたときはみんなを励ましてくれたり、初めて私がクラス委員になったとき、色々助けてくれたり。そんな吉井君のことを、偉いなあとも思っていました。グループに加わって遊んだりとかはしていませんでしたけど、吉井君がグラウンドや教室にいるのを見ているだけで、心が温かくなりました。

中学はクラスが別々になってしまいましたが、噂は時々聞こえていました。たまにバッタリ会って、挨拶すると、なぜかドキドキしてしまって。あれ？　なぜだろう、と思っていました。

高校も偶然でしたが、同じ学校だと知って、本当に嬉しかったです。

そして、振り分け試験のときに私をかばってくれたことで、吉井君のことを本当に意識するようになって――これは好きだってことなんだな……って、今更なんですが、気がつきました。

あなたのことが好きです。

今はこの気持ちを伝えるだけで精一杯なんですが、吉井君に私の気持ちを知ってもらって、徐々にもっと仲良くなれたらいいな、と思っています。

一方的な手紙でごめんなさい。あと、誰かつきあっている人や好きな人がいる場合は、本当にすみません。

でもでも、好きです。大好きです。

☆

「う～ん……ありえない登校時間だ」

晴れ渡る空。澄んだ空気。暖かな陽射し。

いつもより一時間早いだけで、雑多なはずの通学路はガラリと様相を変えて、ひとけのない爽やかな散歩道のような雰囲気になっていた。

「早起きは三文の得って言うし、何かイイコトがあるといいなぁ～」

昨日学校から帰った後ちょっと昼寝のつもりで横になったのに、気がつけば朝まで寝ていた。おかげで今朝はいつもより二時間も早く目が覚めてしまった。

早朝にすることなんて思いつかずに学校に来ちゃったけど、こんなに天気がいいなら洗濯でもしてきたら良かったかもしれない。

「さてさて、こんな時間から何をしようかな――ん？」

そんなことを考えながら歩いていると、校門の近くに見知った後ろ姿を見かけた。刈り揃えられた髪に浅黒い肌、無骨なシルエット。あれは鉄人――もとい、西村先生か。一応担任だし、挨拶でもしておくかな。

「先生、おはようございまーす」

後ろから元気に声を掛けてみる。すると、鉄人は今まで見たこともないような爽やかな笑顔で振り向いて、

「おう、おはよう！　部活の朝練か？　感心だ――」

動きが止まった。

「先生？」

「――すまん。間違えた」

「人違いですか？　いやそんな、別に謝る必要なんて」

「吉井、こんな早朝に学校に来て、今度は何を企んでいる」

そう言って爽やかな笑顔から一転、警戒心をあらわにした表情になった。
「あの……間違えたのは接する態度ですか？」
僕、そんなに悪いことばかりしていたかなぁ。
「お前を警戒するのは教師として当然のことだが……。それはそうと、丁度良かった。《観察処分者》のお前がいるなら手間が省けるからな」
「げ。《観察処分者》ってことは、また力仕事ですか？」
「そういうことだ。占くなったサッカーのゴールを撤去してくれ」
「やれやれ。早起きなんてするんじゃなかったなぁ……」
ついつい溜息が出てしまう。
《観察処分者》。これは僕の通う文月学園にある『試験召喚システム』という特別なシステムを使った罰則で、主に教師の指示した雑用を召喚獣を使ってこなす係のことだったりする。
科学とオカルトと偶然によって作られた『試験召喚システム』というものがある。これはテストの点数によって強さが決められた召喚獣を喚び出すことのできるもので、ここ文月学園はそれを使って生徒の勉強に対するモチベーションを上げさせるという試みを行っている実験校だ。その召喚獣を使った試験召喚戦争なんていう制度があって、確かに普通に勉強するよりはやる気が出ているかもしれない。
「後悔するのは早起きではなく、観察処分を受けたお前の態度だということに気付くべきだと思うがな」
呆れたように鉄人が僕の顔を見て溜息をつく。
「うぅ……。僕はそんなに悪いことなんてしていないのに……」
「……どの口でそんなことが言えるんだ。いいからグラウンドに来い」
「へーいへい」
鉄人に連行されるように校庭へと足を向ける。トラックを走っているのは、朝練をしている陸上部だろうか？　朝から元気だなぁ。
「吉井、頼んだ」
「了解です。――試獣召喚」
鉄人の立ち会いの下、試験召喚獣を喚び出す。
足元に浮かび上がる魔法陣のような幾何学模様。そして傍らに現れるデフォルメされたもう一人の僕。三頭身程度の姿は愛嬌満点だけど、その腕力は凶悪なほどに強い。召喚者の点数によって変わるけど、僕程度の点数でも成人男性の何倍もの強さを持っている。だからこそこうやって雑用に使われちゃうんだけどね。
「それじゃ、そのゴールを持たせて」
「はいよ」
僕の指示を受けて召喚獣が身の丈の何倍もあるサッカーゴールを軽々と担ぐ。
「街外れの産廃場まで行ってこい」
「何キロあると思ってんですか!?」
せめて近くに運搬用のトラックぐらいは用意しておくべきだと思う。
「冗談だ。ゴールネットを外して校門前に邪魔にならないように置いておけばいい」
「なんだ、ビックリした～」
「お前が破壊した校舎の修繕費用を考えれば、その程度の罰も当然だと思うがな」
「うぐ……」
そりゃ、ちょっとは悪いと思うけど、こっちにはこっちの事情があったわけで……。
「外したネットは別口で処分するから、とりあえずは体育用具室にでも置いといてくれ」
「はぁ……。今日も一日イイコトなんてなさそうだなぁ……」
早起きは三文の得、なんて誰が言い出したのやら。

☆

鉄人の指示通りネットを外してゴールを運んでいたら、あっという間に朝のＨＲの時間

寸前になっていた。外したネットを体育用具室に運んでいる時間はないし、一旦教室に持って行くことにしよう。

そんなことを考えていた僕を迎えたのは、靴箱に置かれていたラブレターのような封筒だった。

「なっ、なんじゃこりゃぁっ!?」

思わぬ事態に叫び声が出てしまう。おおお落ち着け、吉井明久！　早合点は命取りになるぞ！　まずはじっくりと中身を確認してから――

「どうした、明久？」

「おわぁっ！」

声を掛けられて、咄嗟に手紙をポケットに隠す。ビックリしたぁー！

「あ、ああ。雄二か。おはよう」

「おう」

片手を上げて挨拶に応えたのは、クラスメイトの坂本雄二だ。どこから見ても頭が良さそうには見えないけど、一応僕の所属するFクラスの代表をやっていたりする。

「い、いやー、良い朝だねっ！　凄くイイコトがありそうな朝だよねっ！」

「？　何を動揺している？」

「べべべ別に動揺なんて……！」

「まさか、さっきチラッと見えた手紙のようなものは――」

くっ！　見られていたか！　まずいな。こんな手紙を貰ったことが発覚したら、クラスの連中は妬みで僕をボコボコにしようとするはず！

「た、ただのプリントだよ！　それよりもそろそろHRが始まるから急ごう！」

ごまかす為に、サッカーゴールのネットを担いで走り出す。実際に時間もギリギリだし。

「お、もうそんな時間か。校内にいるのに遅刻にされても癪だな」

僕の後ろに雄二も続いてくれた。良かった。どうやらごまかせたみたいだ。

さて、問題はこの手紙をどこで読むかだけど……。人目につくところだとイロイロとまずいしなぁ……。どうしよう？

☆

「工藤」「はい」「久保」「はい」

チャイムと同時に教室に駆け込むと、間髪入れずに鉄人がやってきて出席を取り始めた。顔に似合わず時間に正確な教師だ。

「近藤」「はい」「斉藤」「はい」

淡々と進む気だるい毎朝の恒例行事。鉄人の呼び声にクラスの皆は眠そうに返事をしていた。

静かな教室にのどかなひとときが訪れている。春の陽気の中、今日といういつもと変わらない平穏な日常が――

「坂本」「……明久がラブレターを貰ったようだ」

『殺せぇえっ!!』

雄二の一言でプチ壊された。

「ゆ、雄二！　いきなりなんてことを言い出すのさ！」

明らかに小声だったのにクラスの誰もが聞き逃さなかった様子。ここの連中は本当にどこかおかしいとしか思えない。

『どういうことだ!?　吉井がそんな物を貰うなんて！』

『それなら俺たちだって貰っていてもおかしくないはずだ！　自分の席の近くを探してみろ！』

『ダメだ！　腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない！』

『もっとよく探せ！』

『……出てきたっ！　未開封のパンだ！』

『お前は何を探しているんだ!?』

怒号が飛び交う我が教室。予想通りクラス全員の妬みに狂う光景が展開されていた。

「お前らっ！　静かにしろ！」

――シン

と、鉄人の一喝でクラスに静寂が舞い戻ってくる。ふぅ、良かった。

「それでは出欠確認を続けるぞ」

出席簿を捲る音が教室内に響く。
「手塚」「吉井コロス」「藤堂」「吉井コロス」「戸沢」「吉井コロス」
「皆落ち着くんだー　なぜだか返事が『吉井コロス』に変わっているよ！」
「吉井、静かにしろ！」
「先生、ここで注意するべき相手は僕じゃないでしょう!?　このままだとクラスの皆は僕に殴る蹴るの暴行を加えてしまいますよ！」
「新田」「吉井コロス」「布田」「吉井マジ殺す」「根岸」「吉井ブチ殺す」
き、聞いてない……。なんて扱いの悪さだろう。
「よし。遅刻欠席はなしだな。今日も一日勉学に励むように」
出席簿を閉じ、教室を後にしようとする鉄人。この男には教室内に漂う殺意が感じられないのだろうか。
「待って先生！　行かないで！　可愛い生徒を見殺しにしないで！」
保身の為に、必死に鉄人を呼び止める。もうなりふり構ってなんかいられない。
「吉井、間違えるな」
鉄人が扉に手をかけたまま告げる。間違い？　何が言いたいんだ？
「お前は不細工だ」
「不細工とまで言われるとは思わなかったよバカ！」
「授業は真面目に受けるように」
「先生待って！　せんせーい！」
僕の叫びも空しく、鉄人は教室を出て行ってしまった。これでもうクラスに満ちる殺意に歯止めをかけるものはない。一時間目担当の先生が来る前に教室内で暴動が起きるのは必至だ。
「アキ、ちょ～っと話を聞かせてもらえる？」
グワシ、と関節が外れてしまいそうな勢いで肩を掴まれた。
「あ、あはは……。美波、顔が怖いよ？」
「手紙を貰ったの？　誰からなの？　どんな手紙なの？」
愛嬌のある吊り目がいつもより更に吊り上がっている。トレードマークのポニーテールが角に見えるほどに怖い表情だ。
「あー、えっと、そのー」
正直言って、咄嗟に隠したせいで手紙のことは殆どわからない。むしろ教えて欲しいくらいだ。うぅー、早く一人になって内容を確認したい！
「いいからおとなしく指の骨を――じゃなくて、手紙を見せなさい」
なんだ!?　断れば僕の指の骨に一体何が起こるんだ!?
「あの、明久君」
と、鈴を転がすような声が後ろから聞こえてきた。
「ん？　なに？」
声の主は我らがFクラスの紅一点、姫路瑞希さんだ。ふわふわと柔らかそうでボリュームたっぷりな髪と胸に、可愛らしい顔。この姿を見たら今日も一日頑張れるって男子も少なくはないはずだ。
「その……できれば、ですけど……私にも手紙を見せて欲しいです……」
もじもじと困ったように俯いている姿も可愛い。けど、だからと言ってそのお願いを聞き届けるわけにはいかない。
「その……ごめん」
だからその分、誠意を込めて謝った。
「でも、でも……！」
それでも食い下がってくる姫路さん。けど、
「いくら姫路さんの頼みでも、コレばっかりは」
「でも、私は明久君に酷いことをしたくないんです！」
「ちょっと待って！　姫路さんまで僕に暴行を加えることが前提なの!?」
すっかり姫路さんも最低学力を誇るFクラスに馴染んできたみたいだ。
「皆、ちょっと落ち着け」
そんな中、パンパンと手を叩く音が教卓の方から聞こえてきた。このFクラスの代表であり、僕の悪友でもある坂本雄二の声だ。

「今問題なのは明久の手紙を見ることじゃない」

雄二がクラスの皆に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。ふむふむ。さすが、腐っても友達は友達だ。

「問題は、明久をどうグロテスクに殺すかだ」

「前提条件が間違ってんだよ畜生！」

荷物を引っ掴んで教室からダッシュで逃走。もはや信じられるのは自分自身のみ！

『逃がすなぁっ！　追撃隊を組織しろ！』

『手紙を奪え！　吉井を殺せ！』

『サーチ＆デス！』

「そこはせめてデストロイで！」

廊下に響いてくる声を聞いて、嫌な団結力を持ったクラスだと改めて実感した。

☆

『いたぞ！　吉井だ！　空き教室に向かったぞ！』

『了解だ！　見逃さないように追ってくれ！こっちは全部隊に連絡を取る！』

『オーケー！　B部隊は正面から、C部隊は逆側から回って挟み撃ちにするんだ！』

『応っ！』

廊下を走っていると背中ごしにそんな会話が聞こえてくる。まさかこんな短時間で部隊編成を終えるなんて。どこまで無駄にスペックの高いクラスなんだ。

上等だ。そっちがそういうつもりなら、こっちだって手加減はしない！

「吉井！　観念して手紙をよこせ！」

「一人だけ幸せになろうなんて甘いんだよ！」

目の前に五人のクラスメイトが立ち塞がった。さっき聞こえてきた挟み撃ちの連中だろう。後ろからも追いかけてきている連中がいる。

このままでは逃げ場がなくなるので空き教室へと身を滑り込ませる僕。敵は全員僕を追って教室に群がってきた。

教室に入ってくる瞬間、入り口が限られている為に向こうは嫌が応にも一カ所に固まらざるを得ない。その行動は、追われている僕にとってチャンス以外の何物でもない。

「よいしょっ」

用意していた仕掛けを発動。

今朝方外したサッカーのネットが皆の頭上から覆いかぶさる。

「な、なんだ!?」

「落ち着け！　ただのネットだ！　端に近いヤツから抜け出して吉井を確保しろ！」

「くっ！　このネット、ぴしょぴしょに濡れているから身体に張り付いて――」

一瞬戸惑うものの、すぐに次の行動に移ろうとする判断は大したものだと思う。けど、残念ながら手遅れだ！

「保健室のベッドでゆっくりしてくるんだね」

僕が手にしている、とある事情で借りていた危険物を見て皆が目を剥く。

「なっ!?　吉井、それは……！」

「離れろ！　全員ネットから離れろ！」

「おやすみ、皆」

ぴしょぴしょに濡れたネットの隅に、電源を入れっぱなしにしたスタンガンを投げつける。バチバチという激しい音と少しの焦げ臭い香り。

「「ぎゃぁぁぁっ!!」」

悲鳴を聞きながら空き教室を後にする。

落ち着いて手紙を読む為には、Fクラスの全員を行動不能にするしかないだろう。こうなったら、徹底抗戦だ！

『どこだ？　確かにこっちに来たはずだが』

『気をつけろ。きっと近くに潜んでいるぞ』

『F部隊とG部隊もやられたらしい。向こうは一人だが、油断はするなよ』

旧校舎の古書保管庫。その中で緊張した様子のクラスメイトが囁き合っている。怒濤の勢いでクラスメイトを撃破してきたせいか、随分と僕を警戒しているみたいだ。身を潜ま

せている本棚の陰から様子を窺うと、互いに背中を合わせて死角を潰している姿が見えた。
一カ所に集まっていると身動きが取りにくいのになぁ……。
息を潜めて彼らの近くにある本棚まで素早く移動。適当な本を一冊抜いて、僕の潜む場所とは対角の方向にこっそりと放り投げる。
バサッ
『なんだ!?』
『吉井か！』
音に反応して全員が同じ方向を見る。これで死角ができた。
「せぇ――のっ！」
あとは一気に力をかけて本棚を倒すだけ。
『な……っ！』
『しまっ――』
倒れてくる本棚とは逆の方向に注意が逸れていた彼らの反応は鈍い。結果、全員が本棚の下敷きとなった。
「ハッハー！　人の恋路を邪魔しようとするからそんな目に遭うのさ！」
脱出しようともがく彼らを尻目に古書保管庫から退室する僕。
『おのれ吉井！　裏切り者め！』
『覚えていろ！　お前の幸せは必ずブチ壊す！』
「……本当、どこまで歪んだクラスメイトなんだろう」
とどめに外からモップを使って出入り口を封鎖する。これで追っ手はほとんど始末できたはずだ。
「さてさて、残っている連中は――っとぉっ!?」
嫌な気配を感じて跳び退ると、さっきまで僕が立っていた場所にボールペンやシャープが突き立っていた。
「誰だっ！」
「……裏切り者には、死を」
手に各種文房具を構えているのは、クラスメイトの上屋康太だった。その旺盛な性的好奇心とその気持ちを隠そうとする姿勢から、ムッツリーニとも呼ばれている僕の友人。いや違う。今は友人じゃなくて、倒すべき敵だったな！
「ムッツリーニ、覚悟！」
拳を固め、ダッシュをかける。悪いけど、おとなしく眠ってもらう！
「……次はカッターを投げる」
「よし。まずは話し合いをしようじゃないか」
やっぱり友人に暴力を振るうなんて、僕にはできない！
「……わかった」
「それじゃ、まずはそっちの要求を聞かせて欲しい」
聞かせて欲しいと言いながらも、向こうの要求はわかっている。きっと、『手紙を渡せ』と言ってくるに違いない。さてさて。どうやって交渉をしたものか。
「……こちらの要求は――」
ムッツリーニが静かに要求を告げてくる。
「――グロテスク」
「待って！　それは既に僕が処刑される方法の話になっている！」
これほど難しい交渉を僕は今までしたことがない。
「……交渉決裂」
「くっ！　やっぱりやるしかないのか！」
構えられたカッターに意識を集中する。
それにしても、普通ラブレター一通の為に友達に刃物を向けるだろうか？
「……大丈夫。目は狙わない」
「ムッツリーニ。それだけで安心できるほど僕はバカじゃないからね？」
「……そう」
ヒュッ
風切り音をあげてカッターが飛んでくる。
その目標は――僕の右目!?
「う、嘘つきぃぃっ!!」
咄嗟に手でカバーする。カッターは、かしゃっと軽い音を立てて床に落ちた。え？　刺さっていない？　刃を出していなかった!?
「……隙あり」
「っ！」

姫路さんの胸のサイズを知ってるか！ ……そんなものは、常識。

呆気に取られる僕に一瞬で肉薄するムッツリーニ。しまった！

「ムッツリーニ！　姫路さんの胸のサイズを知ってるか！」

咄嗟に身を守る為、ムッツリーニの好むような話題を振る。うまく食いついてくれ、ムッツリスケベ……！

「……そんなものは、常識……！」

ダメだ、ヤツの注意は逸らせない！　というか、常識だったの!?　僕は知らないよ!?

「じゃあじゃあ、もしも僕に彼女ができたら、秘蔵のコレクションを贈呈するから！」

「……（ピタッ）」

僕の目の前でムッツリーニの動きが止まった。よしっ！　食いついた！

「……いつ？」

友達ながら大した男だ。コレクションの内容、量を確認せずにいきなり引き渡し日時から交渉に入るとは。

「えーっと、今度の週末にでも」

「……交渉成立」

恐ろしいほどに買収は簡単だった。今度からムッツリーニが敵に回った時はこの方法で行こう。

「それじゃ、僕は先を急ぐね」

と、この場を立ち去ろうとする僕をムッツリーニが手で制する。なんだろう？

「……護身用に」

そう言いながら僕に小さな袋を渡してくる。

「護身用って？」

「……中に刃物が入っている。いざというときに使うといい」

正直、そんな簡単に刃物って持ち歩く物じゃないと思う。けど、今の僕にはありがたい。まだ倒していない曲者連中が残っているのだから。

「ありがとう。困ったら使わせてもらうよ」

「……（グッ）」

親指を立て、僕に背を向けるムッツリーニ。僕もこうしてはいられない。早く手紙の内容を確認しないと。「昼休みに屋上で待っています」なんて書いてあって、読んだのが昼過ぎだったりしたら洒落にならない。

「そうだ。下見も兼ねて屋上に行くかな」

屋上なら人が来ないので手紙も読み易いし、告白の場所になる可能性だって高い。うん。我ながらナイスアイデアだ。よし、早速屋上に行こう！

現在地は二階だから、とりあえず目的地へ向かう為に階段を昇る。すると、その踊り場で、

「アキっー　見つけたわよ！」

「げっ！　美波!?」

僕の天敵と遭遇した。

肌にビリビリと伝わってくる殺気。一触即発の雰囲気。

全身を緊張させながら、階段の踊り場で向こうの出方を見る。すると、彼女は意外にも落ち着いた足取りで僕に歩み寄り、こんな選択を迫ってきた。

「おとなしく手紙を渡して殺されるか、殺されてから手紙を奪われるか、好きな方を選びなさい」

おかしい。僕が生きている選択肢が見当たらない。

「どうしてそんなにこの手紙にこだわるのさ！　美波には関係ないじゃないか！」

はっきり言って相手が悪い。ここは説得で切り抜けるのが吉だ。

「ウチには関係ないって、酷い……！　アキは本当にそう思っているの……？」

「え……？」

美波が急に傷ついたような表情になる。さっきの言葉の意味を考えると、美波は僕に彼女ができるということに対して関係があるってこと？

「まさか、それって」

「だって、今まで恥ずかしくて言えなかったけど、ウチはアンタの……」

いつもと違ってしおらしい美波の様子に、何故か僕の鼓動が速くなる。この感覚は一体なんだろう。

「アンタのせいで、『彼女にしたくない女子ランキング』の三位になってるんだからぁあ

あっ！」

「さらばだっ！」

この感覚は紛れもない恐怖だった。

本能の赴くままに逃走行動へと移る僕。屋上を目指していたけど、ひとまずは恐怖から逃れるために階段を二段飛ばしで駆け下りる。

「逃がすもんですか！　人をこんな立場にしておきながら自分だけ幸せになろうなんて、そんなことは許さないわよ！」

「まだ上に二人いて良かったじゃないかっ！」

「いいわけないでしょう!?　下には何人いると思っているのよ！」

えっと、二年生は全員で二〇〇人くらいだから、

「ざっと一五〇人くらい？」

「ひゃくご……!?　どうしてくれんのよっ！　責任取りなさい！」

「責任って言われても！」

「とにかく、まずは手紙を渡しなさい！」

「嫌だ！　絶対に破かれるから！」

「そんなことしないわ！　再発防止の為にコピーをとって校内にばら撒くだけ！」

「そっちの方が酷い！」

マズい。本気で走っているのに全然引き離せない。なんとかして、一旦美波の動きを止めないと！

「ところで美波、階段を走っていてわかった

んだけど！」
「なによ！」
「今日は白なんだねっ！」
「なっ……！」
立ち止まり、スカートの裾を押さえる美波。
バカめ！　こんな状態で見る余裕なんてあるわけないじゃないか！
「おおおおっ！」
この隙に一気に距離を稼ぐ。チャンスは今しかない！
階段ダッシュが終了し、今度は廊下を駆け抜ける。
「あっ。吉井君。廊下は走っちゃダメですよ？」
と、この時間は授業がないのか、廊下を歩いている英語の先生がやんわりと僕に注意してきた。遠藤先生か、丁度いいところにいてくれた。
「すいません、遠藤先生。ちょっと用事を頼まれていたもので」
先生の前で立ち止まって頭を下げる。
「用事ですか？」
「はい。急いで空き教室から机を持ってくるように、と」
もちろん嘘だ。けど、遠藤先生は疑うこともなく納得してくれた。
「そうですか。でも、廊下は走ってはいけませんよ？」
「気をつけます。それで、お願いがあるんですけど」
「はい、なんでしょう？」
「召喚許可を貰えますか？　ちょっと荷物が重そうなので」
召喚獣を喚び出すには先生の許可が不可欠だ。
「アキいっ！　よくも騙してくれたわね！」
やばっ！　もう追いついてきた！
「先生、とにかくこっちへ！」
「え？　あ、はい」
先生の手を取って近くの教室に飛び込む。
旧校舎は空き教室が多いから助かるなぁ。
「さあ先生！　早く許可を！」
「はぁ……。よくわかりませんけど、許可します」
「よっしゃ！　試獣召喚っ！」
喚び声に応え、浮かび出た魔法陣の中から現れる僕の召喚獣。こいつがいれば、たとえ相手が美波でもなんとかなる。
「今日はライトグリーンなんだから、白が見えるわけないでしょうが！」
一拍遅れて美波が登場。それはいいんだけど、
「美波、わざわざ教えてくれなくてもいいのに」
「あ……っ！」
僕の指摘を受けて赤面する美波。ムッツリーニあたりが聞いたら大喜びの情報だ。
「隙ありっ！」
「きゃっ」
動揺する美波の背を押し、教室の隅に追いやる。そして、
「いよいしょぉっ！」
教室の後ろに設置されている生徒用ロッカーを召喚獣に持たせ、バリケードを作った。
「こ、こらっ！　卑怯よ！　出しなさい！」
ガンガンと美波がロッカーを叩く音が響く。こんな大きな物、女の子の力じゃ動かせっこないだろう。美波の無力化成功！
「吉井君、何をしているんですかっ！」
その様子を見て遠藤先生が僕を叱責する。
それと同時に召喚獣の姿は掻き消えた。先生が召喚許可を取り消したんだろう。
「すいません！　緊急事態なもので！」
「あっ！　待ちなさい！」
先生の制止の声を背に、再び廊下へ舞い戻る僕。もう少し、もう少しでこの手紙を読める……！　後から訪れるであろう幸せを想像すると、屋上へと向かう足取りは自然と軽くなった。
そして、二階を通過して三階の廊下。
「吉井、待っていたぞ」
そこにはクラスメイトの須川君が待ち構えていた。
「須川君。君まで僕の邪魔をするのかい？」

「もちろんだ。吉井にはここで死んでもらう」
そう告げて、彼は背中から何かを取り出した。
「ぼ、木刀……」
「剣道部から借りてきたんだ。吉井を止める為になっ！」
「うわっ！　とっと――！」
突然須川君が斬りかかってきた。寸止めじゃなくて、完全に振り切られる木刀。それをなんとか横に跳んで避ける。
「吉井。手紙を渡すんだ」
「くっ……！」
思わず唇を噛む。まさか武器まで持ち出してくるなんて。そうなると、丸腰じゃあ勝ち目は薄い。せめてこっちにも何か武器があれば――ん？　武器？
「そういえば、アレがあった！」
ポケットの中に手を突っ込み、小さな袋を取り出す。そう。これはさっきムッツリーニが僕に渡してくれた、刃物の入った袋だ。
「くっ！　丸腰じゃなかったのか！」
自分の優位性が消え、焦りを見せる須川君。
「よし！　コレで勝負は五分五分だ！」
袋から刃物を取り出し、須川君との間を一気に詰める。勝負だ、須川君――！
「くそっ！　俺はまだ負けたわけじゃない！」
須川君が木刀を振り下ろしてくる。けれども、
「甘いっ！」
半歩横にステップした僕にその攻撃は紙一重で届かない。そして、目の前には木刀を振り切って無防備な須川君の身体がある。隙だらけだ。
このタイミングを逃さず、僕は手に持った爪切りで須川君を――
「って、爪切りで勝てるワケないじゃないかバカぁっ！」
思わず廊下に膝から崩れ落ちる僕。そりゃ、刃物は刃物だけどさあっ！
「吉井……。お前って――本当にバカだなあ……」
須川君の憐れみの視線が物凄く痛い。
「ち、畜生！　こうなったら爪切りでもやってやる！　素手よりはマシなはずだ！」

「いや、明らかに素手の方がマシだろう!?」
「黙れぇぇっ！」
静かな旧校舎二階の廊下で、僕と須川君の怒号が重なった。

「ぐぅぅ……！　爪が、爪がぁぁ……！」
廊下に倒れ伏し、手を押さえる須川君を見下ろす。

まさか、本当に勝てるとは思わなかった。

「これはこれで自分の才能が怖いけど、今はとにかく先を急がせて貰おう」
「よ、吉井……。裏切り者……」
なぜか深爪しか外傷がないのに息も絶え絶えな須川君を残し、階段を昇る。屋上まではもう少し。四階の廊下を越えて、階段を昇れば――
「やはりここまで来たか、明久」
「明久君、言うことを聞いてください」
「雄二に姫路さん……！」
屋上へと続く階段。その前に立つのはラスボスの雄二と姫路さんだった。
「どうして僕がここに来ると？」
「屋上はこの学校の告白スポットだからな。単純なお前なら下見も兼ねてここに来ると思っていた」
くそっ。さすがは雄二だ。僕の思考を完全に読んでいる。
「トイレにでも行けば、誰にも邪魔されずに読めるはずなんだがな」
あ。
「ごめん雄二。僕、ちょっとお腹が痛いから先にトイレに行ってくるね」
「明久君、ずっと気付かなかったんですか……？」
姫路さんが心配そうな目で僕を見ている。その視線は耐え難い！
「雄二、どうしてそこまで僕の邪魔をするのさ！　そんなことをしても、雄二にとってのメリットは何もないはずなのに！」
それ以上つっこまれない為にも、気になっていたことを確認する。
僕の質問を受け、雄二は真剣な顔で答え始めた。
「そうだな。確かにお前の言うとおり、こんな行動は俺にとってなんのメリットもない。いや、それ以前に俺は、彼女が欲しいなんていう気持ち自体が全くない」
「だったら、どうして……？」
「そういう問題じゃないんだよ、明久。俺はただ、純粋に……」
迷いのない目で悪友が言葉を紡ぐ。
「お前の幸せがムカつくんだよ」
「アンタは最低の友達だ！」
そもそも友達かどうかも疑わしい！
「さて明久。『おとなしく手紙をよこせ』なんて野暮なことは言わねぇ。本気でかかってこい」
雄二は学生服の上着を脱ぎ、ネクタイを外した。改めて見せ付けられる悪友の身体は、しなやかで無駄のない理想的な筋肉のつきかたをしていた。
「姫路。上着を持っていてくれるか？」
「あ、はい」
姫路さんに服を渡して身軽になった雄二は構えを取って軽くシャドーをしてみせた。シュッと鋭い風切り音が鳴る。それだけでわかる、喧嘩の素人と玄人の違い。あの野郎……本当に僕を殺るつもりだ。
「吉井君、やめておいた方が……」
姫路さんが近くに来て心配げに僕の表情を窺っている。その心配も無理はない。雄二は見ての通りかなり喧嘩慣れしている。僕の勝率はかなり低い。でも、
「心配ありがとう。けど、僕はやめる気なんてないから」
勇気を出して手紙をくれた女の子の為、僕自身の未来の為、こんなところで僕は逃げるわけにはいかない！
「そうですか……。わかりました。もう止めません」
「……ごめん。心配してくれたのに」

「いえ……。なんだか明久君らしいです」
「僕らしい？　――っと。これ、僕のも持っていてもらえる？」
「あ、はい」
僕も雄二にならって少しでも身を軽くする。それにしても、こうして本気で喧嘩をするなんて随分と久しぶりだ。しかも相手は雄二。ほとんど勝ち目はない。この身震いは上着を脱いだせいだけじゃないだろう。
「……明久」
「雄二、勝負だ！」
拳を握って構えを取る。
コイツを倒して、僕はあの手紙を――
「……お前、バカだろう」
「へ？」
呆れたような雄二の視線。その先にあるのは僕――ではなく、姫路さんが持っている僕の上着だった。
「あ、あの、手紙がポケットに入っているみたいなんですけど……見ちゃってもいいんですか……？」
姫路さんが僕の上着のポケットから封筒を取り出している。え～っと……
「だ、ダメだよッ！　戦わないでそれを見るのは反則だよ！」
「お前がバカなだけだろうが！　やれ、姫路！　その手紙を始末するんだ！」
姫路さんのところに向かおうとする僕を雄二がっちりと羽交い絞めにしてきた。くっ！　全然解けない！　この馬鹿力めー
「……」
一方姫路さんはというと、手紙を手にしてぼーっとしていた。あまりにも呆気なく手に入ったから気が抜けたってこと？
「……」
いや、違うな。そんな様子じゃない。優しい姫路さんのことだ。きっと人が想いを込めて書いた手紙を勝手に読んだり捨てたりなんてできない、と困っているんだろう。そうか。それなら僕にも勝機はある！
「姫路さん」
「えっ!?　あ、はい。なんですか？」
「僕にはわかってるよ。優しい姫路さんは手紙に込められた人の気持ちを踏みにじることなんてできないってこと。だから、おとなしく――」
「手紙を細切れにするんだ」
「違うっ！　そうじゃない！　雄二、卑怯だぞ！　そうやって僕の台詞みたいにつなぐのは反則だ！」
「はいっ！　わかりました！」
「いや、『はいっ！』じゃないよ姫路さんってあああああっ！　そんなに丁寧に手紙を裂かなくても！　それじゃあもう読めないじゃないよ!?　返してっ！　僕の幸せな未来と大切なラブレターと10行前の台詞を返してぇっ！」
叫んでいる間にも破られていく手紙。それはもう既に原型を全く留めずに、紙クズという名前で廊下中に散らばっていた。
「まさか、本当に姫路が破るとは思わなかった。……すまん、明久」
雄二が驚いた様子で姫路さんを見て、その後僕に謝った。驚いたのは僕も一緒だ。そんなことは絶対しない子だと思っていたから。
「せめてものわびだ」
そう言って廊下中に散らばった紙クズを集めて持ってきてくれる雄二。そうか。まだ可能性は残っていたんだ。
「ありがとう、雄二。最後の可能性にかけて、この紙クズをつなぎ合わせ」
「――未練を断ってやる」
シュボッ　　メラメラメラ……
ああ、暖かい……。まるで僕の凍てついた心を溶かしてくれるような炎だよ……。
「ってうそぉっ!?　ここまでやった挙句、容赦なく燃やすの!?　もうこれ一〇〇パー読めないよね!?　僕の幸せな未来はどこへいったの!?」
「明久。お前は知らなかっただろうが」
「なに!?　なんでもいいから早く水を持って来て！」
「俺はお前の幸せが大嫌いなんだよ」
「知ってるよバカ！　ちくしょー！」

必死の消火活動も空しく、手紙は綺麗サッパリ灰になってしまった。
「坂本君は手紙の主が誰だか気にならないんですか？」
灰になった手紙を見て、なぜか安心したかのような声で姫路さんが雄二に話しかけている。
「全然興味がないな。俺は明久の幸せを妨害できたらそれでいい。もっとも――」
「は、はい。なんですか？」
「誰からの手紙だか、目星はついたがな」
「え……っ!?」
「確かに、他人の書いた手紙を破り捨てたら問題があるよな？」
「そ、それは、その……っ！」
なんだか姫路さんと雄二が妙な話をしているな。まさか手紙の主がわかったのか!?
「雄二！　その話、もっと詳しく」
「ああ明久君は聞いちゃダメですっ！」
「こぺっ!?」
「姫路。明久の首が真後ろを向いているぞ」
「ご、ごめんなさいっ！　私、大変なことを！」
「まぁ気にするな。どうせ生かしておいてもあの連中に殺されるだけだからな」
朦朧とした意識の中、雄二の示した方向に耳を傾ける。
「ア～キ～～～～～　アンタよくもやってくれたわね～～～！」
「吉井ぃっ！　絶対殺すぅぅっ！」
「ガンホー！　ガンホー！」
願わくは、無事明日の太陽が拝めんことを。

☆

――落としちゃったと思ってた手紙が明久君の靴箱に入っていたなんて！　きっと拾った人は親切でやってくれたんだろうけど……。
私のせいで酷い目に遭わせてごめんなさい、明久君。
でも、前に明久君が言ってくれたように、この気持ちは手紙じゃなくて……直接伝えたいから。
だからもう少しだけ、待っていて下さい。

『僕と暴徒とラブレター』おしまい

◆シリーズ情報◆

『バカとテストと召喚獣』

「こんな教室は嫌じゃあ！」アホの明久は叫んだ。ここ文月学園では、進級テストの成績で厳しく組分けされ、明久のいる最低Fクラスの設備は腐った畳と卓袱台だけ。憧れの瑞希のため、明久は組代表の雄二をたきつけて秀才Aクラスの設備を奪うべく、立ち上がるが!?　第8回えんため大賞編集部特別賞受賞作。1～2巻好評発売中！

●バカとテストと召喚獣

●バカとテストと召喚獣2

『108年目の初恋。2』、刊行!!

「バカテスト」だけじゃない!

えんため大賞フェア2007でエントリーされた作品群、シリーズ化一番乗りは『バカとテストと召喚獣』でしたが、他の受賞者達も、どんどん続刊&新作を準備中!
まずは『108年目の初恋。』が、6月30日(土)に第2巻発売です!!

■『108年目の初恋』って……

ヒロインは、田舎の中学校の「旧校舎」。建物ですから動けません。新校舎に教室が移り、生徒たちを見守ることもできなくなって寂しくしていたところに、ある日、新入生の少年が、探検に忍び込んできて……。

というところから始まる、108歳にして初めての、とにかくピュアな初恋を描いたこの作品。何と2巻目が発売になります! 応援してくださった皆様ありがとう!!

■気になる2巻の内容は……

「解体」という最大の危機すら乗り越えて、めでたしめでたし、となったはずの初恋。けれど、現実には、ふたりの恋には問題が山積みで……。うまくいかない初デート、セクハラ常習犯な目付役の登場、そして、初めてのケンカ。初々しさがむずがゆく、ついついニヤけてしまう、人と人ならぬものの不器用な初恋は、まだまだ始まったばかりなのです。

こちらもヨロシク!

第8回えんため大賞佳作受賞作

声で魅せてよベイビー

著:木本雅彦　イラスト:ヤス

主演:ハッカー、ヒロイン:腐女子
2007年最高に恥ずかしい!?
激♥ミュージカル開幕!!

第7回電撃学園特別賞受賞作

ほおむスティ☆でぃ~もん!

著:鋼津ゆうた　イラスト:シコルスキー

ソロモン王の呪いによって、美人な魔神と同居生活!?
ライトテイストおバカコメディ!

FBOnline EXPRESS

エフビー・オンライン

大ボリューム！　毎月第4金曜日に最新号配信のファミ通文庫HPを徹底分析！

今年1月に生まれ変わった新公式HP「FBonline」は皆様から好評をいただき、1週間の平均アクセス数は以前の3倍を突破。現在も増加中です。すごい！　もし、文庫の部数がこの勢いで増えれば……（コホン）。さて、このコーナーでは小説にコミックにコラムetc.と読み応え抜群のコンテンツがぎっしり詰まった「FBonline」の魅力に迫っちゃいます♪

美麗描き下ろしトップページ

まずはHPの顔、トップページについてです。我らが「FBonline」は雑誌を意識して作っています。ここはいわば雑誌の表紙！　個別の記事へはINDEXページから行くようになっています。表紙をめくる気持ちで「ENTER」をクリック！

このトップイラストは原則的にファミ通文庫で活躍中のイラストレーターによる描き下ろし！　今までにx6suke先生、日向悠二先生、BLADE先生などが登場！　今後も人気イラストレーターが続々と登場する予定です。お楽しみに！　これらの画像はコンピュータの壁紙としてダウンロードできるようになっています。

人気小説のWEB掲載

「FBonline」のなかでも、一番の人気コーナーはやはり小説。ファミ通文庫の人気シリーズの続編や番外編などが掲載中です。今現在掲載中なのは……。

『狂乱家族日記 番外』

〝狂乱〟世界を舞台に狂乱家族はもちろん、家族以外の人物にもスポットを当てて日日日先生が自由度をあげて物語を描く〝番外〟シリーズ。昨年11月に発売された『狂乱家族日記 番外そのいち』につづけ！　と乱崎家長女の千花の学校生活&お友達をフィーチャーした「マイちゃん破壊魔伝説」「乙女心ラビリンス」に続き「清くん完全育成計画☆」を連載中。

『コッペとBB団』

『吉永さん家のガーゴイル』で人気の田口仙年堂先生のもう一つのシリーズが「コッペとBB団」。ひょんな事から、悪の秘密組織「ブラック・ブリッツ」（通称BB団）に保護された少女コッペ（実は改造人間!?）と悪の組織のはずなのに優しい団員達との交流を描いたハートウォーミングストーリー！　発売中の1巻と2巻の続きを連載中。

『〝文学少女〟の今日のおやつ』

ご存知〝文学少女〟こと文芸部部長天野遠子と平部員井上心葉の部室での日常を描いた連作シリーズ。心葉が遠子先輩のおやつ用の三題噺を書く間、遠子先輩は相も変わらずの文学講釈……。古今東西の文学作品への愛情たっぷりな遠子先輩の熱い語りには思わず元の本を食べたく……じゃない読みたくなっちゃうかも!?

『期間限定特別短編 ―戦嬢の狂詩曲（ラプソディ）―』

その他、「FBonline」では好評シリーズの特別読みきり短編の掲載や、新作の先行公開なども期間限定で実施しています。今現在、公開中なのが、築地俊彦先生の好評シリーズ『戦嬢の交響曲（シンフォニア）』第2巻の発売を記念して書き下ろされた『戦嬢の狂詩曲』。本編に比べラブコメ度大幅UPの短編です。こちらの公開予定期間は6月下旬までになっています。まだ読んでない人はハリーアップ！

特集コーナー

人気作品や新作および新シリーズの魅力をたっぷりとお届けするのが、この特集コーナー。どうせ、ストーリーやキャラクター紹介をするだけなんでしょ、と侮ってはいけません！　製作のヒミツにも迫るべく、時には著者インタビューや対談を行ったり、製作裏話的なコメントを著者＆イラストレーターさんからいただくことも多いのです。さらに、時には激レアなラフ公開や、描き下ろしのイラストなんかも公開しちゃうかも!?　今までには、「狂乱家族日記」をはじめ、「吉永さん家のガーゴイル」「学校の階段」「〝文学少女〟シリーズ」「まじしゃんず・あかでみい」などなどたくさんの特集を組みました。特集は各配信号だけの期間限定コーナー。くれぐれもお見逃しなく！

コミック

玉岡かがり先生による「吉永さん家のガーゴイル」のコミック版が連載中！　隔週で4コマとストーリー漫画が交互に配信されています。玉岡かがり先生がキュートな筆致で描く、新たなガーゴイルワールドの魅力に目覚めた方はマジキューコミックスから好評発売中の単行本コミックスをどうぞ！　また「FBonline」では今後、ガーゴイル以外にもコミックの連載を計画中です！

その他のコンテンツ＆チェックポイント☆

●今月の新刊――発売日直前の最新号配信スタート時には、新刊の詳細情報だけではなくカバーや口絵のイラスト公開や本文冒頭の立ち読みも。本屋さんに行く前に家で立ち読みができるんです！

●今後の刊行予定――常に2カ月先までの刊行予定を掲載しています。また、毎号最終週の更新では、発売直前の新刊カバーイラストも大公開しちゃってます！

●エッセイ＆コラム――人気作家のエッセイや文庫製作の裏側を描く編集部コラム。現在は『田口仙年堂の御色町図書館だより』で〝ガーゴイル〟制作秘話などが読めます。不定期で登場する作家も!?

●もぎたて文庫ニュース――アニメ化、ゲーム化や、お知らせしたいイベント、キャンペーン情報などなどをこまめに更新中！

●読者のページ――「FBonline」に寄せられたご意見や質問などからピックアップしてお返事するコーナー。時には先生方のコメントも添えて月イチペースで掲載中です。投稿はメールフォームから！　皆様のお便りお待ちしております。

●えんため大賞――応募される人へのサポートとして要注意点などをまとめたコラムも。また今後は選考の様子などもレポートします。

●ちょく読み――毎月配信される電子書籍情報など。

というように、こんな感じのコンテンツがぎっしりと詰まった「FBonline」。今後ももっと喜んでいただけるコンテンツを計画中ですので、毎週金曜日の更新をお見逃しなく！

FB Online

http://www.enterbrain.co.jp/fb/

アクセスお待ちしてます！

エフビー通信

ここでは皆様からいただいたお便りを大公開!!　ちなみにコーナー名はeb(エビー)!風じゃなくてFB(エフビー)です!　覚えて下さいね、エフビーエフビー……(催眠術)。情熱あふるるメッセージ、魂の宿るイラストなどを紹介していきます!　求ム、愛のハガキ!!
今回は、『FBSPvol.1　狂乱家族日記すぺしゃる』で頂いたお便りをご紹介～!!

まかでみコラボ旋風!?

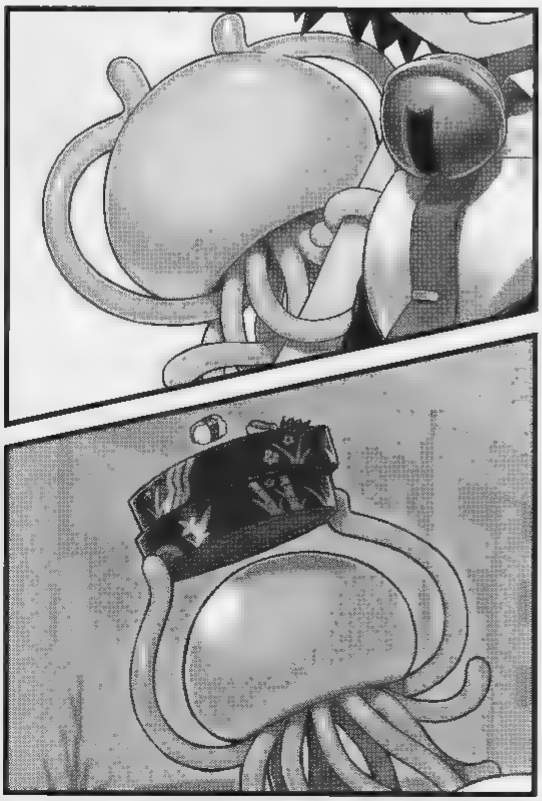
●FBSPvol.1では『まかでみの階段』が特に面白かったです!
　いままで『まかでみ』しか読んだことなかったのですが、今度『学校の階段』も読んでみたくなりました。
　また『まかでみ』のコラボ企画やってください!　ぜひぜひお願いします～。
(埼玉県／ヤンバル さん)

『まじしゃんず・あかでみい』と『学校の階段』のコラボ作品(FBSPのvol.1掲載)へのご感想、多数の方からいただきました!
「こんなコラボあったら面白くない?」「あはは、いーかも!」的な、編集者同士のノリの軽～い会話がきっかけで生まれたコラボアイディア。その予想以上の反応にニヤニヤしながら、今回の『まかでみ』特集ではスペシャルコラボ2本立てを企画してみました!
『アニレオン!』『超妹大戦シスマゲドン』……どちらも『まじしゃんず・あかでみい』本編中で登場したことがあるタイトルです。気になっていた人も多いのでは?　葛西先生&うなじ先生、古橋先生&内藤先生へのお便りもお待ちしてます!

『狂乱』の超人気キャラは!?

●『狂乱家族日記』特集号では、日日日先生の短編やx6suke先生のマンガも読めて大満足でした!
　今度は、『狂乱』の月香メインの特集をぜひっ!!
(鹿児島県／ラー麺 さん)

「狂乱家族日記」宛のお便り、たくさん頂きました!　ありがとうございます。
　その中で、特に目立っていたのが……なんと、月香宛てのお便りだったのでした!
「FBSPvol.1　狂乱家族日記すぺしゃる」のアンケートのハガキの方を見てみても、「月香をもっと出して!」「月香カワイイ!」と月香宛てのラブコールがいっぱい届いているのです。
　うーん、凶華とか優歌とか千花とか……他にもカワイイ娘がいっぱい揃ってるんだけどなあ……もしや「くらげ萌え」属性な方が急増中なの?　とにかく、おそるべし月香パワー!!



FBSP vol.1の表紙を飾るなど大人気の月香。好物はお寿司。その正体は……?

FB画廊

～愛と魂を感じるイラストをご紹介します～

凶華様特別賞

（長崎県／あおじる さん）

**凶華様のチャームポイントを
まあまあ解っているようだな!
合格!(凶華・選)**

愛がいっぱいで賞

（高知県／黒雪姫 さん）

**和己くん&ガーくんへの愛が
溢れるラブリーな一枚♥
(編集部・選)**

おたより待ってます♥

- ●キャラクターへのファンレター&イラスト
- ●作品への応援メッセージ　●夢のコラボ企画アイディア
- ●作品や編集部への疑問・質問
- ●あなたの"いま気になる一冊"を教えて!
  （ファミ通文庫以外でもOK）

他にも、フリー投稿やメッセージなど大歓迎です!!
どんどん送って下さいね!

投稿方法をよくお読みください!

おたよりは、官製ハガキに書いて(or描いて)送ってください!
文章でもイラストでもOKです。あなたの住所・氏名・ペンネーム・電話番号・性別・年齢・職業を忘れずに明記してください。
採用させていただいたお便りは、ファミ通文庫公式Webサイト「FBonline」や、次回のFBSP(時期未定)誌上など、ファミ通文庫の関連メディアに掲載いたします。
※お便り・アイディアを掲載させていただいた方には、
もれなくファミ通文庫特製グッズをプレゼントいたします!!

※ご提供いただくお客様の個人情報につきましては、弊社のプライバシーポリシー(URL：http://www.enterbrain.co.jp/)の定めるところにより、取り扱わせていただきます。

送り先はこちら!

〒102-8431
東京都千代田区三番町6-1
株式会社エンターブレイン
ファミ通文庫編集部
FBSPおたより募集係

FBSP（エフ ビー エス ピー） vol.2　まかでみスペシャル

発行日　2007年6月11日　初版発行

企画・編集：ファミ通文庫編集部
（河西恵子／笠原次郎／川崎拓也／森丘めぐみ／荒川友希子／渡辺彰規／長島敏介／原山聡子／浦 高晃）

編集協力：ねこまた工房（市川 香／池山一二）・山崎 拓

アートディレクション：田村 宏（海月デザイン）
デザイン：佐々木由美子、田村 宏（海月デザイン）

DVD-ROMコンテンツ制作：小林章彦（虎式）／KC鈴木／冨田敬弘／花島次郎／福井祐貴

コンテンツ協力：「学校の階段」製作委員会

撮影：studioT

スペシャルTHANKS：デジタルコンテンツ部・企画宣伝部・映像サービス部・エンターテイメント出版部
（エンターブレイン）

発行人　浜村弘一
編集人　青柳昌行
発行所　株式会社エンターブレイン
〒102-8431　東京都千代田区三番町6-1
電話　0570-060-555（代表）

組版：ワイズファクトリー
印刷：凸版印刷株式会社

■本書は著作権上の保護を受けています。本書の一部あるいは全部について、株式会社エンターブレインから文書による許諾を得ずに、いかなる方法によっても無断で複写、複製することは禁じられています。
■価格は表紙に表示してあります。

本書の内容・不良交換についてのお問い合わせ先
エンターブレイン・カスタマーサポート
電話：0570-060-555
［受付時間：土日祝日を除く　12:00～17:00］
メールアドレス：support@ml.enterbrain.co.jp

© 2007 ENTERBRAIN,INC.
Printed in Japan
ISBN978-4-7577-3565-1

MSP

まんてん

FBSP

おもしろければジャスティス！ まかでみスペシャルDVDとは

まかでみスペシャルDVD

築太郎先輩じゃないけど、おもしろければジャスティスの「まかでみ」のために、編集部が総力を上げて企画したスペシャルDVD。その魅力溢れる収録コンテンツを紹介しちゃおう。

SPECIAL 1
●『まかでみ』ミニゲーム&アクセサリー&プロモムービー！

★まかでみ・そりてぃあ

タナロット、拓人、鈴穂、ファルチェの可愛いSDキャラが入った4種類のカードを移動させて、スート(ダイヤ、ハート、スペード、クラブ)ごとに小さい数字から積み重ねていくゲーム。クリアするとご褒美画像が見られるぞ！　くわしいゲームの遊び方はゲーム画面のヘルプを見よう。

★初等魔法能力開発実技Ⅱ練習問題『まかでみ・きゃらあわせ』

画面いっぱいに並んだまかでみキャラ&MAマーク。同じ絵柄のコマを他のコマの上を通らずに直線でつないで消していくパズルゲーム。これができれば、キミも「マジシャンズ・アカデミイ」に入学できるかも？　くわしいゲームの遊び方はゲーム画面のヘルプを見よう。

★タナロット迷言列伝 デスクトップカレンダー

デイリー、マンスリー機能切り換え可能のカレンダー&時計。タナちゃんの可愛いお姿に加え、なんと1分ごとにタナちゃんの迷言が表示されるというすぐれもの。さらにインターネットに接続した環境であれば、ファミ通文庫が提供する最新情報がゲットできる。くわしい操作方法はデスクトップカレンダーの左上の「？」(ヘルプ)で確認しよう。

『まじしゃんず・あかでみい』壁紙集

BLADE先生の美麗なイラストがパソコンの壁紙に！　Windows用壁紙6種類を収録。それぞれに複数のサイズがあるので自分の好みのものをコピーして使おう！

PS2版ゲーム『まじしゃんず・あかでみい』プロモムービー

発売日が目前に迫ったPS2版ゲーム『まじしゃんず・あかでみい』のプロモムービーを大公開！驚異のMM-SRPG(萌え萌えシミュレーションRPG)とは一体どんなゲームなのか――!?

SPECIAL 2
●実写映画『学校の階段』プレミアム試写会シークレットレポート

大反響の学園グラフィティ、櫂末高彰先生の「学校の階段」実写映画はもう観てくれたかな？　去る4月12日にシネマート六本木にて催されたプレミアム試写会の完全レポート映像を収録。FBSPの読者に向けて主演の黒川芽以さんからのメッセージもあるぞ！

このDVD-ROMはWindows2000/XPに対応しております。使用するパソコンの環境をお確かめの上ご使用ください。また、DVD-ROMの不具合については、エンターブレインカスタマーサポート部までお問い合わせください。お問い合わせの際には、お使いのマシン環境(機種名、メモリー、OSなど)と具体的な症状を確認したうえでご連絡をお願いいたします。DVD-ROM自体が破損していたり、盤面の傷でまったく読めない場合も、カスタマーサポート部までご連絡ください。不良DVD-ROMをお送りいただいた後、代わりのDVD-ROMをお送りいたします。

＊本DVD-ROMは、トレンドマイクロ株式会社が提供するアンチウイルスソフトウェアによってウイルスチェックを行っています。ただし、ウイルスチェック後に発生した新種ウイルスには、対応が困難な場合があり、トレンドマイクロ株式会社はウイルスチェックの結果を保証するものではありません。
＊本DVD-ROMは、ソフトウェアを提供するものであり、お客さまの動作環境、使用方法、トラブルに関していかなるサポートも負担いたしません。また、お客さまの使用結果及び損害に、弊社ならび各メーカーはいかなる責任も負いません。
＊本DVD-ROMに収録された動画、画像、プログラムを著作権者に無断で複製、放送、有線放送、上映などに使用することを禁じます。

エンターブレインカスタマーサポート
support@ml.enterbrain.co.jp　TEL 0570-060-555
(受付時間は、祝日を除く毎週月曜日から金曜日の正午から午後5時までです)

© 2002 Ichiro Sakaki/PUBLISHED BY ENTERBRAIN,INC. /illustration:BLADE　© 2007「学校の階段」製作委員会

これはタクトと我の愛の結晶のようなものなのである。子どもである。

もちろん我のラブリーでスイートなギリギリショットも満載なのである。

なんであるか？この本にはタクトがいっぱい出てるのである。

みゅみゅっ？スズホはお邪魔さんなのである。

ちなみに我とタクトが「ゲーム」なるものにも出てるのである。

ではさっそく読むのである。

9784757735651

ISBN978-4-7577-3565-1
C0093 ¥1100E

1920093011006

価格 本体1100円 +税
株式会社エンターブレイン

CONTENTS

『まじしゃんず・あかでみい』&『まかでみ・らでぃかる』
- 巻頭カラー描き下ろし&まかでみ大特集
- 書き下ろし短編2本「まかでみ・えくすぺりめんと　魔法都市？」「まかでみ・らでぃかる　彼女なんですけど。」
- 特別コラボ短編「シスマゲ☆まかでみい　超妹召喚!? なんですけど。」「だめあね☆まかでみい　アニレオンなんですけど。」
- "まかでみ"秘蔵ラフなんですけど。
- 特別対談　"まかでみ"で語ろう!
- まかでみ・ぎゃらりい／・「まじしゃんず・あかでみい」ゲーム情報

狂乱家族日記』
- 競演!　4コマ劇場

『ガーゴイルおるたなてぃぶ』
- 書き下ろし短編「ガーゴイルおるたなてぃぶZERO　高原さん家の昔話」

『学校の階段』
- 巻頭カラー描き下ろし
- 書き下ろし短編「学校の階段　～夜明けの階段～」
- 映画化記念特別インタビュー

『"文学少女"シリーズ』
- 巻頭カラー描き下ろし
- 書き下ろし短編「"文学少女"と恋する牛魔王」
- イラストラフ&コメント「"文学少女"のつくり方」

『バカとテストと召喚獣』
- 巻頭カラー描き下ろし
- 書き下ろし短編「バカとテストと召喚獣　僕と暴徒とラブレター」

DVD CONTENTS

- 『まかでみ』ミニゲーム&アクセサリー
  タナロット迷言列伝　デスクトップカレンダー
  まかでみ・そりてぃあ
  初等魔法能力開発実技Ⅱ練習問題『まかでみ・きゃらあわせ』
  『まじしゃんず・あかでみい』壁紙集
- PS2版ゲーム『まじしゃんず・あかでみい』プロモムービー
- 実写映画『学校の階段』プレミアム試写会シークレットレポート